昭和五年二月十五日印刷納本第三卷第三號
昭和五年三月一日發行（每月一回一日發行）

女人藝術



新人進出特輯号

員章を打つ

山本勝治著

同志山本勝治は自殺した！彼の血によつて書かれたこの一卷を日本の無產階級にささげる。



50セン

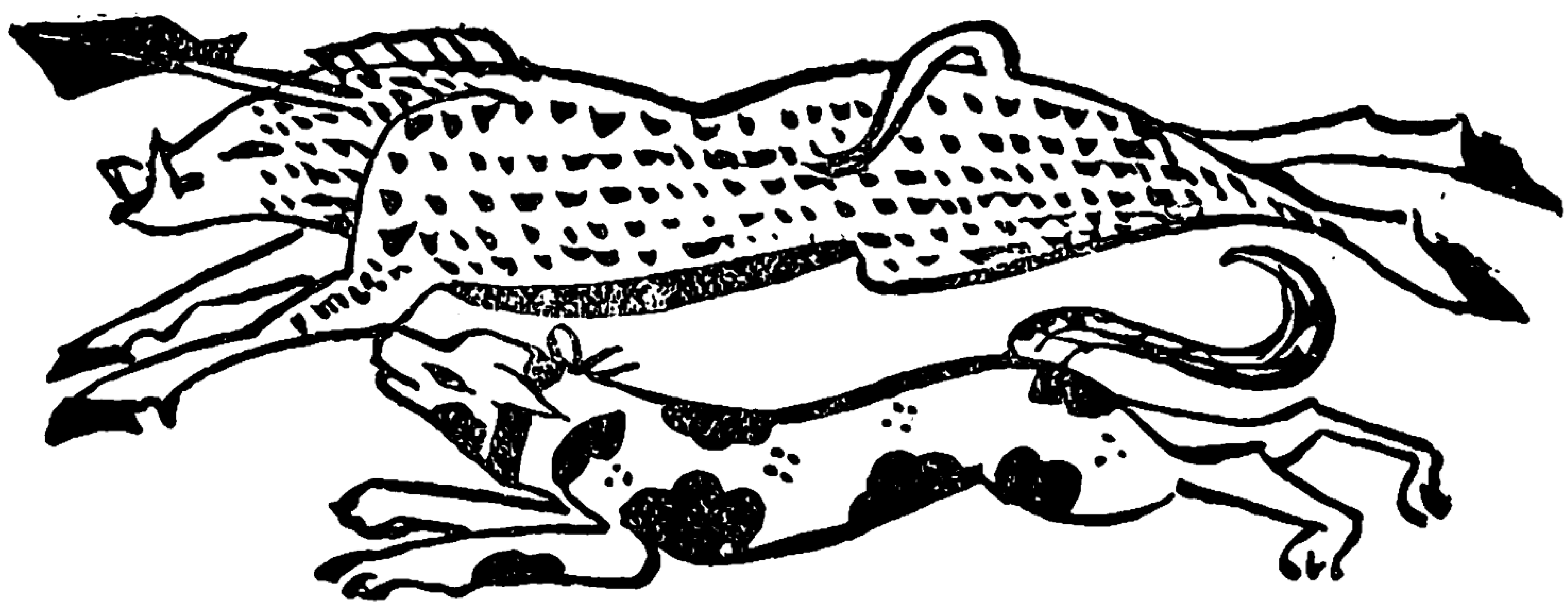
文藝戰線社出版部刊
東京市外高圓寺一六一
振替東京五九三八七


あなたのお化粧に對するお考へは？
「たゞ色が白い」と言ふことが美しいとは申せません、お肌はいつも生々と健康さから出る艶やかな色を保ちキメは滑らかに細やかにそれはお化粧によつて作られた美くしさのみではない。これこそ眞の美しいお方と申すことが出來ませう。
若しもあなたがこの美しさをお望みになるなら是非御化粧下には純國産のヘチマ化粧料を御使ひ遊ばせ
ヘチマコロンは素肌をすこやかに美しくととのへキメを細かく滑らかにし白粉のトキ水によく、ヘチマクリームは肌あれを防ぎお肌をいつも若々しく保ち粉白粉の下に使つて、お化粧遊ばしたとは思はれぬ美しさになります。
純國産美粧料
ヘチマクリーム
姉妹品
ヘチマコロン
定價
ヘチマクリーム 大瓶 .75 中瓶 .50 小瓶 .30
ヘチマコロン 大瓶 .50 小瓶 .30
本舗
天野源七
東京日本橋横山町



女人藝術第三巻三月號目次

——禁轉載——



題書　塩原久和代・橋本花子　甲斐仁代・深澤紅子　西村菊子・熱田優子


天下一品
萬
キッコーマン醤油
日本一
万上
マンジョウ味淋
資本金三千萬圓・醸造高五十萬石
宮内省御用達
野田醤油株式會社

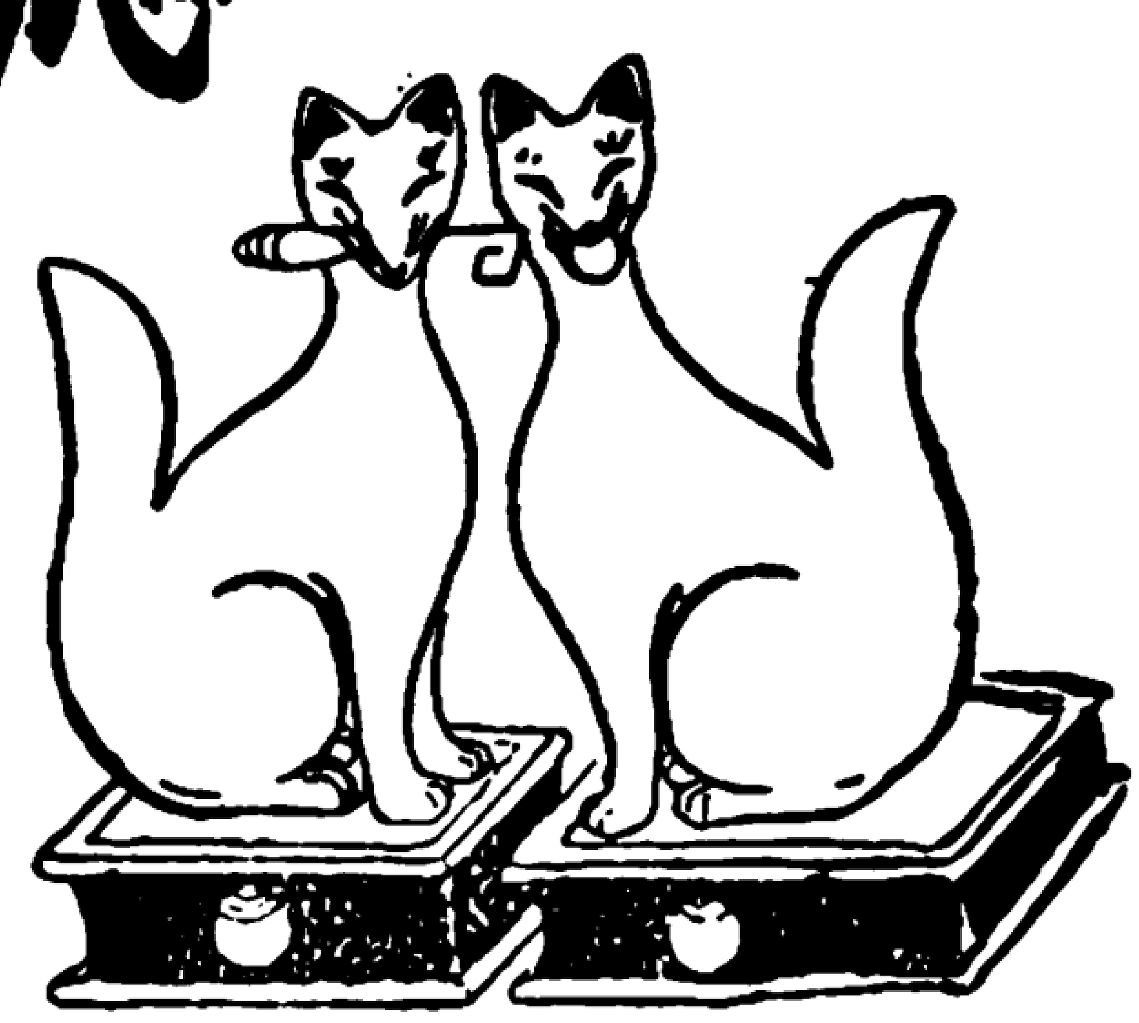


まねきん

日に増し御注文多く　今日はどこへお廻し
しやうかと　大騒ぎをするほどです

一個六十錢

願望叶 日限の神狐



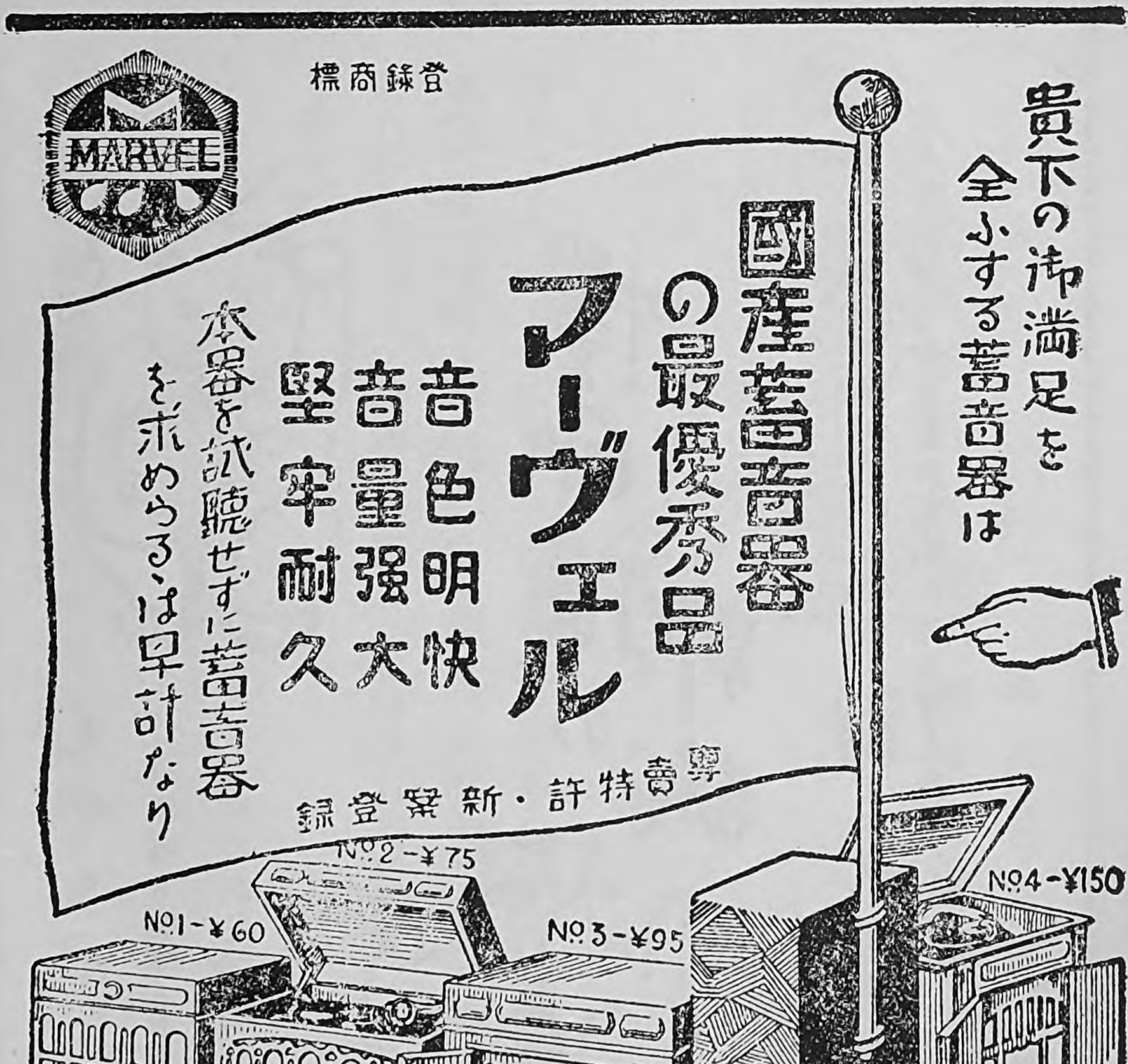
一對五十錢

日限の神狐の靈驗いやちこなることは、
女人藝術社でお宮をお求めになりました
ので知れてをります

薔薇苑こと

招金

豐川稲荷と赤阪見附との中央いなり社側　赤坂表町二の一



登錄商標
MARVEL
貴下の御滿足を
全ふする蓄音器は
國產蓄音器
の最優秀品
マーヴェル
音色明快
音量强大
堅牢耐久
本器を試聽せずに蓄音器
を求めらるゝは早計なり
專賣特許・新案登錄
No.1-¥60
No.2-¥75
No.3-¥95
No.4-¥150
銀座三丁目
十字屋樂器店

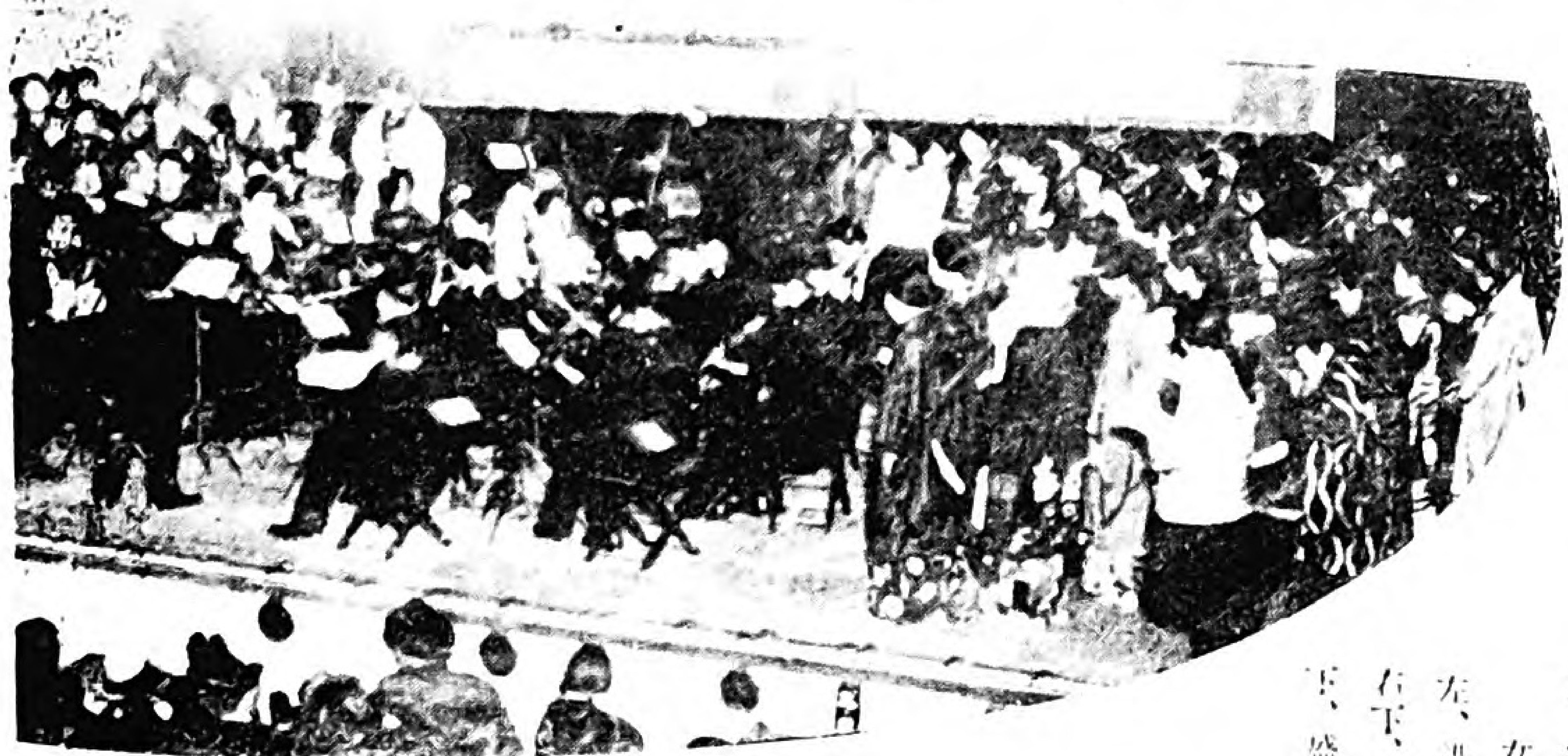


パリー・コムミユン六十周年

三月はパリー・コムミユン樹立（一八七一年三月）の六十周年記念の月である、パリー・コムミユンは世界に於ける最初の勞働者政府として永久に記念されるであらう。寫眞は一八七一年に銃殺された前衛等の記念碑であつて當時のバリケードに使用された石を積み重ねたものである。

名古屋新守座に於ける女人藝術講演會

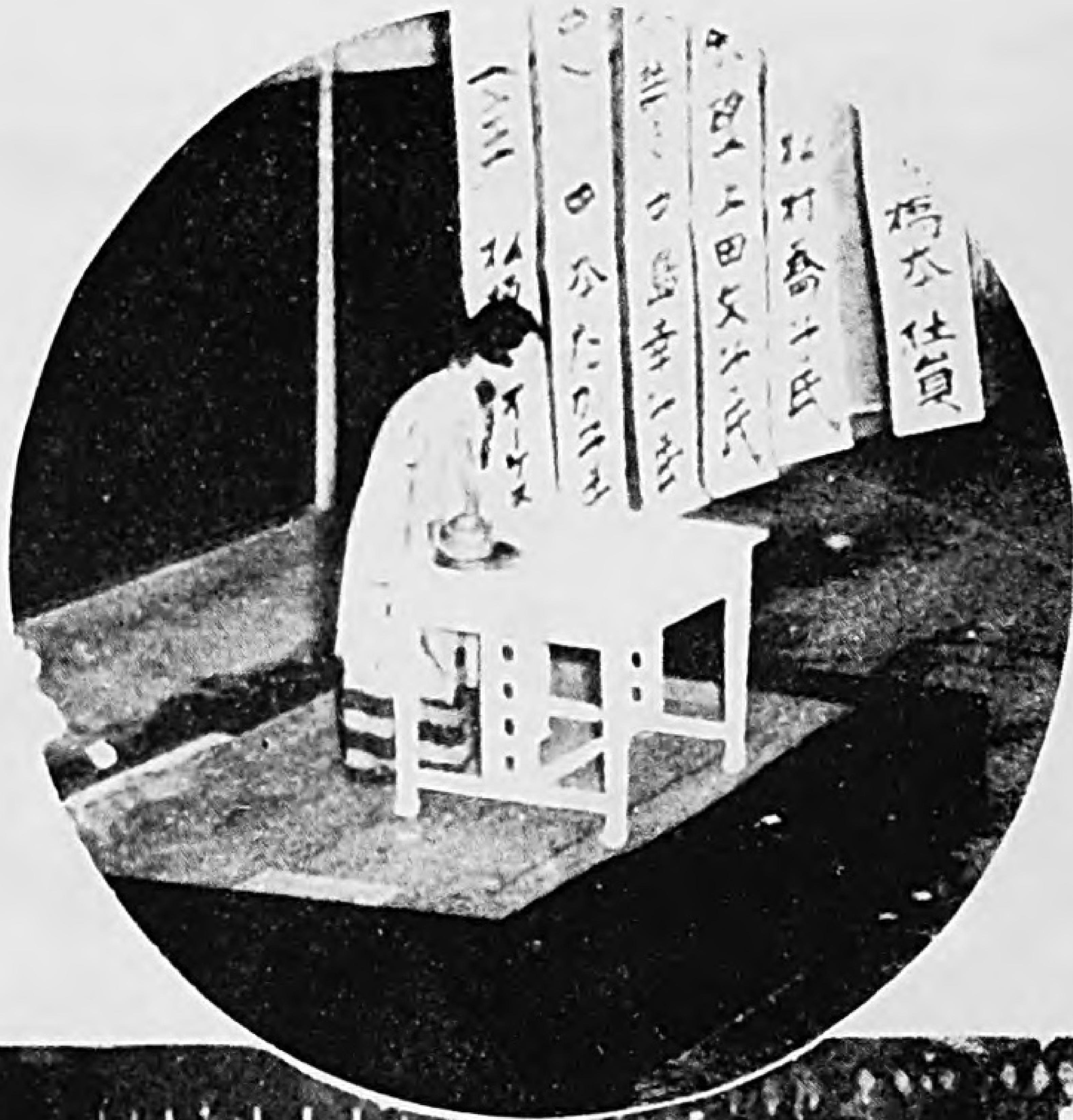
上、女性行進曲を合唱する女人聯盟員諸氏
左、講演中の上田文子氏
右下、長谷川時雨氏
下、盛會だつた當日の聽衆



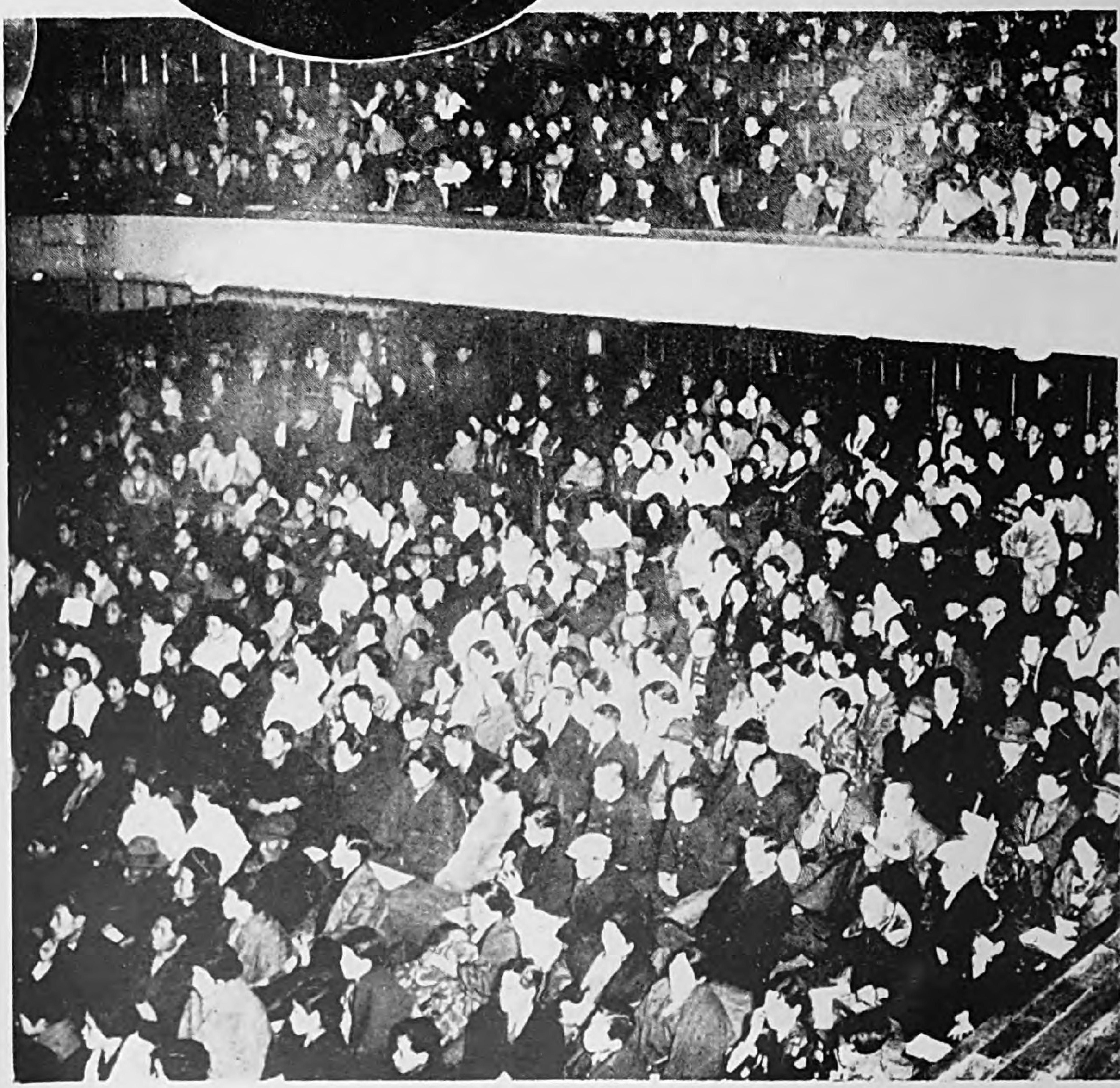














神戸女人聯盟員諸氏――一月例會

白十字堂

洋生菓子界の權威

美味しい店
明るい感じ好き店
誠實努力の店



本郷帝大前本店	電話小石川七〇九五
新宿支店	四谷五七五七
日本橋支店	日本橋八四二
淺草支店	淺草二五三五
神樂坂支店	牛込一五三五
四谷支店	四谷二七一二
駕籠町支店	大塚三二二五

新宿の二階は高級家庭食堂、三階は二百人までの集會宴會場座敷料なし

女人藝術

三月號



婦人デーと

三月八日は私共の日である。世界の無產階級婦人の日である。

この日は、もとアメリカの社會主義婦人によつて參政權の獲得、一般社會主義宣傳の日として定められ、その目標によつて行動を開始せられた日であつた。その後クラ・ツエトキンの努力の結果、それは第二インターナショナルによつて世界の無產階級婦人の日と定められた。爾來社會主義思想に目ざめた世界各國の婦人たちによつて、年々無產階級的スローガンの下に記念せらるゝことゝなつた。

ロシヤの大××が、千九百十七年の婦人デーに、レニングラードの街頭に溢れ出した婦人勞働者と兵士の妻たちによつて口火を切られたことは、世界によく知られてゐるところである。

レーニンは、婦人を運動の圏內に誘き入れることに成功する迄は、その國の無產運動は成功しないと云つてゐる。フランス革命にしろ、ロシヤの革命にしろ、私共は婦人が男子と一緒になつて血みどろな××的鬪爭に參加してゐるのを見る。

婦人は今日はまだ男の如くに正確に階級理論を把握し、これを組織的に表現することに馴れてゐない。婦人の無限の世代にわたる隷屬の傳統と頭腦の訓練不足とは、婦人にそれを不可能ならしめてゐる。しかし婦人は直接に必要に當面する時には、躊躇なく勇敢に行動を開始するに必要な勇氣と犧牲的精神とを備へてゐる。

日本に於ける資本主義の行詰まりは、金解禁と產業の合理化との遂行を使命とする濱口內閣を出現せしめた。

產業の合理化は、產業の統制、優秀機械の採用、勞銀の低廉な婦人と幼年者の使用とを意味する。そしてこゝに婦人と幼年工との最後の血の一滴までも、その飽くなき利潤への轉換を行なはうとする資本主義の爪牙が、最後の狂暴性をもつて臨んで來るのであつて、全プロレタリヤの資本への隷屬化はこゝにその極端な形をとり始める。

日本の勞働運動は、田中內閣以來の露骨な反動政策によつて空前の彈壓を加へられ、最も多難な時機を通過しつゝある。指導者は職を奪はれ投獄せられ、無產大衆はそれに抗議する迄には未だ力を得てゐない。したがつて眞に階級的な勞働組合にしろ無產政黨にしろ、その存在の爲めの鬪爭に忙しくて婦人の組織教化の問題について多くの時間を費やすほどの餘裕を有してゐない。が、事情は前述の如くである。加ふるに第三次世界戰爭の危機は、刻々に迫りつゝある。

我らの任務

軍縮會議が纏まらうとも又は決裂に終らうともその危險に變りはない。そして戰爭の切迫は、尙ほ多くの階級的勞働者の迫害と制禦し易い婦人勞働者の生產事業への引入れとを誘導する。

生產事業の重心が、かうして今日婦人勞働者の上に重くなり又ならんとする傾向にあることは、婦人勞働者が無產階級解放運動に重大な責任を持ち始めたことを意味する。

この大任を負ひはじめてゐる婦人勞働者を、私共は未組織の儘に放置することはできない。勞働者にとつて組織と團結とは武器である。武器なき勞働者をもつて工場を充たすことは、無產運動に大きな蹉跌を與へる結果を誘導する。

しかし資本家階級の企圖は、凡ての生產工場から團結と階級意識とを驅逐して勞働階級を防禦なしにすることにある。したがつて無產婦人の組織運動は、日本に於いては嘗つてなき妨害と彈壓とを覺悟して進められなくてはならない。

今日の日本の社會主義婦人の重要な任務の一つは、この困難な時期に於ける勞働婦人の組織化の援助であり、この機運を助長するがごとき雰圍氣を、社會に漲らせることにある。

尙ほ、昨年各國の無產婦人が國際婦人デーにかゝげたスローガンの主なるものは左の通りである。

婦人よ汝らの鬪爭に出でよ！

ロシアの婦人は×を斷つた、彼女らに倣へ！

帝國主義××準備に反對せよ！

賃銀の値上げを迫れ！

婦人の政治的自由を獲得せよ！

資本主義的合理化に反對せよ！

夜業の廢止！

母子の救助法を迫れ！

婦人悋氣組合

三場

時雨



街頭

若い巡査　こら〳〵、規定外の場處でビラを撒いちやいかん。

四十位な女　はいはい。

巡査　ハイハイぢやない――こらッ！　ハイハイ言つとるうちにそんなに撒いとるぢやないか。（疳癪おこして女の持つてるビラを取上げやうとする）

女　はい、いゝえ（ビラをとられまいと肩の方へあげて）　この道路の、街路樹の下でとお願ひしてありますの。

巡査　どの樹の下なのだ。先刻から見ておると、あつちへいつたりこつちへ行つたりしておるではないか、アン！

女　されば！　何處のどの樹の下とても考へておかなかつたで――こりや惡いことしましたな。三丁目といふたら、此處の角から、あすこの角までよろしい思ひますが、さて何本ほどこの街路樹はございますかな。貴方樣御存じかもしれんませんなあ。片側といはず、兩側にいたしましたら。

巡査　（面倒くさげに）許可書はもつとるのですか？　許可書は。

女　それはもう、もつとる段ではござりませぬ。お手間はとらせませぬさかひ、ちよつと見てみてくださりませな。（ビラを求める人に）はいはい、あげる段ではござりませぬ、見てもらひたいばかりに、女子がかうして日に照らされ、風に、塵埃に晒されて、ビラも撒きますのぢやわね。（巡査に）あなた樣もようみておくれなされませ、これが、このビラを撒いてもよいと、警察署からおゆるしうけた許可書、ビラにはなんと書いてあるか（讀む）

目覺めたる婦人よ、來れ！
我等はいま協力せねばならぬ時が來た！
おゝ！　鐘は鳴る――鐘はなる。我々女性が迷夢を破る鐘は鳴る――

聽け、諸君、妾等が同志よ！

巡査　（許可書とビラを等分に眺めて）なるほど、街の頭角に立つて往還の進路をさまたげぬため、三本目の街路樹……。

女　おわかりでございまして？　それね、三本目の街路樹の下と書いて御座いましよ。ですから、こちらの角の三本目で停立り、あきると、あちら角の三本目の方へと、そろ〱と參りますの。無論、歩きながらビラを皆樣にさしあげるつもりではないけれど、くれくれとせがまれ、手をだされるとよう斷りきれませんでな――ホホ、これはあながち、男だから、女だからと、性のけぢめによつたり、物色してかかるわけではなく、自然の――まあ、なんといふたらよいかね、微妙な心の動きね。そこが男女の、いえ、人間同士の感銘といふやうなものぢやないかしら。いふて見れば、あなた樣とでも、かうして、仲よく、柔らかうものもいえ、お答へも出來る。また、あなた樣にしてから、優しう、なんともいえぬお優しさで私にものいふてくださる。これはまあ、なんともいえぬ嬉しい事ではありませぬか。わたくしはさう思ひます。これが人情、生きとしていける男女の間柄は、かう美しうなうては嘘。なあ、さうとは思召しませぬか？　元來、わたくしが、このビラを撒き、同志を募るといふのも、いささか時勢を嘆じるからなのですのよ、私は一個の個人としての利益とか、名聲を得やうとか野心があるのではなく、といふて決して男性に强う當らうの、反謀しようのと、反抗するわけでもございませぬのよ。これが、女子として忍びきれないよく〱の事なればこそ……

巡査　わかりました、それはわかりましたが、（手帳につけながら）あなたがこの署名者ですか？

女　左樣でございますの。私がこんど、この「婦人同盟組合」を組織いたさうと主張いたします、岩崎あやめでございますの。婦人ともふしても、重に既成婦人の方たちを――。

巡査　ハ？　既成といふと……。

女　既に夫のある方々ね、つまり有夫の女性。

巡査　（思はずニヤリと）處女はないのかね？

女　それは段々に――尤も、入會者があれば悦んで迎える。有夫の經驗はなくとも――といつて、それらの娘さんがたが、處女らしい處女、眞正の處女でない方だといふのではありません。これらは經驗者から、より貴い、生きた實驗的の何らかを學ばれるよい機會で――。

巡査　？。

女　いはゆる夫操縦法といつたもの！　肉體的のではございません

の、決して決して、そんな賤しいものぢやない、男性の愛をいかに繋ぎ止めうるか——手早くもふせば、男性をどう束縛しうるかなのですの。おわかりになりまして？

巡査　——。

女　もし夫人がおありでしたらば……

巡査　いや、幸に僕はまだもつとらん。

女　早うお貰ひなさいませなあ。一人口は誠に生活にくいものでござりますよ。ではどうぞ御同僚の夫人がたに御吹聴くださりませ。

巡査　言つて見ればまあ、良妻組合とでもいふものなんでしよう。

女　ええ、ええ、さうでございます。誠によいお言葉をうかゞひました有難うござります。

巡査　では、なるべく歩いて撒かないやうに。

女　いろ〳〵と御苦勞樣、お若いにようお氣づいてお優しいこと。またお目にかかることも御座いませう。

往來人　——なんだ、なんだ、良妻組合だつて、チエツ。（ビラを讀む）惡しき良夫をもつものは集れ？

巡査　こらッ、立つちやいかん。（いつてしまう）

往來の男　（ビラの女をジロ〳〵振返つて見ながら連れに）おらあ、家へかへつて嬶を可愛がつてやるよ。あいつおれの前ぢや泣きやあがるけど、世間へ出て惡しき良人なんていつたこたあねえ。

女　（冷たく）さうお思ひなのも宜しかろ。男といふもの、みんなさうした安心を持つてゐる。あんたのおかみさんも組合によこして見て、さて何をいふか蔭で聞いててごらん。そのをりによく思ひ當ることもあらう。

男　ヘイ、これは濟みません。（笑ひながらいつてしまふ）

　女がくる、男がくる、子供がくる——

女　（娘たちに）澤山もつていつて、そこら中に撒いてください。なるべく婦人にあげてね。いえ、かまはないの、おまはりさんとはよい了解を得たから、（さう云ひながら電柱にビラを張りつける）

蕎麥屋　（出前の自轉車をとめて——感心して讀みあげる。）——漢えなあ！

婦人同盟組合員募集

1　惡夫を退治しなければならぬ！
2　誘惑の原因を追求せよ!!
3　妻子扶助額の協定！
4　家庭惡化の罪は斷じて男性より發る。
5　浮氣なる男性を糺彈せよ。
6　家庭の女子は起て、奮へ!!
7　我等が血涙の叫びをきけ！
8　暴横なる家庭に於ける專制主の悔悟を促せ。

女 （猫が日向でするやうな、虎もするやうな欠伸をする）

蕎麥屋 （びつくりして） おお凄げえ。

婦人 （勇敢に白粉を面のやうにぬつた、舊式な束髪で、上衣なしの洋服、三十五六の婦人がピラ夫人に突然握手を求める） 全く男性は横暴です。しかも、それは一度女性が彼の家庭に隷屬するとなるとです。大いに膺懲しなければなりません。私はあなたの右の腕になります。

女 まあ！ これは素晴らしい。ちよつと待つてください。私はいま煙草を吸はうと思つてゐましたから――（強く敷島を一吸ひして氣前よく投げる。吸殻を下駄で踏みにぢりながら、其方も氣にしつつ握手する） 機會は熟しすぎてゐるですね、あなたのやうな方が、最初の一分間に飛出して來てくださるなんて――こりや、此組合はもしかすると、全國的な大きなものになりますよ。（聲をひそめて）女性の大反逆です。異性に對する幾世紀かの欝憤が、女性といふ女性の胸に燃えさかつてゐるしるしですね。力強いではありませんか、大いに奮いませう。

婦人 私は涙に――感激の涙に胸が一ぱいなのです。何もいえません。握手、握手！ どんなにでも私は戰ひます。この戰ひのためなら、家の禿茶瓶なんか、まつさきに犧牲にしてやる！

女 勇しいッ、その勇氣！ なんと凜然たる闘士だらう。私はもうあなたといふ人を見出したから、今日殺されても殘り惜くはない

9 暴力に報ゆるには暴力をもつてせよ。
10 女よ嚙みつけ
來れ、共に泣く婦女子よ、我等は團結して惡夫を膺懲せん。
時。×月×日
所。組合事務所××町理髪店二階

婦人 誰が殺すのです。誰があなたを殺すのです。

女 彼が！ 彼女が！

婦人 ウム――即日實行だ。

女 待つて――彼はいま痔で寢てゐるから――あまり痛めると、月末に困るですよ。

婦人 卑怯だ、それは未練だ！

女 それがまた、さうばかりは言えんの、よう考へてからでも實行はおそくはない。まづ〳〵團結せねばはらぬ必用が最大急務であるですよ。

婦人 フフン、今から妥協ですか。私の夫は私に子供を二人おつけて、今更になつて私と同棲すると命が怖しいと隱れ廻つてゐる不所存ものです。わたくしはかなり人にも知られてゐる。谷間花子といふ詩を書いてるものです。

女 まあ！ あなたがあの有名な谷間花子さん？ 私は自分の所存

を世に問かけたいの一歩に——いや半歩です、いやもつと短い。今、足を踏出すかださないのに貴女といふ素晴らしいお方が、私の胸へ飛込んできてくださつた。といふより、貴女はすでに、私より早く内心では叫んでいらつしつた要求だつたのかもしれない。それを、謹しい日本女性の優雅さから、押えにおさえてお出だつたのだ。であるから、私の、このかぼそい、蚊のやうな叫びにも、ガクとしてお目がさめ、夢から——甘い甘い詩の夢からさめて、かうしてはゐられないとお駈附けくださつたのだ。いやもう有難いことです。頂きます、頂きます、このお手を、神とも佛とも、私に力をお與へ下さる天のお手とおもひ拜します。——有難うございます、私は貧乏な——そのくせ心は富んだつもりでをる岩崎あやめともふすしがないあはれな女です。

婦人　おゝ、では、あなたがあの思想家の岩崎あやめさん？

女　おはづかしうございます。

婦人　はづかしいと稱しやるの、貴女が！

女　失言です。今のは失言です取消します。我々はすくなくとも十人の同志を、今日中に獲得することを約束しませう。

婦人　勿論！　このスローガンを胸にかけませう。我々は舊思想の羞恥を捨てなければいけない。

女　無論ですとも。

（募集傳單を胸にかけ二人勇敢に歩き出す。夕刊賣が急に氣がついたやうに鈴を振りならす。交通巡査の警笛、消防自働車の警笛の叫び）

組合事務所

あやめ　（大火鉢に頬杖をついてゐる。二ッの拳固ではさまれた顔が歪んでゐる）——それで吉澤さんどうしたの？

吉澤　どうもかうもないさ、姙娠した女髪結なんて、必然的失業ぢやないか。この腹を抱へて得意廻りが出來るものか。

あやめ　あんたの商業收入がよい筈だから、出産手當の費用は貯金しておありだらう。

吉澤　組合の幹事さんともあらう人が、そんな間抜けでどうするのだよ。ダラ幹だね。金がある位なら、あんな野郎、あとくされになる奴探しやしないよ。

あやめ　あんたが金がないなんて、飲込めんじやないか。

吉　あいつが飲込んぢやつたのだよ。

あやめ　なにを！

吉澤　お前さんはまた、ばかに飲込みがわるいね、あたいの臍くり金をあいつが浚つて逃ちやつたんだ。

あやめ　ふえ——ッ、なんぼ？　いくらほど？

吉澤　いくらかくらつて、ありつたけさ。

あやめ　何時ね？

吉澤　何時つて、あいつが出た日さ。何時もの通り歸つてくるかと思つて油斷して、通帳のなくなつたのも知らなかつたんさ。今日ねもしかと思つて銀行へいつて聽いたら――。

あやめ　盗られたかッ？

吉澤　ねこそぎ――やんなつちやうよ。

あやめ　ふうン――（絶叫する）花子さん。

花子　（しきりに帳簿に記入してゐたのが顔をあげる）

あやめ　あなた、まあ今のはなし聽いたか？　まあなんといふ冷たい顔をしてゐるの。およそ世の中に、この吉澤さんほど氣の毒なものがあらうか。私はこの人が、一生懸命に稼いできたのをよう知つとる。その貴い勞働から得た金を、この身重な女を捨て、ねこそぎ盗んで逃るとは――人道上の大問題ではありませんか。なんのために婦人の諸團體はあるのです、工場に働く婦人ばかりが職業婦人であり、勞働に從事してゐるのではありません。女教員ばかりが妊娠時の手當その他の優遇法を得るべきではないでせう。共におなじ婦人です。しかも彼方は、昨日までは女の腕であらい働きをして、大の男を易々と養つてゐられた大切な、その男にはいはゞ恩人です。その稼ぎ手に、働きもしないで、終日のらくら遊んでゐた、指さきのきれいな、青白いインテリが、その稼ぎ人に子供を姙せたといふ事からして間違つた、取りかへしのつかない失敗ではありませんか。彼はどんな方法によつてでもその過失を悔なければならないのに‥‥

花子　ですが――私の場合に照して見ると、彼等の言ふことは一ツです。悔ればこそ逃出すのだと――

あやめ　なにを仰しやるの、あなたまでそんな――。

花子　冷靜に、冷靜に――（壁のポスターを指さす）

復讐　血は血で!!!　金は金で!!!

あやめ　（ちよいと鼻白んで）ああさう〳〵。私は頭が燃えていけない。

吉澤　だけど書記長、金は金でたつて、あいつもう持つてやしないんだからくやしい。

花子　金にもいろ〳〵あります。延金つていふ事知つてますか？

あやめ　ほん、全くよい智惠！　ねえ吉澤さん、痛くないていどにチク、チクと突ツついておやり、あんたをそんなにまで泣かせたのだから、片耳ぐらゐ削いてもよろしかろわね。

吉澤　それで腹の子はどうなるのだね、こんな時の組合だと思つて飛んで來たのだが――

あやめ　そりやまあ出た時のことでよい。この組合の成立が、お産

の問題はまだ誰も提議してゐないから——然しこりや當然議題にのぼせにやならんわ。なあ、花子さん、緊急動議として貴女から提出して下さらんか。——そこで吉澤さん、今日臨時會議をあなたのために開催します、まづ第一の問題は。

花子　さあ〳〵、會員臨時召集です、饒舌はその上のこと。吉澤さんは亭主の居所を出來るだけ嗅出してお出なさい。

吉澤　あん畜生の耳をとるより、腹の子の方の始末がしてもらひたいんだが。

あやめ　ものには順序があつて、さう自由にばかりもならんの。—わすれた、これが男性刑罰の最初の會議及執行ではないの。（おごそかに）吉澤さん、あなたは第一の釘を打つ名譽をもつたのです。その壁繪の男子の何番にでも第一の釘をおうちなさい。（花子と共に、吉澤が繪像の何處に釘を打つかを凝視する。）なぜ足へなんぞ？（激しく咎める）

吉澤　頭も可哀さうだし、盗人だから遠くへ逃られないやうに足へうつたのさ。

花子　よしッ、君、すぐ行け。

吉澤　じやあ探しだしてくる。（轉げるやうに梯子口から階下へをりてゆく）

理髪師　（白エプロン、バリカンを持つたまま梯子口から顏を出す）岩崎さん、どうしたのです。

あやめ　（愛想よく）まあ親方さま、まあお上り、毎度、なにやかやとお世話になります。組合の方も會員が日毎に増えますので、事毎におうるさいことでござりましよ。

理髪師　いゝえ、あつしの方は、人出入りの多い方が賑かで、客足がついてよござんすがね、あの髪結さんが血相變へて飛出していつたから——喧嘩でもしたんですか？

花子　フフン、婦人か寄れば、喧嘩をするものとお思ひなんですかね。

理髪師　そんな譯ぢやないんだが、なんせ、偉い見幕だつたから—貴女がたもお出かけなんですか。

あやめ　はい、皆を寄せに參ります。

理髪師　へ？　また寄合ですか。よく毎日厭きませんね。

あやめ　緊急問題があれば日に幾度でも集ります。（うや〳〵しくお辭儀をして下りてゆく花子もつゞいてゆく）

理髪師　（後を見送つて階上へ上つてきて見廻す）

客　（半刈りのままそつと上つてくる）親方、おれにもちよいと覗かせておくれ。あら！　みんなやつてくるぜ。

（階下から客だの職人だのがぞろ〳〵上つてくる。）

理髪師　いけない〳〵、歸つてくると家宅侵入かなんかで訴へられるぞ。（さう言ひながらゆつくり感心して壁のポスターを見廻る）

客　君のとこに婦人同盟組合なんて、妙な看板がぶらさがつたから

女の理髪師の組合だらうと思つてたら、こりやあ大變なのだね。

理髪師　大變も、大變でないも偉いことでさあ、今日もこれから、何がはじまるか知れませんよ。

客　物凄いんだね。

他の客　おれの番はゆつくりだから、便次に何があるか覗いてゆかうかな。

理髪師　見てゆく必用はたしかにありますね。

弟子　うへッ（飛上る）親方助からねえや、釘が打つてある、釘づけだ。

客　本當だ、まるで耶蘇だ。

他の客　書いてある事がどうだ。とんでもないこつた。

も一人　ねえ、こんなのが、秘密結社とでもいふんぢやないかね。復讐——血は血で？　不氣味だなあ。

他の一人　——男性の横暴を懲せよ、か。女子も人間なり——

客　當りめえぢやねえか、人間でねえ女なんて、見たくもありやあしねえ、

弟子　だけど、人間でない女もあります、猫だつて——

客　ニヤンていふ方のは女つていやしないぜ、ありや雌だあな。あなたやあつていふ方のは正銘の人間の女だあな。

弟子　それや違ひますよ、猫だつて、女猫とか男猫とか、女猫とかいひますからな。

他の客　でも、女象男象なんていはないよ。

も一人　ところが、女蝶男蝶、女獅子男獅子もあれば、女虎、男虎、——役者の名にもあつたつけ。

弟子　あたしのおぢいさんが唄つてましたがね、ええ、けちな咄し家だつたんですけど——女蛇ぢやか、男蛇ぢやか、なんぢやかかんぢやかわからないんぢやつて。

理髪師　しやれるない、この場合。おれはすこし氣味が惡くなつてるんだ。

客　全くだ、氣をつけないと、一味同類のやうに見られると、暗いところへやられかねない。

理髪師　脅しちやいけねえ。

弟子　一體親方お人好しで、女の人さへ見れば誰かれなしに間がしなんぞしちまふから——

理髪師　なによ言つてやがるんだ。階下へいつてろ、店が空つぽだ——ほら、誰かよんでるぢやねえか。

（弟子がをりてゆくと入違ひに斷髪、馬の如き巨軀の洋裝が飛上つてくる）

斷髪女　（ヂロリと見てかまはず唄ひつゞけ、すぐに謄寫版を出して摺りはじめる）——世界のはあは、われら。世界のはあはわれら——（一段聲高く）とざす雲裂く日よ、荒れ狂ふ嵐よ、山とうねる波よ、立て燃えつつゆけ（強く）諸腕を、さしのべ……

（男たちだん〳〵に逃げをりてゆく）

断髪女　（一枚の摺上りをとつて、立上つて讀む。）

組合員規約

一　會員相互の友情を重んじ、彼女の彼を奪ふべからず
二　彼女を援助し、彼の浪費を會員相互にて監視すべし
三　本組合員にしてやむなき戀愛事件惹起の場合には愼重の決議をもつて除名する事
四　六ケ月間家庭爭議を起さず安價なる妥協を幸福とする者は組合員の資格なき事

（その時階下にて婦人連の鬨の聲あがる。）

あやめ　（駈上つて來て）沖さんか、よい折に來てゐてくれた。吉澤さんを捨た亭主をいま捕へてきたの。組合は今日こそ有名無實ではない、彼が後悔するか、我々が制裁を加へるかです。

断髪女　ブラボオ。（兩手を高くあげる）

あやめ　だが、男は卑怯者だね、今になつてこんな事をいふのだと。あの組合を脱けてくれれば、以前の通りお前を大事にすると――

（呟く）あの男あの女にあんまり媚びすぎてゐた。

断髪女　ばかな。――もし會長たる貴女を、あなたのハズがさういつて誘惑したら、あなたはハズにどんな制裁を加へますか。

あやめ　さうね、自分自身の問題となると、輕々しく返事は出來んわ。こんなこと矢つ張りみんなの熱ね。ともあれ、今日の事件は断じて許されない。

断髪女　やつちまいませうか。鼻でも。

あやめ　片耳といふ事にしてあるの。

断髪女　チッ！　手ぬるいな。だから貴女方にやまかしておけない。

あやめ　おほほほ、この急進派が！　（肩を叩く）然し勢ひはいいですね、大いに鼓舞されるですよ。

（ワツワツと梯子口に大勢の女の頭が現はれる）

ある政務次官の邸

主人　（髯をなでながら）そりや英雄色を好むさ、なあに妾の五人や三人飼つておいても不都合ぢやないさ。

訪問者　併し。

主人　なにが併しだ。俺は、おれの手腕を信じてゐる。三人五人の女子が御せんで、なんぞ一國の政事をやだ。まあ案じるな。

訪問者　いや、君が總理大臣になれる日が明日だと言つても、あながち突飛だと思はんが、併し、女子を三人も五人も一つ家においておいちやいかん、夫人ヒステリーになつてしまう。

主人　なあに、あれは最初つからヒステリー女なんだ。今はじまつた事ではない。

訪問者　まあ、まあ君がさういふのなら何をか言はんやだが、君の夫人ぐらゐおとなしいのは珍しい。

主人　陰氣なんだ、たまらんほど陰氣で、メソメソしてゐてかなはん。他の女達は、どうしたら僕が慰さむかと、ダンスだとかなんだとか氣を揃へてやつてくれるのだが――

訪問者　他の女と一緒になつて、それが出來る位ならそんな女達を五人も邸の中にごろごろさせてはおくまい。

主人　君に言はせると、あの女たちはまるでゴロタ石だな。

訪問者　しかしまあ氣をおつけなさい。先刻もいつたやうな、ぶつさうな組合もあるさうだからな。

主人　そんなものは君、どうにかして摑みつぶしてしまつてくれたまへよ、世の中を惡化させる種だ。

訪問者　さうとも言へんでなあ、無茶もやれないさ。ほう！　だいぶ話が長くなつた歸らう。

主人　いまいつた變な女の組合なあ、なるべく摑みつぶしてしまへよ。

訪問者　おれはさう害があるとも認めないのだが――君は脚に疵だから、氣になるなあ無理もない。

主人　押かけられたりしちやあ見つともないからな。

訪問者　すると糺彈をうけるだけの罪は自ら認めるのだな。あは。

（笑ふ）

主人　あッはッはッはッは。（客を送つてゆく）

（華やかな燈火がつく。主人と訪問者の聲とに交つて賑はしくざわめく女達の笑ひ聲。）

夫人　（たおやかに、さびしく、濕めりと額をおさえてゐる）

小間使ひ　（祕かに）　おくさま、おくさま。

夫人　町や、もうなんにも言はないでおくれ。意氣地のない私は、お前にまで愛想をつかされて――

小間使ひ　何と仰しやるのです、夫人。あたくしは、こちらの旦那樣が、あんまり人をばかにしてらつしやいますから、とう〱行つて參りました。

夫人　とう〱つて？

小間使ひ　ええ、あんなにお止めになりましたけど、あの理髮店に看版のかかつてる婦人組合へいつてきたのでございます。夫人、大變でございましたよ、一人の、いけない亭主がとつつかまりましてね、鼻をチヨンギられるところでございましたの。私も、家の旦那樣の鼻がいいだらうつて申込んでまいりましたの。

夫人　まあお前――

小間使ひ　ええね、そりやあ私にも旦那樣にさうしていい權利は、夫人には失禮で申上げかねるのでございますが、ないのでもないのでございますの。けれど、會の規則としてなる可、さういふ場合には細君の加入された方がいいといふので、私、實は夫人の

代理に失禮ではございましたが、此方のお宅の妻——つまりあなたの名で入會いたしてまゐりました。

夫人　まあお前、そんな無茶な。

小間使ひ　なに、かまやしません。あの旦那様ですもの、夫人なんざほんとは誰だつてかまやしないのでございますよ。あなたは代表者——名義人だけなのねと、あちらの會長も仰しやいました。

夫人　（額をおさえて伏沈む）

小間使ひ　で、すみませんが、電話がかゝつてきましたら、鼻にするか、耳にするか、それともキュッと一時咽喉をしめてやるか、よく考へになつて御返事なさつてくださいまし。

主人　（女達の肩につかまりながらくる）ねえ夫人、ゆりはダンスしに行かうといふし、あざみは飲みに行かうといふし、ぼたんちやんは活動に行かうといふお好み、まゆみ君は芝居、アネモネ君は麻雀で御注文なんだが、僕は身ひとつで困つたよ。

一人の妾　ねえ夫人、つまりその狀件が聞入れられたものが今夜の正夫人なの。そして、今夜中は、どんな御注文でもきいてもらへるの。ダイヤでも別莊でも——

他の妾　だが、みんな米國行きが目的なのよ、誰の手におちるかつてことが。

別の妾　五人の仲の誰かしらかだが、夫人が選外だつていふ事だけはきまつたのよ。



第四の女　さあウキスキー。だらしがないね、そんなに髭にこぼして。

五の女　いよいよアル中なんだよ。ねえあんた、今のうちにウント金をとつときなさい、あたし達が困らないやうにね。

主人　この上とると疑獄をおこすからいけない。

五の女　あたしたちが知つた事ぢやないぢやないの。とれるだけとつときなさい。おやおや、貞節な夫人が泣いてらつしやる。

(電話の呼鈴がなる。小間使ひ嬉しさうに飛んでいつてすぐ夫人に取次ぐ)

夫人 (受話器を耳にあてて)え? なんですつて、組合員が大擧してむかつたつて? まあどうしませう。私決してそんな事お願ひしやいたしませんのに――デモですつて? え、デモンストレーション、なんの事でございますの。

小間使ひ (街へむかつた大きな窓を開けて見てゐたが)まだこないのかしら、早くくればいゝのに。(窓に上る)

主人 (夫人を突きとばして受話器をとらうとする)離せ、××へ知らせるのだ。

夫人 (急に受話器にかぢりついて叫ぶ)誰が離すものですか――ああをかしい、ああをかしい、ああをかしい(ヒステリツクに)あははは、あはははは、あはははは。

妾の一人 ねえあんた、なんなのよう。



他の妾 へゝんだわねえ。

別の妾 何時もと違ふわ。

主人 (せきこんで)おい、離さないか――離せ、俺が出てやる。

夫人 (泣笑ふ) あははは、あはは、鼻が惜くなつたものだから……

主人 なんだと? ば、ばかな事をいふな。(狹く) ね、お前、どうしたのだ。ウン? みんなが居ては話が出來んか? あつちへ追拂ふからな、氣を靜めなければいかんよ。ね、お解りだらう。夫人の身分はなんだか――ね! さうでしよ、余の正妻でしよ、ばかな事に雷同すると、取返しのつかんことになりますよ。

夫人 私が正妻でございますつて? おほほ、みんなが笑つてをります。私は代表者にすぎないのでございます。名義人だけなのですと……。

主人 だ、だれがそんな事を言ふものか――

小間使ひ (金切り聲で) いいえ、旦那樣、私が申上げました。世

間(けん)ではみんなさういつてをります。

五の女 （手を拍いて） 其通り、全くだ。

主人 こらッ、なんだ、あつちへいつてゐなさい。



五の女 へイへイ。

夫人 （電話に答へて） 入らつしやるのですか？ え、みなさんもうお出かけ？

小間使ひ （叫ぶ） 旦那様、復讐の時が來ました。夫人は、私の代りに組合員になつて下さつたのです。

主人 なんだと――き、貴様が煽動したんだな。

五の女 （やゝ不安に） 一體どうなの？

主人 おれの――鼻をもぎにくるのだ。荒くれ女の一隊が押寄せてくるらしい。用心しろ、お前も鼻や耳をとられないやうにしろ。

妾たち あらやだッ。どうしたらいいのよ、どうしたらいいのよ。

小間使ひ （窓の上で） 來た！ 萬歳！ 早く、はやく、はやく！

主人 離せ、さなさぬとぶんなぐるぞ。

夫人 死んでも離さない。あたしは、この屈辱を忍ぶより、あなたの鼻がない方がまだしも忍べる。

主人 ばか （打つ）

夫人 （泣しやくりながら） 貴夫は――貴夫は、いま、この弱い女の強い力をお知りになる――

主人 なにを生意氣な――（打つ）

夫人 あたしを助けるために、あの組合は生れたのだ。

主人 どうしても俺のいふことをきかぬか。

夫人 あたしにも、あたしの心があるといふ事を見せて差上げます。

主人 こん畜生ッ。（激しく亂打）

小間使ひ ――萬歳、はやく、はやく！

（多勢合唱の女性行進曲ほがらかに聞えてくる）

主人 コラ、ぼたん、まゆみ、なにをウロ／＼してるのだ、暴力團

國が來たんだ、早く書生共をよべ、警察だ。

妾たち（扉をあけて走り出たが、すぐ歸つてきて）だめよッ　もう來ちやつたわ。（てんでに机やカーテンの下に逃げこむ）

小間使ひ　旦那様、逃げ路は此窓つきりです。（主人とんでゆくと突きとばす）だめだ、この前科者！

主人（夫人の前にぬかづいて拜む）夫人、たすけてくれ。

其時廊下から隊伍堂々と同盟組合員なだれ込んで居並らぶ。

斷髮の女（進出て剃刀を夫人に差示す）あなたの意志によつて、この男のいづれの部分を削ぎとつてもよろしい。別の方法としてはおだやかな詰問ののち、袋叩きにして釋放もします。

夫人（すすりなきながら）どうか、髭位にしておいて――

小間使ひ　いけません、斷じて。

主人（戰きながら威容をつくつて）はは、君がたが、その悋氣組合なのかね。どうです、好い條件で、妥協しませんか。この臨時總選擧にも、無論我黨內閣です。婦選をものにしてあげますよ、婦選をね。隨分好い條件ぢやありませんか。

夫人　欺されてはいけません、ちやんと約束させなくつては。

主人　だまんなさい。――どうです、貴女方、隨分長く運動しなさつたぢやないか。

花子（冷然と）當家の主人はあなたですか？　お申出の條件は後で伺ひませう。先刻夫人よりの申出では、

一　內妾五人を卽時放逐

二　外妾は一人たるべき事（但月手當百五十圓位、人物は當家小間使矢澤はつ廿歲の事）

三　はつ女以外の浮氣絕對無用

四　今日迄女性を苦しめたる罰として相當體刑を加へる事。

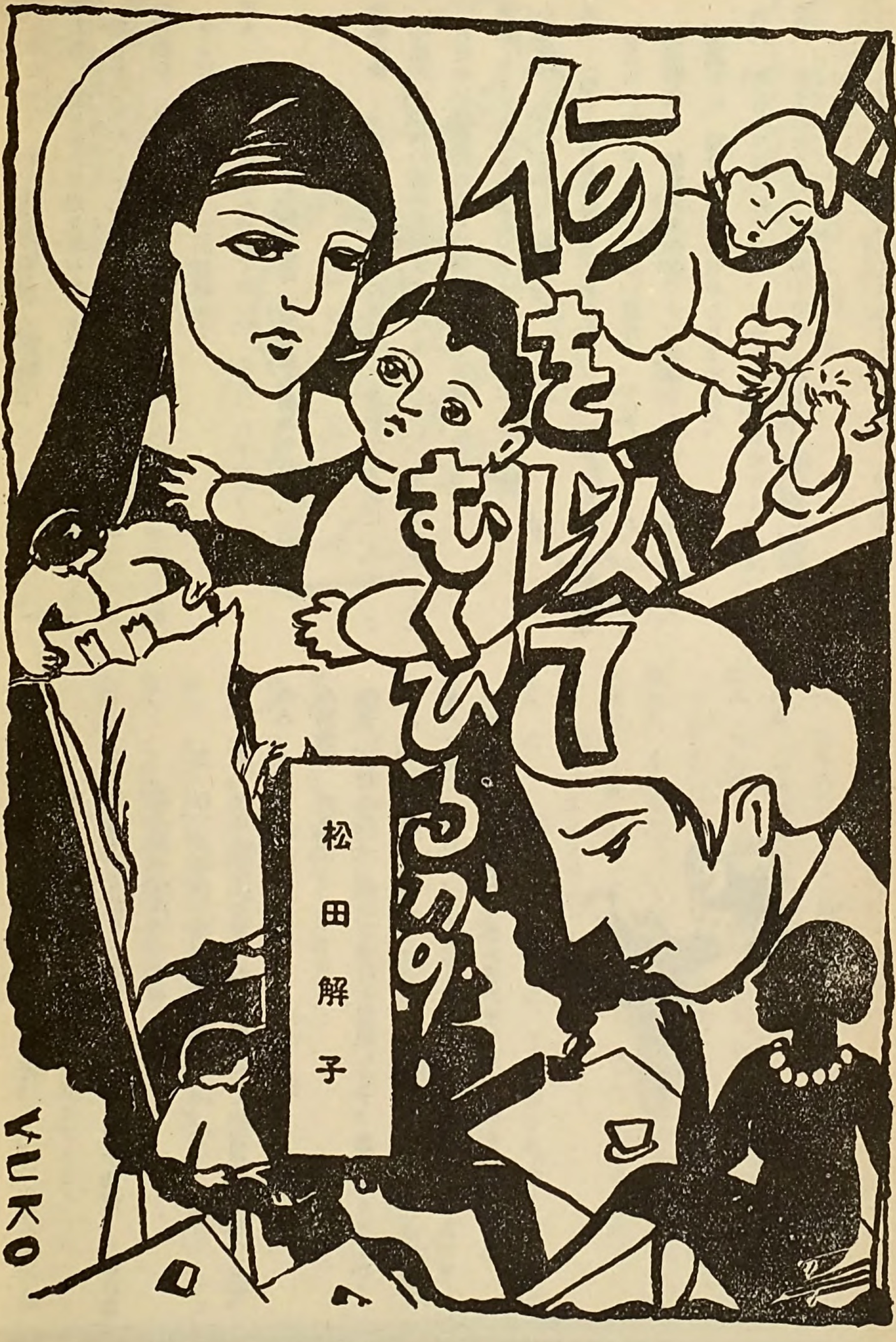
夫人　まあ！　はつ、お前。

小間使ひ　シッ。

花子　私共は第二、第三の申出を拒絕します。意議ありますか？ありませんね、では――

夫人　待つて下さい。（主人を救ひ起す。主人眉毛なし）あさましいことです。私はやつと夢が覺めました。（靜かに出て行く）




何をむくれているの？
松田解子
YUKO

— 搾取網、慈善網

忍耐強い太陽だ。一ト月近くのヒデリ續きで、地殼はボロボロに乾き切つてゐる。雨の樣なアブラ汗が其處を通る馬丁の首すぢにも自轉車で走る小僧の手指にもジットリ滲んでゐる。三田土ゴムの赤茶けた煉瓦塀の中、精工舍の巨大なタンクの下、溝川の向ひに屹立つ花王石鹼工場の中、中空に迄黑々と苦惱を吐く煙突の下はすべて、雨の樣なアブラ汗が、働く男と女との手指に、背に、眼頭に、細胞の一粒一粒にジットリと滲んでゐる。

彼等の安息所はトタン屋根の下に、よくよく焦げ付いた黑パンみたいに打ちひしがれて隣り合つてゐる。其の合間合間のドブ板は、鼠の死骸や、葱の尻尾や、便所の餘り物で、ドロッとなつた重油——の壓力で、大概は押し除けられてゐる。容赦なく臭みが發散する。蚊群が身動きもしないで流しの飯屑にへばり付き、糞ばえや家ばえが、飽く事なく交尾し食ひ、飛び廻つてゐる。が、そこら中に響き渡つて來る眠たげなオルガンと子供等の歌聲……エス樣守り給へ……懇願の調子だ。事實救世軍托兒所の黑板塀の節穴からは、更に多くの場面が覗かれるのだ。

蒼ざめ瘦せた四十位の女、大した惡相ではないが、しつかりした身ごなしで晝の「お祈り」をやつてゐる。オルガンは蓋を開けられた儘。何時もの樣に鼻汁を垂したり、着物の前をはだけたりした子供達に、半ば化石した彼女の眼球が吸ひ付いて、何かを一心にシャベり續けてゐる。めい〳〵の机の上に載つてゐる二つのトモエ燒きをそつと引寄せてペチャンコにする。ハミ出した小豆粒を掬く口に運んで又元の位置に据える。が、未だお祈りは續くらしい。赤ちゃけたホッレ髮に幾千度目かの憂うつがからみ付く。最後の……エス樣守り給へ……だ。其の時、道路人夫の一塊りが、頭から泥を被つて這ひ上つた。

「晝まだ、よすべえ。」

トラック、トラックの代りに車で砂を運ぶ朝鮮人、ガソリンより、電力より、馬よりも賤い勞働力を此の日だけ買はせる事が出來た彼等は十錢の稻荷鮨を目懸けて業平橋を渡つて行く。あらゆる者が、それ〴〵の晝食を狙つて走る時刻だ。

モーターサイレンが唸る。その後から遲ればせに——そして常に遲ればせにライオン齒磨が唸る。栗原紡績が唸る。一分の餘剩價値であり、二分三分のより大なる搾取だ。

芋虫の樣な足つきで、勞働街の略々中央にしがみ付いてゐるH婦人會B館は、敏感に受付窓を締切つた。が、此の時刻迄はみ出して了つた十人近くの姙婦が、控室ベンチにぐつたりしてゐる。沈まり返つた空氣を裂いて分娩室に呱聲が擧がる。嬰兒を浴室に抱え込むスリッパの音、產み落した女を二階褥室に擔ぎ上げる產婆見習生の一團……

「さあ今度はあなたよ。」

朝鮮婦人は白衣を脱ぎかけた。潑溂たる母體がメートル尺とキロ秤にかけられる。

「骨盤は割に狹いのね。」

黒いベッドが三つ。機械で產みかけてゐる女は左端だ。

「發作六…もつと其の革紐を握りしめて。」

若い產科女醫がバラ色の頰で右往左往する今や三つの分娩床が、極端に誇張された眞白い脚部を二本宛横たへて、靜かに陣痛に軌み續ける。消毒液が、死の色ガスの焰に沸き立つてゐる。縫ひ付けられる甲斐絹の樣にけいれんする三つの臍帶。

若い初姙婦がドアの外に立つて、刺す樣に覗き見てゐる。ゾッとして頸を廻す。

「木村ときさん。相原きくゑさん、松本みささん。小林きよさん。順に帶を解いて入つて來て下さい。」

小肥りした若い看護婦が、診察室のドアにもたれて叫ぶ。

連れて來た子供が、母の脱ぎかけた着物に取り付いて泣き立てたり、背中に居る「兄ちやん」が喚いたり、手を引張つて錢をねだつたり。皆、空腹を覺え始めたのだ。

「わたしやこれで八人目さ、何の、心配などありませんよ、案ずるより產むが易しでね。わたしなど、何時でも此處で御厄介になるけど三日經ちやピンピンして歸りますよ。だつて小さな子供が煩さく迎へに來るし、家じや燒芋をやつてゐるもんですからね。」

醬油樽の樣な胴體の樂天家が、不安さうな若い女にまくし立てゝゐる。何も云はないで自分の番を待つてゐる者や、はしやいでゐる者達…。〇時三十分のチーンが鳴つた。

事務員達がぞろ〳〵食堂から流れ出る。

「おい、さつき來た引つめ髮の蒼白い女知つてるかい。」

「おゝ、杉元春子つて云つたね。」

『知つてるんか。」

「あゝ、社會主義の雄辯家だつて云ふ、何處がいけないんだね。」

「むねらしいね、俺は醫者じやないから知らんがね。」

それから默つて、田代幹事の名聲を自分の出世と結び付けて考へたり、讚美歌を唸つたり、事務室はいつも平和だ。「アーアーアーアーメン」と墨太く落書しだハトロンが頭の上に張り付けられてゐる。眞白い埃を浴びた硝子窓は、炒り揚げられてゐる勞働街のアプラ滲んだ姿をベッタリ塗りこくつて。

2 ふみにじれた者達

高い行衞不明が滅茶苦茶にほつれて、白粉のはげかけた額や頰に垂れ下つてゐる。「不幸なる」女給は、それをかき上げやうともせずじつと泣きはらした瞳を良子の胸のあたりに注いで待つてゐた。

精一ぱい[redacted]ふつと、風船玉の樣に素

飛んだ金持の二男坊――人の話では青森の實家に歸つたかも知れないと云ふ、そんな事は、今となつては全るつきり當になる話ではない。一ヶ月前迄は泥中の白蓮」のつもりで一筋に其の男との新生活を憧れてゐたのだ。病父――リウマチを二年も病み續けてゐる――も多産な弟妹も皆安樂にして貰へる筈だつた、が、欺まされ、ふみにじられた美しい夢は、一箇月の中に片端から毒々しい現實の泥で浸され始めた。そして今、彼女の下つ腹にずり下つた成熟し切つた胎兒――は、男に對するにくしみに執着を上塗る。時には涙を誘つてまで細い望みを繋がせ樣とする――じつと泣きはらした瞳を、今度は相手の眼に注いで待つてゐる。

――……産んで了つたらどうする積りなの。」

「……産んで了つたら、子供はこちらに御厄介になつて、私は又女給でもやつて、お金をこちらに差上る樣にしたいと思ひますけれど……。」

「そう。先生がいらしたら、よくお願ひして見ませうね。」

細民生活調査カードが一枚一枚、彼等の奇蹟的な生活力を物語りながら机の上に堆重なつてゐる。――月收三十圓、家族六人――そして今、眼の前に立つてゐる女の家族も亦、木賃宿の二階に一個の奇蹟的生活を實踐してゐるに違ひなかつた。無能と依頼心とで結びつけられた六つの食慾旺盛な肉塊。更に血と力に依つてまで、或は一つの生命の生よりも死に近い苦悶に依つてまで生れ出なければならないもう一つの口を持つたそれ。

良子は焦々と立ち上つて、十二時四十分を指す時計を確かめて椅子に戻つた。何か優しげな言葉を見出さうとさへ思へない、彼女と共に自らを解剖臺に載せて、腐りかけてゐる二つの心臓を自らの手にあるメスでえぐり出して了ひたい嫌悪が襲つて來る。すると手脚は却つて機械的に動き出すのだ。田代が歸つたら先刻よりも叮嚀に頭を下げ、一切を哀訴して此の女が求めてゐる手近な幸福を實現するのだといふ確信が彼女全部を支配し始めるパンだ！それも眞理だが？

ドアが陽氣に鳴つた。

田代が歸つた。明らかに社交的な逆上で呼吸器を彈ませてゐる。黄ダリヤの樣な洋裝女が後に續いて。

「さあどうぞ。」

輕々と腰をゆらめかして應接室に通るらしい。良子は立上つて田代を追つた。彼は威厳を振り向けて「何です？」と云ひかけた。メモを讀んでゐる……夫、逃亡。

「で、乳兒部のアキはあるの？」

「えゝ、無理すれば何とか……それに。」

腕時計を覗き、額に一抹の不快さを浮べて

「しかし時間外だね、午後の受付までまあ待つて貰ふんだね。」

そして捷く應接室に消えた。

待ちくたびれてゐた女給が、不安そうな眼付きで良子を迎へた。

「駄目でせうか？」

「はつきりしないんですよ。でももう一度聞いて見ますから一時からの受付まで控室で待つてゝ下さいね。」

失望が頬を掠め、憎しみに近い視線がチクと良子の顔を刺した。

「えゝ。」

とは肯いたが、すご／＼と草履を引き曳つて乳兒相談部のドアを押し開けて行く。

良子はバラバラとカードをめくり始めた。

――何かね。お金を集めるんかね‥‥ヘエそんな事をたゞ聞くだけだつて？聞いたつて仕樣があるまいにね。――

横顔だけでせゝら笑つた細君が眼に浮ぶ。三疊の借間で活る四人、二疊に住む母と子。アパートの屋上に夜を明す自由勞働者、永久失業者達。幾回もの嵐に、其處此處から引き拔かれて行つた鬪へる者の遺族等。どれもこれも生活してゐる。嘲けつてゐる。憎んでゐる。望みを抛つてゐる。そして新聞記者は逸早く此の種をモノにしやうとしてやつて來る「田代」の二號活字がジャーナリズムの一角に喰ひ込んで行く。社會事業の對象は、ルンペンからプロレタリアへ――の新たなるスローガンが登場するのだ。事實はもうそこまで行つて了つてゐるのだ。

3　彼等の術策

M政黨系なら誰構はずの財布を揺ぶつて出來上らうとする日婦人會B館本建築が、應接室左に、生々しい骨組みで立つてゐる。田代は故意と反對側のカーテンだけ引き上げて、寛やかに紙卷を挾んだ。

「ではお話を承りませうか。」

「えゝ、早速申上なければ‥‥何しろ此の頃はガス問題で多忙なものですから、もう毎日駈けづり通しなんで御座いますのよ。でも本統にいゝ機會にお目にかゝれて仕合せで御座いましたわ。その件ではもうすつかり困らされてゐましたので。」

と、婦人參政權獲得論者、岸田友子氏は切り出した。赤い唇から時々尨大な前齒が覗きよく廻轉する眼の上に、間違ひのない四十女の額が、しわを疊んで見え隱れる。で、田代の視線は決して赤い唇より上に脫線しまいと努力し乍ら

「其の娘さんてのは幾つ位なんです。」

「二十ですの。何しろ育ちが惡いものですから心に締りがないんですよ、私も隨分說いて聞かせましたがね。」

彼女は、何かけがらはしいつきものでも感じた樣に身振ひした。鼻の下の深い溝から、くつきりと裾を擴げた富士山型の薄い唇の中に、今にも脫落しさうな不安定さで金の義齒が光つてゐる。それ

は田代の人格に一層効果的な人の好さを附與する高價な裝飾に還ひない。

「で、其のお家敷といふのは？」

「それが一寸申上られませんのですよ。極秘に極秘に依頼されてゐますもんですから‥‥。」

「さうですか、しかし‥‥」

フト田代は見るべからざるものを見て了つた。不意に襲はれた小魔の様に、瞬間、よく廻轉する彼女の眼玉はスカートに轉落する。

「そのお宅でも、かうなる以前に御自分の手で何とか始末を付けたいつて仰言つてゐましたけれども。その娘が强情で、どうしても旦那さんの好意を――つまりお金を貰つて一旦故郷に歸ることを肯じないんださうで御座いますの。私も餘り奥さんがお氣の毒だと思ひましたので十日程前から自分の家に引き取つてやつたんですよ。所がもう我慢が出來ないのです。とても親馬鹿と云ふか何と云ふか子供にかけては氣狂ひですもの‥‥一昨日なんか私にあてつける積りで子供を殺しかけたんですよ（身振ひして）私、あんな恐ろしいことは生れて始めてですわ。

「どうしてそんな事をやつたんです。」

「私が一寸した洗ひ物を云ひ付けたんです子供はまあそこへ寢かしつけておいてつてね。所が直きに泣き出したのです。するともう仕事などはそつちのけで走つて來るんです。で私叱り付けました。泣いたつて死にやしないからまあするだけの事をしてからオッパイになさいつてね。所がその夕方、思はず女中部屋を覗くと血相變へて子供の頸をしめかけてるんです。たすきで！」

何か偉大な眞理でも語り終へた様に、彼女は大きな吐息をした。

「ヒステリーですね。」

「何ですか、本とうにもう他人を家に置く事はこりこりしちまひました。で、どうしても先生にでもお願ひしなくてはと、決心したんで御座いますの。」

「で、つまり、其の赤ん坊を此處に預けてお母さんは働いてつて云ふ風にですね。」

「まあさうお願ひ出來ますと仕合せで御座いますけれど‥‥」

「何しろ‥‥どんなお家敷か分りませんがそう云ふ環境で産れた子供さんが、此の埃と煙の本所で育つと云ふ事は中々ですからね。それに乳兒部は設備が思はしくないので‥‥。」

微かな、だが、確實な鑛脈！彼は大膽に相手の心を覗き込まうとした。が、眼はつゝましく本能を抑えたイタチの様に下を狙つて。

「お察しします。本統に正しければ正しい事程經營困難でしてね。‥‥私も主義としましてもこうした事業には深い關心を持たせられる方でして‥‥。」

投資せよ！とイエスキリストは命ずる。愛を以て！田代の面貌は仄々と輝き始めた。

「いや實際、不幸な娘さんですなあ、二十ですつて？一體何處のお家敷なんでせう。」

ガラン洞の眼瞼を突く淡い潤ひを彼女は見逃さなかつた。註文通り分泌した此のセンチメンタリズム！

「それに就ては無論、そのお屋敷からも…それよりも御紹介したい心當りも御座います。尤も早急とは行かないまでも。」

田代は火の消えた紙巻を灰皿に落した。

ナショナル金錢出納器が勇ましく鳴り出した。カードの整理。間違ひない献金の緒二つ。バラ色の女隣。名聲と大經營。華やかなクリスマストリーの様に、信仰と算盤が、彼の頭の中で接吻し、抱擁し、火を點じた。

「では…」

田代は、最初の寛やかさで最初の言葉を始めた。

「明日、その娘さん、いやお母さんは子供と一緒に此處にやつて來るんですね。」

「そうさせて頂き度う御座います。どうぞよろしくお願ひします。忙しいもので御座いますからこれで失禮いたします。」

女史は何時の間にかすつかり上氣した頰をもたげた。

4 實踐された自由主義？

東京市のガス値下問題――二百萬市民に高い、空氣の多いガスを使はせながら多額の配當を續けてゐるガス會社の横暴…婦選獲得同盟、婦人市政研究會等婦人團體主催の演說會――を、翌朝都下の大新聞は筆を揃へて報道した。其處には百パーセントの合法舞臺を惠まれてゐる彼女等の（勿論岸田友子を含めての）華やかなどよめきがカメラに收められてあつた。

將に其の朝。

頗るつゝましやかな、女史が、問題の女中に赤ん坊を背負はせてH婦人會B館を訪れてゐた。話せる事務員の永田は、新聞の寫眞と實物とを、こつそり向ふ隅の机で比較研究し始めた、算盤を彈いたり帳簿を繰つたり、受付をしたり…だが事務員達は、眼の前で幹事と相對してかけてゐるモダンマダムを、時々珍らしげに偸み見た。確かに珍らしい種類の「お客さん」だつたのだ。婦人會館にとつては勿論、此邊の細民街そのものにとつても。

「お名前は？」

良子は女中と向ひ合つて、事務的に空欄を埋めかけた。

「中村とみ。」

「お郷里は？」

「福島縣…二十歲。二年前上京。…

「赤ちゃんの名前は？」

「豐一つて云ひます。」

哀愁が、若い母親の頰を過ぎた。昨夜の演說會に話込みながら

も、岸田女史の視線は、堪えず、とみ子の顔に注がれてゐる。

「旦那さんは？」

若い母親は深く頂垂れて、涙と鼻水をすゝり上げた。その時、それよりも前に、岸田女史は椅子を離れて進み出様としたが、田代がはつと立ち上つて良子の前に歩み寄り、「理由」欄に、細長い中指をあてゝ低く云つた。

「こゝはまあ空けておいて下さい。……あゝそれでいゝ。」

女史は全く腰を安定させて、今のモーションを技巧的に取消すための言葉を撰り分けた。

「……どうしても問題が、全市民對ガス會社といふ明瞭した關係にあるのですから、一般の人達もよく私達の運動は理解しても呉れますし、寧ろ積極的に支持するといふ態度さへ強く現はれますので……」

「昨夜なんかも大盛況らしかつたですね。私も出かけたいと思つてゐましたが、恰度、社會事業協會の會合があつたりしたもんですから……。」

良子は、桃の毛の樣な赤ん坊の産毛を見上げて、もう一度ペンを握りしめた。

「赤ちやんは產れて幾日目ですの？」

「やつと二十日です。」

「今まではお母さんのオッパイでせう。」

「えゝ。」

敏捷に女史の眼玉が女中の顔に襲ひかゝつた。

「どうも有難う御座いました。先生、今度又私達主催の演說會がありましたら、是非御後援をお願ひ致します。今の處外部からの、特にかうした細民の生活を徹頭徹尾御研究の方面からのお力添へが、どんなに必要か、大切な事かと、何時でも考へさせられてゐますので……。」

「いや皆さんの目覺ましい活動には、唯々感嘆させられてるんです。特にあゝしたジヤアナリズムの効果大きい利用？と云ふと少し變ですが、兎も角も輿論の生産の甘さには……到底、僕らの出來る相談じやないつて氣がしますよ。……ハツハツハ……。」

「あんな……（さう云ひ乍ら椅子を離れて）とみ子、そちらもう濟んだの？では直ぐ赤ん坊をお預け出來るんですね。」

良子が前に立つた。續いて女史。とみ子は廊下を通り乍ら、此の場合の幾百幾千の母親が流したであらう涙をふり落した。乳兒室は青草一筋生えてない「中庭」に面して橫臥してゐる。パトロンで天井と四方を張りめぐらした部屋。床板だけは×館そのものの、歷史と疲勞で黑ずんでゐる。

鐵製のベツドが二十幾臺、コの字型に並んでゐる。主に生後一年未滿の嬰兒達が、夫々の不幸を、彼等の營養不良、消化不良、皮膚病、乳兒脚氣、例外的には光澤のない肥大にありつたけ語らしめな

から。

「先生は？この赤ちやんが今日から入る事になつたの。」
隅の方で、おしめを疊んだり、着物の綻び縫ひをしてゐた看護婦達が立ち上つた。
「……では、先生をお呼びして來ませうか。」
「よろしいんでせう。」
女史はそう云ひ乍ら良子の顏を覗つた。
えゝ……尤も後で一寸診察して頂くんですけれど……。」
看護婦が、眼を覺しかけた一人のベッドに近づいて、ゴムの呑み口を小さな唇にくはへさせてやつた。
「とみ子、赤ちやんを抑して御らん。」
母親は憤りと悲しみで口をつぐみ、コボレ落ちる涙を堪えて、そつと子供を抑して抱きしめた。産毛には夜露の樣な汗が溜つて、眼は開かうともせず、乳房をさがしもとめてゐる。何かの彈みで乳兒の一人が泣くと、外のも思ひ合せた樣に泣き始めた。が、豐一は無心に乳を吸つた。
「本統に大變なお仕事ですわね。」
女史はクインの樣な身ごなしで、靜かに部屋を歩き廻つた。牛乳と、おしめと、吐息が醸す匂ひがムッとする。窓が三つ、中庭に面して開け放されてゐるが、新鮮な空氣は遙かに靑空に凝固してゐるだけである。それは堅牢な碧玉の色澤で限り無く廣く擴がつてゐる超人間的な力が叩き落さなければならない。そして地上のものとしなければならない、高價な生命の糧ではないか。けれども女史は別の事を考へてゐた。――成功、成功、とみだつて却つて此の方が幸福だわ――否、斷じて！彼女は泣いてゐる。憎んでゐる、其の胸にたゝみ込んだ、セメントの樣に混ぜかへつた二十年の苦痛を嚙み碎かうとしてゐる。けれど牙は、すでに彼等の懷に晙もる萬能のメスで削り取られて了つた……

良子が蹲んで、耳近く囁いた。
「大丈夫よ、大丈夫！、あなた働くんでせう。」
母親は乳房を赤ん坊の手と唇に任ね切つてむせびながら、うなづいた。

5　彼女達

白いカーテンが茜色に染り、終日の酷熱が一枚一枚薄くはぎ取られて、ソヨといふ風も吹き始める。勞働街は夜の騷音をかなで、人々が煙る埃を呼吸しながら、更に夜の勞働へ或は明日の勞働へのぎりぎりな休息時間に、めいめいを運んで行く。
淺草から警察へ、それから此の病室へと運び込まれた女乞食は、ひどく盛り上つた鼻下と、長く裂けた唇を、豪華な夕燒空に照されながら、産み落した赤子を覗いて快心の微笑を洩してゐる。
龜戸の娼婦、失敗して孕み、不幸にして？流産した。彼女は白い

腕を掛布團の上にぬつと突き出して、親切な婦長さんの言葉を反芻する。もう――龜戸へ行くのはお止しなさいね、外にいくらでもシンセイな仕事がある筈よ。モトメさへすれば――だつてさ、カレイ粉は確か流産に効目がある。

日立工場の女工は、ずん／＼減つて行く脫脂綿の大袋と、今晩來て與れる筈の夫の事を頻りに思ひ浮べてゐる。

ガス水道付の家に住つてゐるといふ女「何だか家のあかんぼは、よそのと取換えられた樣な氣がするのよ。だつて、まつ毛はもつと眞黑で五分もあつたんだもの。」

「看護婦さん、どうぞ灌腸して下さい！」

双兒を産んだ四十近い女。「あなた昨日も灌腸しましたね。一日位出なくても大丈夫よ。あした。あした！」「行きやがつたしみつたれ！」

吐き出してでんぐり返つて了ふ。

便器はベッドの下に押し込んで食事。

全くの夜。蚊がブンブン唸り出す。汽車會社で鐵板をノス音が、混沌たる夜の騷音の骨格をなして響き渡る。赤い十六燭が點り、ヒソヒソと面會人が入つて來る。印ばんてんの男。老いた母親。ナッパ服の儘の職工や、忙し氣な腰付の商賣人等。色々な愛情や事件の報告が、しのび笑ひに溶け込んで細かに夜氣をふるはせる。

「あなたは何處でおなかゞ大きくなつたの。」

夜勤の看護婦が、ものずきそうに女乞食に話しかける。

「アサクサでよ、おーら、五圓もらつたゞ。けいさつでも三度、まゝ食つたゞ。赤んぼせんにもできたゞ。」

憂欝な眼差しでじつと二人を眺めてゐる朝鮮婦人。

H婦人會B館の持つ大部分の愉悅は此の褥室にあると云つていゝ。孕んだ女達のあらゆる苦惱の解決が產むことであるならば――慈善の白い毛布に生の最初の夜を明すとも、彼等、嬰兒達には祝福がある！

H婦人會B館の持つ大部分の不幸は乳兒室にあると云はねばならない。母乳の代りに、呑む事の出來ないそれ／＼の母親の、苦い涙が彼等を取り卷いてゐるだけだ。

とみ子は其の夜、時々、錐でもまれる樣な乳房の痛みを感じた。長い一分に長い一秒が續く。朝、朝になれ！彼女は炊事場に立つて餘りにも遠く引き離された嬰兒の、眼と頰と唇を、乳房に柔く觸れた小さな手を、床の中で彼女の腹壁を輕く蹴つた二つの脚を描き出した。

主人は「惡い、けがらはしい夢」を流す爲め、遙々と關西旅行中であつた。夫人友子氏は相變らず東奔西走。

とみ子は堪え切れなくなると、茶碗を取出して乳を搾つた。火山の樣に張り切つて、盛り上つた二つの乳房が、白皿の色した液體を苦し氣に噴き出す。彼女は自分の舌に觸れて見た。そのはづみに鹽

辛い涙が、茶碗の中にコボレ落ちた。――この乳はとつておく事が出來ないのだ――强い光を放つ星が、一寸位宛西に傾いて行くのを眺めながら、そして深い瞳の樣にきらついてゐる星々を數へながら、彼女は、明朝を待ちあぐんだ。

6　交叉しない二つの道

「昨晩は本統によく入つたわね。」

若い受付係が朝刊をひろげながら云つた。

「そうねえ、やつぱりあれだつたからよ。此の前の歌舞伎の時なんかはとても少なかつたんですもの。」

良子は幾分興奮してゐた。自分達の主張が正しかつたといふ喜びからも。

「…歌舞伎なんて全く、黑砂糖のアンコみたいに腹がつつばつて、下痢が起るからね。今時のお金持だつて餘り好かないでせう。」

「何が彼女をさうさせたか、か。あゝ云ふプロ派の芝居は、僕始めてだが、一寸痛快だね。」

「痛快？…確か、損はしないでせうね。」

「あゝ、あれだけ入れば…。」

夜昨のH婦人會B館本建築基金募集觀劇會の話が弾んだ。受付窓には幾つものムクンだ顔が折重なつてゐる。

「今野さん。あつちにもお客さんだよ。」

話せる男、永田が乳兒部を指さした。昨日のとみ子がつくねんと立つてゐる。良子は急いで彼女に近づいた。

「どうしたの。」

「あの…赤ん坊を見に來ました。」

「見て來たの。」

「えゝ、眠つてゐましたから、そのまゝにして來ましたの。それに…。」

「そうねえ、どうせ離すんでしたら、餘りお乳を戀しがらせない方がいゝでせう。」

「えゝ…でも昨夜は何だか心配で一晩中眠られなかつたもんですから、今朝家の用が濟むと直ぐやつて來たんですの、何か仕事も見つけたいと思つて…。」

「あの奥さんの家はどうしたの。」

「奥さんが、何でもいゝから仕事を見つけて家を出る樣にしろつて仰言るんです。」

「急にそんな事を云つたつて仕方がないでせうに…どうしてなの。」

良子は黄ダリヤの樣なリベラリストの孔だらけな心臓を察した。

「色々な譯けがあるんです。皆私が馬鹿だから…だけど本統に仕事は中々ないでせうね。」

「中々ないでせう。あの奥さんなら、何かしら手づるもありそうな

もんだと思ふけれど……旦那さんは何していらつしやる方？」

「戸川電氣ですつて。」

とみ子は眼をふせた。欺き拔かれてゐる自分だ。――その事何も彼も素破拔いてやれといふ衝動が、むらむらと胸にこみ上る。

「奥さんは、こちらの先生に何と云つたでせう。」

彼女は眞直に良子をふり仰いだ。

「私には分らないのよ、私はたゞの取次役ですもの。」

「私が馬鹿で――でも隨分餘りだと思ひますわ。奥さんには何も仰言らないで下さいね……固く口止めされてゐますから……あの子は本統は主人の子なんですの。」

「あの奥さんの旦那さんの？」

「えゝ。」

とみ子は、胸のわだかまりが、少し宛洗ひ清められていくのを覺えた。

「奥さんの留守に、私が……私が馬鹿なもんで、たうとう子供まで出來て了つたんです。でもそれは奥さんにだつて、本統云へば悪い所もあるんです。毎日毎晩外を飛び廻つてばかりゐらしたんですもの。誰か他の人と關係があるとかつて噂も立つた位なんですよ。それに旦那さんは、お酒呑みの分らず屋で、どんなに私、殺すの生かすのつて嚇されたか分りやしないんです。そしてこんな風に今になつて見ると、二人がかりで私を敵の樣にしてるんですもの、……本統に、何か仕事がないでせうかね。あの子はでも、私育てゝやらうと思ふんです。あんな鬼みたいな人の所に任せる事は出來ませんもの。」

「さうなの?! 確かあの奥さんはそんな事、おクビにも出さないでせうよ、そんな所にはとても居堪らないわね。仕事を搜して御覽なさいよ。女中なんかより勤めの方がいゝでせう。」

「えゝ、女中はもう一生したくないと思つてゐる位ですの。何か外の通ひ仕事を見つけて、こちらにも、幾らなりお金を入れなくてはならないと思つて……。」

「しかしひどいねえ。仕事位自分で世話して與れるのが當り前じやないのねえ。」

「もう私、他人に頼りたくないとつくづく思ひましたの、お金持には貧乏人の心が分らないんですもの、ありつたけいゝ思ひをしておいて、あとは虫けら同然ですからね。」

「本統に虫けら同然と思つてゐるのね。あんた今日若し仕事が見付からなくても、見つかるまでは其の家に居た方がいゝでせう。」

「えゝ、行く處がないですもの。此の邊は工場がある樣ですけれど、女工なんかの口がないでせうかね。」

「直ぐ搜して見たらどう。三田土ゴム、知つてるでせう。此の間募集の札がかゝつてゐた樣でしたよ。行つて御らんなさいよ。精工舍だの、ミツノ運動具だのつて、工場は隨分あるわ。」

「どこかにあるかも知れませんね……本とうに奥さんには何も云は

ないで下さいね。それこそ大變な事になりますから。」
「大丈夫よ、赤ちゃんだつてそんなに心配しなくたつていゝでせうよ。」
　昨日のとみ子ではなかつた。輕い翼が、今彼女を一つの桎梏から、兎も角も解き放さうとしてゐる。彼女は再び乳兒室へは足を向けなかつた。
「あなた、仕事が見つかつたら知らしてね。」
「えゝ。」
輝やいてゐる眼だ。彼女は求めてゐるに違ひない。
　其の日の炎熱を十分に豫告して、太陽は、H婦人會B館の屋上に萬國旗の樣にヘンポンするおしめを蒸發させ始めてゐる。大地の底から搖り動かす樣な、得體の知れない勞働の唸りと、それが堪え間なく掻き出し、吐き流す、塵埃の濛霧の中に、とみ子の姿は汲ひ取られて行つた。
「どうしたの、あのお母さんは？」
　受付係の聲だ。
「モダンマダムの女中さんよ。昨日來た婦選論者の。」
　患者控室が、急にざわめき始めた。ベンチを兩側に引曳り寄せて道を開けると、おかみさん達が、顏を曇らせてヒツソリと立ち並んだ。黑い布で掩はれた擔架が運び出されて行くのだ。
「骨盤が小さかつたつて？」
「何がさ、ムクミを餘りほつたらかしたんだとよ。」
「こわいねえ、何だつて又そんなに。」
　人々はそうして「產みながらに死んだ母親」と「生きる前に死んだ子供」の、むくろを見送つた。
「可愛さうに。」
　洞ろな言葉が彼女達、明日の苦しみを待つ者の唇から唇に交される。其處に新たなる呻吟、新たなる安堵、新たにして宿命的な泣き聲、H婦人會B館それ自ら、遠い其の日までの陣痛に軌み續けてゐる。
　良子は自分の椅子に戻つて、調査カードの下をむさぼり覗いた……。奴等は又同志××を狂はせ……。未だ一つとして滿されてゐない救援會基金袋が、重苦しく彼女の眼に迫つた。たつた今眼の前を通つた黑い擔架の運ばれる道と、今も、そしてこれからも「狂ひ」「死」なねばならないであらう二つの道が、はつきりと彼女の前に開けた。「先づ滿すのだ。それがつとめだ。」
　彼女は再びニュースをむさぼり讀んだ。

7　プレゼント

「不景氣なもんで、此の頃ちつとも寄附がなかつたわね。」
　ひつそりと寢鎭つた正午近く、ハラハラさせながら廣告屋が通る。看護婦達は、乳兒等の初秋に備へるため、古毛布や綿入の修理

に忙しかつた。

「まあ開けて見やうよ、何が出てくるか。」

一人が、縫針を白い胸に止めて、今事務室から廻された「某女」なる差出人の小包を解きにかゝつた。

「古ものばかしよ。絹の靴下。古えぷろん男ものズボン下。」

「上等らしいね。」

「フン、切れても錦つてんでせう。」

「まあ、サルマタ、馬鹿にしてる！」

額の廣い、白粉氣のない一人が摘み上げた

「いゝわ、それでも、私のとく坊のズボンにしてやるから。」

一番年下らしいのがそう云ふと、皆噴き出して了つた。

「古サルマタはこれを以てコウシとす、だわね。」

事實、未だ嘗てより以上のプレゼントは無かつたにしろ……廣い額は唇を突き出して憤慨した。

「こんなものでもくれたと思つていゝ氣になつてんだらう！」

二三人眼を覺して泣き出した。

「てるちやん、みつちやん、としちやん。おつぱい、おつぱいだつて、よち、よち。」

彼女達はバタバタと動いた。温室の花ではなくて、暴雨の下の青豌豆の様に、乳兒等は骨の固まらない頭や、實のらない眼玉を靜かに動かしてゐる。彼等は、肉や骨格から出來てゐると云ふよりも、小さく完成された病の器に似通つてゐる。慘忍な微笑を堪えた。聖母マリヤが、自分の子供だけをしつかりと抱きしめて、壁の上から冷やかに眺めてゐる。取返しのつかない睡眠不足で、窓掛の様にたるんだ眼瞼を引き伸し引き伸し、肥つた看護婦が、泣き喚く乳兒のベッドを揺り動かしてゐる。

「今晩はバイブルクラスね。」

誰も答へない。あくびが盛に傳播する。仕事は、却つて、やけにおつかぶさつて來る。

「とくちやん、いゝ子だからじつとしてゐなさいよ。」

おしめを取換へて、シッカロールをふつて削り取られた様に痩せた、小さな臀部への注射だ。女醫は冷靜で看護婦は細心で……消毒が濟むと小さな患者は、唇を眞一文字に引ばつて悶え叫ぶ。針が刺し込まれる瞬間、泣き聲がフッツリと斷ち切られ、次の瞬間訴へる様な呻きが咽喉を破り出る。

「有難う御座います。」

母親の言葉つきで看護婦が腰を曲げる。小さな患者は、放心した様に、むしろ淡い侮笑に近い表情で、またゝきもせぬ瞳を天井の一點に吸ひ付けたり、長いあくびをしたり……回診中の女醫が、不意にマリヤの額緣の下に立ち止つた。

「未だ此の子を迎へに來ないの？」

「えゝ、事務でもお父さんの方へ幾度も手紙を出したり、電報を打

つたりしたさうですけれど・・・此の間などキトクの電報を打つたとかつて云つてましたけれど、未だ連れに參りませんので・・・・」

年上の看護婦が罪の許しを乞ふ様な調子で答へてゐる。生後滿一年を二十日も(!)過ぎてゐる規則違反の金雄君は、キョトンとして、眞白い女を見上げてゐる。

「困るわねえ、狹い所へもつてきて、こんな餘計な人にまで何時までも居られたんでは。」

彼女は少しばかり唇の隅に笑ひを浮べたが要するに不機嫌だつた。お粥を入れたニューム鍋や、牛乳や、野菜スープが運ばれる。

「金雄ちやん。おまんまよ！大きくなるんでちゆよ。お父さんがおき迎へに來るからね。」

女醫が行つて了ふと看護婦は、高く抱き上げて、ほゝづり頰いた。

8　二度目の訪問

二ケ月目であつた。それ迄、とみ子は仕事を搜し廻つた。そして漸く（この言葉は簡單すぎる）再募集中の三田土に決つた。日給は五十錢で、しかも臨時に使つて見ると云ふのだ。それでも彼女は嬉しかつた。

「一日三十錢位で食べなきや、間代が出ないけど・・・・でも、うどんでも飯屋でも山の手よりはいくらか安い樣ですから・・・・。」

埃をかぶつた庇髮の下に、眼や頰が、生々と彈んで見えた。

「よかつたわね！あなた、赤ちやん見て來た？」

「いゝえ、今、會つて行かうと思ひますの私、これからうんと働いて、こちら樣へも御恩を返さなくちやならないと思つてゐますわ。」

「御恩だつて、何の御恩なの。大丈夫よ、此處に預かつたつて、必ずお金を入れる必要なんかないわ、それよりか・・・・」

良子は次の言葉をさがしもとめた。

「時々、赤ちやんを見に來てね、お金はきつと食べるのが漸くでせうよ。それでも餘つたら、もつともつと大切な使ひ途があるかも知れないわ。」

そして、もつと大切なこと——彼女自身の靑春の使ひみち——は彼等が示してやるのだ。良子自身も亦、もつと大切なことは次の訪問までカードの下に疊み込むことにした。

感謝

名古屋毎日新聞社主催本誌講演會の盛況を全國女人聯盟を代表して感謝いたします。



轉形期

大谷藤子

一

白々と冬の風に冷えきつた街道が、少しばかり彎曲してゐる。そこに間島の邸が黒板塀の裾を引き摺つて、ガッシリと聳えてゐた。

この邸は、數十年來、蛭のやうな本能さで村の營養を吸ひつゞけて來た。

質屋——金貸——地主。と云ふ經路を通りすぎるうちに、この邸は超數學的な速度で肥滿した。田畑を抵當に金を貸す仕事は、最も間島家の本能に媚びた。苛酷に「抵當流れ」を宣告された田畑が、辷るやうに此の邸へ吸ひこまれた。その新しい所有地は直ぐに、よく働く小作人を携帶するのであつた。次第に、この邸は脂肪過多症の兆候を見せて來た。秋の小作爭議は、其の病症の程度を明らかに發き出した。

——この頃百姓は、自分の怠けた罪を私に背負はせるのです。あの人たちの墮落を救つてやるのには、宗教が必要です。とにかく修養會でも開きませう。

間島俊一郎が、嘆息と共に文化的口調でかう云ふと實に道理らしく聞えた。彼の容貌は、數代をかけて沈澱させたやうな迫信と歴白力とがあつた。この容貌は、素晴らしい商品となつた。彼は、小都會の貧乏な藥種屋に生れた。そして生活難に青ざめながら成長した。彼が苦學して私立大學に籍を置いてゐた時、間島家から養子に望まれた。

——かう云ふ容貌は、間島家にとつて非常に必要だ。

間島家では、父も母も娘も一目で彼が氣に入つて了つた。

――それに苦學するやうな男なら、金の修業も積んでゐるだらう。財産を守りぬいて行くに違ひない。

しかし完全に希望通りな養子だとは、誰も斷言しなかつた。彼が更に、白痴的風習を利用して「家系」を商品にすることが出來たなら――或ひは更に、親戚にでも間島家の上座を占める様なのがあつたなら――彼の養子價値は、一段と高まつたであらう。けれど彼の家は、現在より優れた歴史を秘藏してはゐなかつた。と云ふのは、彼の祖先は正直すぎて虚僞な傳說を生み出さなかつたのだ。彼の親戚はと云へば之は又、浮び上れない「貧民」の部で蠢めいてゐるのであつた。だから彼は、複雜な宣傳を振り撒く必要はなかつた。

彼は間島文子と結婚した。三年目に舅が死んで行つた。そこで彼は間島家を相續したその日から、此の邸の財産を守りぬいて行く義務を背負つた。この義務は、彼の心を滿足させ魅力を持つてゐた。

間島俊一郎は、早速、修養會を開くことにした。

――最近の農村は、實に憂慮すべき狀態です。これは宗敎心の缺除から來てゐると思ひます。

彼は村役場へ行つて、自分の主旨を述べたてた。萎びた六十歳の村長は、彼を偶像のやうに待遇する癖を持つてゐた。それに彼は十日ほど前に、警官派出所を新築したいと申し出てゐる。彼が寄附する建物なら、村の誇になるやうな近代式のものに違ひない。

――いや、大きに、大きに。俺も常々、そのことに就いて心配しとります。

――そこで私は一つ、修養會のやうなものを開催してみやうと考へるのですが。

――それは〳〵誠に何とも感謝の至りですな。役場でも出來るだけ御後援いたすことにしませう。

金を出さないで濟むことなら……と云ふ心を、村長は茶と一緒にグツト飮み下ろした。

――では早速、私が東京の方から先生を招聘いたしますが、主催は役場か學校かにして村の人を集めて下さい。

――それはいかん。あんたが金をかけて村のために開催する會を、あんた以外の名で發表することは出來ません。云はゞ、あんたの德望を橫どりするやうな結果になつて、實に好ましくないです。

――併しですな。かうした會は、個人の主催でない方が多くの効果をあげ得ると思ひます。むしろ、私の計畫であることは絕對に秘密にして頂きたいのです。

――また、あんたの奧床しい謙遜が初まりましたな。

――恐縮です。とにかく、主催は役場にでもしておいて下さい。

さうです。私は役場の名で、東京へ手紙を出しておきませう。一週間ぐらゐづゝ、これから度々かうした會を開いたらどうかと思ひます。百姓たちに惡思想が食ひこまないやう敎育することは、全く焦眉の問題ですからな。村長は此の有益なる事業が、自分の名によ

つて行はれることに喜悦を感じた。彼は、その喜悦が卑しげに見えるかも知れないと思つたので、わざと唇を引き緊めてゐた。そして疲勞に濁つた六十歳の兩眼を、皺だらけの皮膚の底へ暫く埋沒させた。この瞑目は、彼が感情を押し隱す時の癖であつた。

——危險思想つてやつは、黴菌のやうに村から村を荒しまはる。そこで最後まで堅實な美風を保ちつゞけるのは、私の村でなければならない。さうだ。最後まで殘された堅實な村！　その功勞者はと云へば、どうしても私を指すよりほかはあるまい。

村長の心の中で、こんな考へが閃めいた。すると次第に、彼の血液が若々しく動き初めた。彼は更に一層の忠實さで、間島俊一郎に接近する必要を感じるのであつた。

——實に、あんたの御計畫には感謝のほかありません。村は助かります。

奧床しい謙遜を振り撒いた俊一郎は、村長とは別な成算を微笑の蔭へ積んでゐた。この修養會が、百姓たちの骨を拔くだらうと考へるのだ。爭鬪の罪惡を魔術のやうな巧妙さで說き步いてゐる一團を、彼は知つてゐた。この一團は、全國的に根を張り枝を擴げて、贅澤な生活を送つてゐた。彼等は其の職業の魔術が巧みであればあるほど、潤澤な生活費にありつくことが出來た。彼等は物質慾を卑しめて、貧民の味方であることを叫ぶ。そして勞働者の懷中に飛びこみ、彼の心臟に痲醉藥を濺ぎかけるのだ。

二

修養會が開催された。東京の日本××團から、脂肪肥りの二人の男がやつて來た。停車場へ出迎へると、此の修養家たちは二等車の窓から赤帽を怒鳴りつけてゐた。

小學校の講堂が其の會場に當てられた。東京からわざ〳〵招聘した先生の話だと云ふので、村の人たちは子供のやうにはしやぎながら押し寄せて來た。日に燒けた彼等の顏に、象のやうな柔かい瞳が輝やいてゐた。殊に靑年たちが多かつた。彼等は光澤のない頭髮を短かく刈りこんで、訛りのある言葉で高らかに語りあつた。娘たちもゐた。少しばかり塗つた白粉が、ちつとも皮膚へ沈澱しないので二重の顏に見えた。老婆さへもゐた。彼女たちは枯れた葉が風に鳴るやうに、時々、空虛な笑ひを笑つた。

時間が來ると、年若い方の講師が壇上へ現はれた。

——皆さん、東の方を向いて合掌して下さい。

そこで會衆は、半身を振るためにザハ〳〵と動搖した。

——次は、瞑想です。五分間。

——眼をふさいで、どうするだかね？

——考へろちうだよ。

無神經な高聲で老婆と靑年が話し合つた。

次が君が代で、それから講演である。

「感謝して働け」

「不平は破滅の原因」

「愉快に暮すべし」

講師は、話の要點を黒板に書きつけた。そのたびに彼は、白墨を持つた右手を氣取つて二三度も打ち振るのであつた。

――私たちの修養會では、激しい體操もするのですが、皆さんには其の必要がありますまいから略します。その代り、歌を歌ふことにいたしませう。

そこで彼は自分でオルガンを彈いて、鋸を引くやうな聲で歌ひ始めた。會衆一同も其れに倣つて、謄寫版刷の半紙を見ながら歌はなければならなかつた。

――もつと大聲で歌つて下さい。子供のやうに無邪氣に。……さあ、お婆さん、愉快に歌はふぢやありませんか。

爆笑が會場を搖がした。彼等は何時のまにか笑ひ／＼歌つてゐるのであつた。それは奇妙な光景であつた。全然、一つの騷音にしか聞えない合唱の中から、明るく無邪氣な笑聲を發散しつゞけた。

それから、また講演である。

今度は中年の男が話した。彼は肥滿した腹を悠々と突き出しながら、彈むやうな口調で喋べつた。彼の話を聞いてゐると、突然、百姓たちは明るい世界に引き込まれたやうな氣がして來るのであつた

――やつぱり、うまいことを云ふだな。

一人の青年が讃嘆した。

――米の飯を食つてゐるだけあるだよ。

村の人たちは、快活に歸つて行つた。彼等は、此の修養會に滿足したのだ。樂しく笑はせて呉れると云ふことに、彼等の心は眩惑され引きつけられた。彼等は、心の休息に飢ゑてゐた。それほど彼等は、生活の困窮に壓しひしがれてゐるのだ。

修養會は、五日間つゞいた。

冬のことで、百姓たちは大して仕事がなかつたので小學校へ殺到した。子供の頃、世界無比の國體に誇を感じた心が、彼等の朴訥な心に蘇生つて來た。それは長い習慣と教育の力で、彼等に心の故鄕を思はせた。國債償還の「光榮ある義務」を、眞劍に彼等は其の双肩に感じた。この困窮しきつた生活を送つてゐる自分たちも、國家にとつては重大なる一員なのだ。間島家から塵のやうに扱はれてゐる自分だつて、國家から見れば平等な國民なのだ。この自慰的昂奮が、彼等を小英雄の心境へまで押し進めて行くのだ。

――目を上げて、世界を見るんです。徒らに小さな不平や憎しみで、同胞たちが相爭ふべき時ではない。われ／＼は睦まじく握手して、擧國一致、光輝ある帝國を世界の優者たらしむべきです。

そこで百姓たちは、寶石のやうにキラ／＼輝いてゐる一つの國を妄想した。彼等は榮養不良の肺臟へ、力一杯に空氣を吸つた。その時、自分たちの肺が卑屈に押し縮んでゐたことに氣づいた。

――國家の基は、百姓です。皆さんの努力は、實に全社會の生命を握つてゐるのです。この尊ぶべき使命を忘れて、この頃は悪思想にかぶれ、間違つた反抗心などを持つものが出て來ました。實に悲しむべきことです。最近の金持たちの腐敗は咎めなければなりません。しかし、人を咎めることに心を奪はれて自分の本分を忘れるのは間違ひです。それから百姓たちが、眞面目な話に飽きかけると歌を歌はせる。笑話を聞かせる。巧妙な譬話を並べて、働くところに滿足があると云ふ心へまで誘つて行くのだ。

――働け。働け。默つて働け。

から百姓たちの心を叩きつけた。

――働いて滿足しろ。貧乏の中で心を安んずるものこそ、永久の勝利者である。物慾は地獄である。金持は多く地獄に住む氣の毒な人たちだ。修養會の三日目に、村で三人以上の軍人を出した家の名が數へあげられて稱讃された。其の家から丁度、會場に來てゐた者は演壇の前へ立たせられた。そして、會衆一同から感謝の禮を受けた。五人の息子を兵役に送つたと云ふ老人は、無感覺な表情で演壇の前へ立つのを拒んだ。

――あんたこそ感謝されなければならん。

村長が老人の腕を取ると、骨が稽古木のやうに固く冷たく突つ張つてゐた。この老人は息子たちが年頃になる度に、鎭守の社へ願掛けをした。彼は其れを五度も繰返したのだ。神社には澤山の繪馬にまぢつて、「願望成就」と云ふ額が、廿一歳の男の名で幾つも奉納してあつた。併し彼の息子は、此の目出度い額を奉納する必要はなかつた。彼等は長い兵營生活が終ると、同じやうに放縱と剽悍さを引提げて歸つた。そして貧乏な百姓生活を蹴飛ばして、東京へ出て行つた。老人の手許に殘されたのは、三番目の息子と解放されない貧苦だけであつた。三番目の息子は、酒を飲む事しか知らなかつた。

村長が老人を二三度、小突いた。そこで老人は前へ進み出ると、葬はれる人のやうに空虚に突つ立つた。演壇の修養家が、彼のために明るい冗談を浴びせかけた。哄笑が會場に渦卷いた。老人は憔れた頬を動かして、疎らな齒を現はした。すると彼の齒の間に、葱の小切れが靑く引つかゝつてゐるのが見えた。彼は笑つたのではなかつた。かうした場合には、笑ふために努力しなければならないと云ふ善良な習慣を守つたに過ぎなかつた。翌日から此の老人は、修養會へ出席しなかつた。

五日間の修養會は「高尚なる精神訓話」を黴菌のやうに無數に、村中へ振り撒いた。數人の青年たちは、日本××國の支部を設置して欲しいと村長へ願ひ出た。

――最後まで殘る堅實な村。

村長は笑ひを零しながら、二人の修養家のために宴會を開いた。彼は自分の村が其の言葉に當てはまるであらうことを、萎びた腦髓で固く信じ始めた。彼は自分が村の爲に、どんなに献身的に働い

てゐるかに就いて考へた。すると自分の過去の行動の一切が、村の爲でないことはなかつたやうな錯覺に陷つた。外套の裾が擢り切れたのも、着物の衿に垢が溜つたのも、秘藏の杖が紛失したのも、彼は村の爲だと云ふ言葉で解決したかつた。六十歳の彼の心臟が、突然、感傷的に膨らんだのであつた。

間島俊一郎は五日の間、村の動きを樂しげに觀察した。

――ざまあ見ろ！

彼は百姓たちの後姿に、優越者の誇を竊かに投げつけた。

――他愛はないもんだ。

彼は自分の計畫を祝福した。この上は、日本××團の支部を村に設置させることだ。其のために、どの位の金が必要だらうかと考へ初めた。彼は、百姓たちが結束して自分に嚙みついて來さうな險惡な空氣を嗅ぎ知つてゐた。併し××團の支部が設けられたら、その支部員が百姓たちの結束を突き崩して呉れるに違ひない。

――頼まないでも自發的に、俺の都合がいゝやうな仕事をして呉れるわけだ。

そこで間島俊一郎は、腹の底からお可しげに哄笑したのだつた。

修養會が濟んで一週間もたゝないうちに、百姓たちの心は前よりも一層、重たく憂鬱になつた。しかし彼等の殆んどが、その原因について考へ究めることは出來なかつた。

――たつた五日だけの話ぢやあ俺たちの無學な心へおつ貼る膏藥に足りねえんだ。さう云つたりした。

ごく少數の人たちは考へ始めてゐた。修養會から背負はされて歸つた「精神訓話」の形骸が、狡猾な假面に隱れて自分たちの心を壓迫するのだ。この形骸は、眞劍に自分たちが熱望してゐる道を塞がうとする本能を持つてゐるのだ。何て、彼奴らは話が巧い人だらう！ まるで姿を變へた寄席藝人のやうぢやあねえだか？

弱蟲の檻から拔け出せない青年の一群は、支部設立のために奔走を初めた。彼等は、村役場や間島家へ繁々と出入りした。精神的な事業と云ふ言葉から、若い彼等は憧憬と自己滿足とを摑み出した。百姓たちから敵愾心を放射されてゐる間島俊一郎も、彼等には暖かい理解者に見えて來た。

だが、これらは表面に動いてゐる波に過ぎなかつた。修養會に出席しなかつた青年の一團があるのだ。彼等は、村の底を匍ひまはつてゐた。そこには生活苦のため土色に沈澱してゐる人々がゐた。そして、新しい時代は其處から沸騰しはじめてゐるのだ。彼等の集團は、村の最底部に於て竊かに膨脹するばかりであつた。

彼等は、次の修養會が最初の時の三分の一の人數しか集め得ないだらうと斷言した。彼等は修養會へ働きかける自分たちの力を信じるのであつた。

三

間島萩代は、義兄の代理で停車場へ出かけた。

――何故、白粉をつけないの？

さう云ふ姉の言葉を薄笑ひで受け流した。母がソッと五圓札を一枚、萩代に渡した。彼女は其の時、母の瞳から秘密な親愛を樂しむ心を讀んだ。その瞳を避けるやうにして、彼女はさつさと家を出た

時間が早かつたので、彼女は途中で乘合自動車から降りた。

惡臭が風に送られて、彼女の呼吸を不快にした。朽ちかけてよろめきさうな家が、すぐ其處に蹲つてゐた。黑つぽく雨に傷んだ藁屋根に、枯れた草が乾いた色で風に吹かれてゐた。

萩代は、自分の派手な着物を後悔する氣になつた。

――いらつしつて？

彼女が聲をかけると、中からタツ子の返事があつた。

萩代はコートのまゝ上つて、タツ子の寢床の側へ座つた。

――どうなの。

――え、同じこと。

タツ子は、鉛色の顏を少し歪ませた。彼女は最近まで、東京で女工生活を送つて來た。激しい勞働と榮養不良で、彼女の兩肺は潰れかけてゐるのだ。萩代はタツ子から東京の工場生活に就いて聞いた。萩代が社會科學の本を熟讀する様になつたのは、タツ子の勸めが緒であつた。タツ子は、病床から村の青年たちを激勵してゐた。

――いよ／＼修養會支部が出來るんですつてね。

タツ子が云つた。

――えゝ。それで私、今日は先生をお迎へに行く途中なのよ。

――先生つて若い人なの？

――さあ、私の想像では若い人だらうと思ふんだけれど。

萩代は、何となく顏を赤くした。

義兄が特に自分を選んで停車場へよこした心を彼女はうすうす感づいてゐた。其の若い男は「由緒ある家柄」に生れ、社會奉仕の爲、犧牲的に日本××園で働いてゐるのだと云ふ。其の奇特な男が骨董的な「家柄」に自分で相場をつけて、義兄に賣りこまうとするのだ。

――噂を聞いたわ。

タツ子の表情が冷たく萩代の眼に映つた。

――何の噂？

――解つてゐるぢやないの。あなたの結婚の噂よ。

――冗談ぢやない

――あなたが一萬圓の持參金を持つて行くつてことも聞いたわ。

萩代は、ガンと心を擲りつけられたやうな衝動を受けた。彼女は噂と云ふものが有形であつたら、ズタ／＼に引きちぎつて泥足で踏みにぢつてやりたかつた。

――隱さなくつてもいいわ。

萩代はタツ子の言葉に、神經が寒くなるやうな棘を感じた。

――ねえ。

萩代は涙ぐんでタツ子を見た。

——私を信じて下さらないの？　私、貴女に隠すわけがないわ。

——私、素直な氣持で云つてゐるのよ。それが本當だつたとしても、私は別にどうとも思はないわ。

——私が景品附の嫁になつても？

——勿論よ。景品が添へられるやうな身の上だと云ふことを祝福してあげてよ。

——まあ。あなたは何て亂暴なことをおつしやるの。

——萩代さん？

タツ子は冷たく澄んだ眼で、萩代を見あげた。萩代は、この子供時代からの友人を、自分より十も年上のやうに感じた。

——あなたは、やつぱり自分のことだけしか考へられないのね。景品附の嫁だと云へば自分の誇に傷がつく、なんてことに拘泥つてゐるんでせう。

——解つてよ。

萩代は、併しタツ子に云へないことを考へてゐた。彼女は、母と姉と共に義兄に隷屬してゐるに過ぎないのだ。彼女たちは、義兄から多くもない小遣を貰つて暮してゐる。義兄は家庭の中で、絶對に強いのだ。萩代は、一萬圓の金を自分のために贈物にして呉れる義兄でないことを知りつくしてゐた。彼女は、此のことが自分の結婚を早めるための義兄の陥穽ではないかと考へてみた。

萩代は、出かける時に見た母の瞳を思ひ浮べた。

——とにかく一萬圓の話は嘘よ。

——ぢやあ、さう考へてあげるわ。

タツ子は最近、村で私生子を生んだ娘の話をした。その娘は大して顔が美しくないので、乳母になるつもりで子供を生んだらしいと云ふのだ。

——さう云ふ評判なのだけど。

——まさか。

——でも、事實かも知れないわ。

タツ子は、何か考へこむやうに目を閉ぢて了つた。萩代は、先刻の五圓札を取出した。

——この頃は、いゝ加減の顏では商品にならないさうよ。

タツ子は、皮肉な微笑を浮べた。

萩代は五圓札を蒲團の下へ挾みこんで、腕時計を見た。

——もう行かなければ……。

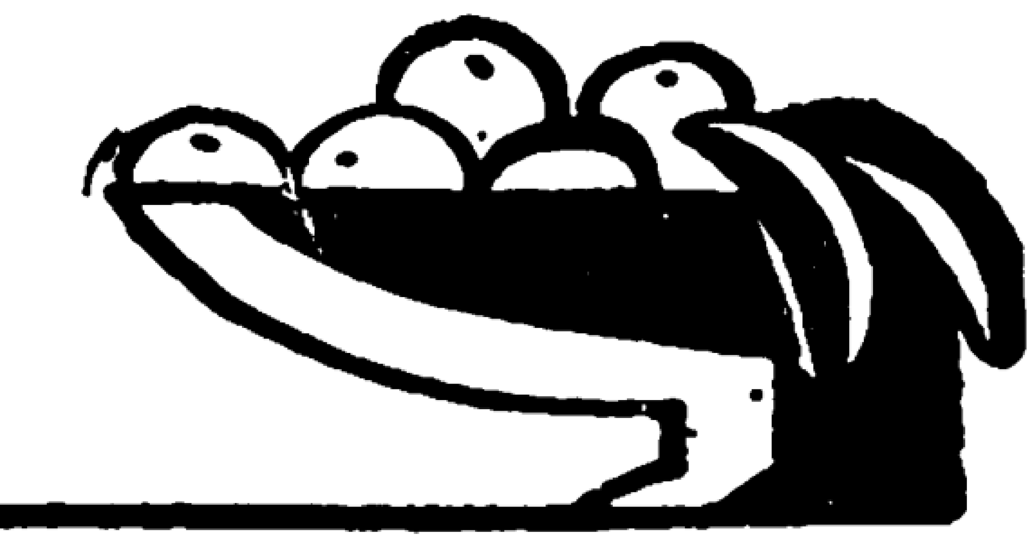
——これ、頂かないわ。貴女から金を貰ふ譯がないから……

——でもね。それつぽつちの金ですもの。文句を云はずに取つておくもんよ。

其の金をタツ子に納めさせるために、萩代は面倒な言葉を積み重ねなければならなかつた。二人は最後に、互ひの言葉に疲れあつて口を噤んで了つた。

――あなたは、ちつとも打解けて呉れないのね。私、とても淋しくなつた。
――そんなことより、修養會に引きこまれないやうに氣をつけなさいよ。
――馬鹿らしい。
無理に金を擱くと、吻つとして萩代は立ち上つた。彼女は、何しら心に壓迫を受けた後のやうな氣がした。
――修養會に引つ張り込れたら、家へ來ても叩き出してやるから――もう一度云つて頂戴。
萩代はタツ子の其の親しげな言葉を、幾度でも聞きたかつた。彼女は子供のやうな自分をへんだと思つた。
タツ子の家を出樣とすると、若い百姓らしい男が摺れ違つて家の中へ入つた。萩代が丁寧に會釋したのに、男は氣づかない振りをして横を向いた。彼女は激しい侮辱を感じて、颯つと顔を赧らめた。
停車場へ行つて見ると、汽車は既に到着してゐた。この前やつて來た若い方の男が、氣どつて體を振りながら構内を出て來るところであつた。萩代は、貸切自動車に乘るやうにと義兄から云ひつけられて來たが、わざと乘合を選んだ。
――あなたは、少し赤いさうですね。
若い修養家は云つた。語調を感傷的にするのが、此の男の癖であつた。
――それで、あなたとお近づきになれましたら、鎭靜劑になつて頂けるだらうと云ふ兄の心なのでございませう。
――いや、どうも。彼は口籠つてゐたが、また喋べり出した。
――赤いのはよくありませんな。あなたなんか赤くなつたら損ぢやありませんか。
――では、修養會でお話を伺ひませう。
――さうですな。會員におなりになると、きつと、思想が堅實になりますよ。
萩代は苦笑して、窓外を見た。
――併し、御婦人は結婚なされば赤い思想なんか、どうでもよくなるでせう。
――私、景品附で結婚するんですつて。あなたは、お聞きになりまして？
――そ、それは何の意味ですか。
若い男は、それつきり眼を伏せて默りこんだ。
邸に着くと、薄化粧をした姉が出迎へた。萩代は、姉の心に嘆息を送つた。義兄の歸りを待つ時も、姉は卅一歳の顔に紅と白粉と墨との色彩を施すのだ。男を歡迎する最上の作法だと考へてゐるやうに見へた。萩代は、若い修養家を玄關に置きつ放しにして、自分の室へ入つた。彼女は、修養會に入るであらう百姓たちに、警告を與へるビラを作らうと決心してゐた。（完）

伯林片々



色

色は空色が流行基調で、配するにオレンヂ。

南國の感情である。

ブラオのマンテルに、バナ、色の手提に靴下に靴。靴は葉間に透いた海の色。

ダンス場のドアを開くと此處は赤いドレス。

その赤が正に腐肉色なのだ。どれもこれも。病的な感情だらう。

若い娘さんはボードレールがお好きで、奥様達は、健康な土人に焦れていらつしやる。

形

どんなに、此處の婦人連が、ジョセフイン、ベーカーの爪先きを舐めてゐるかを彼の女達のドレスの形に見やう。

それは、鳥の羽や、木の葉を綴つて腰に巻いた土人に似せて、三角の切れ端を澤山下げて土人色の膝小僧を出す。焦茶色の靴下も又流行なのだ。最近は三角の切地をレースにするので、皺の加減や脚の透き工合が一層、土人に近い。

圓い形は昨日、何んでも角を持つた物が嬉ばれる。オペラバックは圓く、ハンドバックは長方形でせう。

建築なぞも、

圓屋根、圓柱は古い年代表で、今日の建築師は、長方形の石材を只、積み上げてゐる。

香

やはり、角を持つた匂ひがモダーンな婦人に添ひ、甘いローズの香りを引いて歩るくのは老婦人に限られる。

然しそれも、テアターや、ホールの事で、戸外にゆきづれては、ヘットとボロの匂ひ。

音

音こそは伯林の本格だから片影をのみ傳へるなら、

自轉車は風鈴の音を流し、自働車は動物園の熊のやうな茶目つた警笛だ。

夜には、そう八時九時頃には、私が鎧戸を開き度くなる青年の麥笛じやなく口笛、

——美しい相手を誘つて踊場へ——

夜

小供をベッドに托して夫婦はビヤホールへ出かける。ダンス場があつて、戀愛氣分の蒸し返へしがあつて。

活動寫眞歸りの母親と娘、

『母さん。私のどが乾いた。ビール呑みませうよ』

叱らないで下さい。此處ではビールはお茶代りですから。

朝

ベッドの中で、私は舗道を鳴らす蹄の音に、その日のお天氣を占ふ。

黑々と照つた馬が、野バラを一輪、でなければ松の葉つパ

松下文子

を耳の所につけてそして牧場から出て來る。

歸りには、輕々としたミルヒ罐をのせて、花もしをれて。

木綿着物に前掛でミルヒ店とパンやへ主婦は走る。

新聞

この頃、ビヤホール會議（井戸端會議に相當する。市場に買出しに行つたおかみさん達が歸りにはビヤホールに寄つてガブ／＼と呑み乍らしやべくる。三角の肩掛をかけて胸を張り、太い片手を太い腰に、右手にコップを持つてゐるのは、しば／＼見る所の圖である）にのぼるのは、ジュッセルドルフといふ街の殺人鬼で、牧逸馬氏の『人肉を料理する男』さながら。彼は英國から獨逸に來たらしい。

競馬記事

××といふ馬は

出場　百何十回

勝　九十何回

負　七十何回

生年月日、

種屬、

特長、快晴には、はやり勝ちで過失あるも、曇天には必勝

女學生間に騷がれてゐる記事は

或る高等學校の女學生が休暇に巴里に出かけた。下車して飛び込んだレストラントで知合つた紳士とホテルに泊つたが熟睡の後の朝には、金數から持物一切盜難。紳士は勿論、とうから逃離。との訴へに目下犯人紳士を嚴探中。

如何やうに、この記事を女學生が騷いでゐるかは、鵞鳥だか、家鴨だかのやうに、しやべくる彼の女達の言葉は聞き取れないが、修身書のやうに四角に育つてゐる日本女生徒とは間隔遠うい事と思ふ。

道德

クリスマスには樣々なダンスの相手から樣々な贈物を貰ふ日とのみ書いてあるのは令孃曆に違ひない。

午前十二時から街の要所々々には市營病院が急設される。ビラには書いてある。

『無料。

夫婦以外に即興を持つた者は二時間以內に立ち寄られたし』

伯林の道德は地球の一歩前を廻轉してゐる。

怪我のないやうにと政府は後からついて廻る。

二千年、或は三千年間に地球が溜め盡した道德の底が割れやうとしてゐる。

どんなに精神王國が、教育フイルムや×道德を鼓吹した所で、最う歐洲地方には裂目が入つてゐる。

どうしたつて滅んで行くものに、何時迄、金のタクトを振うといふのか。最つと廣く時流を觀察して慾しい思ふ。

檢束のある小說



大田洋子

1

へんぽんと舞ふ牡丹雪——白痴娘の熱心な踊り見たいだ。雪を浴びて、家政婦井上タミは、公園に添つた河端を歩いてゐた。蒼いゴム引きのやうな膩い水面に、ぼた／＼と雪の粉が吸ひついてゐる。

一時間程前に派出先きから、勞働過剰で、折れ釘のやうになつて會へ歸つて見ると、會長は彼女を待ちうけてゐた。二百人もの家政婦が大かた出拂つてゐて、會長にとつては、景氣のよすぎる現象だつた。

だからタミもお茶一杯のまないで、すぐ次の申込者の家へ廻されるやうに、萬端の取引き事務が濟んでゐた。

使はれる者と、使ふものとの差別が、恐ろしくはつきりしてゐる城のやうな家で、朝六時から、夜の一時近くまで、二十日ねずみのやうに働き拔いて來たのだから、彼女は今、實際二週間のたゞ十分間でもいゝから、休息が欲しかつた。しかし、理由はどうでも、それを斷らうものならあとのたゝりが怖いのだ。すぐしつぺ返しに、傳染病の處だの、子供

の大勢居るうちだのへやられる風習があるのだつたから。
　そこでは、彼女等の收入の二割をはねるのだから莫大なものがふところへ入るくせに、恩着せがましく、彼女等を相手に、小資本家風な感情遊戯にも耽つてゐるのだ。
　タミは素直をよそほつて外へ出た。さつきまでゐた家でさんざよごした割烹着や、ペッチン足袋や、寢卷きを、そのまゝ入れた粗末なバスケットをぶらさげて外へ出たタミの頰へ、粉雪がじんじんと降りかゝつた。
　タミは歩き乍ら一枚の葉書を讀んだ。さつき會長は、向ふで書き入れて貰ふ成績表の印刷物を——雇主の家で彼女等が微塵も油斷したりなまけたり出來ないやうに、歸るときにはちやんと各項へ記入して貰つて來るのだ。それは奴隷のやうによく働く女を一人でも多く養成し、會を隆盛にする目的だ——入れた封筒を渡して、一旦外へ出してから、事務が追つかけて來て、端書を渡すには渡してよこしたのだが。端書を讀んで見れば、それがトリックだと云ふことも分るし、それにもう今更ら渡して貰つたつて必要な時機はすぎてゐるではないか。
　肋骨カリエスの良人が、どうも體が惡いから、二三日通勤にして貰ふやうにと、書いて五六日も前に出してゐるのだ。良人は、よく〳〵でなければ、そう云ふことを賴まない男だ。どこからでも自由に風の入る歪んだ四疊半の二階に、煎餅でも投げたやうに、横たわつてゐる良人の所へ、タミはすぐとぶやうに歸つて行き度かつた。
　だがそう云ふ良人の妻であるが故に、昂奮の通りに泳いではいけなかつた。行動を正しく決定しなければ——タミは習慣的にそう思つた。
　大型の青いタクシーがタミを笑ふやうに疾走した。白狐の衿卷きをうづ高く肩に卷いた若い令孃が大理石のやうな横顏を見せてゐた。そして四ツ角に、浮彫のやうな別な若い女が現れて、曲つて行つた。白い顏と、紅殼いろの防寒用コートを、紫の雨傘が、雪にもつれる花火のやうだつた。タミの美に對する思想はやはり今、マンネリズムだ。だから彼女は寂びしくやる瀨なさそうに吐息を洩した。生れた時の嬰兒のやわらかな肉くわいには、階級に依る差はなかつた。胎盤から離れて外氣に觸れた時、そこに階級の門が、地獄よりも物凄い形で待ち設けてゐたゞけだ。
　二十年の生活は糸のやうに細く、あぶなかつた。貧乏は一つの弱少的な型を女にきざんでくれる。生活の裏書きであるみすぼらしさや、色氣なさは、もしかしたら一生涯、自分に對して女を感じる男を一人も作らないのかも知れない。良人は、工場の鐵粉を內臓のあらゆる細部へまで密着させた、笑はない男だつた。そして遂々、涙の出るやうな解雇手當と、立派すぎる位の助骨カリエスとを持つて餞にされて來た。それから、いつさいで四十圓程の荒つぽく冷酷な手術を受けた良人は、病院の門を出るが早いか、二人の家には歸ら

ないでまつすぐにしかも何か情熱でいつぱいになつたやうな眼を輝かせて、同志たちのかくれ家へ行つてしまつた。

『浮氣丈けはしないでね』タミもそこいらの女心と同じやうに、結婚の相手にそう云ふ願ひを持つ女だつた。すると彼女の心を覗きでもしたやうに良人は云ふのだつた。

『お前以外の女を愛するやうなことはめつたにないが、運動だけは目的が達するまでは、止さないよ』と云つた。

『え、體をこわさないやうにして、しつかりね。私にも敎へて下さいね』タミは宿命を感じ、自分達の昇つてゆく階段の方向を感じた。

途中、内密で道草が食へないやうに、印刷物には、出發時間が記入してあるし、先方へ着いた時間もいやでも正確に書いて貰つて來なければならない。タミはむづ〱するやうな苦痛をじつと抑えて良人を無視した。

2

タミはその無數な窓から、ほうづきのやうな灯の洩れてゐる石灰色のアパートメントの中へ吸はれて行つた。方々でまごついて、やつと三階へ上つてゆけたが、洋室なんか初めてだつたから、とにかく映畫で見た常識程度で、ドアをこつこつと二つばかり打つて見た。そして、内側からの返事を聞かないで、ぽつかり開いた扉の中へ體を辷り込ませた。

先づ電氣ストーブの沈んだ明るさが、入陽の様にタミの眼を射た。人氣のない妙に黄いろつぽい部屋だ。左奥に、大きなシングル・ベットが、二つくつ付けておいてある。裝飾と云へば、クリーム色の壁に、巧みに選ばれたグロッスの繪が一枚、押ピンで留めてあるきりだつた。タミは誰もゐない部屋の中へ入つて來た事が不氣味だつた。だが、間もなく壁際の寢臺の上で、派手やかな色彩が動いた。

よく見ると、まだうら若い娘が、しなやかな細い毛らしい斷髪の頭を、うつ伏せにして、柚子色のスタンドの笠から洩れる灯を浴びて寢てゐるのだ。黄いろいピジャマを着た細い身體と、本を支えてゐたらしい、ふくらみのある二の腕が觸れたのだ。

娘は、蒼味をふくんで剃刀のやうによく切れた眼でタミを見た。

『ああ、家政婦會から來てくれたの』

『はい、大變遲くなりまして、濟みません。何も氣がつきませんから、敎へて下さいませ』

『いゝえ、私が病人ですが、大した事もありませんの。唯人手がないので傍にゐてだけ貰えばいゝんです。外は何か降つてゐて？』

『雪が降つてゐますのよ。お寒くありませんか』

『いゝえ。そう？ 雪ぢやあ本當に氣の毒なんだけど、今すぐお使ひに行つてくれない？』

娘はタミの持つて來たバスケットに眼を走らせたが、急がしく

『其のバスケット、ちよつと私に貸してくれない？ 先方へ屆けて

貰ふものを、濡れると困るから、その中へ入れてつて下されば都合がいゝんですの』
『えゝゝお使ひ下さいまし』タミは隅の方へしやがんで、中のものをとり出した。
『どうぞ』
『あなたの物は戸棚の中へ入れておいてね』
娘は寢臺から飛び降りると、戸棚のカーテンをひらいて、トランクの鍵をあけたそして中から、雜誌を重ねて包んだ位のものを取り出してバスケットに詰めた。
『これには、鍵はないんですか?』
『毀れてしまつてございませんが。濟みません』
『さう。ぢや、是を持つてね、××停留所で降りるのよ。そしたらトンネル長屋つて云ふのを訊いて、細い長い露路がありますから、眞すぐと入つて行つて頂戴。ずつと入つて行つたら、左側のお終ひから、二軒目に福田つて家があります。そこゝこれをちやんと屆けて下さいね』
娘はびつこだつた。そして支那風の斷髮の前髮が、リリアンののれんのやうに垂れてゐるが、その影に小さな三ケ月形の傷跡がある。娘はそんな、因緣づきか何かのやうな欠點を、いくつも持つてゐる癖に街の小娘によくある、小芝居じみた、キザな表情を使ふ娘でもなかつた。その代りに、光りの鋭い強い美しさが、小麥色の肌を持つた全身に溢れてゐた。娘は少し不安げにタミを見た。
『大丈夫で御ごいます。すぐに行つてまゐります』
『間違のないやうに渡したら、すぐ歸つて來て下さいね』
娘は、戀文を他人に賴む人妻のやうに、飽くまで不安げだつた。タミは早く行つて來てこの曰くのありさうな小娘に安心させてやりたかつた。タミは娘に愛情を感じたからだ。
タミが出て行かうとして、ドアに近づいた時、外からノックする音がした。娘が近づいてドアを開けた。
『あなたなの?』
『起きてもいゝのかね。氣分はどう?』
入つて來た三十五六の紳士は、小兒的善良さをもつた豪奢な男だつた。彼はいきなり娘を引きよせて抱きしめた。だのに、男の腕の下にある娘の顏には感興が現れない。タミはその無遠慮な厚顏ましい抱擁のしぶりに、目を見張つた。長い間、遠ざけられた異性への情感がむくむくと乳房のあたりで虫のやうに動くのだつた。
『家政婦の人が來てくれてゐるのよ。井上さんて云ふの。この方は野口さん』
『さう? 名前は?』
『タミと申しますの』
『おタミさんか。この駄々つ子をどうぞよろしく』
男は眼尻に皺を寄せてにやにや笑つた。今は乱にきつちりとしま

つた躰付をしてゐるが、この階級の男は今に見ろ、太いいやしげな首と、八ツ頭のやうな頭骸骨に變化してしまふだらうから。沒落的な風貌が、もはや彼の紫色を帶びた唇や、ぜいたくな男に特有な躰臭に構成されかけてゐるではないか。

だが、いつたい、この若い娘とはどう云ふ關係なんだらう？　戀仲なのか。まさかこの聰明な顏を持つた小娘が戀の相手にこの男を選ぶ筈はない。娘は不良少女なのかも知れない。金持ちの男から、手練手管で金をとることを合理的に考案し、實行してゐる女の一人でもあるのだらうか。それにしては、娘の態度が男に對して粗雜すぎる。甘さがなさすぎるではないか。まあ、それは何れにしろ、自分が同情すべき筋合ひのものではないに决つてゐる。とにかく命令通りに使ひに行つて來やう。

『お孃さま、すぐに行つてまゐりませうか』

『ああ、いえ?!』と娘はさへ切り『それはもうよござんす。あとでまた』と少しろうばいしたやうだつた。

『なに？』と男は優しく娘の肩に手を掛けた。

『買物を頼まうと思つたんですけど。氣が變つたから——』

『行つて貰つたらどうだ。俺が來たからつて、氣を變えなくてもいゝよ。おタミさん、これはこんなに若いが、お孃さんぢやないんだ。俺の奧さんだよ』

『あら、左樣でございましたか』と、タミは赤い顏をした。

娘は逃げるやうに、ベッドへ行つて横になつた。

『おや、足をどうかしたのかい。びつこを引いたね』

『昨日から少し變なのよ。腫物が引くまではこうなんですつて。藥をのまなくちや。井上さん、テーブルの上の粉の藥を下さいな』

『大變だね。痛いだらう』

『えゝ、痛いわ』

娘は男に向つて非常に簡單にしかものを云はない。深い眼の中が靑く燃えるやうに熱をもつてゐて、その態度や動きは熱情的な部分と、活然とした部分とが、はつきり分れ、自由に働きかけてゐた。

藥はみんな、婦人科のものだ。

『私、恥かしい病氣なのよ』

藥と湯とを持つて枕元に來たタミに、娘はあつさり笑つて云つた。

『私ももう、一人前の女になつたわね』

と、口尻を釣つて男にも笑つて見せた。

『ギロチンへ上る時は、あんな氣持ちがするかも知れないわ。何しろ高い、はしご見たいなところへ人を乘つけて、白い幕を引いて顏をちやんとかくすの。そしてお醫者つたら、降りる時に、轉ばないやうに起きて下さいつて、毎日同じことを云ふのよ。轉ぶ人が乾度あるのね。私も一度、どしんところんで見てやらうかしら』

娘はからからと笑つた。それは、相手の男の非衞生に挑戰した厲りに違ひなかつた。

け、派手な模樣ものの靴下を覗かせた右足を、新子のベッドへかけてゐる。

『まつたくお前をそんな病氣にしてすまなかつた。飮みすぎて、躰が弱つてたんで、出てきやがつたのさ。それはそれとして、俺は新しい自動車を買つたよ。この型だ』

彼はポケットから、カタログをとり出した。

『うんむ。結構ね。私には何の關りもない。眞新しい健康な躰に病氣がうつたことよりも、關係のないことだわ』

娘は見向きもしなかつた。

『まあぞう云ふなよ。わざとうつしたんぢやないやね。無體なことを云つてすまん。御免だ。御免だ』

『二人の對立は非常にはつきりしてるわね。今晩はいつ迄ゐるの』

『いつまでゞもゐる。邪魔になるのかい』

『そうでもないけど。又熱が出そうだから』

『熱が出ると、俺がゐない方がいゝの。驚いたね。でも今、計つて御覽』

野口は體溫計を彼女の腋の下へ入れた。タミは手持ちぶさたで、馴れない椅子に、空虛な顔をして、板のやうに腰かけてゐた。不思議な雰圍氣に對しても、タミは別に興味もなかつた。こう云ふ情景は、ブルジョア文化の靜脉の中に、いくらでも點在してゐることなのだから。野口は娘の枕元に落ちてゐる本をとつて、背の文字を讀むと苦笑した。

『共產主義のABCだ？どこでこんなものを拾つて來たんだい。女の道のABCでも讀んでもらいたいね。どれ、もういゝだらう』

彼は體溫計をとり出し、娘の髮を撫でた。

『ほう！九度あるぜ、九度。おい、新子、こんなにひどい熱が出てるのに、どうしてうろうろ起きてゐたんだね』

タミが氷を買ひに出て戻つて見ると、男は火のやうな娘を、玩具のやうに抱いてゐた。

3

野口の歸つてゆく靴音が、廊下の向ふへ遠のいて、五分も經たないうちに、新子は、かくれん坊の子供見たいに顔を上げた。

『困つたわ！もう十一時でせう？今晩の內にどうしても、屆けなくちやならないんだのに』

『行つてまゐりますわ、私は、夜の夜半でも平氣で步きつけてゐますから』

『そうですか、だつたら濟みませんが、行つて來て頂かうかしら』

ガラスの破片のやうな娘の眼が、急に丸みをおびて微笑した。

外はこまかい雪が降つてゐて眞つ白だつた。タミは敎えられた通りにして、此の家の前までやつて來た。と、タミはびつくりして、

その家から出て來た男と眼を合せた。紛れもなく良人の安井なのだ。
『ま!!あなたぢやないの、よう!』
『何だ?』やせた長身の、安井は、怒つたやうに肩をいからせた。タミが、うろ〳〵と自分を探しでも來たやうに思つたらしかつた。
實はね、とタミは一ぶ始終を話した。
『そうかい。ぢやあ早く届けて、さつさとお歸り。よけいな事を云はないやうに。いつでも自分で自分を訓練することだ』
偶然妙なところで、良人に會つたからと云つて、すぐそれに驚いて聲を大きくしたりすることを、安井は嬉しく思つてゐないのだ。
『えゝ、ぢやあ、あなたはあのアパートの女の人を御存知?』
『あゝゝ、わるい立場にゐて非常に誤解されてるが、あの人は、あゝやつて經濟的に助力するより外にないと思つてゐる人だ』
『でも不良少女見たいなところもあつてよ』
『目的のための手段だ。あれでいゝよ。あの人は有名な共産主義者の娘で監獄で生れ、同時に母を失つた人なんだよ。どん底から、獨りであそこまで上つて來た女だ』
『そう。ゑらゐのね』タミは少しすねた。
『病氣は?』
『大丈夫。早く行かないか』
覺悟は常にしてゐるものゝ、面と向へばやはり情炎が燃え立つた。
『大事にしてゐてね!あなた――』タミは、眼で愛撫を求めた。
と、安井は白つぽい暗闇の中で彼女を羽交ひじめにした。そして彼は突きのけるやうに冷く云つた。
『さあ、早く用事をしろよ。又ゆつくり逢ふからね』
強い良人に對して、タミは涙一てき見せるわけにゆかなかつた。女を捨て際の色魔みたいに、タミは一度も良人を振返らなかつた。
その家の中では、まだ四五人の男達が、熱心に何か語り、鐵筆を持つた男が、タミから品物を受けとつて眼を光らせた。
タミの胸もときめいて來た。

4

爛々と眼を光らした若い勞働者が、浪藉者のやうに、新子の部屋へ飛び込んで來た。
『又、尾行だ!これを預つておいてくれ』
青年は、無産者新聞を數枚、折りたゝんで束にしたのを、かくしから引き出して、新子に渡した。
『だいじようぶ!ぢや、これを持つておいでよ』
新子は、がさりと氷のうを額から落して起き上ると、素早く、枕の下から紙入れを出して、幾枚かの札を青年に押しつけた。
『いゝのかい』
『よくなくても、そつちは要るぢやないか。さあさあ、はやくさ』
『有難い。氣をつけてゝくれ。スパイがとび込むかも知れないぜ』

青年は、脱走者の如く、再び走り去つた。

タミは、はつきり新子の存在價値を見た。

灯がついて、部屋はまた、山吹いろの灯の霧がかゝつた。醫者が來て彼女の腕に血のやうな色の注射液を打ち、懷中電燈で、體のずつと下部の方を診て行つた。

入れ違ひに、野口がふらつとアルコールの匂ひをまき乍ら這入つて來た。高價なしやれものにはふさはしい、だがふざけた、色模樣のハンカチで先づ、彼は帽子をとつたひたひを押えてから、新子に近づいて行つた。

『いやよ。くさい。』がさ〳〵と氷の袋をはねて新子は向ふを向いてしまつた。

『いゝつたら、こつちイおむきよ。妬いてるのかい』

『えゝ妬いてるの。アッハッハッハッハッハ。あアあ。紅はタンジユで、白粉はコッテイの線。香水は金ツル——アッハッハッハ』

『何を云つてんだい？ね、何だい、氣がふれたのかい』

『洋服の腕に、それだけみんな喰つついてるつてことなの。ほら、だらしのない』

『おや、本當についてるね。矢鱈無しようにくらいついて來るんだもの。香水は金ツルかい？あの踊り子の奴』

『辛いわ、踊り子たちも。金持ちの奴等にイヤでも紅や白粉を喰つつけて、一枚でもよけい稼がうとするんだ。さうしなければ、生きてゆけないんだから』

『何を憎まれ口許り利いてるの』

その時、はげしいノックが扉をふるはせた。

タミは扉を細目に開けた。貴婦人型の、ヒステリックな二つの目が、ぎろりと光つた。

『新子さんはあなた？違ひます？ぢやあ新子さんを一寸呼んで下さい。私、野口』

その女は銀狐の毛皮を肩にまとつたまゝ、寶石の輝く白い指を、ドアに掛けて突つ立つた。

『御病氣で動けないんですの。どうぞお入り下さいますやうに仰言つてます』タミは不愛想に云つた。

『動けなくても、男は引つぱり込めるのね』

女は成金の女房としか思へない言葉を、よく通る聲で叫び乍ら入つて來た。

『嘘つき!!別れた、別れたつて、よく人をだましてゐたのね。毎日々々、株主總會だ、宴會だつて、こゝが會場なんですか？よつてばッ』野口夫人は先づ良人の胸を突き動かした。

『新子さん！初めてお目にかゝります。どうも野口が、いろ〳〵お世話になつてすみません。お禮を申しますよ』

新子の二倍もあるやうな、巨きな躰の夫人は、新子のベッドへにじり寄つた。新子は、だまつて頭を、下げるやうに動かしたゞけだ

つた。夫人は眼を釣り、毒草のやうに蒼ざめた。

『あなたは、これから野口をどうする積りです。私があるつてことを知つて盗つたのでせうからね。返事をして下さい』

どう云ふ積りか新子はだまつてゐた。

『病氣がよくなつてからにしてやつたらどうだね。今日は俺と一緒に歸らうよ。今歸らうとしてゐたところなんだ』

と、野口が白つぱくれた顔で云つた。

『よけいなお世話よ。人が病氣で寢てる時は一日も家にゐないくせに。この人だけが可愛いゝの。この人が何か云ふまでは歸るものですか。ね、新子さん、私の良人をどうする積りなの？』

夫人は新子の夜着の衿をはねた。そして肩をつかんだ手をヤケに振り動かした。

『お止しになつて下さい』

タミは走り寄つて夫人を引き離そうとした。

『何をするの。あなたは何？下女でせう？』

『下女ならどうなんです。どいて頂くわ』

タミは力を入れて夫人をしりぞけた。

『下女のくせに何を邪魔するのさあ。お前だつて野口に食べさせて貰つてるんぢやないか。新子さん、どうするのか、それを聞かしたらいゝでせう』

と、新子はベッドの上にはね返つて起きた。發熱のためにビジヤマの衿の間から、湯氣が立つた。

『どうするか、分らないですよ。野口さんがこゝにゐる間は私のものだし。だけどこの扉から一歩出てゆくと、私はすぐ本を開いて、どん〳〵讀めますからね。何にもかけがへのないものではないわ。無論、戀ではないのね。それから何を聞き度いんですか』

『まあ、何て、何て圖々しいッ。二人で勝手にするがいゝ。私はすぐ出て行くから。あなた！子供を頼みますよ』

『私、何も子供に關係はありませんことよ。野口さんをたとへ要るにしても、子供が欲しいわけはないわ。責め道具に、子供を使ふこと、ないでせう』

『なにイ！何ですつて？淫賣婦！毒婦。淫賣ッ、淫賣ッ』

夫人は新子の肩を突き倒した。

『お互ひさま。家の中の女は一生涯の淫賣ですよ。私はぜひこうしなければならないから斯うしてゐるんだわ。一生涯、やきもちを妬いて死んでゆく、ブルジョアの女とは、少し違ふの、野口さんのやうな非科學的な男を、誰が戀の相手になんか――』

野口夫人は、化粧品荒れのした細長い顔を引き釣つた。中年の金持の女の躰内に燃えさかる情慾が、中間で裂け、黑こげになつてゐる。そのさまをタミは小氣味がよかつた。

『馬鹿ッ！こんな女にだまされて。あなたつてば、口惜しい、口惜しい。何も私云へないからよけい口惜しいッ』

野口は葉巻も捨てゝ、つかみかゝつて來る夫人を支えてゐる。と、案内も乞はないでノック一つしないで、すうつと扉があいた。佩劍だ。佩劍の音を亂して三人の警官が、無禮にも亂入して來たのだ。

野口夫妻が、眞つさきに蒼くなり、一つにかたまつた。

『南新子と云ふのは――』

と一人が尋ねた時、新子が、私よ、と云つたにも拘らず、あれですよ！と野口が助言したではないか。

『不穩文書を出せ、ちやんとこゝにあることを、突きとめて來たんだぞ』

『どこにもないと云つたつて、どうせ、ひつくり返してさがすんでせう？せいぐ探せばいゝわ』

『この女が何かしたんですか。私は斯う云ふものですが。この女の親籍のものを家で使つてゐるので、一寸見舞ひに來てやつたので。何も關係はないです』

『はあ、なるほど。×銀行支配人、野口秀春氏ですね。間違ひないですね。この女は、左翼運動の手先きを働いてゐるんですよ。そちらは奥さんですね。ぢやあ、お引き取り下さい』

野口は夫人を伴つて活然と出て行つた。タミは新子の眼の中を見た。だが彼女は、眉一つ動かさず、一言の抗議も申出でない。たゞ

『あなたも早くお歸りなさい』

と、タミをふり返つた、

『いかん。出ることはならん。同じ仲間だらう』

『出ないよ。同じ仲間だ。あんたたちのすることはこの通りなんだね。今に、あばいてやるから』

タミは警官をにらみ据へた。

『ふふむ。おい、お前は今の金持ちの世話になつてゐたんだらう？うまく逃げやがつたなあ。しかし、薄情なものぢやないか』

陽に燒けた四角な顔の警官は、帽子のあご紐をしめながら感心してゐた。

『男の手先きに使はれて、金持ちの奴からはいゝ喰ひものにされて、ざまを見ろ』

警官も、夜の女の部屋で、緊張を失つて饒舌た。

『喰物にされてるなあ、自分たちでせう。支配階級のいゝ喰物にされて、いつたい、あんた方は、どれだけのことを、彼奴等にして貰つてるの。しつかり眼をあいて、肚を据へて、ちやんと、見なほしなさいなね』

新子はオレンジ色の毛糸の首巻きを肩に引つかけた。熱のために、ぼーつと上氣した顔に、凄慘な怒氣が血走つてゐた。

『さあ、連れていらつしやいよ。油を賣らないで――』

こひぶみ

——愛する人に捧ぐ——

高橋鈴子

序詞

愛する人よ、出しようのない遠い旅にいらつしやる人よ、こんな手紙をこんな場所に出したあたくしをお叱り下さいますな、

あたくしはあなたにこれを捧げるつもりで書きました。あなたに讀んでいたゞきたいばかりに意地も殼もぬぎ捨てゝ、苦しいあなたへの戀情を書きましたどうぞ靜かにお讀み下さい。

一月×日

あなたは今何處にお出でになるでせう？　たゞお一人默つて遠い遠い旅にお出になつたまゝあなたにお目にかゝつたあの夜からあたしはもう一年も二年もお目にかゝらないような淋しさから今夜は手紙を書き始めました。どうしてそんなに默つたまゝ行つておしまひになつたのでせう。こんな事を書き始めるともうあたしはあの夜があなたとのお別れであつたような永遠に巡り合ふことの出來ないような悲しい悲しい氣持があたしの心を掩ひかくして書いてゐる字が見えなくなる程涙が溜つてまゐります。

「泣いて居てはいけない。靜かにあの方の心を凝視め、あの方の心の灯をぢつと見ていらつしやい」親切なあたしの友達はあたしの手をとつてやさしい言葉を毎日のように言

つて寄越してくれます――けれどもあたしはそのやさしい友の慰さめの言葉にも親切な思ひやりにももう充たされなくなつて來ました。××樣　この手紙はあなたに出しようのない又あたしの手元に殘されて積まれてゆく文殼です。

しのびよつたあなたの心はやさしい言葉、ほんたうの愛に飢ゑに飢ゑ切つてゐたあたしの心に、あたし自身が火をつけました。

そして日一日あたしはあたしの戀の火を燃えたゝせ今日では狂戀の女と少しも變らない自分が燃え立たせた情火の苦しみの中にかぼそい命をつないでゐる樣な氣がします。

ほんたうに氣が狂つたら――どんなにあたしは仕合でせう。どんなに和やかなそして自由に朗らかに唄を唄ふ調子であなたのお名を呼びつゞけあなたの後をお慕して從いて行けるでせう。

めんだう臭い理智の一點があたしの素朴さを掩ひかくしてあなたをこんなにも愛してゐながらお慕しながら、戀ひつゞけながらもあなたの前に坐つた時片くななとりすました女になつてしまひます。

××さま　あたしにはあなたがあたしに對して「愛」の言葉を持つていらつしやるかどうかさへ知りません。

あたしはあなたがどんな態度をお見せにならうと、どんな道へ一人でどんどん歩いて行つておしまひにならうとあたしの心は植　けられたあなたへの愛情にあたしの命の續く限りにあなたのお名をぢつと呼びつゞけ、あなたのお心を抱きしめていつかの日、いつかの日まで待つてゐます。

あたくしはあなたがあたしに對しての愛情を少しも持つてゐないと若しあなたのお口からあなたの御聲であたしの前ではつきりとおつしやる日があるとしても――それは恐ろしい〳〵苦しい戰があたしの心をさいなめる最初の日にならうともあたしはあなたがいつも靜かに話して下さる時のおやさしい眼眸、親切なお言葉をみんなあたしに下すつたものとしていつの日までも喜びの思ひ出として、しつかりと抱きしめて居りませう。

思ひ出、思ひ出、とはどうしてこんなに弱い響きをもつた言葉でせうか、それはあたくしには悲しいけれど美しい優しい夢の思ひ出となる所爲でせうか。

いや、嫌です。そんな恐ろしい悲しい思ひ出に浸りつゞけることからの長い一生の道、それは遠い淋しい路です。

けれどもあたしの小さな魂の中にあなたの御心一つばいを充たしてしまつたあたしの心がこれから何を考へ、何を綴りに、何を盛つて生きながらへてゆけるでせう？

人一人を思ふといふ事がこんなに苦しい悶えをもつたものとは、知りませんでした。

廣い大きな世の中にたゞ一人、たゞ一人の男の方をあたしは愛しまた戀ひしく思ひました。

がそれはあたしが間違つた事をしたのでせうか、あたしの心に僞の何かゞ潜んでゐるせゐでせうか、かうまで苦しい戀、こんなにまで惱み續けなければならない戀。

あたしの今日の日までにこんなに思ひ患ひながらもたゞ一つの火を凝視め、たゞ一途なまぢめな氣持を持つた何かゞあつたでせうか。

あたくしはそんなものはありませんでした。地位だとか名だとか、すべての目的を持つたものでした。

あたくしの若い少女の日、あたくしは男の子のように向學心に燃えたつて大きな希望と憧憬の中に生きて來ました。偉くならなければならない。傑れた女になつて立ち上らなければいけないのだ。と本の中に埋まつて人と人とに觸れもしないで大きくなりました。

それからあたくしは物を書き始めました。いゝものが書き上げたい。ほんたうの人生をつかみたい。

其時あたくしの境遇と生活はどん底から覆されてしまひました。

靜からあらしへ――創作から建設へ――目眩しい戰ひの日が訪れて來ました。あたくしは平和な我儘をし盡した「家」を去つて戰鬪の眞只中に深く飛び込んで行きました。

僞瞞と技巧、屈辱と侮蔑、一人一人の人間がかうまで挑み合ひ敵となつて相鬪ひ、一撲打ちをしなければ生きてゆけない悲慘な世界を毎日見續け、あたし自身もその怒濤の中にあらしの中に捲きこまれて行きました。

スツト伸びた一莖の野生の花は強いあらしに散らされさうに、捥ぎちぎられさうに、蹂みにぢられさうになりました。があたくしは鬪ひの中に頑丈に立つてゐました。

――強い女――

――笑はない女――

――情をもたない白刄の女――

しつかりと傷つけられないための武裝にはあたしは微笑

さへもし得ないで恐怖の中で震へながらも悲痛の涙をおし殺して「欺されないぞつ」『負けないぞつ』『馬鹿にはされないぞつ」と自分自身へ生まぢめに元氣づけながら今日の日まで一日一日氣弱い母をも助けながら「元氣を出して、あたしは まだこんなに 元氣に 歩いて ゆける」と母の手をとり、後押しをして生きて來ました今日の日まで、

が其處にあなたのやさしい微笑みの眼眸があたしを待つてゐて下すつたようにあたしには思はれました。

疲れ切つたあたし、今日の日までの大きな苦しみ、緊張し切つた心のゆるみ

伸びたまゝのなんの飾りも持たないあたしはあなたにめぐり合つた喜びのために、感激のために聲さへも立て得られませんでした。

××さま

あたくしはそのまゝ息が絶えてしまつたらその喜びの中に浸りながら幸福に目を閉ぢられたでせう。がその幸福の中に生きて行きたい氣持になりました。それが女の狡猾といふものといへますかしら——いゝえあたしの數年はあまりにみぢめなあまりに敵に圍まれた悲慘なものでした。あたしは休みたい。大きな抱擁の中に樂よと一時でも眼を閉ぢたかつたのです。

それから先——後の苦しみはまたどんなに大きくても多くともしつかりとあなたと二人であなたの腕により縋つて鬪ひつゞけて行けたならば——そしてあたしはあなたの爲に何を捧げよう、あなたの喜びの目をみるためにはあなたの滿足な喜びのお聲をきくためにならどんなにすればいゝのでせう。

あたしには分らない。たゞ一途に、たゞ命の限りをあなたに捧げ、あなたを想ひ、あなたを愛してゐるよりどうしていゝか術を知りません。

一月×日

「淋しいんだつたらあたしの胸でお泣き、一緒に泣いてあげよう、あたしを忘れてはいけない、あたしが耐えて來たあの苦しみにあなたもいつの日までも耐えて下さい、挫れてはならない。あなたの手を、あの方が「××さん」とおとりになる日まであたしと一緒に祈りませうね」

あたしは友達のこんな淡々とした手紙を讀むと聲をあげ

て泣いた。そしてあなたへあるつたけの我儘を書いてみたくなりました。

××さん××さんなぜあなたは遠い旅からお歸りになりません？また默つていらつしやるのです？あたくしには友達のやさしい言葉の一言があなたからあたくしにあてた一行だつたとしたら。あなたはあまりにお強い！

あなたはあたしのこの苦しみを嘆きをじつと默つて見てお出でになる！

九時の最終の友達の手紙をみてからあたくしは何の敎養もうけない、生れたまゝの子供のようになつて目を閉ぢて横になつて見ました。起きたまゝで小さなこの身を支へ通してゐることさへあたくしには今夜堪えられない重荷です。目を閉ぢて、默つて默つて――あなたを思ひ浮べようとしましたがあたくしの頰は涙がとめどもなく流れてゐました。

こみ上げて來る悲しみのすゝりなきをぢつとおしつけて今から朝までの長い苦しみの時間をどんなにすごしてまゐりませうかしら。

あなたのお心の中にあたしの小さな身をソット坐らせて下さい。

あなたの御手の中にあたしの小さな手をやすませて下さい。

あなたのやさしいお聲であたしを暫くすやすやと眠らせて下さい。

朝まで朝まであたくしは平和な靜けさに浸りながら和やかな心持であなたの髮をなぶらせて下さい。

その一時を――あたしにおゆるし下さいませ。

生活と閑暇をもたないプロレタリアの生活の中で人を戀ふといふことがあまりに不眞面目な遊戯と言へるでせうか。

あたくしはあたしの全てを捨てゝ、全てを投げ出してこれ程眞劍に生きてゆかなければならない氣持があなたにお目にかゝつた最初から日一日と強く培かはれて行ました。

プチブル的な根性を叩きつけて、はつきりと淸算してしつかりと强い愛情に生きて行く事の出來る女、その女はもう少女でも、淑女でもムスメでもない完全なやさしい一人の女となつて立上つてゆく力强さを感じました。

今の時代にどんなに女性が男性と對抗してみてもどれだ

け立勝る事が出來るでせう。

あたしは弱い女でもいゝ、どんな仕事をなし得ない力弱い女になつてもいゝ。今夜のあたしはたゞあなたを思ひ浮ぐあなたに犇とり縋つてゐればいゝのです、何もいらないのです。

××さん××さん。氣の觸れた小さい〱あたしはあなたを呼び求め、こんなにあなたの胸の中に飛びこんで行きたがつてゐる。

なぜ、どうして默つていらつしやる？

錐で射すやうな胸の痛みが呼吸もつけない程鋭くあたしをさいなみます。

二十何年かに始めてこれ程に人を戀ひ、人を慕ひ、人を愛す、それを知つたあたくしは寧ろ「戀」といふ言葉を終生知らないで終つた方が、どれだけに樂々としたものだつたでせう。

始めて巡り合つたこの戀はあたしの身も魂も燒け盡さうとしてゐる。からからに燃えたゞれさうです。

「いぢらしい××さん、あなたはまた今夜もあの方を思ひ浮べて頭の髮がぬれてしまふまで泣いてゐるのぢあない？それを傍から見てゐてたまらなくいぢらしい。あたしまで泣きさうになつてくる。しつかりしていらつしやい。あなたの左に私が居ます。倒れてはなりません。あの方のお心の中に私とあなたは今夜も坐つてゐてあげようね」

友達はこんなにも手紙の中に書いてくれました。この苦しみから逃れるために離れてしまつたらとかう心に誓つて見たあれから數日後あなたは一人で長い旅に出ておしまひになりました。あたしの心は如何した事か水のやうな悲しさがおし擴がるばかり、もう今夜はかうしてペンをとつてゐても××さんと大聲で喚きたくなつたり、走り廻つてみたくなつたり、大聲で涙のあるつたけ泣いて泣いて狂ひながら街中を駈け續けてみたい。

こんな毎日が續いて行つたら——地獄の底に苦しさに血みどろになつた女が××さんと名を呼び通しながら、刹那的に笑つてゐるかも知れません。

一月×日

昨夜は一晩かゝつてあんな手紙を書いてゐたあたしは恐ろしい大きな罪をもつた情炎の女です。けれども昨夜のあ

たしに月の中に一回起る身體のアブノーマルな前日で病的だつた事を今朝知りました。

××さん。かんにんして下さい。あたくしは今日は女らしい靜かな氣持で昨夜の續きを書き始めました。あたくしはあたしがこんなにあなたを愛しあなたに執着してゐるならばもつと靜かな心持で、もつと和やかな心持であなたを凝視める事が出來るものでした。どんな所にいらしてもどんな淋しい旅をつゞけていらしてもきつと心の中にソットこのあたしの心持がしのびよることを信じます。そしてあなたを苦しめるでせう。かんにんして下さい。

あたくしはあたし自身の苦しみから、淋しさから無理强ひな愛をあなたから奪はふとしてゐた惡い女です。

どうぞおゆるし下さいませ。今日からあたくしは靜かに勉强を始めます。

本も讀みます。そしてやさしい美しい女になります。あなたのお好きなひらかなを忙しい仕事の暇々にまつ白な色紙に稽古してみませう。よくお歌ひになる「××」の歌も歌ひます。そしてあなたのお身に變りのないよう、あなたの御心が一時でもお幸福であるよう祈ります、それが愛するものへのほんたうの祈りです。

あたくしはいつかの日あたくしの書き上げた一つの作品があなたに讀んでいたゞける日を待ちます。あなたが「いゝね」と讃めて下さるまで懸命に死物狂ひになつて勉强を續けてまゐります。

どれほどの侮蔑の中にも、迫害の中でも、確かりとした自己を凝視め、主義をもつて、戰つて生きてまゐります。

あなたのお心の中に坐つたまゝ、一人で淋しいこれからの長い〳〵人生の旅を續けてまゐります。

疲れ切つた日、かぼそい身一つぱいで大聲にあなたの名をお呼びしませう。歩き疲れて最後に斃れる日あなたが何處にいらしてもあなたのお傍までまゐります。そしてあなたの兩腕の中で靜かに眼を閉ぢさせて下さいね。

愛する人よ、生きて居て下さい。死んでは嫌です。

いつかの日、いつかの日まで、あたくしはあなたのお心にあたしのほんたうの姿が分つていたゞける日まで、あなたへの愛情をあたしの仕事に捧げます。

よりよきお幸福を祈りながら、あるがまゝの人生をすなほにとり入れて生きながらへてまゐります。



その村の新年

川瀬美子

膨大なB湖のまはりにHの町は、ゆるやかな海岸線を底邊にした矩形の形で連らなつてゐた。この小さな町には不釣合に突調子もなく大きなコンクリートの白い町役場の建物をかこむ街の屋並が途切れ、わづかばかりの牧場と藁屋根の農家と荒涼とした田甫と、其中につゝ立つた棟の高い一軒の屠殺小屋とによつて南に延てゐる一帶の地――それがHの町に編入せられてまだ日の淺いMの村である。

一つの町として存在してゐる僅いHの町とMの村との間には現在も尙一目にして瞭然たる區別があつた。

有り餘つた階級と、足るを知る事の出來ぬ階級と――、その上にMの村の人々にはいつの頃からか理由の不明瞭な人種的差別の烙印が確然として押され、彼等を原因のない屈辱の上においてゐた。

Mの村は××部落だ。

湖面を渡つて吹きつける意地惡くつめたい風が新築でたてつけの惡いガラス窓のすき間から吹きこむのを氣にしながら、こはるは、机の上の小さな瀬戸の火鉢に左手をかざすと、つくりかけてある敎案のつゞきを、かきはじめた。

舊Hの町の一部の兒童の便宜を許つてMの村の中央から北端に移されて新築された學校へ通ふ事は、Mの村の子供達――特に下級の子供達にとつてはかなりな道のりだつた。

殊に雪の降る冬には、一苦勞だ。

「せんのとこにあつた方がよかつたなあ」

一週間程前初雪がかなりひどく降つて四五寸つもつた道を歩きながら綿ネルのえりまきにくるまれた子供達が話してゐたのを後から歩いて來て耳にしてゐたこはるは、今日の父兄會でM町の父兄達がせめて舊M校の場所に、二年生までの分教所を設けるやうにと、校長まで申し出てみればよかつたのにと、思ふのだつた、新築後はじめての父兄會で骨の折れる一年生を持つてゐる彼の女は、今日の授業のつかれが、冷へた足からキリ〳〵頭へのぼつて來た。

彼女のとなりの机には三四人の女教員があつまつて盛んに男の教員の批評をはじめてゐた。村野君、一寸來て下さい。

校長室のドアをあけて今父兄との懇談會からかへつて來たらしい校長が首を出した。

今までしやべりつゞけてゐたとなりの女教員達が一齊に自分の席につくと殆ど同時にこはるはインクの栓をして立ち上つた。

「實は私もまだこゝへ來てから三月餘りにしかならんのでその邊の事情はよくはわからんのだが――。あんたはたしか去年からだな、こつちへ來てゐなさるのは――今日Hの兒童の父兄から抗議が出たんだがあんたの級ではHの兒童とMの兒童とを、並ばせてゐるさうでどうもあれはHの兒童が嫌だと云ふて學校へ來ないさうだ。どうか一つあんたそこの所を工夫して、巧くやつて貰ひたいんだが」

つめたい空氣になれた顔へストーブの火氣がムーッと來る校長室の、こはるの目の高さにあつたすべての物がドカリとおちこんだやうな氣がした。

小商人くさい卑屈さをもつた校長の正角な顔が目鏡の奥でグル〳〵まはつた。

うなづくともなくうなづいて自分の席にかへつたとき彼女は彼女自身のMの、村民特有だと云はれる、目尻のつんとつり上つた、ひたいのせまい顔立を思ひ浮べた。

それから殆ど村の人々のすべてが親族關係にあるMの村の血族結婚の結果生れた子供達の彼女のそれににた顔立を思つた。

その時も又こはるの腦裡にはこの二つの觀念がひらめいた。

何と云ふざまだ。

あきらめやう。

幼い時からこの二つの觀念が彼女自身をかこみつゞけてゐた。

女子師範の寄宿舍に親の許をはなれて四五年間ゐた間にこの觀念はます〳〵彼女の中にしつこく成長した。

無意識の中に、目尻の眞直な、ひたいの廣い他の娘達の顔にせやうと工夫してゐる自分自身に對するあざけりと、それにつゞいてくる宿命的なあきらめ――かうした二つの觀念の葛藤の中に、彼女の少女らしい涙もろい心はいつか宗教にとらはれてゐた。

あらゆる人種的差別を捨ゝ總て信ずる者はサドカイ人もパリサイ人も神の國に入り得ると斷言したキリストへの熱烈な思慕の情が彼女の彼女自身の宿命に對する呪詛をうるほし續けて來たのだつた。

こはるは机の上をかたづけて一人で學校の門を出ると肌をこほらせるやうな風の中を牧師の家へ急いだ。

二三年前に、O市の神學校を出たばかりの青年牧師幡は、××部落の傳道と云ふ使命が持つ青年らしいヘロイズムに、あふられて學校を出て以來教會とは名ばかりの小さな家にとゞまつて、Mの村の傳道につとめてゐる男であつた。

外出の支度をしてゐた彼はこはるが紫色になつた顔に、興奮した目をギロリとかゞやかせながら入つて來たのをみるとおどろいて、ネクタイを結ぶ手をやめた。

「先生。私はもうこれ以上の屈辱にたへる事は出來ません」

彼女はもつてゐた風呂敷包を投げ出すと緊張してゐた心がゆるんで、名狀し難い感情に壓倒されて、慟哭した。

「どうしたんです。一體？」

こはるのたゞならぬ樣子に、幡は、胸をつかまれて彼女の肩に手をかけた。

「先生どうして神樣はこんな事を默認してゐらつしやるんでせう！ 私はどうしてこんな不合理な十字架を負はされる義務があるんでせう！ 私こんな不合理な社會を平氣で默認してゐるやうな神樣なら信じたくありませんわ」

「まあさう興奮しないで――。落着いて下さい」

その日の出來事を途切れ〳〵に話した後で興奮して、彼にくつてかゝるこはるを幡はなだめるのに努力した。

「だつてさうぢやありませんか、現に私がこんな屈辱に甘んじてゐなくてはならない樣子を目の前に見てゐながら、神の愛をとくあなたがそれをどうする事も出來ないなんて」

「まあ靜かにして、今日はこのまゝおかへりなさい、いづれ後でゆつくりお話ししませう。たゞキリストは人類の罪をあがなふために尊い御身を十字架におつきになつた――と云ふ事だけは忘れないで――ね。この事だけは忘れないで靜かにかへつておやすみなさい」

彼はかう云つて、彼女の氷の樣に冷たい手に風呂包をもたせた。

十二月も中ばすぎて都會の街には、クリスマスデコレーションの華やかな頃だ。雪をいたゞいた湖をめぐる山々は、眞白な瀬戸のやうにチカ〳〵光つてゐる。

こはるは、二三日間の事件以來忽然として起つた、彼女自身の信仰の反問に、名狀しがたい、空虚な日を送つてゐた。

その日彼女が學校から冷たい風の中をかへつてくると、店の土間で、父と小僧が、今屠殺場からはこばれて來たばかりの牛肉――と云ふより牛の死體を秤りではかつてゐた。

白と赤との生々しいかのこの肉から、血生ぐさい臭氣がむつと、こはるの冷えた鼻へ來た。

「こはる。精吉がもどつて來てのう」

秤を肩から下して父が話しかけると殆ど同時に、店と居間との境ののれんから、たくましい、精吉がぬつとあらはれた。

村の小學校を出るとすぐ東京にとび出して、それ以來十年程何のたよりもしなかつた從兄の何かしら熱情を相手にまで感じさせるやうな風貌に、こはるは一寸たじろいだ。

「やあ」

こはるの少女時代をしか知らなかつた彼も成長して、女になりきつた、こはるの姿に、一寸驚いたやうに云ふと、小倉のつめ襟のヅボンのひざを折つて、目であいさつした。

十年ぶりで會つた、幼い頃は兄妹同樣にしてくらして來た、從兄の前に文字通り先づ何を云ひ出していゝかと惑ひながら、こはるは店の疊の上に座ると、大きな火鉢に手をかざした。

「精さん東京で何してたの？」

「何つて？　いろんな事をしたさ」

こはるがやつと口をきると彼は、かう答へながら、力感的に四角くそつた肩を一寸ゆすつて、ポケットから、バットをとり出した。

「先づ最初が牛乳配達、それから、役所の給仕、そいつもすぐくびになつちまつてあちこちの工場をほつゝきまはつてゐる中、ある男の紹介で本部の方で働く事になつたんだが――もうそれから、三四年になるよ。今度この村がHの町に偏入されたつてきいたんで一體どんな具合になつてゐるのか知らんと思つて――それについて色々思ふ所もあつてかへつて來たのさ。はるちやんは先生だつてね」

最後の言葉の侮蔑的な響にこはるは何か云はうとしてだまつた。

「俺は、役場へ行つていろ〳〵しらべて來てみて、今もおぢさんと、話した事なんだが全く、この村は、このまゝで行つたらHの町に、好きすつぽうに、されちやふんだよ。現に今だつてさうだ。いゝかげんにごま化されて、偏入させられちやつて、それでボロクソに云はれながら平氣な顔をしてるなんて第一この村の奴等が少しだらしなさすぎると思ふんだ。先程もおぢさんと話してゐたんだがHは商人の本場だ、東京なり、大阪なりで、金持になつてる奴等の多いところだ。それで至極不生産的な町だらう、それも好況時代はいゝさ。しかし近頃のやうな經濟界の不況に會つちやあ小商人はどしどしつぶれちまふ。そこへもつてきて、町は不生産的で、町その物を經濟的に維持して行けるだけの財源がない、そこでMの村はとにもかくにも、日本中で一番うまいつて云ふ近江肉の本場で、肉がどん〳〵他の地方へ出て行く。そこがHの町の奴等の目のつけ所なんだよ。おためごかせに村の奴等を手なづけて、この牛肉の生産をもつと大規模にやらせた上で利益をしこたま吸ひこんで、自分等の安定をつけやうと云ふのだ。それでだまつてるやうな村の人間だものいくら議員を出したつてだめだ。屠殺場もH町役場の保管になつてからは屠殺税が一頭五圓に下つたつて、よろこんでる村の、――奴等だもの――俺はもう少し目をひらいたつていゝと思ふんだ。おそらく

Hの町會では、近い中に又もう一つ屠殺場増築が計畫されるだらう。そして俺達にもつと牛を殺させて、彼奴等は遊んでくらす分別をするだらう。しかし何も、さう／＼彼奴等の横暴にたへる義務は俺達にはない筈だ。俺達は俺達の權利をあくまで主張するために一つの組織が必要だと思ふのだ。稅金を出して、牛を殺してそして、年中貧乏だなんて、――その不合理な事は、誰が考へたつてすぐわかる筈だが――」

精吉は闘志にみちた眼でギヨロリと皆をみ廻した。

「實は、俺が今度かへつて來た目的は、この組織の實現にあるんで――この縣にもかう云ふ村は十近くある、その中××社支部を持つてゐるのが一つ、それはO市の傍で、こゝとは汽車で二時間近くへだつてゐるだらう。それにこの近所には、KとSとNとまあ五つ六つの村がある、それで俺は是非一つこゝにも支部が必要だと思ふんだが」

話しつゞけて精吉は一寸言葉をきつた。

こはるは、彼の話しにしらず／＼引込まれて、云ひしれぬ力のあふれてくるのを感じながら彼の顔をあほいで云つた。

「でも村の人達がその必要を痛感してないから―」

「さあ、それをさせるのが、俺の義務であり、目的なのだ」

一寸前にのり出すやうにして、云ひきつた精吉の視線にこはるは、充血した目でうなづいた。

必死の力で荒れ狂ふ牛のすきをみて、鐵槌でその鼻先を撲りつけると、支へる力を失つた百貫の牛の體重がどたりと目の前に倒れる。

昏倒した牛の腹は土まんじゆうの形で波うつてゐる。

屠夫の源太は、鋭利な刄物で、倒れてゐる牛の頸動脈を、敏速に横に切斷すると、血が勢のいゝ噴水のやうに、いきなり彼の法被の胸をよごした。噴出した血は、みる／＼中に、コンクリートの床にザブ／＼たまつて、吐氣をもようさせるやうな臭氣を、その部屋の中に充滿させた。

血の噴出する速度がやゝおそくなつたのをみると、源太は牛の腹の上に立つた。

牛の腹は、ゴムのやうに、生暖い、無氣味な彈力があつた。

他の屠夫達は、矢繼早に流れて、床にあふれる血を、穴にシヤベルで流しこんだが、その速力の何倍かの速力で、血が流出するので、床の上には忽ちある深さをもつて、血がたまつた。

血が殆ど一滴も出なくなると、源太は再び床の上に下りて、皮をはぎにかゝつた。他の屠夫達も手傳つて皮をはいでしまうとすばやく腹部を眞二つに切斷して、内臟をとり出した。

そして最後に頭と足が切られて、遂に一つの商品となつた牛の死體は、その部屋の角につゝ立つてゐる、巡査の手で『H警察所檢疫濟』の紫色の印が押されてすぐ棟車につまれ、一先づこの村の牛肉商に運ばれる。そして、皮と骨は、又Hの町の仲買人の手を經て大阪方

面に賣捌かれる。

牛をなぐつてから、死體にして、車につんで、その牛の所有者で、つまり牛肉の所有者となるべき商店へもつて行く。それが屠夫である源太の職業である。

以前ある牧場の牧夫であつた源太が、惚れた今の女房と一緒になるとき、とても牧夫の收入では、彼の老父母をかゝへてゐる上に、一人の女を食はせて行く事はむづかしいと知つて、こはるの父にたのんで、屠夫になつた。

今までが牛をいつくしんで來た職業であつたゞけに、最初は場内にある小屋から、屠殺場へ引かれて來て、さてそこの門をまたぐ時必死の力で反對の方向に體重をかたむけて、名状しがたい悲痛な聲で鳴き叫ぶ牛の姿をみたとき彼はあやふく自失しさうになつた。

しかし職業意識が鮮明になるにしたがつていつか、彼は牛への憐憫の情を失つてしまつた。彼はいつか、牛肉を生産するために、一頭分一圓五十錢であがなはれる機械になつてゐた。

しかし、目に一文字ない彼にとつて、適當な職業は、他には餘りない。

馬車ひきになつて、Hの町へ出ても何かにつけてぶべつを浴びせかけられるのは、この職業に甘んじてゐるより他にみちはない。

一日平均夏は七八頭、冬は十頭程の牛がこの屠殺場で屠殺される。

屠夫達は、大抵平均一日一頭の割で屠殺する外に、場内の洗滌や運搬の雜用があつた、しかし、一頭一圓五十錢ならともかくいゝ收入だ、時によつては、二頭の場合もあつてこんなありがたい仕事は餘計はないと源太は信じてゐた。

底つめたいみぞれがジャブ／＼ふる中を、氣味惡くあたゝかい牛肉を他の男と二人で、屠殺場の前においてある荷車につむと、彼は合羽を着て、その荷車をこはるの家へ運ぶ用意をした。

父も母もない精吉は、たつた一人の姉が、他家に嫁入つてゐたので身をよせる所もなく、その後づつと、こはるの家にとゞまつて、こはるの店へ話しに來る村の人々に彼が計畫してゐる、××社支部の設立に關して、先づその必要をといてゐた。

如何に、多くの同じ屈辱の下にあつた人々がこの組織によつて、權利を主張し獲得して來たか？　と云ふ例が人々の心をとらへて、終には、

「さう云ふ物が出來たら結構だが……と希望をもらすいくらかの人もあつて、彼の計畫も順調に運んでゐる形だつた。

源太が、こはるの店に、荷車で牛肉を運んで行くと、精吉が店先で、二三人の若い男達と話しをしてゐた。

「ともかく、まあやつてみるにしやう。具體的な効果は、その中何らかの形で表はれるにきまつてゐるから：

精吉は、本部からもつて來た支部設立に關する記事をしたゝめた刷物を青年達の手から受けとつて、ポケットに、しまひこみながら

云つた。

「源太お前も精吉の話しをきいてみたらどうだ。」

角の方にかゞんでたばこをのんでゐた源太にこはるの父が云ふと、精吉はじめて源太に注意した。

「わしなんか何にもわからん人間だから」

「いや、わかるとかわからんとか、字がよめるとかよめんとか云つてる問題ぢやないんだ」

精吉は、のり出して云つた。

「俺達は他人から何ら蔑視される原因をもたない、りつぱな人間なんだ。その事を忘れないやうに、――卑屈になる必要は一寸もない、何事も正々堂々とやるのが一番いゝ」

中ば一人言のやうに、つぶやくと、精吉は便所へたつた。帳場で帳面をつけてゐたこはるの父は

「源太、Hの方からは、たくさんの店が屠夫をやとふてゐるかい」ときいた。

「いやまだ今は三人だが、だん〳〵多くなるらしいですな。何でも一頭二圓出すらしいさうな」

源太が聲を落した最後の言葉に父親は一寸頭をふるとしみ〴〵云つた。

「この分で行けば、今にMの村の牛肉屋は皆な潰れて失ふだらう」

MがHに編入されて以來今までMの村の牛肉屋を通して、牛肉の供給を受けてゐたHの町の牛肉商は、早くも自ら屠夫をやとつて、直接屠殺場からの肉を、販賣する事によつてより多くの利潤を得る事に着目した。

有利な條件によつて、Mの村の屠夫の内でもの商人にやとはれる者があらはれた。

かうしてHの商人の手に渡された肉は、Hの町民の食料となる外、東海道線によつて東京に運ばれ、或は××省御用の肉屋に或はデパートの食料品部に分られ、或階級の人々の身體に蛋白質を蓄積した。

しかし、それはMの村の人々が、牛肉をたらふく、食つて倘餘るからと云ふわけでは決してなかつた。しかもHの商人によつて、牛肉供給の販路さへ奪はれ、Mの牛肉屋も又、打撃を受けぬわけには行かなかつた。

帳面を、くつてゐた父親は、突然云つた。

「源太お前すまんが、これからHの大和屋さんまで、使に行つてくれ。小僧は一寸他所へ行つてるからな。明日あそこの娘さんの誕生日に使ふのださうだから、ロース一貫目持つてつてくれ。わざ〳〵前からのひいきだからと思つてわしの家へ注文して下さつたんだから、まちがひのないやうに、よくしらべて、よい所を持つて行つてくれ、おそくならんやうに」

源太は早速承知して棚の中の肉からすばやくヒレのあたりの肉を一貫目だけ庖丁できりとると竹の皮と、新聞紙で幾重にもつゝんで

自轉車にのつた。

しばらくすると息せききつて、源太はかへつて來た。自轉車をドシンと表へ下して彼は入つて來た。

「親方どうしても、一貫目五圓に負けろと云ふんです、しまひには主人まで出て來て、小賣りでは百匁七十錢だが、お宅だから六圓にしておくんだと何ぼ云つてもHの町では五圓でいくらもかへる。どうしても負けろと云ふんで、さうは出來ませんと、云ふとHの町ではいくらでも五圓でかへるんだが、可哀想だと思つて買つてやると增長する。それがきさまたちの根性だとか生意氣だとかあんまり惡口雜言するんで、むつとしたから品は、持て歸つて仕舞ひました。」

「えゝつ？」

父親が返事をする前に奥でこはると飯をくつてゐた精吉がのれんの間からおどりだした。片足を前に出して手を腰にあてがつた姿がひどく殺氣立つた感じだ。

「それは、誰が云つたんだ。主人か？」

「そうです」

「君それでだまつてゐるつもりか？」

「そんな事云つたつて仕樣がないし」

「仕樣がなくはないぞ、人種的差別の呼稱によつて侮辱された場合には、立派に謝罪させる事が出來ると云ふ法律さへあるんだ。そんな事をだまつてちやあいつまでたつても俺達はうかばれないぞ、さあボヤ／＼して居られない、早速その手段をとるんだ」

激して、早口で話しつゞける精吉の樣子に、源太も漠然とした勇氣を感じた。

「ぢやあお前どうするんだい」

「これから出かけて行つて謝罪狀でもかゝせるんです」

たづねる父親に荒々しく答へて精吉は源太に、彼の知つてゐる十人近くの靑年に、是非すぐ來てくれるやうに云つてくるやうにと、言傳けて、こはるをよんで云つた。

「はるちやん。いよ／＼俺の希望も實現しさうだ。俺は、きつと、この事件の上に俺の計畫を立派に建設してみせるよ」

日がとつぷりくれてから、一緒に行く事を承知した、八人の靑年と共に、自轉車の列をくんでHに出かけて行く、精吉の後姿に、こはるは、彼女が今まで氣づかなかつた新らしい勇氣が忽然として彼女自身の中に起るのをはつきり感じた。

精吉達が、大和屋の主人に、幾度か交渉してかなりの困難を經た後で、遂に新聞紙上に、名譽毀損に對する謝罪狀をのせさせたと云ふ事件が村中の注意をひいてゐる中に、その年もあと五日でくれやうとする朝、こはるは幡からの手紙を受けとつた。

　クリスマスにも姿を見せてくれなかつたあなたの爲に僕は、

こゝ三日三晩いのりつゞけました。

そして、今信仰を失はうとしてゐるあなたを救ふためには、僕をあなたの僕にしてしまふ方が最上の方法であると云ふ啓示を受けました。

勿論これは僕が前々からあなたを愛して居つた事に原因するのかも知れませんが、ともかく僕はこれから、神の使用をおびて、あなたを愛しあなたを救つてみせます。

あなたが今心を奪ばれやうとして居られる問題は、僕にも殆どわかります、しかし僕はあくまでクリスチヤンとしての立場から、あなたの信仰をとりもどさねばなりません。

「人もし、全世界を得る共その命を失はゞ何の益あらんや、」

私達の求めねばならぬ物は、目の前の現實ではなくして、永遠につきざる命であるはずです。

僕は、僕の力で、もう一度あなたを、再び神の國の世繼たるべき子としてみせる事を誓います、一度御面談したいですから、御都合をつけておいで下さい。

白い大きな便箋にかいた幡の手紙をよみ終えると、こはるは封筒と一緒にくしや／＼にねじつて、火鉢に入れて燃え出すのを見ると湧いて來た幡への愛着をはらひのけるやうに叫んだ。

「與へられた生が屈辱と、侮蔑に、原因なく甘えなければ、ならない物であつたら、永遠の命が死んでからの安息が何にならう。その屈辱と侮蔑に甘んじる女を愛する事によつて、神における彼自身の位置をたかめやうとする男の殉情なんか、抹殺して進まなければならない問題が今私の面前にある！」

大和屋の事件以來、今までねむつてゐた、權利への主張をよび起された村の人々は、こと〲く精吉を信頼して、一つの組織を持つ事を自らのぞむやうにさへなつて、精吉の計畫は着々實現されて行つた。

「本部からも支部が設立したら應援に來てくれるさうだ。この調子で、どん／＼すゝんで來年の選擧には、一つ、すぐれた我々の代表を出してHの奴等の目に物見せてくれるぞ、」

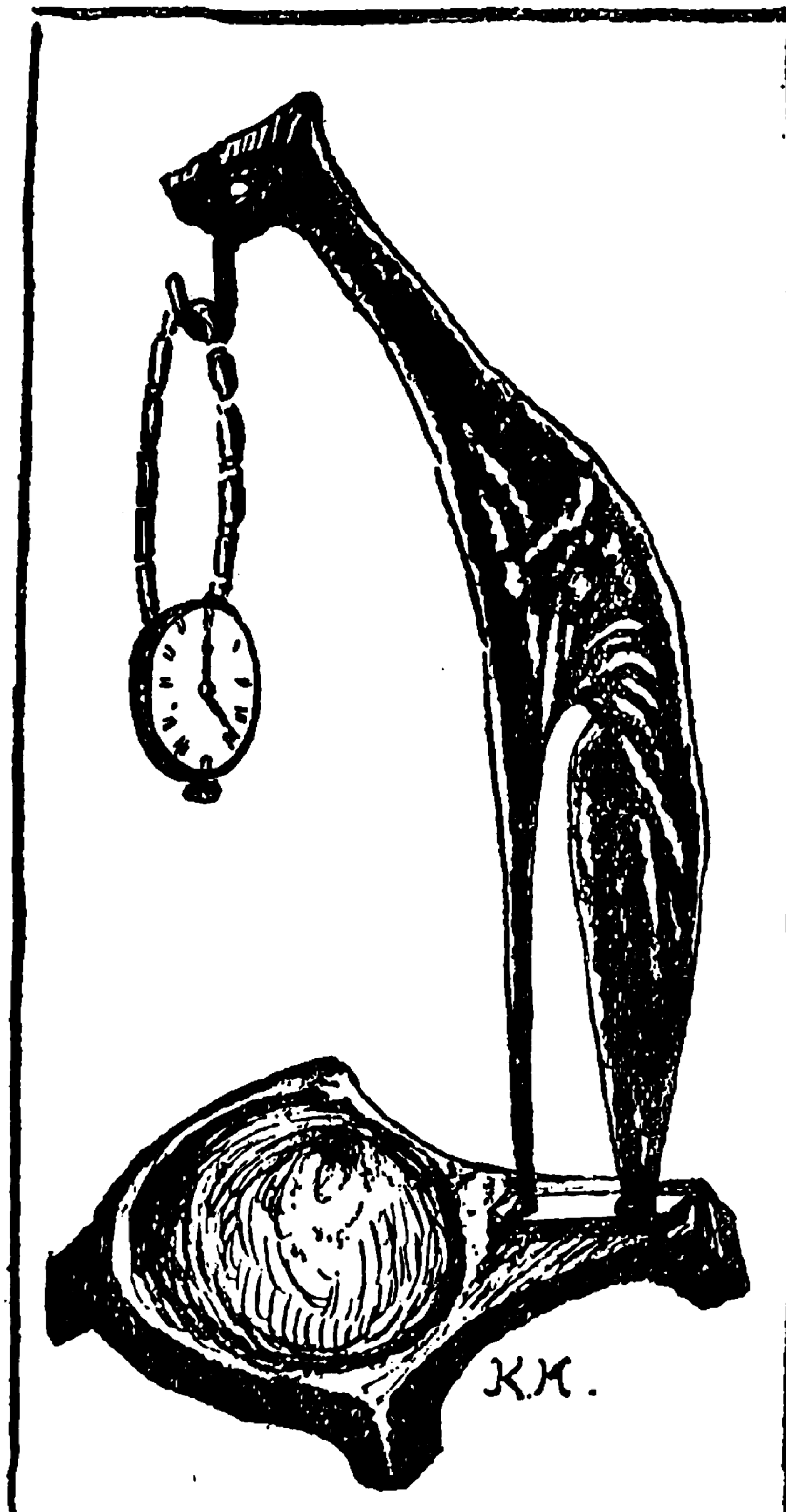
大きな火鉢をかこんで、眞赤に上氣した多くの村の青年達、いよ／＼來る新年からMに××社支部を設立すると云ふ決議をした後で精吉は昂然して云ひ放つた。

M村××社支部事務所

こはるの家の店先へ牛肉商の看板と一緒にけやきの一枚板へ精吉持有の右肩のとび上つた字のならんだ看板を物めづらしさうに、よみながら新年をむかへた。村の子供達は、青い日本晴の空へと、たこをあげて嬉々として遊んだ。

一九三〇・一・九〇

二人の女友達



園田時子譯

グレブ・アレクセイエフ作

十五分前に、ナターリヤの生活から、彼女の夫であつた一人の男が出て行つてしまつた。部屋は、侮辱された空虚なものとなり、不必要なものとなつた。そして、彼女が孤弱になると共に、はつきりと判つて來た事は、自分は、幸福に生きて行くためには創られてゐない不便な風に出來てゐる女であると云ふ事であつた。

茶器が、机の上を驚いてころがつていつたのだつた。そして、彼が出て行きがけに突きやつていつた、飲み殘したお茶のコップの中には、棄てられた女が、兇惡な激情から彼の顏に叩きつけた言葉が今も尙たぎつてゐた。

窓から、秋のポプラ樹がさし覗いてゐた。その樹から、不幸の優

しい焦燥をもつて葉が舞ひ落ちてゐた。

彼女は、狼のやうに吠えたてないためには、又、その吠えたてることに自分の心迄も引づり込まれないためには、この部屋から、一時の猶豫もなく出て行く事が必要であつた。

夜に、倶樂部で裁縫女工たちに講義をしなければならないのを憶ひ出して、ナターリヤは、机にぶつつかり乍ら、直ぐ眼の前にある襟卷や、折鞄や、外套を探して、まるで火事場のやうに馳けづり廻つてゐた。

机は、まるで生物になつたもの丶やうに、厚かましくも彼女の行く手をさへぎつた――しかし、彼女の兩手はふるへてゐた。何もきゝとれなかつた、ふるへる兩手が、何よりもよく今さつき、起つた事件が、取返しのつかないものであると云ふ事を悟つてゐたであらう。

恰度この瞬間に、夜汽車でくしやくしやになつた外套を着た女が、十字に縛られた纖維布地のトランクを――そのトランクには、歩く毎に蓋が鳴るブリキ製の軍用茶器がくゝりつけてあつた――さげて部屋の中に入つて來た。そして、戸口のところにトランクを置いて、永い間逢はないし、以前のやうな交際も杜絶えてゐた女友達同志がお互に出會つた時にするやうな、よろめく、うれしさうな足取りで、ナターリヤの方へ近づいて來た。

――ナターリヤ！　――入つて來た女は救はれたやうに呼びかけた。

ナターリヤは一目見て、入つて來た彼女が判つた。年老ひてひからびた、田舎で日に焦けた、かつては親密な友達であつたこの顔、滑稽な茶器、また火事場で鍵をなくしたために、手早くくゝられたやうなトランク、それらのものを見ると――彼女はワツト泣き出した。そして、十五分前に起つた無意味な事件から、彼女に自分を救つてもらひたいもの丶やうに、また、青春時代の日を彼女の中に探し求めるもの丶やうに兩手をさしのばした。そこで、入つて來た女は泣き出した。彼女は、女の邂逅の涙の中に、彼女がもつてきた自分の悲しみをとけ込ませて泣いた。

二人は手を組み合せて一緒に泣いた。言葉もなく、生活が彼女らにとつて、どんなに慘酷であつたかを互に理解し合ひ乍ら泣いた

――なんて、あなたはまあ年を取りなすつたのね、アーシヤ！――ナターリヤは、友達の顔の皺や、歯のない口の内側へ落ち込んだ唇を見乍ら考へた、自分も同じやうに年をとつたのだ、しかし自分が只その事に氣が付かないのだ。

――あなたと同じやうにね――アンナは、今度は彼女が友達の顔を見乍ら答へた。その顔には、絶えることのない煩勞が、ぼんやりした注意力と服從さを示す、爆された滑稽な黄色な斑點となつて現はれてゐた。

――そして今、とナターリヤは遂に、邂逅の涙の中に二人を沈めやうと努めてゐる事を云はうとして話し出した。

――二人は、始めつから生き直すのが必要なんだわ、あの時の――十年前のやうにね――憶ひ出して？――私はピョートルとモスクワにたつたでせう、そして、あなたはボリスと停車場迄送りに來てくれたでせう？……

けれども、全く夜になつて、窓が夜嵐しの前の靜けさで物悲しくはためいてゐた時には、二人の女は闇と孤獨を怖れて、長椅子の上にお互に寄り添ひ乍ら坐つてゐた――彼女らは身の上話を始めてゐたのだ。

♠

わたし、停車場からまつすぐにあなたのところへ來たのよ――アンナが涙と言葉を呑み込み乍ら云つた――わたしは何處へ行けばいゝの？　誰のところに行けばいゝの？　この世界には人間がたくさん生きてますわ、だけど、人間と云ふものは本當に、はづかしい程に知り合ひが少ないものね！　十年たつたのね、憶ひ出して？――あの、私たちの頭にリボンがひらひらしてゐた時分から、あのリボンは私たちにとつては、まるで旗印のやうなものですわ、靑春の、幸福の、歡喜の旗印なのね…　ね、憶ひ出して？――あなたはお發ちになつたのね、あの滿員の列車が發車してしまつたあとで――私たちは、汚らしい街の中を通つて腕を組んで家にかへりましたわ。ボリスがその時こう云つたのよ、『あの人たちは、我々より幸福だ、きつと二人は人生の支配者になるだらうよ、それに我々と云へば――まるで奴隷のやうだ。ごらん、革命はまだわきたつてゐる、鵞鳥の仔供らが街に這ひ出してゐるよ、鵞鳥の仔供らは、みんな大きくなつて、また我々の道を通つて行くだらう！』

――あゝ、ナターシエンカ！　だけどその頃……結婚當時によ――私たちは他人の幸福なんか考へたでせうか？　私たちの持物は、みんな太陽のやうに輝いてゐたわ、あなたは、かうした感情――それは歡喜だとも云へませう、溫かい、――善い人に逢つた時に、思はず心が溫くなるやうな――、そんな氣持はお判りですわね、こんな感情を、つひ、わたしは最近迄ボリスに對して持つてゐたわ。

人間と云ふものは、悪い事よりも、善い事の方を恥かしがるものだわね。だけど、私たちは、自分たちの戀を恥づかしいとは思はなかつたわ。私たちはあらゆるものに驚いたんですの、わたしたちのあひびきや、自分自身たちや、森や、雲や、凡そ愛と名づけられるものに、また昨日迄は眞暗らだつたのに、突然に底の底迄も照らし出されて來た生活、にふりかゝつて來るものに驚いたんですわ、私たちはもう、モスクワでのやうな飢じい思ひもしなかつたのよ、モスクワの人たちは、私たちのところにやつて來て、いろんなものをもつて來たわ、ある日のこと、私は、一片の麵麭と蓄音機とを取換へてやつた事があつたの、その、窓の下へ蓄音機を持つて來た女は、よろよろした足を曳きづつて來たわ。私が丸麵麭をそのまゝやつたらね、

私を氣狂ひだと思つたらしいのよ、まるで赤ン坊でも抱くやうにその麵麭を胸に抱きしめて街路(みち)を馳け出して行きましたわ。

ある晩、ボリスがやつて來ましたの――あの人は、その時はもう中央執行委員會の會計部に入つてゐたんですの――私たちは蓄音機を持ち込んで、あの人は夜中迄でもソビノフやシヤリヤピンのやうな聲で、私たちの幸福に就いて歌ひましたの、たゞその言葉は、多少異つた、一層朗らかなものでしたけどね。

そして、こんなにして長い年月がたつてしまつたわ、そしてその年月の間に、私たちは、さゝやかな住居はまるで城塞のやうに變へてしまつたんですの、でその城塞に私たちは、私たちの生活を打ちこわす危險のないものだけを入れてゐたんですの。

だけど、ナターシエンカ！　あなたは、私たちを反革命家だなんて思やしないでせうね、反對に――革命は、別居による私たちの生活そのものを、旅行券(パスポルト)によらないもののやうに、一層はつきりした、一層堅實なものにしてくれましたの、いや、實際私たちはその生れ故鄕で生きて行く權利はもつてゐたんですがね。

しかし、理性でゝなく、本能で、全身の血で結合された私たちは恐れてゐたんです、革命が、その道で、別居してゐる私たちの各自に屬してゐるものを破壞するのみでなく、私たち二人に、一緒に屬してゐるものを破壞してゆくのではないかしら、このわれ〳〵に幸福が輝いてゐるのは、それがわれ〳〵二人一緒に屬してゐるものである、われ〳〵だけに屬してゐるものであると思つてゐたんですからね。

毎晩ボリスは長椅子に横になつて、私はプウシユキンや、トルストイをよんできかせたんですの、そして私たちに、この偉大な作家たちの本の中に、われ〳〵が、二人きりではなれてなすことに對する辯解を見出したわ、――そして私は、昨日の日迄ボリスを、このやうな私の夢想してゐる通りの人として信じてゐたんですの、

こんなにして月日がたつて行つてしまひました……やがてもう私たちのところへは、着物も、金指輪も、蓄音機も運ばれなくなつたんです、そして、ぴつたりと閉められた私たちの小さな家の窓が春の鳩のやうに――平和と陽氣に迎へられてパツト開かれたんですの。

私はあなたに云ひますけどね、ナターシエンカ！　――この戰時共產主義時代には、私たちは苗字ばかりで呼ばれてゐたものなんですが、人には、その苗字のほかにまだ名前もあるし、父稱もあるんだつてことをこの陶醉時代に憶ひ出したのね。それから麵麭や薪のほかに感情と云ふものがあるんだつてことを憶ひ出したんです、そこで、この全く置き去りにされてゐた感情によつて、新らしく生きてゆく時代がやつて來たんです――それなのに私は、この社會的な歡喜の代りに、はじめて、わけの解らないやうな苦い恐怖を感じたではありませんか――この朝のことは今だつて憶ひ出されてよ。

ボリスは中央執行委員會に出かけました、私は窓のそばで、あの

人の靴下をつくろつてたんですの、春でしたわ、空氣は遠くの鈴のやうにやさしく鳴りひゞいてゐたわ——こんなに空氣が鳴り響くのは春だけの事ですわね——春になると甲蟲がとびますわね、さうでせう？

私は靴下を取りおとしてしまつて、氣狂ひのやうにぢつと草の上を見てゐました、そして、人間が人生から得るところのすべての事を感じました——それは私にあるものでした、そしてわたしはそれ以上何も欲しくはなかつたんでした——この日から、私は、招かれもしない客人のやうに、わたしの生活の中へ這入りこんで來たところのものを頭の中でつかまへやうとしたのよ、そして汚れたシャツの入つた籠の中をひつくり返すやうにかき廻したのよ。

私は、これ迄、自分のために造られた或る表によつて生きてきたやうに思はれました。私以前にだつて人間と云ふものは皆、こんなおきまり通りの生活をして來たんですわ、そしてその生活は、恰度コップを一ッ一ッと重ねたやうに、私の中に重ねて置かれてあつたんです、そして若し、ソットでも上の方から掌でおさへやうものなら——それは一時にみんな壞れてしまうやうなものでしに。

あゝ、ナターシエンカ！ 人間は誰でもきつと、自分の中にでなく、この世界に生れて來る時があるんですね、そして地上での自分の場所を探し出さなければならなくなる時が來るんですわね。

そこで私は、赤ン坊のことを夢想し始めたのよ。あゝ、私はどんなに赤ン坊を持ちたかつたでせう！ 私は毎晩毎晩もがきましたわ、そのことばつかり考へつゞけたわ、そして私は、自分の何もかもをそれに捧げやうと思つたのよ、そして私はとう〳〵姙娠してしまつたんですの——

——まあ、あなたは姙娠したんですつて？

ナターシャが注意深く友達の方へこゞみかゝる作りたづねた。

——えゝ、そうなんですよ——これはほんとうに崇嚴な一日でしたわ、二度と來やしませんわ。私は、今はもうまるでボタンのやうに地上に縫ひつけられて、永久に引きはなす事は出來ないやうな感じがするんです。

ボリスは、この報告を、ほんとうに偉大な自分の本分を成し遂げた人間のやうな平靜さをもつてきゝ取りました。そして、暗くなりかけてゐた私たちの部屋の中には、また始めの頃の幸福が覗き込んで來たんですの。

それだのに、その時私は、ボリスに對する自分の感情が割られたやうに二重になりかけてゐることに氣がつき出したのよ。二つにされた感情は、半分づゝにして、あの人と自分に與へたんです、その一ッはあの人の仕事のためだし、もう一ッのは自分の生活のためなんですの。そして、その私のために二番目の半分と云ふものは、お腹にゐるこれから生れて來やうとする人間に屬してゐるばかりでなく、ボリスのものとなつてゐる最初の半分に敵對さへしてゐるんで

す。この二重性が、自分にもつと近く、眞の自分と云ふものを見究めるやうにさせました。結局、私は何んな女なんでせう？　私たちは自分の顔も見なければ、その行動も判らないぢやないの、人間は自分の性格さへ知りはしないわ――私たちは人の振りを見て自分を敎育してゆくんですわね、私は鏡の中を覗くやうに、その半分を覗いて見たんです、そしてその半分を、他の人間のために土壌として準備したんです。

おゝ、ナターシエンカ…この傷ましい、自分を掘り下げてゆく事の中に、何と名づけていゝか、私にも判らない喜こびがあつたんです。

あの人は私のために働いてゐてくれます、そして、私は自分が、胡瓜を鹽づけにしたり、食事の用意をしたり、毛の上の斑點（しみ）をぬいたり、色變りのした着物を染めたりすることが出來ると云ふ事を見ました、だけど、私が今その生命をはらんでゐる、この未來の人間に譲り渡す事が出來るものと云へば――自分自身を正當づけるものとしては――たゞこの眞相以外には何も出來ないんです。私の生活は、私たちの長椅子のやうに具合がよくて柔らかでした。だけど私が、未來の新らしい人間にしてやることが出來る只一つの事は――起き上る事も難かしい程に具合のいゝ――自分の坐りつけてゐる場席を彼に譲つてやることなんです――たゞ、それ迄だけこの場席は具合がいゝんです。

これは、全生活を轉覆させてしまつた發見だつたんです。わたしにとつては、何もかもが苦痛になつてしまつたの、以前は一日を大部分費してやつてゐたお料理をする時も、わたしはそれを涙で鹽辛くしてしまひました、殊にその涙が、どこから來るものか判らないので尚更の事氣にかゝつたんです。

私は部屋をお掃除しますの、掃除は好きでしたからね――それで、私たちの部屋は清潔でかゞやいてゐました。ところが、時々私は突然、自分のしてゐる仕事が、我慢のならない程無意味なものであると云ふ感じから、刷子を落してしまうんです、この無意味なと云ふ感じは、しつきりなしにわたしの中で大きくなつて行つて、日常の煩勞が、捕へる事の出來ない蜜蜂のやうに、私を刺し始めて家の中からわたしを逐ひ出してしまひ、その中で平和に生きてゐた、わたしの中のものが何だか緣のないものゝやうに思はれて來たんです。――そして、ポリスが出かけると直きに私は、家からとび出してしまつたんですの、それで家の中には、わたしたちの煩勞のあとを明らかに消してしまつて、机の上や、寢臺や、戸棚の上に、まるで覆ひのやうに埃がたまつてゐましたわ。

かうして家をとび出して、ブラ〳〵歩き廻つてゐる中に、私はどうやら、生活と云ふものを發見したやうでした。私は今迄自分がたゞ生活から自分を防衛して生きてきたのであると云ふ事を理解しました、たゞその生活から、自分の幸福のために必要なものだけをま

るで買物をする女のやうに拾ひ上げて生活を通つて來たと云ふことを理解したんです。ところで、今度は私には、何でもが次から次へと興味深いものに思はれて來たんですね、河の上も汽船も、野良仕事も、市場も、舗道の修繕も――次から次と何もかもがね。

わたしたちの街では電氣事業が興されてゐました。――私は何時間も、その敷設工事を見てゐましたわ、すると、何だか自分の部屋が街頭迄も押しひろげられたやうな氣がしましたの。

ある日、土堀人足たちが、私に口汚ない罵言をあびせかけたんですの、そして、私が皆の仕事の邪魔をしたと云つて、それはあつかましい様子で、私を面と向つてがみ〳〵怒鳴りつけたんですね、以前なら、こんな罵言を受けたら、頰打ちを食はされたやうに、打ちのめされたでせう、そして家へ逃げ歸つて、枕の中に埋れて一週間も自分の城塞から出なかつたでせうよ。だのに今では、私は自分が女であることも忘れてしまつて、それと同じ辛辣に罵言を云ひかへす事をするやうに、自分を抑制出來るやうになつたんです。

私は中央執行委員會（イスポルコム）に出かけて行つて、そして技術部の管理人を呼んでもらつて、工夫たちは電信柱を建てさへずればいゝのだ、この連中は、全く何の役にもたゝないと云ふことを、その人に云つてやつたのです、すると、その人はひどく感激して、私を同僚（タワーリシチ）と呼んでくれたのよ。(今迄の生活で、私を同僚（タワーリシチ）なんて呼んでくれたのは、この人が始めてゞしたわ。(そして、その人は直ぐにその工夫たちのところへ出かけて行きました。

次の日に、私はまた仕事場に行つて見たんですけど、するとねえナターシェンカ！　工夫たちは私に挨拶をしてくれるのよ。みんなの人に挨拶されると、私は小娘のやうに眞赤になつて、家に馳け込んだのよ。そして、辛辣な彼らの罵言で泣いたのとは異つた風で泣きましたのよ。私は理解したんですよ、つまり、ねえ、私はこれ迄生活して來たんぢやない、只生活する支度だけをしてゐたので、生活と云ふものを耳を傾けてきいてゐたんですね、自分の貝殼の中から生活を覗いて見てゐたので、しかもそれは、眞正面から見てゐたんではないと云ふ事を理解したんです、そこで私は墮胎をして、自分の殼からぬけ出さうと決心したんです。

しかし、この人生で、どこへ向つてゆけばいゝのか？　――それは判りませんわ、だけど私は、生活がめい〳〵の人に勞働を與へてゐるのは、胃袋を充たすためばかりではないと云ふ事を信じたんですの。革命は、私たちに生活の意義を與へ、そしてそれを實踐によつて有意義化することを、私たちに要求してゐるんです。ねえ、ごらんなさいよ。私がこの生活の根底にたどりつくには、どれだけの苦勞をした事でせう、だけど、この根底から生活を始めたあなたは、ほんとうに幸福だつたわね？

だけど私にはボリがスあつたわ、

一つ部屋の中の十年間の生活の間に、私の感情は、私の中で生長

したわ。私はすつかりあの人に對しては自分に對するやうに慣れてしまつたんですの、だけど、今になつてさへあの人がどんな人間なのかは一向判らないのよ、この町の多くの人々と同じやうに、あの人は表裏のある方で、むつつり屋ですわ、この表裏は自分のためだし、むつつり屋は他の人々のためなのよ。革命からこちら、あの人は邊りをきよろ／＼見廻すやうな習慣がついてしまつたんですの『誰か尾行してやしないか？』つて云ふわけなのね、又革命が後戻りしてくるんぢやないかと云つたやうな、ひそやかな恐怖心が殊にあの人を捕へるんですわ。

あの人の笑つたのは、わたしは家でだけしか見た事がないのよ。――もつとも、私たちの町では一般にみんな笑はないやうだけれどね――映畫を見たつて、ほんとうに面白い芝居を見たつて、遊びに行つたつて笑やしないわ、――まるで革命が、笑ひ禁止の布令を出したかのやうにね。

私たちの町を支配してゐるのは小供たちで、それは目にはつかないけど、それだからこそ征服されないのよ。さうなのよ。ナターシエンカ！　ほんとうにさうよ！…

自分の失敗に終つた生活で――と云つたつて、人間は、百の生活の中でたまに一ッだつてまともにゆきはしないものだけど――人々は小供たちに道をひろげてやるのよ。で小供たちは、それに對して、自身が完成出來なかつた仕事を、完成すべき義務があるわけなのよ。彼らが考へ盡さなかつた思想も考へ盡さなければならないわけなのよ。

だけど、何だつて貧困があり、何だつて小供たちはやつぱり私たちと同じやうな生活の道程をたどらなければならないのでせうね！

私たちは、小供が私たちよりも、もつといゝ生活をするやうにしたいわ、多分さうならなきやならないでせうよ…

だけど、かうした犠牲をして、人々は又、周圍の者から、それと同じやうな犠牲を要求するんですわ。神聖な贈物の盃のやうに、小供の壺を、自分の頭より高く持ち上げて、人々は、自分たちのさうした行爲が賞められるのを要求してるんですわ、そして、周圍の人々の、賞讃の程度によつて、人間としての評價をするのね、そしてそれらの人々を「勞働者としての彼」「コンムニストとしての彼」、「人間としての彼」とに區別をするのですわ。そして最後のものこそ――一番大切なことなんですね…だけど、私たちの時代では、親の羨望より惡いものや、親の自慢より滑稽なものは、あり得るでせうか？　そこで昨日のこと、私は自分に一番親しいあの人に、何もかもとう／＼打ち開けてしまつたわけなのよ。あの人は五時頃に歸つて來たわ、私は、その日はわざと、あの人の大好物の野菜シチューをこしらへて待つてゐたの、あの人は食卓について、喜こんで食べたわ。だけど、その時私は、煮立つてゐるシチューのやうに燃えさかる自分の激情を、ぢつと抑へてゐたんです。私は、愛しい親

しいあの人の顔や、その爪が喰ひ込んでゐる短かい手や、もう既に、あの人の頭に見え出した溫柔な禿を見つめてゐたの、そして私はこの漠然とした、だが今となつては、わたしにとつては一番貴い事を、どんな風にして云ひ出したものかと考へてゐたんですの――わたしには、私たちの城塞の中に仕組まれた習慣のために、どうしてもその決心がつかなかつたんです。

――ボリス――と私が呼びかけたのよ。――あなたは私の小さいお願ひをきいて下さるわね――

――勿論だよ――だがそのお願ひつてどんなことかい？

あの人の聲の中には不安がこもつてゐたわ、それは、いつでも私が靴下や、長靴や、新らしい下着が欲しいと、いつもこんな風に云ひかけたからなのね。そしてその時、若しあの人が、餘分のお金を持つてゐなかつた時には――私は、あの人のかうした問ひ言葉の調子で直ぐにそれと察してしまうのよ。

――あの人は善良なひとなの――それで私に拒絶するのがほんとうに苦しかつたらしいのね。

――いゝえ、違ふわ――私は笑ひ出したのよ――私はね、トウルベイジに行く事をお願ひしたかつたのですの――革命前には、私たちはいつもあそこに散歩に行つたものでしたわね――つて云つたの、するとあの人は笑つてゐたわ――人間はみんな疑ひ深いものなんだけど――あの人は信じ易い人でしたわ。そして、このわたしの願ひをきつと、姙娠のためのむら氣ととつたんでせう。だけどあの人は私と出かけてくれました。そして私は河の邊りに來た時に、たうとう、私が墮胎をしたいと思つてゐると云ふ事を云つてしまつたんですの、と云ふのは、産むためにのみ産むと云ふ事は無意味な事であるし、それに自分と同じ者をくり返して産むと云ふ事は罪悪でさへあると云ふ事を云つたんです。

あの人の眼は、驚きで暗くなつたわ。すつかり茫然としてしまつたわ、革命の一番苦しい時代にさへ、見たこともないやうな、そんなしよぼ〳〵した、ぼんやりした様子になつたわ。

――我々の小供をかい？　氣がぬけたやうに、あの人は繰り返したわ。――我々の小供をかい　え？　アーシャ！　それぢや我々は、今迄何のために生きて來たんだらう？　それぢやあらゆる人間の生活は、何のためにして來たんだらう？　小供一人のためばかりぢやないか、ねえ、さうだらう。この小供が、われ〳〵の二人から産された、たつた一つの一番よいものぢやないか……

私は泣き出しましたわ。あの人は私の手を執つたんです。

――ごらん、ねえ、此處にはこんなに草叢が繁つてるね――つて病人にするやうに物柔しくあの人は云ひ出したわ。――今ではもうベンチさへなくなつてるね、きつと腐つてしまつたんだよ――十年前、此處で我々は、われ〳〵の戀を見つけ出したんだつたね……

私は邊りを見廻したの――全く、此處はわたしたちが戀を打開け

合つた所だつたんです、その時のひとが、この人ぢやありませんか。十年前には、私は、この愛しいボリスに自分の生活をまかせてしまつたのね、そして十年たつて今、その人は私に、自分の戀よりも、もつと大きなものをくれたんですわ――自分の小供をね――

――お前、寒いだらう？　――あの人は私の起き上るのに手をかしながら云つたわ――

秋だからね……お前は、われ〱お互のためばかりでなく、小供のためにも體に氣をつけなきやいけないよ――

あの人は不細工な格好で、長靴で秋の埃を蹴散らし乍ら、私の前を歩いて行つたわ、そして私は、まるで綱の上でも渡つてゆくやうに――あの人の後からついてゆき乍ら、苦しい心でかう云ふ事を考へてゐたんですの、それはね、私にとつては一番親しいボリスが、今ではどんなに遠い人間となつたか、この町の中で、もう彼以上に緣遠い人はない、あの私を罵つた勞働者でさへ彼ほどではないと云ふやうな事をね。

空にはもう星が輝いてゐたわ、そして、夜になつたの――私たちの最後の怖ろしい夜だつたわ。――おゝ、ナターシエンカ！　家に歸つて、あの人はお茶を飲んで、默つて着物をぬいだわ。私は、あの人は夜になつて何か私に云ひ出すだらうし、寢臺に入つてから、晝間に云へなかつた事を話してくれるだらうと考へてゐたんですのよ。それで私たちは横になつて、私は毛布を頭からすつぽり被つて、眼を塞いで神様にお祈をしたの、全世界に、ボリスに、この夜を安らかに過しますやうにつてね。

すると、あの人は私の方へ手をさしのばしたんです。私は、さわつてはいけないつて、あの人にたのんだんです、あの人の手に接吻をして上げたわ、だけどとう〱腹をたてゝ、あの人の顏を引搔いてやつたわ、だのにやつぱりあの人は、無理强ひに私の兩手を後にねぢ曲げて、慘酷に、しかも貪慾に、勝手にしてしまつたのよ。私が、あの人にとつてまるで妻でも何でもないかのやうにね、そして、勝手にしてから、品物のやうに投げ出してしまつたんです……あの人はまもなく寢入つたわ、枕の上にのつかつてゐたあの人の顏は、月の光で判然と見えてゐたわ、私はナイフを手にとつて、そのナイフを握つて、あの人の枕元に一晩中坐り通してゐたんです、――私の、あの人に對する憎悪は、若しあの人が一寸でも動かうものなら、あの人の心臓にナイフを突き立てやうとしてゐたほどに激しかつたの。

朝になると、あの人は、消防夫のやうな長靴をがちや〱鳴らし乍ら、無關心に口笛を吹いてゐましたわ、そして圖々しく、私に笑ひかけるんですの、だけどあの人の眼は、まるで自分から、生活が流れ出してしまつたもののやうに、悲しさうに茫然としてゐたわ、そこでわたしは解つたんです、あの人が男性としての暴力でもつて、私を又自分の方に引き戻さうとしてゐたのだつたんですね。

私は、頸のところ迄毛布をひつぱつたのよ――私はあの人が――半裸體でゐると云ふこと、そしてその人と一緒にわたしが寢てゐたと云ふことが、ほんとに恥かしくなつて來たんですわ、――

あの人は出て行き乍ら、ふざけたやうに云ひました。

――大方、今日もトルウベイジに行くんだらうね？……

そしてあの人は出て行つてしまひました。私は寢臺から躍び起きて、直ぐにトランクとこの茶器を始末して、そして一番汽車でモスクワへたつて來たんですの――私、列車の中では、ずつと昇降口のところに坐り通して歌をうたつてゐたわ……

明日私は墮胎するわ、そして何處へなりと自分の行きたいところへ――床拭きなりと、使ひ走りなりと、又市場で鹽を秤るなりと何でもしない事をするわ――

私に力をかして頂戴ね、ナターシエンカ！

今日、わたしはまた十八娘にかへつたんだわ、そして、もしこれ迄の私が、生活自身を防いでゐたんだつたとしたら、今こそ、ほんとうに今こそ、その生活を兩手に掴んだんだわ、おゝ、生活よ、今度はお前が私から身を防いで見るがいゝ！

――この飲みさしのまゝのコップは――とナターリヤが話し出した。――最後のものなんですの、あの人は腹立たしくそれを突きやつて、二度と歸つて來ないように、この家から出て行つてしまつたの、そこで私は、ねえ、ごらんなさい、――この事を喜こぶことはしないで、又この十年間のわたしたちの同棲生活の間、輕蔑し通して來たやうに輕蔑する事はしないで、たゞ泣いてゐるんです。この私にとつて心にもない憐憫的な輕蔑は、多分さつきあなたがおつしやつたやうに、革命の時分、私どもが出發の時に汽車に乘り込んだあの日から、既に初めてゐたんだわね。

私どもは、モスクワの「勞働宮（ヴヲオレツトルウダ）」についたわ、あの人は、そこで裁縫職工達の職業的な新聞の廣告取りになつたんですの、そして私はさしづめあの人の助手でしたわ。それからあの人は、もう十年間もその廣告を取りつゞけてゐるわ、多分、これから先だつて仲々十年位は止めはしないでせうよ。一方、私は、――縣の專屬測量技師になつたんですの。

私は、現在の地位を得るためには、一通りや二通りでない困難と、ながい〳〵年月とがかゝつてゐるんですわ。それは、私が女であつたと云ふ事に原因してゐる事ですわ。

ロシア人のいつもの癖なんだけど、徹頭徹尾の共産黨員であるとしても、あり來りの言葉を持ち合せてゐないために、いつも口汚く罵るのです、ところが私が、悲しい時や、うれしい時や、驚いた時など、あらゆる人生の瞬間にも、そんな風に罵ることが出來ないと云ふ――この事のために、わたしは完全な意味での彼の同志となることが出來なかつたんですね。

とは云へ、私は、自分にさへ氣づかないで、日に日にと女らしさのすべてのものを失くしてゐたんですの。煙草は飲み出す、髪は短かくかり込む、身裝(みなり)と云へば女の衣服は、只一枚のスカートとトルストーフカ（註、上着の一種）だけになつてしまつたの、そのトルストーフカだつて、ピョートルが自分のに買つて來てゐたんですもの、それを私たちは代りつこに着たわけね。

そして、私は頑强に、私にとつての新らしいこの世界に這ひ込んで行つたんですの、なぜつて云へば、新らしい關係と云ふものは、當然、私たち女性の參與によつて建設されなければならないと云ふ事を知つてゐたからです。さうでないと、男性は私たちを、第二段の位置の時も退ぞける可能性を見出すでせう。

だけどね、アーシエンカ、私は今日になつて、やつと解つたわ、自分の性と云ふものを拒絶したところで女と云ふものは——ねえ、さうぢやありませんか！ 女性の不自由さと云ふものはなくなるけれど、男性が持つてゐるやうなものは何一つとして勝ち得ることは出來ないんですわ。

ピョートルとの私的生活では、私どもは妥協し合つてゐたんですの、この妥協は二人をすつかり滿足させてゐたんですのよ。

結婚をすれば、きまつてそのどちらか一方が權力を持つ——その意味で、私も「やり手の女」だつたんですね。すると、それによつてひどく困らされてゐたピョートルの男性も、間もなく私の優越があたへるところの便利さと、習慣性に從ふやうになつてしまつたの。

私は憶えてゐるわ。一番最初にサモワールを立てたのはあの人で、私ではなかつたわ。私は夜おそく會議から歸つて來たの、すると、何と云ふあはれな得意さで、あの人がサモワールを臺所から運んで來た事でせう！ そして、自分でお茶を入れて、十杯から飲んだわ。けれどもその時から、サモワールを立てるのはあの人の受持になつてしまつたの、たゞそれには、得意さをもつて、そのサモワールを持つて來ないやうになつただけの相違(ちがひ)はあつたけど！

私どもは『勞働宮(ドゥレツ・トルーダ)』で食事をしたんです——その方が安上りだつたし、二人にとつても都合がよかつたものですからね。

この事は、私は特別な意味であなたにお話しなければなりませんわ……實際私には何もいらなかつたんですの、しかし時々、頭が痛んで來て脊條に寒氣が走る、指先はふるへる、そして口の中は——煙草の灰の味がするのよ。このやうな時には、私は思はず男たちを眺め出すやうになり、男の聲をきいただけで身體が顫へるんですの……私はさうした時夫が必要だつたのね。そして翌朝には私は、再び常態になつてゐたんですの……

私は、あなたのプーシュキンやトルストイが上手に書いてゐる、あの愛なんてものは、認めなかつたのよ。だけどそこに私の間違があつたやうだわ、私は今、女は一人ぼつちで生活してゆくことが出

來ないと云ふ事を知つたのよ。たとへ、どんな平等を女に與へたところで、女と云ふものは壁を見てゐるのとちつとも變りはないんだわ、若し女に愛する男がなかつたら——その仕事振りでもやつぱり壁を見てゐるのと同じやうに、能のないものなんだわね。たしかに、生物學的に新らしい女の型(タイプ)と云ふものが創られない間はこの儘でせうよ。

私は、夫には決して忠實ではなかつたんですのよ……お判りになつて？

ある日私たちは、みんなでピクニックに出かけたのよ。その時、私は、一人の同僚に森の中で抱擁されて草の上にころがされたんですの、夜で、大きな月が出てたわ。その男は、私は嫌ひではなかつたわ、それに肝心な事は、その男が私の勞働(しごと)の上での同僚(タワーリシチ)で、我々は同じ思想を持つた人間であると云ふ事を、わたしは知つてゐた——で二人がお互の慾望によつて關係し合つたところで、何もやましいところはないと見てゐた事ですわ。

だのに、翌日になつて私が、惱みと驚きをもつて氣がついた事には、私と、この同志との單純な關係は消えてしまつてゐたんです。私どもは、お互になるたけ眼を見合す事を避けたわ、二人の間には、或る敵意の感情さへ流れてゐたやうなんですの、何だか私は、彼の眼には、今迄よりはずつと下らない働き手として映つたやうですわ、——いや、彼の眼にだけではなくて、——自分の眼にも、わたしは何だか脇つぽの方で働いてゐる人間のやうに思へてきたんですわ。人間は、どんな事でも人々から隱すことは出來るでせう、人を殺したつてうまくかくせるわ、だけど、男女の關係だけは、どうしても人の目をかすめる事は不可能ですわ。

間もなく男の同僚たちが、私に色んなくだらないことを云ひ出したぢやないの、眼の中を覗き込むやうにして、別れに私の手をギユッと握つたりするんですもの。初めのうちは氣にもかけないでゐたのよ。だけど、かうしてこんなことが、私の社會的な仕事の上に、又わたしの地位に迄影響してきたんですもの。そこで私は夫を大切にするやうになつたの。結局、私に必要であつたものを與へてくれたのはあの人でした。あの人は、私を、働き手として働くのに都合のわるい狀態に置く程、そんなに、私とかけはなれた馬鹿な人でもなく、又階級的に差別があつたんでもなかつたんですわね。それに又、それと同時にあの人は私をこのやうな腹立たしい機會(チヤンス)から護つてゐてくれたわけかも知れませんわね。

私は、朝眼をさますと、何より先に新聞を掴んだんですの——ねえ、今日と云ふ、この今日の名でわれ〲すべては生きて行つてゐるんでせう？ 獨逸での選擧における共産主義者(コンムニスト)達の敗北、支那革命の行動、イギリスの鑛山勞働者のストライキ——こうした事件のすべてが、私の生活と、又個人的な人格と密接に結びつけられてゐたんですの。——それで、たとへばスン、ヤトセンが死んだと云ふ事

は、まるで母が死んだ事のやうに私を泣かせてしまつたわ。——

この世界中で起つてゐる事件を毎日待つてゐると云ふことが、わたしの個人生活の重要さの目でわたしを充たし、その個人生活の內容となり、目的となつたんです。

人間は闘爭ですわ、で私はね、ナターシヤ、コンドラテーエトはね——パリーフ街の三サーヂエンしかない小部屋の中から、この闘爭に卷き込まれた全世界を注目してゐるばかりでなしに、その闘爭に參加してゐるんですよ！——

あなたは赤ン坊が出來た時に、自分が地面にボタンのやうに結へ(ゆは)つけられたやうに感じたとおつしやつたわね。だけど、私は、アーセンカさん、自分をボタンとは感じなかつたけど、土地の主婦のやうに感じたわ。と云ふのは、この土地の未來がわれ〳〵に、共產黨員に屬するであらうと云ふ事を、一體、否定し得る者があるでせうか?!

こんなやうにして日がたつたんですの、そして來る日も來る日も、私は自分を犧牲にし、すべてを投げ出してしまつたんですの、青春も幸福も女らしさも家庭も財產も、みんな投げ出したわ。なぜつて云へば、私の俸給の大部分は、解放運動犧牲者救濟會(モップル)に、又特別飛行技術協會(オリアバフ)に、或は、イギリスやギリシヤの罷業勞働者の支持に對する寄附金を出してしまつてたからなのよ。

そして、この夏私はソーチの休養所へ行つたの、一月中私は新聞をよまなかつたわ。すつかり自分自身の事に、自分の考へに自分の仕事に、かゝり切りに、なつてたんですの、私は一人ぼつちでゐたわ。ピョートルの休暇は、私のとはかち合はなかつたものですからね。一日中私は海邊に坐つてゐたの——海は私の膝の下で、沫を飛ばしてゐたわ。そして、私ははじめて、ありのまゝの自分の生活に就いて考へてみたんですね、世界とも、いろんな問題とも結び合はされてゐない自分の生活を考へたんですの、たゞ、このリヤザンからモスクワへと、幸福と平和を獲やうとして出かけて來た、このナターシヤ、コラドラクテイエヴに就いて考へたんですの、私は平和はかち得たわ。だけど單なる人間的な幸福、——その幸福は、あなたの笑はない街では、おかみさんたちが誰でも持ち合せてゐるわけですがね——その幸福を私は獲る事が出來なかつたやうに考へたんですの、それは、手から滑りぬけてしまつたんですわ。

そこで私は、ピョートルのことを考へ出したんですの——多分、あの人は私にさう云ふ幸福を與へてくれるにはふさわしくないでせう。その時、別居して初めてわたしは、女が男に對して、自分がその男よりも大きなものであると感じてゐる時に、いつも抱いてゐるあの輕蔑の、かるい冷たさが初めて消えて行き出したんです。あの人の聲も、歩き方も、手も、今は私にはとゞかないで、遠いところにあるのだと云ふ事がわかつたの。そして、われ〳〵二人の生活の中で、かう云つてよければ——その不可解なものと云ふものが少なかつたと云ふ事に對して腹立たしさを感じたんです…

こんなわけで、期限よりも丸一週間も早く、變に、歡喜にまで達したやうな昂奮の氣持で、わたしはモスクワへと駈けかへつて來たんです。その途中、私はあの人のことばかり考へてたのよ。あの人の名を、愛稱のこもつた呼び方で呼んで見たわ。ピョーチカ、ペトルーシャ、ペトーシェなんてね、以前だつたら、こんな呼び方をするのは遠慮してゐたんですけど。

私は二晩ねなかつたの、そして色々想像してゐたわ――ボリスのところへ着いたら、笑つて、あの人の首に身を投げかけよう……つてぬ。

そしてその日、殆んど喜こびのために泣き出しさうになつて、私たちの家に轉げ込んで來たんですの。三ッ鈴を鳴らすと、あの人が開けに出て來てくれたの、ところが私を見ると眞靑になつて、私に十分たつてから來てくれ、と云ふのは、下らない爭ひがあつてはいけない、他の女が來てゐるから、その女が着物をきて出て行くのに時間が必要だからと云ふんです。

――私は、お前に何もかも說明するよ、だが今、行つてくれ……

そして私の手からトランクをひつたくつて、私を、うしろの階段の上へ突きやるんです。この十分間を私は、往來で『モスクワ農產企業團證』の倉庫の側で、玄關から眼を放さないで、ぢつと突つ立つてゐましたの。この十分の間に、私の生活が、私の眼の前に上つて來たんだわ。私は、何ものでも覆はれてない、又、どんな合言葉でも飾られてない、つまりむき出しの生活そのものを見たんですの――この生活を、私は他の人に與へてしまつてゐたんです。そして、この生活は、今日になつてやつと私自身の事を憶ひ出してくれたんですわ。

玄關の中から、短かいスカートをはいた。鑄鐵の帽子を被つた娘が出て來たんです。――その女は、愛撫で充たされ、滿足させられた足どりで身を搖がしながら、又自分の幸福を、見知らない人間に振りまかないために眼をかくし乍ら出て來たわ。私は、裁判官のやうなゆつくりした足どりで、その女に向つて步いて行つたんですの。わたしの全身は、わなわなと震へてゐたわ……私は、その女の髮の毛を摑みはしないかしらと心配したわ。若し私がナイフを持つてゐたら――その女に飛びかゝつてゐただらうと思ふ程の敵意の激しい感情を、わたしはその女に對して感じてゐたんです。そして、私たちが、並び合ふ所迄來た時、その女は、睫毛を輕蔑するやうな風に搖がして眼を上げましたの、そして、私は、その眼に中に、征服者の勝利感をよみとつたんです。

私は、裏切つた夫の方へと階段を上つて行きましたの――お判りですか?――そして、たつた今出て行つたばかりのあの女に對する、激しい、制しきれない敵意と一緒に、わたしはピョートルに對して、自分の罪を持つて行つたんです、さうです、私が女でなかつたと云ふその事に對する自分の罪をね……ピョートルは、私を、ま

るで贓品を持つたまゝで捕まつた盗人のやうな失禮さをもつて迎へました。それはみんな「自由」とか「私的關係の自由」とか云ふ言葉のものですね、――しかし、人間的人格の上での所有の權利と云ふものは、革命の時でさへ廢止することは出來なかつたんですわね。

あの人は、腹立たしげに眼をつり上げて、兩手を振り廻し乍ら部屋中を歩きまはつてゐましたの、

――えい、それかどうしたつてんだい？　僕は――男なんだ、お汝が歸つて來る時まで待つてられるかい？……

あの人は、私があの人に云つたのと同じ言葉で辯護しました。あの人は、わたし自身、自分の自由さの基礎として打ちたてゝゐたところのものを、私に返しただけなんです。私どもが、全く最後迄裸になつて、お互に向き合つて立つたわけです。そして私は、思想でゝはなくて、また再び感覺でもつて悟つた事ですが、若し私が今、呼び出して、この口紅が頰の上に殘つてゐる男をこき下すことをしたならば、彼は又比較しはじめる、そして、私は負けてしまうでせう。

――えゝ、もうたくさんだわ！　――私は笑つて云つたんです――私は、よく／＼解つてゐるぢやありませんか……あなたが、隣の人たちが誰も廊下に出て來ない中は、私を外に突き出したのは、なか／＼賢いやり方でしたよ……つてね。

あの人は、私が變るのを期待してゐたんでせう、涙を期待してゐたんでせう。本當は涙は私の中にたぎつてゐたんですけど。だけど私は、同志としてあの人に近づいて行つたので、あの人はすつかり茫然としてしまつたわけです。

――私は、あなたを貰ひ取つたとでも云ふんでせうか？　――と私は云ひつゞけたわ――私どもは、宮殿を乞食に與へるために鬪つたばかりでなく、工場を勞働者達に與へるために鬪つたのではありませんか？……若しも、所有權と云ふことを廢するとすれば――先づ第一に、人間に對しての所有權を廢すべきですからね――

――ナターシヤ、お汝はその事は……眞面目に云つてるのかね、ええ？――とあの人はきいたんです。

あの人の聲は、今迄きいた事もないやうに憂鬱のひゞきをもつてゐたんです。まるで、窓ごしにやつて來る憂鬱が、空虛の中から、彼を通してやつて來るやうでした。

一晩中、私たちは、どちらかゞ一方、何か云ふと身震をしてゐました。そして一晩中私たちは、眼をさけ合つてゐました。

けれども夜になると、――私は、同棲生活で初めて――私自身であの人のところへ近寄つて行つたんです。私は、女としての要求にかられてゐたんですわ。そして、初めて女となつたんですの――あなたお判りになるかしら？　――本當にこの夜になのよ。

あの人はぐつたりとなつて、私の手の上で眠りました。――そし

て、私はずつと夜通しあの人の眠りを守つてやりましたわ。

朝近くなつて、臺所へ牛乳配達女が入つて來た頃になると、人々の聲々が――ねぼけたやうな、しわがれた悪たい聲が――廊下にがやくくし出したんですの。私はそつと起き上がつて、あの人の顔に日が當らないやうに、カーテンをひいてやりました。それから、臺所へ出て行つて、お茶の用意を始めたんですの、卵を袋に入れて煮たんですけど、あの人は、硬くゆでるのは嫌ひだものですから、煮過しやしないかと思つてずゐぶん氣をもみましたわ。それに、とうくやつぱり煮過してしまつてね、又煮直したりしましたのよ。

あの人は、起きてすつかり仕度が出來てるのを見て、――感謝するやうな微笑で、わたしに笑ひかけましたわ。その時の微笑は、不眠の一夜に對する報酬として、わたしに輝きかけましたわ。このやうな微笑のためには、わたしは、まだ十晩も百晩も眠らないでゐられたでせう……

私は、勤めに行くために、着物をきかへ始めたんですの――私は、鏡のそばへ行つてルバシカをぬいだわ、あの人のゐるところで、平氣でそんなことをしたのは始めてでしたの、そして、わたしは、鏡にうつゝたあの人の眼が、私のむき出しの胸を、しつこく、しかし冷淡に追つてゐるのを見たんです。――まるで、私をあの女と比較して、評價してるやうでしたわ、その時、私は、自分の乳房が落ち込んで、下つてゐるのに氣がついたのよ、それで、私はゾッとしてはづかしくなつたわ。その時の氣持と云つたら、喉の上にナイフを突きつけられたと同じやうに、怖ろしいものでしたわ。

――解つてますよ――私は叫びましたわ――あなたは、又あの女のところへ行くんでせう……

あの人は、何も云はないで、工合悪くてれて下を向いた眼眸をかくすやうにして、兩手をテーブルの上に載せましたわ。

――私は理解しましたわ――あの人は決心しちまつたんです、で私が、今更ら俄かにしたところで、それは何もならないのだと思ふとがつかりしたわ。

その時、私は一言云へばそれだけ、自分が負けるし、一ッ動作をすると、それだけ自分の穴を掘り下げるやうなもので、そしてその穴に自分が落ち込んでゆくばつかりでしたわ。さう云ふ事を知つてゐながら、私はそこで叫び出したんですの、私があの人を愛してゐると云ふ事、私の生活の中には、あの人以上のものはないと云ふ事、又世界も、イギリスの鑛山勞働者も、或は、パリーで夢を見てゐた土地の主婦も、――それはすべて夢であつた、しかし、わたしはまだ目を醒す事が出來る、目をさまして、あの人の奴隷となる事が出來ると叫んだんですの……

わたしは、あの人の手をつかまへて、そのわたしの心臓をつかんでゐるその手に接吻しましたの、だのにあの人は　はやくもコップを突きつてや起ち上つたんですの……人は、私を憐んだのです、私

の取亂した樣子や、ルパシュカから露はに覗き出してゐる胸は…あの人には嫌はしいものだつたんです——
——ちやんと着たらどうだい？——あの人は笑つて云つたわ。
それで、私は又怒鳴つてやつたんですのよ——卑劣漢！——さう云つて顔に唾を吐きかけてやつたのよ。
すると、あの人は肩をすぼめて、鼻の下を鳴らし乍ら、机の方に行つたわ、そして、机の中から折鞄を取出し、掛釘から外套を下したんですの、さうよ、決してもう歸つて來ないために外套をね…
さうしてあの人は出て行つてしまつたんですの、もう歸りますまいよ。わたしは、今迄私が、人生の脇つぽの方を通つて來たことを叫び出す力さへもうありませんわ。これは、これ迄の生活がそれに對して、私に復讐してるんですわね！

空虚な、嵐の前夜で惱ましてゐた夜は終つた。そして、二人の女友達は、涙にぬれて眠つてしまつた。しかし、空は、この夜は泣かなかつた。そして、雨雲は依然として、街の上空にかゝつてゐて、水の臭をたゞよはしてゐた。丁度日の出前、雀の不安と共に、風が鳴つてゐた。風は街の埃を持つて來た。その埃は、窓を覆つてしまひ、世界は、窓の彼方に汚れて、亂雜な姿で横はつてゐた。
最初に眼をさましたのはナターシャであつた。こういつたやうなことは、大きな、神經の動搖の後では度々あることだが——彼女は、いつ迄も理解する事が出來なかつた。何故に、アーシャが彼女と一緒に並んで寢てゐるのであらうか？ しかし憶ひ出すとはづかしくなつて來た。昨日は——女としての絶望の中で——友達は、彼女にとつては唯一の最も近しい人間であるやうに思はれた。しかし、今日は、裸體で彼女に對するのさへ辱づかしくなつた程、それ程緣遠いものであつた。
ナターシャは、長椅子から飛び下りて着物を番にかけ出した。そして、友達も眠らなかつたことに氣づいたのであつた。彼女は垂れた睫毛の下から、同じく、警戒したやうな、よそ〳〵しい眼眸をもつて、彼女の一つ〳〵の動作を追つてゐた。
——憶えてゐて？——アーシャは苦笑しながら云つた、——昨日、あなたは、私たちが小つぽけな停車場で、再び出逢つたのだけど、またその驛から、別々の道を私たちの幸福の列車が別れて出て行くのだと云つたわね？
——えゝ、憶えてゐるわ、——ナターシャは着物にくるまり乍ら答へた。
——今後は決して私たちは——ねえナターシャ、わかつて？——私たちは、今後決して逢ひますまいね…私たちは、お互に幸福の妨げをするんですからね…

臺灣を旅して

林　芙美子

一

臺灣を旅する事三週間、全島を縱斷するには急テンポであつたが、少しの時間を利用しては、私はよく街衢を歩いた。

內地で空想した時の臺灣より、行つた時の風景が、づゝとエキゾチックで、いゝものだつた。

日月潭とか、阿里山とか、角板山なんてところには、急がしい旅で緣が薄かつたが、行つた街々のさかり場を、私は好んでよく歩いた。

此講演旅行と云ふものは、いつたいに、きづつないもので、肩が張つてゐたせいか、切角美しい山河に接しながら、只呆然と私はその風景を橫切つて來た。

要するに、臺灣は大泉黑石あたりの長編小說である。色々のものが、熱帶的にもり上がつてゐる。

一月だと云ふのに、私は東京の雪を空想するさへ、むづかしい程な暑さをこゝで感じたのである。

紅毛と云ふ寒驛には、櫻が簪のやうに咲いてゐた。ゐかだかづら、しようじようひ、ミモザた



チンコツきり

——日本橋——
11

時雨

朝散太夫の末裔——ツヾキ

アンポンタンはぼんやりと人の顏を眺める癖があつたので、

「いやだねおやつちやん、私の顏に出車でも通るのかね。」

流石の藤木さんもテレて、その頃の月並な警句をいつた。

小傳馬町の牢屋の原を廻る四角四面の町々に、アンポンタンの友逹の分譜があり、學んだ學校があり、長唄稽古所があり、親の知合の家もあつたから、私がポカンと立止つて眺めてゐるなにかしらが多くあつた。もともと牢屋の原の居廻りは、日本橋といふ主都の中央でありながら、今でいへば新開の町だけに、神田區上町との間に流れる泥川の河岸についた、もとの大牢の裏手の方は淋しいパラリとした町で、呆けたやうな空氣だつた。そのかはりに今いへば日本橋區內の何處でもに見られない新職業があつた。古鐵屑屋の前に立つて、暗い土間の隅の釜で、活字が鉛に解かされてゆくのを何時までも眺めたりしてゐ

いわんひよどり、などの野性の花や、栾つばの美しい色を、北投の温泉の寢覺めに眺めて、ゐるかだかづらなぞは、私はツヽヂが吹いてゐるのかと怪しんだ位である。
基隆・臺北・新竹・臺中・臺南・高雄・屛東・嘉義と、此フォルモサの島を斷走して、私は思ひ思ひな風土に接した。
土語が美しい。
臺灣娘は屹立として秀麗。
椪柑、木瓜の美味な事、さすがは熱帶地、たつぷりと何もかも豐富である。

こゝでは色んな人に會つた。
臺灣社會民衆黨を組織するところの古い富豪、林獻堂氏・日本ビイキな高雄の富豪陳仲和氏、インテリゲンチヤでは、謝春木、彭華英周合源、稲垣藤衛氏等々……。
臺灣は爬蟲類の感じだ。
高雄の夜の花壇では、臺灣の小唄もならつた。

どんと玄海
荒波越へて
荒波越へて
だてにや來ぬぞえ
どんと臺灣へ

河合武雄に似た、三次と云ふ藝者が居た。同行の食通は、あれはミズテンですよと云ふ。ミヅテンがあんなものなら、反逆的で、私には好ましい女であつた。
植民地における、樂な内地人達は、たいてい苦力をやとつてゐた。

た。古莚に山と積んだ、汚ない古い細かい鐵屑が塵埃と一緒に笑で釜の中へはかりこまれると、ギラギラした銀色の重い水に解けてゆくのを、いくら見てゐても厭きなかつた。それが泥の中へこぼされると、なまこ型にかたまるのも面白かつた。またある板がこひの中を覗くと、そこは地獄のやうに炎が赫々と燃てゐて、裸の小僧さんが棒のさきへ何かつけて吹くと、洋燈のホヤになるので息をのんで覗いてゐた。小さな瓶や、大きな瓶もすぐ出來上るのを見てゐたが、暑さと苦しさうなのが、この面白い見物とは反對に、こしらへてゐる小僧さんたちにすまなく思はせた。

表通りには鐵道馬車の線路のある日本の中央の幹線道路でありながら、牢獄のあつた時代からはかなり過ぎてゐるのに、人通りがなくて、道巾の廣い通りには野道のやうに草が生えてゐた。ガラス工場などは板屋根だからよけいに草が茂つてゐたが、瓦葺の屋根にも青々とした草が黄色い花をつけてゐた。

藤木氏がチンコッきりをしてゐたのもその近所だつた。はじめ私が發見した時、私は藤木氏なんぞ目にも入れなかつた。忙しなく煙草の葉を揃へる人の手元や、チヤキ〳〵と煙草の葉を刻んでゐる職人の手許を夢中になつて眺めてゐた。

その日の夕方、いつものやうに來て藤木さんは母に呟してゐた。

「今日つてけふは弱つたのなんのつて、汗が出たね。だんまりはいゝがね、いつまでもいつまでも立つて見てゐるのだからね。此方のはうがなにか言はなくつちやならない氣がして——」

だが眞から心配さうにもいつた。

「あんな道草してゐて、稽古にほんとにゆくのかしら?」

その翌日あたしは、藤本さんのチンコッキリを立つて見てゐてはいけないと誡められ

塔俥も安い。自動車も安い、前者は十錢位で市內のどこへも行けるし、後者は五十錢位で、三人は乘れる。

臺北では學生Sさんに案內してもらつて、私と生田女史は龍山寺、萬華女紅場と見て步いた。

龍山寺の裏の廟には、安產の女神がまつゝてあつて、子供を抱いた澤山の人形が飾つてあつた。

「まあ、さゝきさんのやうなのも、長谷川さんのやうなのも、平林さんのやうなのも……。」

生田さんは子供のやうによろこんで、安產の神樣を見てゐた。

佛樣には金紙を、神樣には銀紙を燃やして若い土人の女達は筶で占つてゐた。

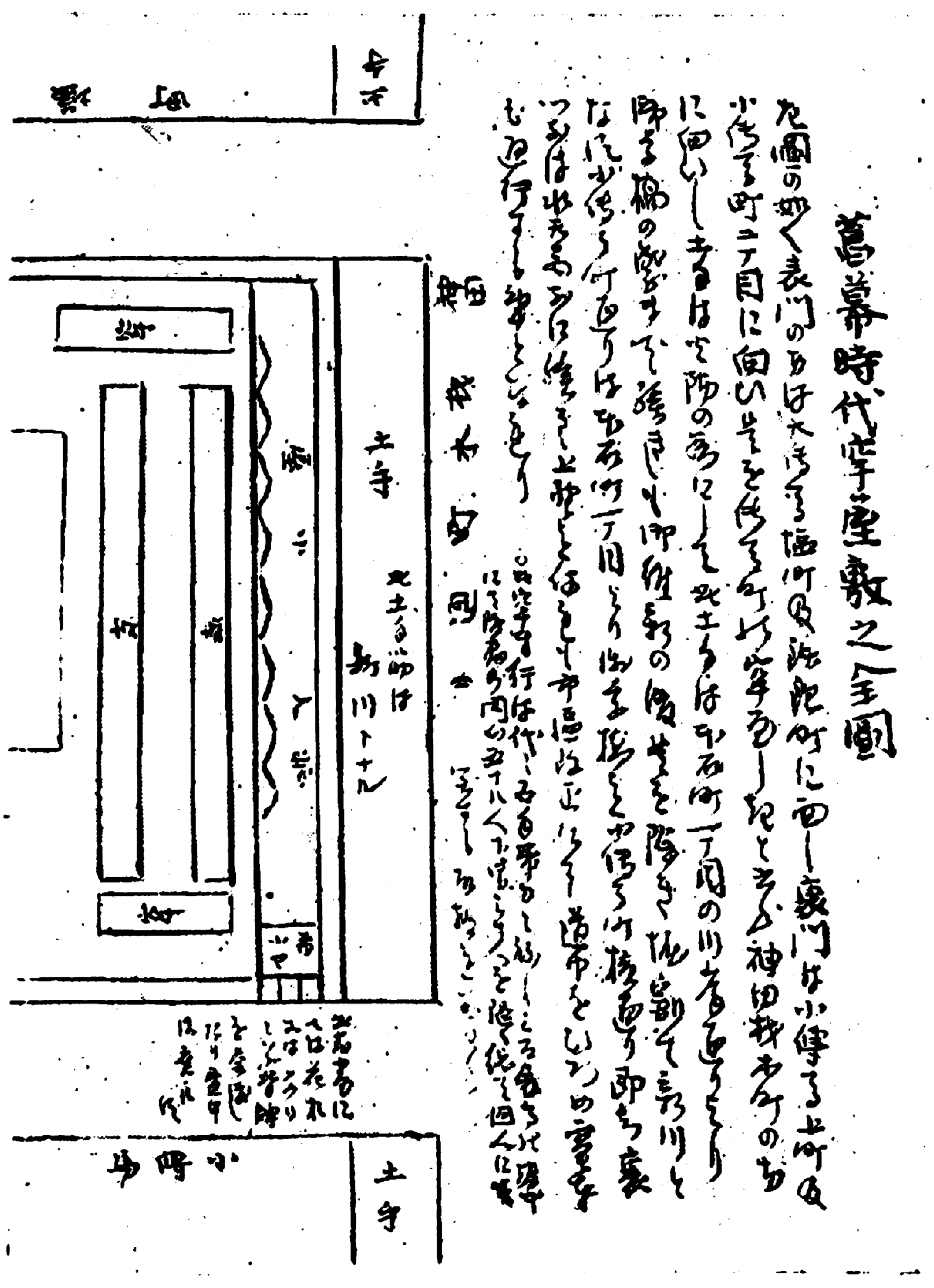
國姓爺の芝居で見る、開山神社も見た。だが名所舊跡は、すぐしびれが切れてしまう、野そだちの私は、汽車の窓から見た、黃包車なんかと走りつくらをしてゐる、毛絲玉のやうな黑豚の道化た風景に、たぶんな面白さを持つた、

樹林と云ふ小驛で見た土人の靑年は、房々とした長髮に針金を波のやうに曲げた櫛をさしてゐた。

「汝！」と呼ぶと、「應了」と答へて。苦力達は走りつかいする、全く、苦しい力とはよく云つたものだ。

爆竹工場が彈けて、土人の女工さんが澤山死んだ話も聞いた。小作農の土人の娘が、自分でつくつてゐる甘蔗を二寸ばかり食つて、

た。そのついでに母と誰かが話してゐたのだがチンコッキリおぢさんは職人としても好くないのださうだつた。細君の方は目が高くて、煙草の葉を選るのに誰よりもたしかで早い大事な內職人なので、その方を手離したくないために、役にたたない御亭主も雇つておいてくれる。家でも口やかましい人が外に出てゐてくれるのだから、大切に、おがむやうにして出してやる。店の方でも細君の方に澤山仕事をさせたいので、機嫌をとつておいてく



××に殺ろされたと云ふ話も聞いた。

ローマン(どろつき)の話しも、蕃人(土人のみ)の島外追放も、だが、何しろ旅は短日月、しかも團體行動、見たいところもカットして、八ケ所の知事官邸と臺灣料理、紳士シユク女諸君へは、良妻賢母の講演、臺灣の景さよりも、自分自身ののぼせにうだりそうであつた。

同行十人ばかり、雲右衛門を論ずる天民氏あり新聞を說く山田女史あり、私を代議士にしてくれと呼ぶ北村女史あり、遠い文學を論ずる生田女史、フランスの女を語る望月女史、婦人の貞操を論ずる堀江女史、チヤチな詩を讀み、貧乏な漫談をこゝろみる林芙美子あり婦人毎日新聞主催するところの婦人文化講演會は、スピードスピード、フオード的ハンドルをまわして、フオルモサの島を縱走したのである。

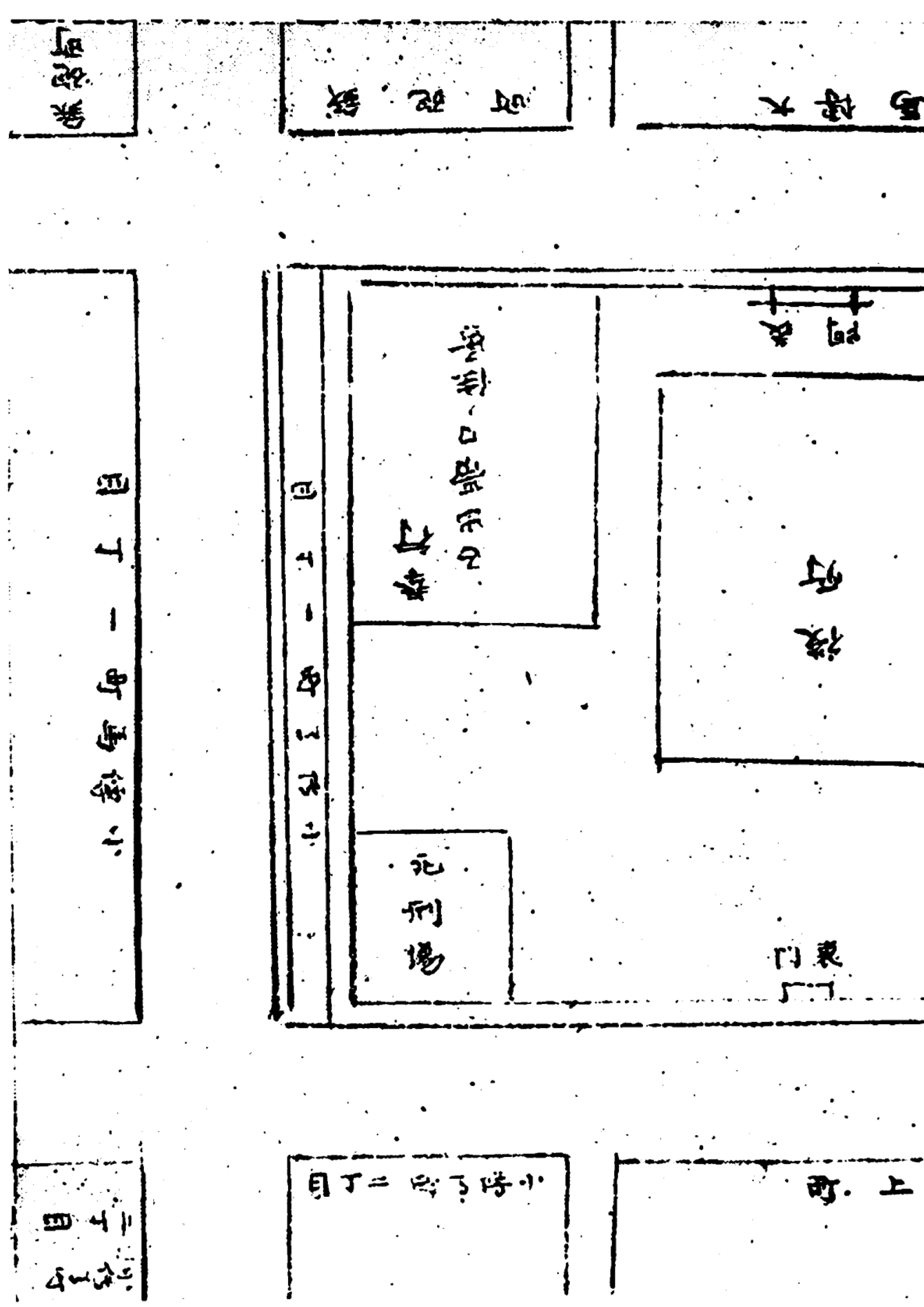
何を殘して來たか知らない、何を話して來たか、わすれてしまつた、だが、龍山寺のかへり、生田女史と相俥に乘つて、案內者Sさんに別れると、彼はぢき××に呼び止められたと云う。

一あんな怪しい女と歩いちやいかん、思想は何だ……」

Sさんは善良な學生である。私は頬の紅らむやうな思ひがした、そしてぢき、植民地風が、おたふく風以上に厭らしくなつた。

風景を汚すものは人間だ。

屏東で見た蕃人も、今では內地製の新モス



故父溪石翁畫

れるので、それでも三日目位にはあきてしまうのだと言つた。

藤木さんはその頃が貧窮のどん底だつたが、細君の前だけでは封建以前の殿樣ぶりを發揮して怒鳴つてばかりゐた。蜜柑箱にキンタマ火鉢を入れたのが長火鉢かはりの生活であつて、

「貴樣なんぞはボテイフリの嬶にでもなれ。」

の腰卷きをしてゐた。
臺灣も段々内地化して來るが、阿片隱者の行列や、ピンローで口を染めた廣東女を見ると、何だかお伽話以上のやうな氣がする。
木瓜、椪柑、西瓜、バナヽ、パインアプル
フオルモサはランマンたる果實の島。
あんまり惡口を云ふと臺灣の人から叱られる、私はも一度行きたいと思つてゐるんだから……北回歸線の上に飛行機が飛んでゐたが、想思樹の綠がウッウッと燃へてゐたが、下淡水の流れに、芭蕉畑があつたが……私は一月の思ひ出にこんな暖いスプニールを持つた事は、これもお伽話以上の事かも知れない。

百二十人の合唱

ジャボジャボジャボジャボ、夕方近くから降り出した雨が本降りになつて、雪になるかなあ、なるといいなあ、ペショペショ顏にかゝるのもかまわず空をのぞいてみたけれど、雪どころかからつ風も吹き出さないしつとりとした暖かさだ。
東京の雨の夜は灯が美しい。濡れたペーブメントにぶつかつて無數にくづれる灯、灯、十時五十分の夜行の神戸行きに間に合ふ樣に走る自動車の光の中でしぶきがおどつて、あと十分、宮城前の廣場の闇に一緒にゆく中島さんと愛妻を送りに來てゐるであらうところの爲場氏の顏が——心配してそうだな——見える氣持。
「伯母さんたらのんきなんだからあぶなくて仕樣がない、芝居ならいいけど相手は汽車だ

といふのが口癖で、魚賣は自分よりよほど身分違ひ——さも低級でもあるやうに賤しめて罵る習慣があつたのだ。貞淑な細君は、そんな事を言はれても尤ものやうに押だまつて辛棒強く働いてゐた。手跡はお家流をよく書き、腰折れの一首もものし、貧乏の中に風流を解するゆとりもあり、容貌は木魚の顏のおぢいさんの娘なりに、似てはゐたが醜くはなかつた。
娘のおあさは色の黑いところと、人のよい、正直者の表標のやうな光りをもつくせに、ちよいと見は鋭く見える眼つきを父親からもらつて、母親からは祖父ゆづりのお出額を與へられた、髮の毛の濃い、小ぢんまりした小さな娘だつた。
ある日、藤木氏夫妻と娘とが、私の祖母と母との前に並んで座つてゐた。あたしもそばへいつて座つた。丁度父が外から歸つて來て客のまたせてある室へゆきがけに通ると、母が縋るやうに言つた。
「おあさが○○屋へ行くことにきまりまして——」
「さうか、金助の家か？」
「さやうでございます、清元が大層氣に入りまして——踊りも質がいいと仰しやつてくださいますので——」
藤木の細君がいつた。
○○屋——柳橋の藝妓家の名だつた。家へも來るが、兩國廣小路——電車道路となつたが——の、兩國橋にむかつて右側に、「芭蕉」といふ大きな藥種屋があつて、芭蕉の葉が一葉大きく青く彫刻した看板が棟にあげてある店だつた。その藥種屋は「正久の一」といふ名人の鍼灸醫の家で、廣い店二階に一ぱい患者が詰めかけてゐた。正久さんは盲目だが上品な老人で供がついて、祖母のために療治に來てくれたが、なにしろ患者が多いので祖母

らう」「大丈夫だよ間に合ふよ」仁さん、社長さんの横につききりでせかしてゐる。「仁つたらまるで御隱居さんの様に心配してばかりゐるのよ」仁さんの御隱居さんのおかげかどうか東京驛に着いたのが十分前、少々興奮した馬場氏が「長谷川先生でいらつしやいますか、中島はあの入場券で先に入つてをります」いそげやいそげ。汽車發車ホームに二つならんだ神戸行と大阪行、ちよいとばかしあはてたらどつちへのるのかわからなくなつた。十一時なら大阪、十時五十分なら神戸。神戸の方だぞ。笠千島氏の犬君の飯島博士社長さんの見送りに來て「御小遣はあるんですか」寫んぢやつた社長さんそんなに貧乏ぢやないんだけど、でもみんなの澤山の人達の責任者なのであんまりビンボウぢやない方が社長さんの好きな啖呵もきれて氣が强いわけ。そこで、發車の合圖が鳴り出した時に食慾娘のお父さんの様に大きな飯島氏が、降りたかおりないにピポー。汽笛一せい東京驛を出たのが一月二十八日晚十時五十分。

　選擧戰をひかへて、車には選擧運動の人達で一ぱい。女子大の方からいたゞた果物籠をひつぱり出して食べようと思つたけれどちよつといきなりなのでてれて「食堂に行きませう」とばかり社長さんを引張り出す。中島さんと三人お手手をつないで、ガツタンゴウゴウの汽車の中を渡つてゆく。隣りの寢臺車に寒むそうな男の人がこしかけて、本なんぞ讀んでるなと思つてみると、寒そうな筈、直木三十五氏がすぼんとした着流しで愛敬を麗き

の方から通ふ日も多かつた。そこの待合せは所から藝妓やや料理店の人が多く、藤木夫婦の望みと抱妓をほしがつてゐる〇〇屋との交渉が、おもひがけなく私の祖母から出來上つてしまつたのだつた。

おあさのために御馳走がならべられて、口々に褒めた。

「おあさは孝行ものだ、親孝行だ。」

父までが藤木さんに杯口を與へながらいつた。

「おれの家でも女の子が多いから、藝妓やをはじめると資金入らずだが――」

十ばかりの從姉と私はだんまりで、二人ともこぼれない涙に瞳が光つてゐた。おなじやうにムンヅリしてゐたが、子供心にも思ふことは違つてゐたかもしれない。私は子供心には言ひあらはせない反抗心がグイグイと胸をつきあげてゐた。その時、父も厭だつた、褒めそやす母は一層憎かつた。ふだんは好きな祖母も、そんな世話をしたかと思ふと悲しかつた。もとより、藝妓は美しいものとしてその他の惡いことは知つてゐやう筈もないのに、なぜだか、なんとも言へない泣きたい思ひを堪へてゐた。

「親孝行なんて、親孝行なんて――」

なあんだ――　たださう叫びたかつた。みんなにむしやぶりつきたい、わけのわからないむしやくしやだつた。

「そんな親孝行なんぞしたくゎない。」

さう言ひたかつたのだ、お金で――金のねうちを知らない子供には、物品とおなじやうに金で子供を賣つてしまう親がただ憎かつたのだ。それを褒めそやす自分の親たちが猶憎かつた、厭だつた。子供はもつと〱親をよく思つてゐるのに――私はやりどころのないわびしさを從姉にむけて睨めつけた。從姉は、蝶々髷を光らさせて、私の眼を避けてうつ

忘れた様な顔をして居る。痩せたりといえども武士の面影ありといふ氏をおいてけぼりにして、又お手々をつないでガッタンゴーの汽車を渡る。ところが目的地は満員で、前の控所に三人の女性が待つてゐる。中位に若い人とも少し年よりと、もつと年よりの眞白な頭をチョンマゲに結つてるおばあさん。ずい分元氣で太つてる人。あたし達に何處まで？と話しかける。その人達を前において勢よく女性行進曲を歌ひだした。出たり入つたりする少々酔つぱらつた、ちよつとばかり偉そうな顔をした、脂肪を身につけた小父さんたちが驚いてみてゆく。アダリンを飲みに來たと云ふ直木氏に又逢つて、社長さん大威張りで「とざす雲さくひよ」と歌つてのける。同じテーブルの隣りに坐つてた青年（之はきつと勞農黨の選擧應援演説にゆくのだらうと思はれる）は三人の女性に壓迫されておち／＼喉へ通らない様な食事をすますと、さう／＼に行つてしまふ。十二時すぎの汽車は何も見えない外の中を走つて行く。ところが十九號の寢臺車には悲しいかな此世に生を受けて三十日たつたばかりの赤ん坊と、はじめて子供を持つた母親とが乗り合はしてゐた。「あんなに慾ばつたつて、ほら一つも食べない内に寢ちやつた」中島さんとはなしてゐる社長さんの聲に、「ハハアあの果物のことだな、はづかしいからもぐつちやへ、一眠りするとギャオギャオ赤ん坊の鳴き聲に目がさめる。いつまでたつてもギャオギャオ、何だか口惜しくてねられないのでカーテンのかげから憎らしそうな顔

むいた。上から釣るされてゐる大洋燈の灯に、蝶々の簪がペカペカした。

この下地ッ子が、二三年たつてから、盆暮れの宿下りに母親につれられて來て、柳橋へ歸るかへりに寄つた。緋の板〆縮緬に鶯色の繻子の晝夜帶を、ぬき衣紋の背中にお太鼓に結んで、反つた唐人髷に結つてきたが、歸りしなには、差櫛や、珊瑚珠のついた鼈甲の簪を懐紙につつんで帶の間へ大事さうにしまひこみ、裾さきを帶止めにはさんで、お尻をはしよつた。

私はさびしい氣持ちでそれを眺めてゐた。私の着物を從姉が着るのでよけい親しみが深かつたのに、なんとなく其日の從姉は私から離れていつてしまつてゐた。おあさちやんの證の方が借りものになつて、着物や箸の方が巾をきかせてゐた。

その頃になつて藤木さんの世帶は、すこしばかりゆとりが出來た様子になつた。根岸の鶯谷の奥の植木師の庭つゞきの、小態な寮の寮番のやうな事をしながら、相變らずチンコッキリと煙草の葉選りの內職だつた。妹娘は常磐津を仕込んでゐたが、勝川のおばさんの方へ多くいつてゐた。

音無川を――現今では汚れた溝川になつてゐるが――前にした、靜かな往來にむかつて、百姓家の角に、竹で編んだ片折戸をもつた、粗末ではあるが閑寂な小屋に、湯川氏のおばあさんが、ボッンと一人住んでゐたころなので、私が子供のくせにふさぎの虫を起すと、母は出養生の意味で、あの心持ちの至極のんびりしたおばあさんの家へ私をやつてくれるのであつた。

前にはざわ／＼細流がつぶやいてゐる。向ふの藪には赤い椿が咲いて、春の日は流れにボタンと花がおちる。夏ははちすの花が早抹に深い叢の中にさいて、藪の蜘蛛の巣にも花

をしてのぞいてゐると、之も又完全にねむ相にふくれつ顔をした若い母親が赤ん坊をだいて出て行つた。氣の毒は氣の毒でもこつちも氣の毒なので、女はつらいなとつまり女性に同情しながら又眠てしまふ。あしたのあさボーイにおこされておきて社長さんに「ねむれましたか」ときいたら「いいや」社長さんのとなりの寢臺が問題の赤ん坊なので、私は社長さんの上、中島さんは社長さんの向ひ側、「あたしのとこだけきこえたのかと思つたわ」「ちやみんながそう思つたのよ」夜半に社長さん、たまらなくなつてとなりのカーテンからのぞいて　可哀さうにねえ」と誰にともはつきりわからない同情を呈した。そこで母親が、意を決して赤ちやんをだいて外に出てつたわけになる。寢臺がゆれる度に汽車でゆれるのか私の重みでゆれるのか、つぶれて落ちると社長さんまでつぶれてしまふので氣が張つて肩がこる、なんて之はうそだけれど、社長さんはたしかに心配したらうと思ふ。何にせ二十貫の娘が上から落ちてきたのでは助かりつこはないから。それやこれ眠られなかつた社長さんすつかり着物をきて、外套まで着て、又一二三と寢床にころがる。「そんなづるいことして降り遲れちやふぞ」「まだ大丈夫熱田にならないから、」おどかしても知つてゐるから駄目、そこで中島さんと二人、かごの果物をあけてネーブルをかじりだす。中島さんはレデイなのでナイフをお持ちにならなくてもボーイにお借りになるが、私はよいしよとにがいのをかまんして一かぢり皮を噛つてそれか

にも朝露がキラ〳〵と光つて空がはれていつた。藪には土橋をかけて、冠木門の大百姓の廣庭と、奥深く大きな茅屋根が見えてゐた。お行の松にむかつた方には狩野といふ繪師の家が、鬱蒼した中に建つてゐた。

お行の松は、湯川のおばあさんの茅屋からは左斜めの向側にあつて、板小屋の不動堂とその後に寒竹の茂みのある幽邃な一區域になつて音無川が道路とへだててゐた。裏の百姓家も植木師をかねてゐたので、おばあさんの小屋の臺所の方も、雁來紅、天竺葵、鳳仙花矢車草などが低い垣根越しに見えて、鷄が高く刻をつくるのがきこえた。おばあさんの片折戸の低い空地も弟切り草が苔のやうに生えて、水引草、秋海棠、おしろひの花もこぼれて咲いてゐた。

あたしにはその家がめづらしくつてたまらなかつた。車馬の轟きはめつたに聞こえず、人が尋ねてくるではなし、晝間家の中を靑蛙が飛んでゐるし、道ばたの小家に簾を釣つて、朝、夜明から戸をあけて蚊帳は釣りばなしで寢てゐると、まだほの暗い中を人聲がして前の川で顏を洗つてゐる。

「おばあさんあれはなに？」

ときくと、あの顏の大きなおばさんは、あたしが大人のやうな返事をして、

「吉原がへりだらうよ、朝がへりだね、ふられて歸る果報者つてね。」

「降られてはゐやしないよ、お天氣だよ。」

とアンポンタンとちやんぽんな問答をする。さうかと思ふと、

「入谷へ朝顏を見にゆかうかね、それは美事だよ。」

「田圃へ蓮の咲くのを見に行かうよう、おばあさん。ポンポンて音がするつてね」？

「この子はまあ、田圃が好きで、お百姓のお嫁さんにしなければなるまいかねえ。」

らむき出す、それを見ながら社長さん向ふ側の寢臺でにや〳〵笑ひながら、「野蠻人だね」と惡口をとばしてゐる。

名古屋の街は朝の活動に入りかけてゐた。晴れ切らない雲の中に雨だけはもうすつかりあがつて、なじまない街の空氣が小さな自動車の中でゆれる。到着た時間も新聞社はじめ誰にも知らせてないので迎える人もないのんきさの中を丸文にゆく。おゆに入つて、御飯をたべて、ねて、それからお城でも見ませうとばかり、長方形の可成大きな五衞門ぶろ、社長さんが入つても上の方が三寸以上あいてるので、ヨイショとばかり横に入ると、ザアーッドドド、氣持よく流れ出すお湯、ナイヤガラの瀑布だつて、なんて思つて嬉しがる間もなく「勿體ないねえ、惜しい惜しい」お湯が何より好きな社長さん勿體ながつてあつたまりもしない内に飛出してしまふ。社長さん、食慾娘の太つたかたいももをつついて、「憎らしいほど固いね、固くなくては暴力團長となつて、保護兼秘書の役はつとまりません。

おひるから、自動車でお城を見にゆく。金の鯱鉾を、昔し昔し小さな小さな子供の頃から聞かされてゐた金の鯱鉾をみた。天主閣の屋根の両端に、ピンとそつたシャチの魚、あはれや海の水から離れて空氣を吸はされてゐるのにその上金網の中に飼はれてピンとシャチヨコばつてゐる。海中に居れば龜にのつた盗人がその鱗をとりに行くかもしれないのに、空中にそびえてゐる魚には、たこに乘つて盗人が行く、なる程なあ。お天主様の金の鯱鉾

あたしは顔も洗はずに、濕つた土の上へ一足、片折戸を開けて飛出すと、向ふの大百姓の家のお嫁さんが生姜を堰でせつせと洗つてゐた。名物の谷中生姜は葉が青く生々してゐて、黒い土がおとされると、眞白な根のきはにほの赤い皮が、風呂から出た奇麗な人の血色のやうに鮮かに目立つた。ボンヤリ見てゐる私は手傳ひたくつてウズ〳〵してゐる。小僧さんが、天秤棒が撓むほど籠に一ぱいの大きな爪を擔いで來て、土橋をギチ〳〵急いで渡つてた。

町の子のあたしが、笹舟を流すことを知つたのも、麥笛を吹いたのも、夜蒔きの瓜の講釋をきいたのも、田圃へどぜうを突きにいつたのも、根岸の里住居のたまものだつた。おばあさんは、切れの巾着の中味を勘定して、あたしのおやつや好きな鹽鮭の一切れを買ひにいつた。まだ上野山下の青石横町に居る時分に、あたしは雨上りに三枚橋下へ小魚を掬ひにいつたり、山内へ椎の實を拾ひにいつて、夜になるとおばあさんの不思議な話をききながら煎つてもらつて、椎の實の味を知つた。秋のはじめになると、

「蓮の實はいらないか、蓮の實いらないか。」

と短く折つた蓮の莟を抱へて、賣つてくれる子とも馴染になつて、蓮の實の味も知つた。そんな事は日本橋油町邊りの子供の、誰一人が知つてはゐなかつた。

田圃道を歩きながら、おばあさんは錦繪のやうな話をはじめる。

「根岸にはお大名の別莊が澤山あるけれど、加賀樣のお姫さまがたは揃つてお美しかつた。お前さん、櫻の咲くころに、お三方もお四方も揃つてお出になると、まるで田舍源氏の插繪のやうさね。」

「おばあさん、お姫樣はピラ〳〵をさげてる?」

「お髷は召てゐないが、お振袖で、曙染で、それは〳〵奇麗ですよ、お前さんに見せた

が大きくよう見えます」三つならんだ望遠鏡をさして茶店の爺が、名物自慢。尾張のお城は中を見せない。後の方からシャチホコをみて、水の滿々とみちた、かざりけのないお濠に好意を持ち「お城の周圍にもつとそろつた家があればいいのにねえ」社長さんの感慨をききながら田舍道をどすん〱ゆられながら宿に歸る。五時九分につく上田、織本、松村、林の四氏を迎へに先着組を代表して祕書役の役目この時とばかり停車場にすつとんで行つてみたら特急の富士はもう出たあと、それにしても影も形もないので改札掛の人に「東京の方からこんな風な女の人が四人きませんでしたか、」きいてみたら「もつとさきに來ましたよ」變だなと思つて宿に歸つてみたら今新聞社から迎へが來て蔦茂といふ宿屋にみんなゐるといふ。そこで一足先きにツタモといふ宿にゆく。臺灣土産の人絹の支那服をきた林さんに上田さん織本さん松村さんの四人と名古屋支部の藤原さん矢田さん、それに名古屋毎日新聞社の人達に逢ふ。中味が銀杏と椎茸ばかりのサザエの壺焼の着いた晩の御飯をたべてサザエの實は一體どこにあるんだらうなど考へながら會場新守座にゆく。聽衆の大部分は若い人達、女性であり男性である。滿員の會場をみてると、もそもそと嬉しさがこみあげてくる　東京を出るときは雨でも名古屋につけば雨ははれてをり、ねて起てみれば蒼空一面濃尾平野の上に廣がり、陽はポカポカ「名古屋は東京より寒いぞ」とばかり綿入のチャンチャンコを持つて來た社長さん「有難いね着なく

いね。ほんと！　櫻の花よりものいふ花がきれいさ。」

あたしにはまたちよいとこの會話が分らなくなる。牛乳を呑ましてくれる家の門に來た。

「こゝらはもう三河嶋田圃。」

とおばあさんがいつたから、三河嶋の方へ寄つてゐたのであらう。一構の百姓家は牧場になつてゐた。牛の牧場なんてそれまで見た事もない私だつた。優しい眼をした黄と白の斑牛が寢そべつてゐて、可愛い仔牛がゐたが、生きた牛の傍にいつた事はないし、臆病な私は怖かつた。若いキリリとした女房さんが、堀井戸に釣るしてあつた鑵からコップへ牛乳を酌んでくれた。濃い、甘い、冷たい牛乳だつた。

「お砂糖がはいつてゐるよ。」

と私が悅んでいふと、おかみさんとお亭主が笑つていつた。

「お砂糖はいれてないけれど、絞りたての甘いのをあげたのさ。」

こんな風に、おばあさんはよく私を連れて他家へいつた。私が本を讀みたがると、何處からか聞きだしてきてくれて、私を貸本屋へつれてゆくといつた。

毎日二時過ぎると小さなお釜でお湯を沸して、盥へ行水のお湯をとつてくれた。私は裏からも表からも見透しの場處でのんきに盥の中へ座る。雨蛙にもお湯をぶつかける、大きな山蟻が逃出すのを面白がる、或時は蟇と睨めつこをしながら盥の中にかしこまつてゐる。涼しい風にくしやみをするとおばあさんが聲をかける。

「さあ、もういゝよ。」

汗知らずをまだらにはたきつけて貸本屋さんへ出かける――

貸本屋も御隱居處なのである。寒竹の垣根つゞきの細道を、寒竹の竹の子を拔きながらゆくと、屹度何處でか藪鶯が鳴いてゐる。カラカラと、辷りのいい門の戸をあけると、聲

ても喫かいよ」何にせ女人藝術の會といふと必ずお天氣はよいのである。泣き顔をしてゐたつて後では笑ひ出すのである。そこで小池みどり開會一番いきなり威張つちやつた。林さんピカピカ光る支那服をきてすまして壇上に立ち、「この支那服は臺灣からもらつてきた人絹の支那服で皆様にお目にかけようと思つて着てきました」。「臺灣では良妻賢母のはなしをしろと云はれました。私が若い時に讀んだソクラテスの哲學の中に禿の哲學といふのがあつて、全部つるつるにはげてゐてもはげ、一本か二本殘つてゐてもはげ、半分はげてゐても、少々はげてゐてもはげ、で、はげにもピンからキリまでありますそこで良妻にもピンからキリまであつて、私はいつも良妻ですが男が薄情で……」わあわあみんなはやしたてる。のぼせた芙美子さん、どうも皆ながあまりアヂつて下さるので喉がかわいて」土瓶の水をガブリとのむ。そこではあ一ぱいのみたいのかなあと推察する。名古屋の遊廓で苦しんで來た松村さん此度の講演會に出る樣に決つて復讐の時こそと非常に喜んだものの前借が少しも拂つてないので廓の暴力團がのりこんでこないかと心配しだす。ところが天我團は警察のお世話中、そこで皆な安心する。しかし少し心配なので警察と新聞社が保護をすることにきまる。織本さんの演說がロシアの國情の中に入つて行つた時に、はじめは文藝講演會なので出席しない筈の警官が多數臨席してゐたのが遂に論旨注意から中止となつ

石だけ殘して、いろとり〳〵な松葉牡丹が一面。軒下に下つてゐる鈴をならすと、切髮の綺麗な女隱居が出てきて、兩手を揃へて丁寧におじぎをした。

「妙々車」「淺間嶽」などが私の膝の前に高く積み重ねられた。私は幾度か見たものもあればまだ一度も開いたことのないものもあつた。小さな私が一心を魅られてしまつて居る時にこの二人の閑人——老婆がどんな話をしてゐたのか、思出すことも出來ない。

「これだけ拜借して、一日なら三錢でよいと仰しやつたよ。」

湯川のおばあさんは踊り道でさういつた。私の本の見方が、大人より大切にして、キチント座つて讀んでゐるのに、大層先方の老女が感心して安くしてくれたのだと、——それにしても、あんまり少額ないお禮に驚いた。

「宅にあるのを、みんな讀ましておあけなさい、お好なものを見せないなんて、わからない親御さんだ。」

さうも言つたのださうだ。けれどその家にはくさ双紙よりほかなかつた。

夕暮が來て、臭双紙にもあきると、おばあさんを誘つてまた田圃に出た。螢がチラホラ飛んでゐる。小さな棺を擔かした人がスタスタと辿つてゆく。前の堰では農具を洗つてゐる。鍬が暗にも光る——その側で、大きな瓜を二ッに裂いてゐる。

「この種をも一度蒔くので——熟れすぎたから鹽押しにするのだ。」

と敎へてくれる。三河島田圃の方の空が明るくて、賑やかな物音のする心地がすると、あつちが吉原だと言つた。晝間よりも、田圃みちを人が辿つてゐる。

谷中芋阪の名物羽二重團子がアンポンタンのお茶受けに好きだつた。その團子屋の近くは藤木さんの住居になつた家だ。腰障子の土間の廣い、荒つぽい枝組で、柱なんぞも太かつたが、簡素な造りで、藤木さんは手拭ゆかたを肩て、目鳥をおとりにして木立に小鳥籠

た。承知しない會衆の男性たちは立ち上つて、「警官横暴、やらせろやらせろ」けんけんごうごうみんな呶なり出す。と、どたどた跫音がしたと思つたら一人の警官が舞臺に飛び出して、芝居の留め男よろしく兩手をひろげて「帝國臣民の常識を忘れたか」と騒ぐ聴衆に對つてどなりかへす。おまはりさんの芝居をみた様な氣になつて面白がつちやふ。その後にのこのことゆう然と落ちついて出て行つた社長さんすまして大きな聲で「名古屋の聴衆の方は低級な野次を飛ばさないから嬉しい」とうまく野次封じをしてしまふ。「ほんとうに力を入れて大衆によびかけて行くのは女人大衆だと思ふのです。いづれ女人藝術と二つに分れて一つは文藝、一つは、」――「それはユトピヤだ」二階のすみから聲がとぶ。口惜しがつた社長さんくるりとそつちの方をむいて「空想は空想でも結構な空想だと思ひます」大きな聲でやりかへした。「人をくつてやがるな」廊下のすみにおいといた耳の中に感心した様な聲がとびこむ。社長さんがひつこむと女子タイピストリーグの百二十人の若い女性と、女人藝術の連中が後についた合唱の「全女性行進曲」がはじまる。松坂屋オーケストラ早川彌左衛門氏のタクトでみんながうたひ出す會場ゆるぐばかりに盛んだ。會後、大阪毎日支局の伊藤金次郎氏のごちそうでユニオンにゆく。それにゆく時松村さんを護る警官が二人、自動車までおくつてゆくと人々みんな、「おやけんそく」あにはからんやでおまはりさんにうやうやしく「どうもごくろうさま有難う」(みどり)

が幾個かかけてあつた。瑠璃の朝顔が大輪に咲くのを自慢した。

朝顔を見にいつた朝は、なんでも朝飯を食べていつてくれと夫婦していつた。それは私に代表させた私一家へ對しての、夫婦の感謝だつたのかも知れない。子供だけれど潔癖だからと、白い御飯を光るやうに炊いてだした。お豆腐の上に、まつ青な、香の高い紫蘇の葉がきざんで乘せてあるのが私をよろこばせた。

「妙なものが好きだ。」

夫婦は私のお膳の前にゐて、煽いでくれながらいつた。

「お豆腐のきらいなのは知つてゐるから、どうしたら好いかと心配したのだつた。青いものが好きだから氣に入るかと思つて――」

木の枝にかけわたした竹棹に蔓がまきついて、唐茄子が二ッなつてゐた。

「朝顔につるべとられて――、とかなんとかいふが、おやつちやん宅ぢやね、あれごらん、唐茄子に乾棹とられてだよ。」

藤木さんは秀逸らしくいつて、

「だけど、うんと大きくして、油町へもつてつたつて、こいつあ一個でもとてもあまるつて、あの人數でもうならせるほど大きくするんだ。」

「桃の中から桃太郎が出るから、唐茄子から何が出るか、あたくしやあ楽しみだよ。」

と湯川おばあさんがいつた。

「運えねえ、飴のなかから多福さんが出たよだ――さあさあ、これなる唐茄子から何が出ますか、代價は見てのおもどり――ハッ來た、とくりやあたいしたものだが、文福茶釜ぢやあるめえし、鍋に入れたからつて踊りだしやあしまい。」

藤木さんがそんな戯談をいつた時に、唐茄子の中にはひつてゐたものがあつたのだつ



海水浴の朝　　熱田優子

二科主催のアンデパンダンへ優子さんの繪を見にゆく。あつたぞ、海の繪と動物園の繪と。社長さんいつも奇想天外なカットを考へ出して書く段になると「優子さんブタの子がね、こういふ風に水をのんで」えつちらおつちら優子さんが書きあげると頭の中の繪とくらべてみて「でも繪畫だけある「でもだつてひどいわ」「でもチョン繪かきで、でもの下にゝがはひるのだから、でも繪かきぢやない。」動物園の繪うまいけどでも色調が弱いので少し損よこう注告しよ（みどり）

た。あんまり大きくなるが樣子が變だからと、庖丁を入れたら蛇が四ッに斷れて出た。

幾年か經つた。千葉の方にゐた私の母の妹が、藤木の家が氣樂だからと荷物をおいて宿にしてゐた。土佐の藩士で、造幣局に出て、失職して千葉の監獄の監守になり、後に裏濱で骨董商と金貸をした（虎と蛇の藥をもつて來た）人の細君だつた。――その時分漸く奉還金の殘りが公債證書で渡されるとかいつて悦びあつてゐた間柄だつた――氣むづかしい毒舌家の藤木さんが、一番氣のあつた女だつた。極く早いお茶の水の卒業生だつた彼女が學校を出て、大丸横町の岡田學校といふのへ月俸金四圓也で奉職したのは、私なぞの知らないころだつたが、わからずやの私の母は、妹が毎日袴をはいて大門通りを通り、近所の小學校へつとめに來られては肩味がせまいといふ理由のもとに抗議をもふしこんだ。そのためにあんなおぢさんのところへお嫁入りさせられたのだと、明治十何年か時代のモダン女性は、平凡に――あんまり平凡になりすぎた運命をよく嘆いてゐた。

ある日阪本に畫火事があつて、藤木さんは義妹の一人子を肩にして見物してゐたが、火勢が盛んなので義妹にも見せたくなつて呼びにかへつた。自分の見世物のやうに、勢ひよく燃えあがつてゐる火事を眺めさせてゐると、根岸の方に飛火があると騷ぎだした。とつて返して見ると見當がわるい、自分たちの方角だ。おやおやと駈けつけて見ると、住居の芽屋根が燃て、近所の人達が消てゐてくれた。

飛火は消えた。どうやら半燒――それも戸棚の中だけですんだといふので、狂氣のやうに家の中にはひつて見ると、戸棚の中味だけがすつかり燒けつくして――やつと、どうにかなりかけた藤木の品ばかりでなく、田舍からはこんで來た義妹の家財は一物も滿足なのはなく、一緒にして鞄へ入れておいてもらつた兩家の家祿奉還金の書類も灰になつてしまつてゐた。――（この項つゞく）



研究會挿話

窪川いね子

一

虎夫とおつやの研究會は順調に進んで來た。責任者である組合のAが幸ひ半年以上も捕まらずにゐたのである。何時からか彼は、表に出ない人間になつてゐたのだつた。たゞ一回、彼の病氣のとき休んだきりである。その間には、虎夫やおつやの全く知らない研究會が、Aの手に依つて同じ製紙工場のなかに三つも出來てゐた。

五月半ば過ぎであつた。その夜で、虎夫等は教程の「共産主義ABC」の上卷を終へた。本といふものに嘗て自尊心を持つたことのない二人にとつて、さすがにそれは一つの喜びだつた。

更めて膝の上に本を取り上げて、ぢつと見てゐたおつやが、虎夫を見上げて言つた。

「とう〳〵濟んだのね。」研究會は月二回だつたから、一月から始まつてこれで九回目だつた。

虎夫は默頭いて、笑ひながらAの方を見た。

「もう後の方はどし〳〵速くやれるよ。」Aは元氣を倍加するやうに言つた。

「もつと復習する暇がありやいゝがなあ。」

「え？　復習だつて？」Aが問ひ返すと同時に、小學生のやうな虎夫の言葉に三人とも聲を上げて笑ひ出した。髮の薄い、年に似合はず額の禿げ上つたAの顏と、三分刈りの眞四角な虎夫の顏と、耳かくし

でなく七三に分けて、太つた膝をきちんと坐り直したおつやの顔とは、互に見合つて嬉しさうにいそ〳〵としてゐた。

「お茶を上げませうか。」笑聲を聞いて、此の家の細君が梯子段の下から聲をかけた。

此の家の主人はAの知合ひであつた。おつやは細君の持つて來たお茶を自分で三つの茶碗へ注いだ。研究會の後でする相談も濟んでゐたが、一段落ついた形で、無駄話を始め乍ら暫く坐りこんでゐた。

「ぢや私さきい歸るわ。」おつやは本を風呂敷に包んで、二人に挨拶して先に起ち上つた。

虎夫は一緒に歸らうとして、彼女の挨拶に答へないでもぢもぢしてゐた。彼女が音のする梯子段をそつと下りかけた時、虎夫はAへ挨拶もそこそこに起つて行つて、彼女の後から呼びかけた。

「今日は山下の停留場まで一緒に行かう、山を越えて。」

Aは後に殘つて手帳を繰り始めてゐた。五六段下まで下りた虎夫は、敷居際へ首だけ覗かせても一度Aへ挨拶した。

研究會の場所が今度から變り、二人とも山を越えて行けば近道だつた。その場所から山へは直ぐなので、虎夫には山下の停留場までくらゐ二人で歩いても構はないだらうと思はれた。彼は自分の家を出る時、今日は思ひ切つて歸りに彼女の意見を聽いて見る積りだつたのである。二人は工事中の改正道路へ出て行つた。セメント樽や敷石や、張つてある繩を、透かし見しながら虎夫は先に立つて歩いた。赤いカンテラが處々地べたに置いてある。

虎夫はおつやにあつた二三回目から彼女を好きだと思つた。そして此の頃になつて彼女の意見を聽いて見たくなつたのである。その一つは自分が彼女を好いてゐることに就いて、彼女は自分をどう思つてゐるかといふことだ。然しそれは彼にとつて大した重要なことではなかつた。戀愛的な意味では好きでないと言はれればそれきりのことである。またさう言ふ意味で互に許し合つたとしても、これから手紙の往復を始めようとする譯でもなし、一緒に活動へ行つたり、逢引でもしようといふ譯ではないから。また結婚などは彼の年齢や現在の運動關係から言つて、少しも具體的な問題としては考へられなかつたから。

虎夫には初めおつやが好きになつたとき、戀愛的な氣持として感じられなかつた。二人の間の密接な、緊張した關係がその餘裕を正直な彼に與へなかつた。研究會の例ばかりでなく、文書などもおつやの職場へ入るものは、みんな虎夫の手から何等かの方法でおつやを通じてなされてゐたのである。虎夫が何よりも氣がかりに思つたのは、自分達の仕事が漸く形をなし始めた時に當つて、一層熱も興味も加はり、最も精力と注意とを要求されてる時に當つて、彼がそんなことに氣を使つてゐるやうでは、――おつやがそこまではつきりしなくとも、そのやうな態度に出はしまいかといふことであつた。彼は時々思ひ出したやうに自分に繰り返して見た。

「おつやさんはどう思ふ?」

二

山へかゝると二人は肩を並べて歩き始めた。虎夫の考へは彼女の前にそのまゝ消えて行つた。

時刻は十一時頃であつた。都會の初夏らしい淺黄の色に透き徹つて、更けはじめた星空の下に、山は黒々と青葉に蔽はれてゐる。山

全體が斜面をなしてゐて、昇つてゆく木蔭の闇は街の灯りを受けてそれとなく明るみ、濕りを帶びた空氣が頰をかすめる。二人は入口近くの石碑を右へ廻つた。ゆつくり運ぶ足にまだ着換へをしない袷の裾が重たく感じられる。

「なんだ、電燈一つ無いぢやないか。」虎夫は一寸立ち止まり、足元ばかり氣を付けてゐた眼を上げて、周圍を見やりながら言つた。山は櫻の名所で、公園風に少しは手入れがしてある。

「ほんとうね。こつちから省線の驛へ出る人は困つちやふでせうに。」

今來た改正道路からの入口には、驛へ近道と書いた掲示板が立てゝあつた。昇つて行くに連れて、頂の線の上に月代のやうに見え出した山の向ふ側の街の灯が、だん／＼濃くなつて、頂の僅かな平地へ出ると一時に眼の前に浮き出した。崖ぎわに沿ふた櫻並木の、崖の方に差し出した梢の青葉は、山下の灯りを脚光のやうに受けて映えてゐる。二人が柵を結つた崖の緣まで出たとき、虎夫が言つた。

「ちよつと見て行かうか。」

眼の下に高架線の驛のプラツト・フオームが見える。驛夫が一人ぽつんと掃除をしてゐる。プラツト・フオームの屋根の下からは、彼等の製紙工場がすぐ先に見える。二人の眞正面に當るコンクリートの建物の二階が機械部で、虎夫はそこに仕事をしてゐるのである。夜業の仲間が仕事をしてゐる。開け放した窓から灯りが流れ出てゐる。窓を人がかすめて通るのが見える。二人ともそこを注意して見たが何も言ひ出さなかつた。工場の電流の音が微かに響いてくる。製紙工場のすぐ裏手にあたる工場の白い煙突が、製紙工場の眞黑な煙突のわきに、水底の鯉のやうにほのかにひそんでゐる。

晝間は工場や煙突や長屋ばかしの、不揃ひな屋並を曝してゐる街の眺めも、全く姿を消して街を綴る灯だけが遠く河の緣まで續いてゐる。

「これでも夜見ると綺麗ね。」とおつやは言つた。

虎夫は彼女の話に應じないで、左手の遙か遠く、灯が夜空に岐阜提灯のやうに並んでるのを見てゐた。彼はそれが省線の次の驛であるのを發見して、暫くそこに眼を止めてゐた。虎夫はおつやに話しかけようと思つた。そして「又どう思ふ。」と自分に言つた。がその後は眺めに氣を奪はれて、ぼんやりした顏に夜の冷えた微風を感じてゐた。二人はたしかに十分以上そこに佇つてゐた。

虎夫は自分の肘に指が觸つたと思つた。振りかへると、

「何してるんだ。」立つてゐる見知らぬ男が低い聲を出した。

「……………」

男は鳥打に背廣を着てゐる。

「二人連れか？」男は言葉尻を心持やさしく上げて、一足ばかり離れて立つてゐるおつやに眼をやつた。

「え、さうですが……」虎夫は「この男は……」と分つて一時に不安に驅られ乍らも、自分の事ではないやうでおかしいと思つた。

男は虎夫の身體を見廻しながら次の言葉を考へてゐる風だつた。

「……僕は警察の者だが……」男は顎をしやくひ上げて言つた。

「ちよつと警察まで來い。」

「何ですか。」虎夫は撥ね返すやうに言つた。

「何でもいゝんだ。ちよつと來い。」

男はさう言つて歩き出しさうに身體を動かした。

虎夫は始めて後を振り返つた。おつやは柵を離れて眞面に二人の

方に向つて、風呂敷包を持つた手を後ろに廻し、ぢつと顎を引いて立つてゐる。虎夫は默つて歩き出した。
「お前も行くんだ」男は動かないでゐるおつやの方へ顎を突き出してさう言つて、彼女が歩き出すと、虎夫にくつ附いて先に立つた。
おつやは少し離れて蹤いて行つた。驛の方へは降りないで東口の急な石段へ出た。虎夫は電車道へ出た時、後を振り返つて見た。明るい電車通りへ出たので、自分が女連れであるといふことが彼の頭へはつきりのぼつて來た。
彼等は省線のガードの手前から、省線の石崖に沿ふた暗い細い道へはひつた。すると十間ばかり先に橋がある。男と並んで歩いてゐた虎夫は少し歩みを弛めて、橋へかゝつた時は二歩ばかり後になつた。橋は漸く三人並んで歩けるくらゐの幅である。虎夫は欄干にくつついて歩いた。おつやが橋にかゝらうとする時だつた。虎夫の横から白くひらめいて落ちたものがある。彼女はほつと安心した。男の背中をぢつと見据えながら、急いで本の風呂敷を持つた手を欄干の外にぶら下げた。そしてすつと手を放した。男は後を向かなかつた。行手に見える夜店の强い光がスポット・ライトのやうに射してくる。三人とも眩しさうにしながらも光の方へ眞直ぐに顔を向けて通りへ出て行つた。

三

寢靜まつた留置場の扉を外から叩くものがあつた。看守は肘をついてゐた机の上の鍵束を取つてぢやらつかせながら起ち上つた。まだ眠らないで退窟してゐた、一號の扉のきわの男はそつと寢床の中に身體を起して、金網の格子扉に顔を持つて行つた。
入口の扉が開いて、外から「これをお願ひします。」と言つた。
「何處からだい。」男女の二人連れを見ると看守はそんな風に訊ねた。
外から扉を閉めながら言つた。
「うん？ 山だよ。」
「山」は男女の二人連れの場合此處でははつきりした意味を持つた通り言葉である。格子扉ぎわの男の隣りも眼を覺まして、寢たまゝ小聲で訊いた。
「おい何だい。」
住所や姓名を調べられてゐる二人にぢつと眼を据えてゐた男は、そのまゝ顔を動かさないで、右手を上げて拇指と小指をくつつけて見せた。隣りはぐつと身體を起して、男のうしろへ身體をづらせて行つた。「ふん山で宜しくやつたな。」
「ちよいと好い娘だぜ。」前の男は隣りへ囁いた。其處に連れと並んで立つてゐる女は、格子扉の中のものには想像外であつた。ありきたりの女に見えるだけに、彼等には一層新鮮だつた。
看守は帳面の間に筆を置くと、パンと閉ぢて、腰かけたまゝ椅子を虎夫の方へ向き換へた。
「さあ、帯をほどけ。」
格子扉の男はそれをきつかけに、話相手になる口を切つた。
「旦那、今何時でせうか。」
「何？」看守は虎夫の襟を開いて覗いてゐた顔を、聲の方に振り向けて言つた。「何奴だ。寢ろ寢ろ！」その手に乘るかと据え付けた眼を、それから六角時計に移した。十二時十五分前である。
虎夫は先に調べが濟んで一號室へ入れられた。扉が開くとき急い

で毛布の中に身體を仰向けにした格子扉ぎわの男は、這入つて來た虎夫を自分の傍へ入れてやらうとして、身體を持ち上げて隣りへ聲をかけた。

「おい、そつちへぐんと押して少し開けてやれよ。」格子扉ぎわの男はまるで隣りがそれを拒むかのやうな調子だ。留置場では高等關係は別として、その部屋の巾利きが、生活範圍の廣い格子扉ぎわを占領してゐるものである。彼は一寸看視の方を見てから、虎夫の身體から何かを嗅ぎ求めるやうに、狎れ〲しく顏を寄せて言つた。

「君、こゝへ寢たまへ。」

扉がばたんと閉まつて錠がかゝると、格子扉ぎわの男は又起き上つて格子扉の金網へ顏を持つて行つた。

今度はおつやの身驗檢査である。

虎夫は毛布の中へ足を突つこんで見たが、寢ないで上半身を後ろの板壁に凭せて廊下に殘つてゐるおつやの方へ顏を向けた。彼は彼女と示し合はしておかねばならぬと思ひ、留置場へ入つた時からその機會を探してゐたおつやもすつかり帶をほどかされて、丹念に調べられてゐる。

「お前の家はどの邊だ?」

「製紙工場の裏の橋を渡つて、右へ行くと左へ這入つたところです。」

「腰巻の紐をほどいて、振つて見ろ!」

おつやは廊下の出口の方へ向きを換えて、開いた兩手に紐を持つて、腰を少しかゞめるなり粉土を浴びて羽虫を取る鷄のやうに身體ぢうをふるつた。その力んだ恰好を見て、虎夫の前にゐる男の顏は思はず筋肉が緩んで笑つた。彼女のその元氣らしい樣子は虎夫に落ち着いた親しさを感じさした。

おつやは留置場へ這入つて來るとき、たしかに風呂敷包を持つてゐなかつた。虎夫は彼女が本さへ持つて來てゐなければ、高等關係でないから必ず明日は歸されると思つた。山の上も彼女は後ろに本をかくしてゐた。橋の上で後ろを振り返つた時、おつやも欄干によつて變な歩きぶりをしてゐた。後から來たおつやが自分のやつたことに氣付かない筈はない。恐らくうまくやりおほせたに違ひない。やたしかにやつた筈だ。若し懷へ入れて來たのなら現在机の上になければならぬ。

おつやは一號の向ひの、保護室へ入れられた。彼女は格子にくつ付いてこつちに向いて立つた。虎夫は寢床に入つた格子扉ぎわの男と入れ代へに、片手を突いて格子扉のところへ身體を乘り出した。そして左手を口へ持つて行つて、人差指を一本唇へ縱に押しつけて納得させるように何度も首を縱に振つた。おつやもそれを諒解したらしく首を縱に振つて見せた。彼もまた口から手を離して默頭いて見せた。

虎夫は毛布のなかへ身體を割り入れた。そして取調べにどう答へたものかと考へた。結局は逢引に行きましたと答へるより他はない。たゞ彼にはさう言ふのが剛腹だつた。それには多少の實感が籠つてゐたから。

彼はまた工場のことを考へた。捕まつたことが何處からともなく知れる。噂が廣まつてゆく。それは安心だ。自分は此處を出たら直ぐ自分の考へを彼女に訊くつもりだ。そして噂の通りになつてゆくかも知れない。面白い。然し、若し家宅捜索をやられたら――今では大工場の職工と言へば鴉の目鷹の目の彼等である。口實を設けて

やつて見ぬとも限らぬ。虎夫は家に、文書は一枚も殘してないが、本が二三册ある。彼は新な不安に襲はれた。

虎夫たちの工場は去年の秋頃までは全く手さへついてゐなかつた。それが化學産業の目標工場の一つとして、Aが專任に組織を分擔して以來、漸く各職場に中心分子が作られて、その中心分子間の連絡も取れるやうになり、社長が會長をしてゐる懇親會を自分達のものにして、從業員一般の投票によつて役員をえらび、從業員の利益を圖るための機關たらしめるために、先づ會長以下、各職長をやつてゐる幹事等に對して辭職要求の運動が進んでゐるのであつた。そして虎夫とおつやは二三回目の研究會以來、歸りは注意して一緒に歸らぬことにしてゐたのである。

虎夫はAの顏を思ひ浮べた。高等關係になれば一言だつて自分は勿論喋りはしない。然し自分が彼等に注意されてゐるやうになることは、遲ければ遲い程自分達の仕事に都合がよいのだ。あの崖の上に長く立つて居過ぎた。Aは此の事を知つてどう思ふか。おつやは自分をどう思ふか。

二人を捕へた宿直の刑事は、上衣を脫いでシクラメンの鉢を置いた窓に向つて夜食の盛り蕎麥を食べてゐる。此の頃は一年中での暇な時節である。彼はあの娘は素人だと思つた。なか〳〵別嬪だ。明日鞫問になつて調べるのは惜しい。今から一つ說教でもしてやらうかと考へた。彼は胸衣から時計を出して見た。まだ一時にならない。彼は食べ終ると階下へ降りて留置場の扉を叩いた。

「遲くなつて濟まないが一寸相原虎夫を出してくれ給へ。」

虎夫は一日の勞働に疲れて鼾をかいて寢てゐた。

總選擧に對して

佐の京子

第五十六議會は解散された。選擧期日まで約一ケ月間、世をあげて、見よ！　いはゆる政治屋の狂態を！　聞け！　パーリアメンタリズムの魔女の歡宴の哄笑を！

「普選」最初の總選擧は一昨年の春擧行された。完全にプロレタリアートを拒否してゐたところの我が帝國議會が、初めて無産黨と名のつく八名の新顏を迎えた。以來二ケ年間、帝國議會に於て、無産黨の代議士諸君によつて何がなされたか！

第五十五議會に於ては八名の『無産黨代議士』は社民黨の四名の露骨な裏切り以外、他の四名の諸君は、まだ、社會民主々義者との明確な提携をなすまでに至らなかつた。しかるに第五十六議會に於ては、前議會に於て朝野の二大ブルジョア政黨が僅か一名の差で相拮抗してゐたのに反して、政民五十一名の大きな開きを以つて政府黨が優勢を確保した。この反動内閣のもとに、五十六議會がなしたことは、第一に支那問題、第二が我國未曾有の勞働者、農民死刑法、第三には、地租委讓、稅制整理、自作農創案等、「地方分權」とか「國民負擔の輕減」とかいつた農民及び小市民を欺瞞してブルジョアと地主の利益をはかるところの諸手段、更に尨大な戰爭準備の軍事豫算等々、すべて直接、間接ブルジョアジーと地主の利益ための切迫せる帝國主義戰爭のた

めの準備の問題に集中された。

　これらの問題に對してこそ、無產黨代議士諸君は、議會內で勞働者と農民のために、彼等と戰ふべき義務を有つものである。しかるに、第五十六議會に於ける八名の無產黨代議士諸君は、山本氏一人を除いて、完全に社會民主々義的裏切りを以つて答へた。院外の勞農大衆の意志から離れて「自由な院內共同戰線」なるものを作り、僅かに聲を低うして、ブルジョア政黨に體のよい注告を一言二言進呈したのみで、ブルジョア黨の尻尾に喰つついて合流してしまつたのである。

　ブルジョアと地主は歡喜した。政府黨も野黨も一樣に安心の胸をなでおろした。

　社會民主々義代議士の買收及び統一は、ブルジョアジーと地主——支配閥にとつては必要に應じて事もなげに、なしとげられてしまふといふ事を先づ第五十六議會は實證した。『普選』第一回によつて持ち來たされたところの帝國議會なるものが何であるか？　此の最初の短い期間に於ける、實踐的經驗によつて、プロレタリアートは學び初めた。

　帝國議會とは『帝國主義ブルジョアジーと地主との支配閥の利益のために、大衆を代表し且つ蹂躙する』——マルクス——機關である。既成二大政黨の政友會と民政黨とは、その機關の中で踊る三井三菱の二大資本閥を代表する第一の手代共の集りであり、阿部磯雄より、大山、に至るまでの社會民主々義者とは、既にブルジョア政黨には引きつけられない不平を持つ衆に、彼等の社會民主々義的行動或は××的言辭によつて、議會に於て勞農大衆の利益を獲得するかの如き幻影を與へ、大衆を議會にのみ引つ張り込み、結びつけんとするブルジョアジーの第二、第三の手代以外のものではない。

　今や、『普選』第二回の總選擧を目前にして、數多き代議病患者が、大衆の前に、大衆の利益を擁護し、大衆の利益のために戰ふかの如き一つの公約を與へつゝある。彼等の全部が、國會に送られるや、或は婦人に參政權を與へること、或は失業者の救濟の徹底を、或は減稅を叫び、米價安定といひ、勞農大衆の解放のために戰ふことをちかふ。

　きのふまでは、婦選運動屋の有閑婦人共の媚にすら一瞥をも與へなかつたところの代議士諸君が、今日は哀願を以つて彼女等の支持を乞ふ。或は經歷を以つて搾取して來たところのブルジョアジーの手代共が、プロレタリア婦人鬪士に、莫大な金を呈してプロレタリアートの一票を乞ふための、彼等の應援者たらんことを願ふ。

　だが、一度彼等が議會に現はれるや、婦人のために、勞農大衆のために契つた公約を實踐した例があるか？　否！　斷じて否！　僅かに、二大政黨の大立廻りの下つぱ役と化して、二三の黨主の顏色の如何によつて、或は立ち、或は坐る。或はオシャベリをし、ナグリ合ひの猿芝居を演ずる一陣笠となる。

　彼等が幾度議會に現はれようとも、世相は依然として、一昨年より昨年へ、昨年より今年へと、勞農大衆の生活の貧窮化はより深刻となるばかりだ。勞働者の賃銀が安くなるばかりだ。工場は閉鎖され、大衆的な失業者が街頭にあふれる。

　しかも「普選」とは婦人を完全に無視し、合計一千四百萬票のたつた七％ほどをプロレタリアートに分ち與へたに過ぎない。更に、選擧區選擧方法、言論、集會、結社、出版等々、婦人とプロレタリアートに對する政治的自由の極度の拘束、壓迫と懷柔と僞瞞と買收とを以つて充たされてゐる。

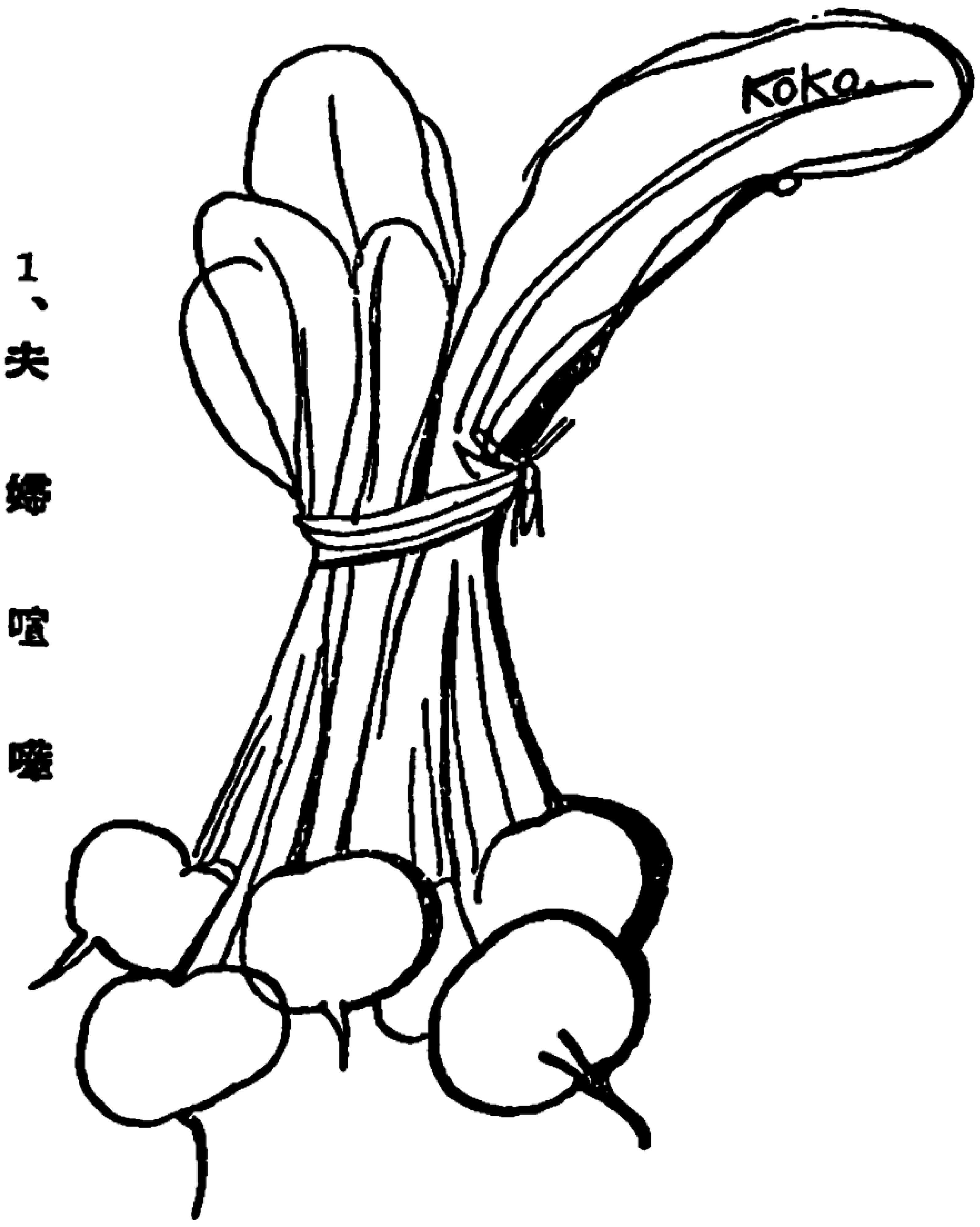
　プロレタリアの持つ一票は、ブルジョアジーの猿芝居を根底からペクロし、院外の勞農大衆と共に戰ふ決死的鬪士に投票されてこそ意義を有つものである。

　代議病患者の尻持ちと、參政權の獲得を御生大事とさわぎ立てゝゐる、ブルジョア有閑婦人と、社會民主々義プチ、ブル婦人の狂態をよそに、全國的に勞働婦人の上にのしかゝつてゐる、賃銀不拂ひ、賃銀の値下げ、失業の嵐に抗して、プロレタリア婦人は戰つてゐる。

　この戰ひから切り離れた參政權の要求をプロレタリア婦人は持たない。政治的自由——婦人の選擧權、被選擧權等——も亦、プロレタリア婦人を全的に解放するための手段として、戰ひの武器として、獲得する意義を持つのであるから、プロレタリア婦人の全的解放は勿論、政治的自由の獲得もブルジョア議會によつてゞもなければ、社會民主々義代議士を議會に送ることによつてゞもないことは云ふまでもない。

神宮裏斷片

八木秋子



1、夫婦喧嘩

暗い三尺露路の踏板をならして、日が暮れて歸つてきた覺さんが
「ゲーップ」――錫のやけるにほひ！
「やい！　このおそくまで、何處をほつつき歩いてたんだ。食(くら)ひ醉ひやがつて―― え？」
覺さんは地下足袋をばんばんはたきながら、「うむ！」と生返事。
「毎日まいんちおそくばつかり歸へりやがつて、あぶれたあなんて言ひわけだ。誰がその手を食ふもんか、やい、何處で飲んだんだ。」
「何處で飲まうと此所で飲まうと、俺の稼ぎでのむんだ。てめえに文句はあるめえわさ」
「え？　文句、よく言つたな、自家ぢやどんなやり操りしてると思つてるんだ。もうこれで幾日手ぶらで歸るんだ。やい留守にあ炭もないんだ、米だつてもう、ちつともないんだ、え、この腰ぬけ野郎さ、財布を出し、出しなつたら……」
「なにい、言はせときや、むやみと増長しやがつて、から見えたつてなあ、昔の覺さんだぜ、おい莫迦にすると、ために……」
おかみがばたばたと走りよる氣配！
「やい、財布、財布を出しな」
するりと亭主の腹かけから、抜かれたらしい。
「あッ、ペシャンコ、口惜しい！」
おかみさんの武者振りつく泣聲、つゞいてド、ド、ド……と根太

のきしむ音、肉體のはぢけるにぶい音。破れる皿小鉢。の中から――

――殺さば、ころせえ。あッ口惜しい、

「くやしいやあーい。」

　パタパタと戸外へ避難する餓鬼ども。そとから十七歳になる長男(親爺の仕事の相棒)の聲がきこえる。

「また始まつた、年げえもねえ。おい、いゝ加減にきりあげな。みつともねえやな、全く、手もつけられやしねえ。おい、おいつたらよう。」

　そして長男は尙も叫ぶ。

「飮んでけえるのはたしかに親爺がわるい。おい、おつ母あ、だがけふは親爺たしかにあぶれたんだ。この俺が眼で見てきたんだ。さつきもいつて聞かせたぢやねえか、おい、やめなつてば、よう」

　中では一層はげしい爭鬪の音。

　表通りで人の話ごゑがきこえ、薪屋、鉞力屋、棟梁の顏がならんでくる露路。

「おい、覺さん、何だその態あ。每度のこつたから默つてやうと思つたつて、うるさくつて仕樣がねえぢやねえか、ちつたあ近所隣りの迷惑つてことも考へろよ、全く……」

「やかましいつてありあしない。だいち餓鬼どもが可愛さうぢやないか、こんな一人めえの息子の手前、ちつたあ恥かしいと思ひさうなもんだ、え?」

覺さんのこゑだ。

「いや、實際面目ねえんです、ですが、何んしろこの阿魔が、全く鬼のやうな奴なんで。もう、とても……」

「判つてる、全てえおかみさん、おめえがよくねえんだ。女房なら女房らしく、ちつたあ優しい面の一つも見せたらよかりさうなもんだ、子供が可愛くねえのか?、え」

「旦那がた、あたしやふんとに口惜しいんです、我慢出來ないんです。あぶれた、あぶれたなんて、この野郎……」

　女の兒が町子の家の前にきて、彼女に話す。

「かあちやんが惡いんだよ、あたい、ちやんと知つてるの。ね、おばちやん、うちの母ちやんね、もうせん喧嘩したとき、お酒の罎にこんなにたくさん、半分ほどもはいつてたお酒をね、くやしい――ッつてね、投げつけたの、罎が七輪の角で割れて、お酒がみんな流れちやつたのよ、あとで父つちやんが泣いてたわよ」

「ひどいのねえ、ほんとに」町子がくすつと笑つた。

「そしてね、父つちやんが醉つて歸つた時買つてくれたお人形をね、いきなり首をもいぢやつたのよ」

　あくる日、天氣のいゝ朝、廂と廂の間に見える靑い空。あぶれた覺さんがめづらしく早く歸つて、地下足袋を干してゐる。

「けふは旗日かね?　小谷さん」

　町子は覺さんの顏を見て、可笑しい。

「毎度どうも、おやかましう。お隣りぢや御迷惑だあね、な、おい」

おかみの顔がふり返つた。

「いやだね、このひとさ。だがね小谷さん、この人の酒の相棒がよくねえのさ、わたしや、近いうちにそいつんとこへ、捻じこんでつてやらうかと思つてるの」

「いつてら。だつてわたし等いつも上の者に頭ばつかり押へられてるからね、うちへ歸つて女房と喧嘩するなあ、まあ、永いきの藥だと思つてね」

そこで町子たちは、朗かに笑ひ出した。

2、嬰兒が生れた

露路に一錢ろうそくの灯がちらちらしてゐる。ザク、ザ、ザ、ザ‥‥カーン。

「もう、それくらゐで可いぢやないの」

駄菓子屋のおかみが、ガチガチ慄へて、穴をろうそくで照らした。

「おかみさん、手がつめたいでせう。あたし替らうか。どうでせう、この霜、外は眞白だわ」町子は袖をかき合せた。

植木屋の下職の圭さんはスコップの手をやめて

「さあ、これでよしと‥‥」

「結構よ、此所へうめときや大丈夫！」

「さうよ、胞衣なんだものね、よく油紙で包んどきや、犬だつてめつたに掘り返へしやしないことよ」

町子はさういつておかみに「あ、ちよつとあたし、うちへ行つてくるわね、取りにゆくものあるの」

彼女は押入の中をかきまはして、米を新聞紙に包み、鯵の乾物の殘りをぶら下げて暗がりを來た。

「どれ、どこにゐるの？　赤ちやん」

「おお寒い、まあ見てやつて頂戴よ、ほら！　こんな生意氣な顔してさ」

若い母親はすつかり委せきつた寢顔。見ちがへるほど美しい、白くすき透つた顔に、ほんのり赤みがさしてゐる。

「何もかも、みんな近所の御厄介だ。こんなに大勢寄つて貰つて、こいつあ仕合せだあ」

圭さんはむやみに粉莨を煙管につめながら、ちよい〳〵女房の寢顔を見る。

「圭さんつてば、おかみさんの顔ばかりみてさ、ちよつとは赤ん坊の方も御覽な」

何處かで一番鷄が啼く。

3、『金』

もう蚊が出た。

町子が夕刊をひろげてゐると、うしろの崖下で何かガヤガヤ聲が

する。

「おかみさん、井戸端でお米炊いでゝおつことしたんだらう？ だから、流しから此所んとこの溝へおつこつたんだよ、此所になきや、どこにあるんだ」

「さうとしきや思へないわねえ、ほんとやんなつちやうわ」

「一體いくらなの？」

「五十錢玉が二つに、それから……バラ錢が、いくつだつたかしら。あたしやどうつてこたあないんだけど、親爺が歸つてきたら、とてもやかましいんだものね」

覺さんのおかみは、そわ／＼して溝のまはりを歩いてゐる。遊園扇をもつた長家のおかみ達が、ぞろぞろ集まつてきた。

空は夕やけだ。豆腐屋のラッパが長家をのぞきこむ。

「何だ？ 金おつことした。溝さらへすれあ、世話ねえぢやねえか。おい、おめえこの辨當箱もつていきな、どう、そこどいて……」

働きから歸つたばかりの俥屋が、スコップを泥溝へづぶりと入れた。町子が小暗くなりかけた廂に、コードをのばして電燈をかざした。

「見える？」

「や、これあありがたう。どうだかなあ、みつかるかな」

覺さんのおかみは、蹲んで、掬ひあげた泥を兩手でかきまはしてゐる。

子供たちが輪まはしで、大人のまはりを喜んで走りまはる。

「うちの前ばかりに泥をあげられちや困るぢやないか、横暴だよ」

「お互樣だあね、嫌な顔するこたねえやな、俺達だつて何も好きこのんでやつてるわけぢやありませんよ」

代書人の原田にいひかへした。原田は一寸てれて、呟いた「日當も出やしまい！。御苦勞なこつた」

原田はいまいまし相に、泥溝から這ひ出るみみずを踏みつぶした

「まあまあ、原田さんにしたつてから積みあげられちや迷惑さね。一體何だらう？ どぶさらひつてな大家がすべきもんだらう」

「さうともさ、全體大家はふだんからケチなんだからね、金ばつかり取る勘考してさ、薄情ぢやない？」

原田は早速進み出た。

「全く、さうです。僕あ、ふだんから言はうと思つてたんだ。井戸料を十錢づゝ取つてて、何してるんだ、一體。以前にわたしやこの泥溝を三圓で大家から請負つて土管を入れたんです。本當は四圓かゝつて損したもんだから、大家へねぢこんだ所が、あゝだからだつて拂はないんだからねえ、實に怪しからん」

「さうですとも、旦那のいふとほりよ、こんな大家つて何處にもありやしない」

「何ですつて！」

篠竹の伸びた大家の二階の簾がうごいて、奥さんの顔が出た。「聞

えよがしに、何いつてるんですか？　さつきから言はせときや勝手な熱ばかりあげて、わたしやもう我慢にも默つちやゐられない、月々の家賃さへきちん〳〵納めてさへくれりや、こちらだつて、するだけのこたしますよ、文句がいへた義理ですか、ほんたうに。ひと莫迦にして」

「何ですかね、ヒス…ヒス…」

おかみ達が顔見合せて、首をすつこめた。

「そんなとこで愚圖々々いはずに、文句があるなら堂々とうちへ來て仰有い。今に宅も歸つてくるから。いけずう〳〵しい」

大家の退役少佐がそろ〳〵歸つてくる頃だ。

4、立ちのいた先

「今晩は、今ばんは…」

圭さんの家。棟梁の平田と町子が恰度居あはせた。

「大家だ！」三人はこそ〳〵と臺所へかくれる。

「はい、どなた？」と町子。

「おや、あんたあそびに來てたんですか、此所の人達あ留守なんでせうか」

「え、ちよつと…何か御用でも？」

「實は家賃の事なんですがね、留守だとすると…」

「溜つてるんですか？」

「えゝ、もう八ッですからね、尤も敷金が三つでしたから、都合五つの勘定なんですが、實にどうも、圖々しいんで、いくら催促しても、駄目なんですよ」

「圭さんも近ごろ、仕事はなし、だいぶ困つてるやうですわ」

「といつて、見込みのない人間に何時までゐて貰ふわけにも行きませんからね。今夜は一つ談判のつもりで…」

大家はじろりと縁ちやけた疊を見まはす。

「あんたからいつてくれませんか、この話で來たつてことをね」

「さうね、でも、圭さんは立退き料でも貰はなけれあ、どうにも動けないでせう」

「飛んでもない、これだけ倒された揚句、そんな無茶な話つてあるもんぢやないですよ」

「兎に角、いま留守なんですから、いづれ…」

大家の跫音が露路の向ふに消えた。

「莫迦にしてやがる。こつちとら、いくら拂ひたくつても、どうにもならねえんだ」

と、平田が顋をなで、

「なあに、お互様だあね、俺だつて四ッだい」

ある朝、大家の奥さんが、町子を呼びとめた。

「ちよいと、圭さんのおかみさんつて、存外いけ圖々しいんですね、立退き料をいくら出すつて言ふんですよ、呆れましたね」

「どんな話になりましたの？」
「それで、あなた、とに角あすあさつてのうちに早速立退かせる事にしたんですよ」
町子は洋傘の先きで、ポンと石ころを彈いた。
「お宅ぢや、井の頭に素晴しい家を新築中ですつてね」
「ええ、何ですかね、‥‥かういふ所ぢや子供の教育のためによかありませんものね」
神宮の玉垣の長い石崖の下を夕方町子が疲れきつて歸つてくると、露路に子供達がさわいでゐる。
「あら、坊や、お前んとこ、今朝ひつ越したはずぢやなかつたの？」
赤ん坊を背負つた圭さんのおかみが、平田の門口からにこ〳〵して覗いた。
「此所へ引越して來たわよ」
「‥‥‥‥‥？」
「平田さんとこへ同居なの」
「あら！ あら！ 妙案ね」
「またこれからも、お願ひね」

5、女房を積んだ荷車

「なか〳〵手間どれるわね、拂ひでもしてるんぢやないかしら」
「あら、施療ぢやないの、一文も要らないんだらう」
町子は病院の裏出口におかみさん達と佇んで、いつか見舞つた時の病室を思ひ出してゐた。看護婦のつめたい顔も——。
「おや、掴まつてたら、こんなに手が眞黒になつた」
「いやだねうちの人、慌て者なもんだから炭の粉を拂ひもしないでさ、薄團がよごれちやうからね」
新屋のおかみは風呂敷で、パッパッとはたいた。大八車のそばに、夜露にぬれた菊がまつ盛りだ。
「人間も死んだら詰んないわね、こんな大八に乗つけられて佛様で家へ歸るなんて‥‥。死ぬ者の損よ、ねえ」
そこへ、産後の腹膜で死んだおかみが薄團に包まれたまゝ、亭主と新屋が擔つて、ぼそ〳〵と出てきた。
大八車が屍體の重みでギイと軋つた。
「可哀さうにねえ、お内儀(かみ)さん、こんな姿になつてねえ、ちよつと顔だけ拜ませとくれよ」
「莫迦！ 提灯つけろ、家へ歸つてからで可いぢやないか。さ、鉞力屋さん、梶棒あげるぜ」
菊がゆらいだ。車が砂利の上を動き出す。
「みんな、遠い所を濟まなかつたね‥‥」
いい月だ。車を取巻いて、子供を背中にしばりつけた女達が、裏參道を歩いて行く。



フローラ夫人と女婿ポンツア氏

ルイデ・ピランデルロ作

下位文子譯

しかし、兎に角、想像してみて下さい。全く自分が氣狂にならざるを得ないことなのです。誰だつて、二人の中の何方が氣狂なんだか、あのフローラ夫人か、それとも婿のポンツア氏なのか、分らないのです。呪はれの町、バルダナに起つた事件は、全く、酔狂な他郷者の心を引つけるに足るのです！

彼女が氣狂か、但しは彼が氣狂なのか、それに就ては皆目見當がつかないのです。が、是が非でも二人の中の一人が氣狂でなくてはならないのです。この事實を置いては、どうにも取扱ひ兼ねる事件なのです…が、いや、そんな事は兎に角として、先づ順序を立てゝお話した方がいゝでせう。

眞面目な話ですが、私も疑惑に苦しんでゐる者なのです。私ばかりではありません、三ケ月來といふものバルダナの人達も同様の惱みの中に生活してゐるのです。尤も私にしてみれば、フローラ夫人にしろ、その婿のポンツア氏にしてからが、何の交

渉もないわけです。もしあの人達の身に振掛つたひどい不幸が本當の話ならば、その二人の中の一人が、少くともその不幸から氣狂となる運命を持つてゐて、相手がその人を庇つて來たのだといふ事は本當でないとは云へないのでして、つまり二人の中の誰が、實際に於て氣狂なんだか分らない位に正氣の人間が氣狂になつた相手を絶えず助けてゐるつてわけなのです。確に、それに優つた慰をお互に與へあふといふ事は出來なかつたのです。しかし只かういふ事を申上げて置きたいのです。この不安な氣分の中にその町全體が――あなた方にはさうまでお考になれないか知れませんが――幻影と現實との區別(けじめ)が、最早つき兼ねるまでに判斷に對するすべての思慮を失つてゐるといふ事です。一の疑惑、絶えざる恐怖。誰も彼も、毎日、此二人に出會つてゐます。その顔をぢつと眺めてもゐます。二人の中の一人が氣狂だとは知つてゐます。あれこれ考へてもみ、索つてもみ、後をつけてもみます。駄目です。二人の中の誰がさうなのだか、又何處が現實で、何處が幻影なのかそれさへも發見する事が出來ないのです。自然、誰の心にも有害な懷疑が生じてくるのです。現實といひ、幻といひつまりは同じ價値のものであるとか、あらゆる眞理も幻影であり得るし、又その逆も云ひ得るといふやうな疑が湧いて來るわけです。如何でせう、さうではありますまいかしら？ 假りに私が知事さんになり代つたとすれば、兎に角、バルダナ町民の精神安定の上から、フローラ夫人並に女婿のボンツア氏に退去命令を出したかも分りません。

併し、順序を立てゝお話をすゝめてゆきませう。

このボンツア氏はバルダナに、彼此三月前に轉任してきた縣廳の書記官なのです。そして、その町の出端(でばな)の俗に『ファーボ』と云はれてゐる大きな新しい建物に落付いたのでした。あそこなのです。あの一番上の一廓です。畑を見下す、丈の高いそして陰氣な――といふのはその正面が北向であつて、蒼白い野菜畑の上に向いてゐるせいでせうが、新しいにも拘らず、何故こんなにまで陰氣臭いのか分りませんが――三つの窓と、中庭に向いた内側の三つの窓とがあつて、この窓には張出しの手摺が廻されてゐて、目隠窓で仕切られてゐます。この手摺から澤山の籠が釣り下げられて、必要の度に紐で下される用意が出來てゐます。

しかし、同時にすべての人の驚異の中に、ボンツア氏は町の中央に、さうです、聖街(ヴイア・デ・サンチ)十五番に、もう一軒別に三部屋に臺所の付いた造作一式附の家を借りました。噂によると、それは姑のフローラ夫人のために借りられたに違ひないのです。

事實、その夫人は五六日後に到着しました。で、ボンツア氏は彼女を出迎へにたつた一人で停車場に出かけて行つて、夫人を案内して其處へ只一人殘していつたのです。

差當り了解される事は一人の娘が結婚して、他所の町にいつてる良人と同棲する所から、母親の家を出て來てゐるといふ事です。所

が、この母親が、その後、娘から一人離れてゐるのに堪へられないで、國を離れ、家を離れて娘の後を追つて、娘同樣彼女も他所者である町で、一軒別になつて暮してゐる、といふ只この事が簡單には腑に落ちかねるのです。云ひ換へると姑と婿との間に、かうまで烈しい矛盾、つまりかういふ狀態で同居の全然出來ない事があるのかと考へないわけにはゆかないのです。

自然、バルダナでも最初はこんな風に考へてゐました。その爲にすべての人の氣持に、信用を落してゐたものは、ボンツァ氏であつたといふ事は確なのです。フローラ夫人に就ては、或者は恐らく彼女の頑固な點か、乃至は愛情の缺乏といふ點で、彼女にも幾分その罪があるのだらうと肯定してゐるものもありますが、すべての人はよしんば娘と一緒に生活する事が出來ないやうに宿命づけられてゐたにしろ、彼女を娘の傍に近附けて來た母親としての愛情といふものを思ひやつてゐたのでした。

十中八九はかういふ思ひやりをフローラ夫人に持つてゐたわけでして、すべての人の心にボンツァ氏から印象づけられた直觀では、彼が邪慳な、むしろ殘酷的な男に思はれてゐたのですが、この二人の容貌に就ても一通り申上げねばなりますまい。づんぐりして猪首で、まるでアフリカ土人のやうに眞黑で、猫額の上に濃い、硬い髮の毛がたれて、眉毛は兩方から續き合つてゐて、巡査のやうな美髯を蓄へて、殆ど白眼のない位黑い、座つた眼には、激しい絶望的な何物かゞ見えて、それが他人の視野を避ける爲なのか、深い惱みのためなのか分りませんが、兎に角、ボンツァ氏は確に、信用とか、同情とかを得るやうには出來てゐませんでした。それに引換へて、フローラ夫人は中老のやさしい華奢な蒼白い人で、容貌のおだやかな貴族的な、そして憂鬱な感じのする人で、尤もその憂鬱も重味のない、朦朧としたものですが、他人をそらさぬ愛相のいゝ人でした。

この自然的な愛相のよさで、フローラ夫人は、間もなくその町に一の燈明を立てる事になつたのです。彼女のためにあらゆる人の心の中にボンツァ氏に對する反感がつのつて來ました。彼女の和やかな、從順な辛抱強いのみか、婿が彼女に仕向ける惡意に對しても淨罪的なあきらめに充ちたその性質が、誰の心にもはつきり分つて來たのです。そしてそんな所からボンツァ氏がこの氣の毒な母親を別の家に住はせてゐるばかりか、生の娘と逢ふ事さへ拒むやう殘酷な事を振舞つてゐるといふ事まで了解されて來たのです。

然し、フローラ夫人がバルダナの夫人達を訪ねると、何はさて置いても、『殘酷だなぞと、そんな事が御座いますものですか』と華奢な手を差延べて言ひ張るのです。實際、婿の事に就て考へさせられるのをひどく苦痛げに見受けられるのです。そして彼のいゝ性質はすつかり賞めそやし、あり得べく想像される長所をも話さうと力めるのです。何れ程の愛情を、何れ程の心配を、何れ程の心遣ひをあの

男は娘に、それどころか彼女にもその心遣ひとか、非利己的なものを持つてゐてくれた事でせう。假りにも殘酷だなぞと言へませうか。それは只これ丈のことに過ぎないのです。ポンツア氏は可愛い妻を全然自分のものとして、彼女が親身の母親に對して持たねばならぬ愛情までも、或點まで自分のものにしたいといふその事なのです。その愛情は直接ではなく、彼を通して、彼を仲立として母親に投げられる事を望んでゐるのです。さうです、殘酷に思へるかも知れません。が、一面かうした事もあるのです。彼女が、フローラ夫人が極めて善意に解釋して、言葉付にも現れないやうに努めてゐるといふ事です。けれど、それは自然なのでせうか……いや、恐らく一種の病氣ではありますまいか、論より證據、彼の目を注意してみれば充分です。あの眼が初對面の折に、不快な印象を殘すのです。しかしその眼は彼女のやうな、その中に隱された何物かを讀み得る人には、すべてを物語つてゐるのです。彼の封じられた愛の世界をはつきり語つてゐるのです。妻はその世界から束の間も、一足たりとも外へ出る事なくて、其處で生きてゆかねばならないのです。そして其處へは如何なる者も、たとへ母親であらうと足踏みしてはならないのです。嫉妬？　恐らくさうでせう。しかしそれは世間並に獨占的な愛と解釋しての事です。利己主義？　しかしそれは普通一般の自分の女に總てを求める利己主義といふべきものでせう。結局、その利己主義も、恐らくこの鎖された愛の世界を無理からせしめて、無理にも其處へ割込まうとする彼女の利己主義ではありますまいか。彼女が娘の幸福な事や、愛されてゐるといふ事を知つての上で、……それも、母親の身としたら無理もない事かも知れません！　たゞ然し、彼女が自分の娘に會はないといふのは決して眞實の事ではありません。日に二度や、三度は娘に逢つてゐるのです。其の家の中庭に行つて、鐘を鳴らすと娘は直に上の方から顏を出すのです。

『チルヂーナや、お前、變りはありますまいね？』

『えゝお母樣、とても丈夫ですわ。お母樣は？』

『お蔭で變りはないんですよ。さあ、籠をお下し！』

その籠の中にはその日の便りとして簡單な手紙が這入つてゐます。只それ丈で彼女は滿足なのです。かうした生活がはや三年越しに續いてゐて、フローラ夫人はすつかりそれに慣れ切つてゐるのです。言はゞ諦めてしまつてゐるのです。そして殆んどもうそれを苦にも病んではゐないのです。

フローラ夫人のこの諦めと、彼女が殉教の思ひでやつてゐると斷つてゐるこの習慣とは彼女が長談議で彼の辯解をしやうと苦しめば苦しむ程、それが反つて婿のポンツア氏の責任に歸着する事は容易に首肯かれる事です。

ですから、初めてフローラ夫人の訪問をうけたパルダナ町の奥さん達は全く怒に燃えて、私は恐怖にかられてと言ひたいのですが、

その翌日、差支へなくば『一言申上げねばならぬ辯明』のためにほんの二三分間、お耳を拜借したいといふボンツァ氏の思ひ設けぬ訪問の挨拶に接するのです。

　ボンツァ氏の顔はすつかり充血して焔のやうに火照り、不斷より一層かたくなり、一層憂を帶びた眼をして、ワイシャツの袖口や襟(カフスカラー)と共に手に握つた純白のハンケチが、黒い膚や毛髮や衣類と對照を作つて、彼は斷えず、猫額や紫色の兩頬から滴る汗を拭ひ拭ひしてゐるのです。しかし、それは決して陽氣の加減ではなく、懸命な努力からくることで、その爲には太い指の延びた爪までが慄へてゐるのです。こんな調子で、その部屋で、殆んど怖氣付いて彼を凝視してゐる夫人達の面前で、先づ前日、姑のフローラ夫人が彼女達を訪れたかどうかを尋ね、續いて苦痛と努力と次第につのる焦燥を以て、彼女が娘の事に就いて話したか、又彼が夫人に對して娘と合ふ事や、娘の家に來る事等を絶對に拒んでゐるといふ事を話したかどうかを問ひ訊すのです。

　婦人達はかうした彼の焦燥をみて、容易く想像もつく事ですが、から彼に即答をするのです。フローラ夫人は――それは眞實の事ではありますが――彼女達へ娘とあふ事を止められてゐる事に就いて話はしたもの丶、ありさうな又想像される彼の善良な點は悉く、彼の辯護とも思はれる位に言つて聞かせたばかりか、この彼女へのさし止めそのものに對しても、何等非難の影さへも彼には考へてゐないのだといふ事を答へるのです。

　だが、この夫人達の話を聞いて、ボンツァ氏が冷靜に返へるかと思ひの外、彼は益々苛立つてくるのです。彼の眼は一層堅く、一層座り一層憂はしげになつて來ます。玉のやうな汗は益々ひどくなり、そして最後に、非常な努力を加へて『言はねばならぬ辯解』に及ぶのです。

　それはかうなのです。簡單に言へばあはれなフローラ夫人は一見さうとは見えないが、實は氣狂なんだといふのです。

　彼女は四年越の氣狂なのです。全體彼女が發狂したのは彼が彼女に娘をあはせないと思ひ込んでしまつた事から起つたものなのです。娘とは？　四年前にその娘は死んでゐます。その死といふ悲哀からフローラ夫人は正しく精神の錯亂を來したのです。幸と云ひませうか、氣狂になつたのです。さうです、發狂は彼女にとつて、絶望的苦悶の逃避なのでしたから。さもなかつたら自然の結果として、その苦悶から救はれなかつたのです。つまり彼女の娘が死んだのは本當でないとか、彼が彼女に娘を逢はせぬやうにしてゐると信じる以上はです。

　不運者に對する慈悲的義務のため、彼ボンツァ氏は四年來、身に餘る犧牲の數々を拂つてこのあはれむべき狂女に盡して來たのです。彼の力には過ぎた暮しを立て丶、二軒の世帶、一軒は自分の爲、一軒は彼女のために張つていつてゐるのです。そして二度目の

妻を強要して、幸な事にこの婦人も快よくこの狂女のために盡してゐてくれるのです。併し慈悲とか、義務とかある點まではあるかも知れません。たゞ官吏としての資格の上からいつて、ボンツア氏はこの町で、彼のこの殘酷なといふ、又あり得べからざる事を信じきられるのを默認する事は出來ぬわけです。まあ云はゞ嫉妬とか、その外の事で氣の毒な母親に生の娘を逢はせぬといふやうなことを。

ボンツア氏はこんな風に話し終ると夫人達が茫然とあつけにとられてゐる中を、會釋して出てゆくのです。しかし夫人達のこの驚異が幾分なりとも靜まる暇もなく、改めて又、フローラ夫人は顏を出すのです。摑み所のない憂うつに沈んだしとやかな物腰で、若しや彼女の事から人のよい夫人達が婿のボンツア氏の訪問で、何か吃驚させられはしなかつたかと詫び旁々來るのです。

フローラ夫人の方では極めて、卒直に而も自然的に話出すのです。しかしボンツア氏が公職についてゐる所からひどく氣兼ねをして、全くこの事に對しては最初はそれを言出す事さへ避けてゐたのです。何故といふまでもなく、こんな事は彼の履歴に傷をつける恐れがあらうからです。氣の毒なボンツア氏——至極溫厚な、その縣では異論のない立派な書記官であり、人物であり、行動の點から云つてもあらゆる判斷の點から云つても決斷的で、善良な性質のみを持ち合せた男なのですが、只一つこの點で、どうとも辯明の餘地がないのです。氣の毒な事ながら、氣狂は彼なのです。そして彼の發狂といふのが、全體からいふ事に據つてゐるのです。彼の妻が四年前に死んでしまつたのだと思込んでゐる事と、フローラ夫人こそ氣狂で、夫人は今も娘が生きてゐるものと信じきつてゐるといふ事などです。いや、彼はそれをそんな風に言つて他人の前で、彼の殆んど氣狂染みた嫉妬や、彼女に娘と逢ふなといふ殘酷な止立を辯明しようとするのではないのです。確に、不仕合な男は彼の妻が死んで、現在連添ふ女は後妻であると信じ切つてゐるのです。恐らくこれにまさるみぢめさがありませうか！ 何故といつて、實際、この男は彼の人並外れた愛情で、若い貞淑な愛妻の健康を損はせ、危く殺す所であつたのですから。そんな事で愛妻を彼からこつそり引離して、彼の氣のつかぬ療養院に入院させて置かねばならぬはめとなつたのです。氣の毒にもその男は戀愛狂の結果、頭がすつかり狂つたその爲に發狂してしまつたのです。確に妻が死んでしまつたと信じてゐるのです。そんな考が彼の頭にしつかりこびりついてしまつたので、約一年後になつて以前のやうな健康體で妻が戻つて來ても、最早、彼の頭からその考をとりのけるわけには行なかつたのです。娘が別人だと思ひ込んでゐたので、親戚やら友人やらの世話で、二度目の結婚といふやうな事にしたのですが、それが彼に充分に腦力の均勢を與へたわけです。

今では、フローラ夫人は、少し前から婿が正氣に返つた妻を全く自分のものになしきる爲に他人との接觸は一向許さず、恐らくそれ

に絶えず彼の心に浮ぶ不安、又しても彼女が人知れず奪はれてしまひはせぬかといふ心配から、妻の後妻である事を信じてゐるやうに扮ふてゐるのではあるまいかといふ疑點の種となるものを持つてゐると思つてゐるのです。或はさうかも知れません。が、若し彼が現在連添ふ女が後妻である事を確信してゐるなら、彼の姑に對する至れり盡せりの世話や、心添へやらは一體、どんな風に說明したものであらうかと思へます。事實上最早姑でもないものにこれ程の心遣ひをする義務を感じなくてはならぬものでせうか。兎に角、フローラ夫人はかうした事を話すのですが、要するにそれで氣狂は彼だといふ事をはつきりと證據立てるのではなく、彼の疑惑の基く所を、彼女自身になり代つて證を立てようとする爲なのです。

『まあかう云つたやうな事で御座いまして――口の邊りに淋しげな微笑を湛へてゐるが、その奥からは嘆息を洩らしながら言葉を切つて――可哀相に娘もその女でもないやうな素振りを致さねばなりませんし、私と致しましても、よん所なく娘が未だに生きて居りますやうに思ひつめてるやうな風を致しました、氣狂じみた事を致さねばならないので御座います。でもお蔭様で、娘も丈夫で、暮してゐてくれますので、私と致しましてはちつとも苦にする所はないので御座います。逢つても居りますし、話も致して居ります。まあ、娘と一緒に暮せませんのも、遠くから娘の顔を見ながら聲をかけますのも、皆前の世からの約束事で、あの男に致しましてもその方が娘が死んでしまつたものと信じる事が出來ませうし、信じたつもりにも致す事が出來やうかと存じます。それはそれとしまして、若しこのまゝで二人共氣樂にさせる事が出來ましたら、さぞ仕合せな事で御座いませう。娘に逢つて話を致しまして、娘が可愛がられて、樂しく暮して居りますのも存じて居ります。かうした暮しをして居りますのも、氣狂のまゝで通して參りますのも、辛い事では御座いますが、あなた、婿や娘可愛さに諦めてゐるので御座います！』

× × × ×

今更云ふまでもなく、パルダナに於て、其處の何もかもを莫迦げきつた事に眺め、而もなほあいた口のふさがらぬやうな事がないと云はれませうか。二人の中の何方を信じたらいゝのでせうか。誰が氣狂なのか。何の點が現實で、どの點が幻影なのでせうか。

それについては只、ポンツア夫人のみが答へ得る筈です。が、それも信頼になるものではないのです。彼の前では後妻だと答へ、フローラ夫人の前では確に娘なのだと云ひきるのです。兎に角、彼女を呼んで膝づめで事實を白狀させねばなりますまい。けれど、それは不可能な事です。ポンツア氏は――彼が氣狂であらうと、なからうと――非常な嫉妬家で、他人に妻を逢はせる段ではないのです。恰で監視人でゝもあるかのやうに、錠を下した例の部屋に閉ぢ込めておくのです。そしてこの事實は勿論フローラ夫人の爲にやつた事なのです。が、ポンツア氏は餘所なくさうしたまでの事で、寧ろ彼

の妻自身が彼にさうさせてるのだと言つてゐます。何でもフローラ夫人が不意打に彼女の家に押かけて來ないやうにといふ妻の用心からなのです。それが言譯になるのかも知れません。尚又、ボンツア氏が家庭に、女中一人置けないのも事實です。彼は餘儀なく二軒分の家賃を拂はねばならず、經濟上からそれを斷行してゐるのだと云つてゐます。それ故、彼自身が日用品の買出しまでやらねばならず、又妻――彼の言分によるとフローラ夫人の娘ではない――も良人の姑である氣の毒な夫人の爲に家事の萬端を女中の手も待たず、はしたない用事まで何くれとなく面倒みなければならないのです。世間の人達には少々大袈裟に受とれるかも知れません。萬事こんな調子ですから憐みの爲といふか、彼の嫉妬のためといふやうにしか說明されないのです。

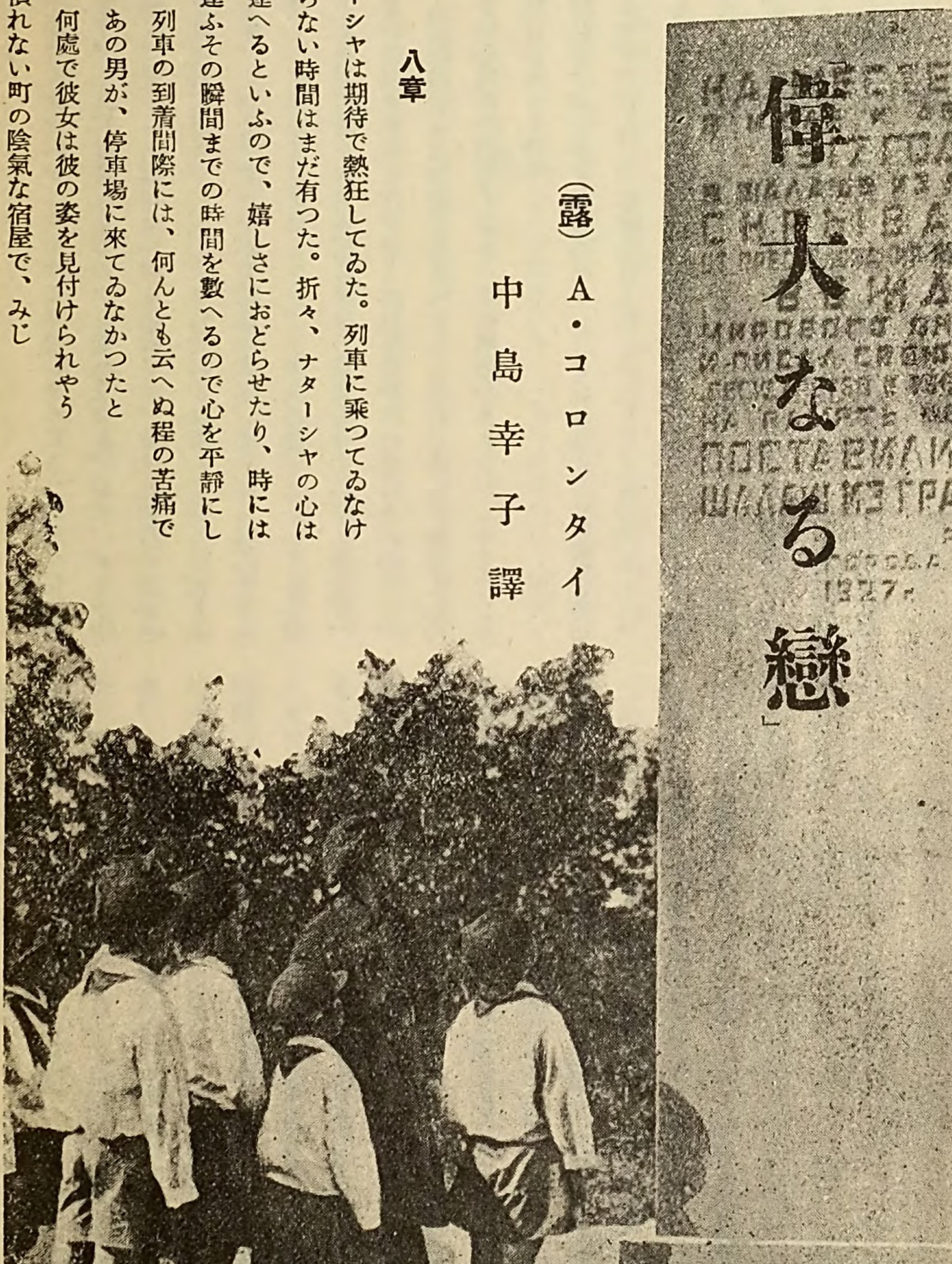
にも拘らず、バルダナの知事はボンツア氏の辯明に好意を持つてゐるのです。しかし、事實彼の人柄と、主として彼の行動とが、少くともフローラ夫人に非常な同情を寄せてゐるバルダナの夫人達丈には彼を有利な地位に置いてはゐないのです。フローラ夫人は實際熱心に娘が籠に入れて下してくれる短い愛の籠つた手紙を夫人達にみせやうとするのです。いや、そればかりか私信といふ私信までも。しかしそれによるとボンツア氏には信用が置けるやうでもあります。

結局二人が互にこの上もない同情的な、犧牲的な、將又驚異的な精神を發揮してゐて、且どちらもその一人の想像的發狂に對して充分な憐憫の情を抱いてゐたのであるといふ事が確實な事となるのです。兩人とも驚異を以て見られるのは至當な事です。そんなわけで、バルダナではフローラ夫人がボンツア氏の事を、ボンツア氏がフローラ夫人の事を氣狂だと云はなかつたら、この二人の中の一人が氣狂だなぞと言ふやうな事は誰の頭にも浮ばなかつた筈です。

フローラ夫人は時折、相談を求めに婿を尋ねて縣廳へ出かけてゆきます。或は何かの買物に連れ出すために、其處の出口で彼を待ち合す事もあります。又、彼の方からも、ちよい〳〵暇な時や、夜は夜で毎晩のやうに彼自身がフローラ夫人の例の萬端行屆いた一廊に訪れるのです。時折、ひよつこり道で出合ふやうな時は、直に禮儀正しく連れ立つのです。彼は夫人を右に置き、疲れると夫人に腕を貸します。そして彼等を研究し、觀察し、探索し、そして五里霧中に陥るさうした人々の不快と驚と狼狽の中を彼等はかうして連立つてゆくのです。未だに二人の中の何方が氣狂なのか、何處が幻影で、何處が現實なのか、どう考へてみても腑に落ち兼ねる事なのです。(了)

「偉大なる戀」

(露) A・コロンタイ
中島幸子譯



八章

ナターシャは期待で熱狂してゐた。列車に乘つてゐなければならない時間はまだ有つた。折々、ナターシャの心は戀人に逢へるといふので、嬉しさにおどらせたり、時には二人の逢ふその瞬間までの時間を數へるので心を平靜にしてゐた。列車の到着間際には、何んとも云へぬ程の苦痛であつた。あの男が、停車場に來てゐなかつたとしたら、何處で彼女は彼の姿を見付けられやうか？　慣れない町の陰氣な宿屋で、みじ

めな夜を過ごさねばならないのだらうか――只獨りで？　愈々停車場の燈火が列車の窓外に見へるやうになつたとき、彼女の心臓は激しく音をたてゝ鼓動し初めたので、彼女はびつくりしてあたりの人々を見廻した。屹度彼等はそれをきいたに違ひない。

ドキ、ドキ、ドキ――それは彼女の體に苦痛を起させ、そして全身の血管に氣味惡い氷のやうな血を送つた。彼女が彼の姿をちらりとでも見つけやうとして體を窓外に差しのばした時、その手はわなないて、いたづらに痺れた。

果して彼はそこに居たのか？　彼れはそこに居たのか？

停車場……ごつた返へす群集……澤山の人々！　こんな中で彼も彼女を見出すことが出來るだらうか？

確かに彼はそこに來てゐたのだつた。彼女の心臓は、まだ音たかく鼓動を打つてゐたが、此度は狂喜のための動悸なのであつた。

列車の中での長い時間、彼女は二人の會合の場面を心に描がいた。彼に逢つたら彼女はあたりの無關係な人々にかまわず、彼の首にかじり付かうと考へてゐた。

然し、實際は、彼女が心に描いてゐた素的な豫想とは、全るで異つてゐたのであつた。

周章てゝ列車の階段から飛び下りたので、彼女は躓づいて倒れた、その時雨傘と手提と財布とはまち／＼に見つともなく投げ出された。彼女は腰を曲げて、散在したそれを拾ひあげた。セニヤは彼女に何の挨拶もしないで手を出した。それから彼は握手をするために手を差しのべた。ナターシヤは一言も云はずに、恰かも彼を見知らない人のやうにその手を握り締めた。

『早くお出で、ナターシヤ……此處にゐる人々の中に……僕等を知つてゐる人がゐるかもしれないよ。僕は少し先に行くから、お前は後からついて御出で』

セエミヨン・セエミヨノウイチは、自分を知つてゐる樣な恰好で一生懸命に彼の後から見失ふまいとしてついてくるナターシヤとは全然無關係なものであるかの樣につとめて無關心に、停車場の出口の方にすゝんで行つた。

彼女は彼をちらりと見て、どうも變つた樣だと感じた彼女の氣持ちを彼に示さうとした。實際、彼の態度には何んとなく妙に異つたところがあつた。彼は傲慢になつたのか？　さもなければ、あの頃とは違つて髪が長かつたのか？　偶然知人と會ふかもしれないと云ふ彼の恐怖は、彼女にとつて初めてのことではなかつた。今迄に誰にも逢はなかつた此の見慣れぬ土地を、こうした不愉快な氣持ちで歩くのは、之が始めてゞはなかつた。あれほど氣狂ひじみた戀慕の情を書き寄こしておきながら、長い間逢はずにゐたにも拘らず、今日のセニヤは、彼女を歡迎する一言の言葉ものべなかつたので、彼女を譯なく怒らして了つた。

彼等は街燈の輝いてゐるガランとした廣場を横切つてホテルに着

いた。正服をつけた門番が二人を迎へた。それから金ボタンの着いた正服をきた一人の少年が、ナターシャの手提げを受けとつた。

二人の部屋に行くエレベータの中で、セニヤは初めて親しげに、彼女に寄り添つて、彼女の手を取らうとした。彼女は少年を警戒するやうな顔付きをして本能的に手を引込めた。

『大丈夫だよ』そう云つて彼はナターシャを安心させた。『僕は自分の妻を待つてゐるのだから、二つの部屋をとつておいて呉れと話しをして置いたのだよ…後でね、吾々は他のホテルに移らう…今晩…わかつたかね、僕は今迄の經驗でこんな事を覺えたんだよ』

セエミヨン・セエミヨノウイチは、金縁眼鏡越しに意味あり氣に彼女を眺めた時、始めて笑ひを浮べた。ナターシャは、同じ列車内の人々が幾度も幾度も、彼女を眺めたほど、終日幸福さうに彼女の眼に灼いてゐたあの光りを消して了つたさびしいかすかな笑ひを浮べた。列車の中での彼女の兩眼には夢の樣な多くの喜樂があつたが今は只氣遣ふやうな不審があつた。

彼女は本當に逢ひたいと願つてゐた男に逢つたのか？　今彼女の傍に立つてゐる男は他の男なのか？——別人…？

金ボタンの少年は、唐草模樣などのある普通のホテルの戸を開けて、彼女の手提げを運び入れた後でお休みを云つて去つていつた。

『お前をまともに見させてお呉れ、いくらか瘦せたのかい？　それとも旅行で疲れたのかしら？』

彼は、本能的に自分の腕に彼女を抱いた。

『セイシエカ、暫くまつて下さい。今帽子を取りますから』

ナターシャは、帽子のピンがベールに絡まつてゐるので、手を擧げて帽子を外さうとしても駄目だつたが、それよりは彼の抱擁からのがれやうともがいた。

『セイシュカ、御願ひです』

だがセイシュカは、彼女の叫びには氣にもとめやうとはせず、益々彼女を抱きしめて、無雜作に接吻をした。

『僕の可愛い〻娘…僕はほんとにお前を慕つてゐたのだ、ほんとにお前に逢ひたかつたのだ！』

帽子はまだ取らず、そのま〻でナターシャは廣いベッドの上に橫たふしにされてゐた。彼の暑い息は、彼女の顏を燒きつけるやうだつた。然し彼女は極端な不愉快を覺えただけであつた。彼女の帽子は髮を引つぱり、ピンは頭にめり込むやうだつた。…そしてセニヤ自身は遠いところにゐるやうに思はれた。

翼にのせられた樣に、彼女を彼のところに運んできた美しい輝くやうな幸福は潰され、破壞された。それはセニヤの猛烈な、野獸のやうな無思慮な抱擁に依つて潰され、破壞されたのであつた。

『ナターシャ、僕に接吻してお呉れ、お前の唇をお呉れ、何故、お前はそつちを向いていふのです？　僕を愛してゐないのですか？』

ナターシャは、無言のうちに彼女が熱烈に愛したなつかしい彼の

頭…その頭を自分の胸におしつけた。
ナターシヤは微笑したものゝ何故かその兩眼には泪さへ宿つてゐた。しかし彼はそれが幸福の泪だと思つてゐた。
彼には彼自身の思ふまゝに考へさせればいゝのだ。ナターシヤは自分の魂が、他の夢の打ち砕かれた斷片に對し、啜り泣いてゐるのでもあり又彼女の心は決して〳〵癒へることのない他の傷から、出血してゐるのでもあつた。彼はもう眠つてゐたが、ナターシヤはベッドの端の方に坐つて、今迄に何が起つたのかを無益に考へながら、彼女の眼前の暗闇をじつと凝視てゐた。
『彼は私を愛して呉れてゐるのだ、然し彼が愛してゐるのは私か？ それとも私が女性なるが故にだらうか？ 屹度彼の愛するのは、私の性に屬してゐる私であつて、私そのものじやないのだ。私が仕事を放擲したり、借金をしたりしたのは、こんな事の爲にしたのであつたのだらうか？ 幸福があるかどうかは知らないが、何かしら美しいものがある事を信じて、心を湧き立たゝせながら突進したのではなかつたか…？ 何んて私は愚かだつたのだらう！』
最早、どうしてもとりかへしのつかない或ものが起つたのだ、彼女は兩手をつよく締め合せて、思ふ存分泣きたかつた！
彼女は曾つて、彼女の美しい思ひ出の中にセイシユカを抱いてゐたのか？ 情熱的な愛を持つてゐる此の男が、彼女の友達であり、同志であつたのか？ 女性なるナターシヤを愛したのは、男性であるセニヤではなかつたのか？
何故、彼女は來たのであつたか？ 彼女は現在彼の傍にゐる時でさへも、千里離れてゐる時の樣な寂しさがあつたのだ。千里離れてゐた時には、むしろ思出や夢や希望があつたのだが…然し此處ではその夢は永遠に、永遠に消へ去つて行つた！

●翌朝、ナターシヤが起きたときには、彼女の魂に妙な冷さがあつた。彼女の樣子は、よそよそしく、ものうげであつた……
『お前と別れてから、どんなことがあつたか話してお呉れ』
彼等は御互にそぐはない氣持ちで朝のコーヒーを喫んでゐた——そしてそんな理由で、ナターシヤにとつては——殆んど不愉快なホテルであつた。それで、ナターシヤはまるで話しをする氣になれなかつた。昨日——あゝ昨日、彼の許へと來る途中、彼女は輝かしい色彩で全てを描いてゐたのだつた。彼女は過去數ヶ月の出來事を幾ら話しても、つきることはないだらうと思つた。二人一緒で夜遲くまで互ひに語つたり、計畫したりしやうと思つてゐた…で彼女は彼の興味を引き起すやうな特別の出來事を思ひ出さうと勉めもし、彼の注意を逸してゐた此の半年間に起つた黨內部の議論と種々なる問題の生活を想ひ出した。彼女は自分に對する彼の愛情を疑つてゐたことを後悔して、彼の前であやまり、且つ彼女の告白が招ねいた、彼の悪感情を、最も深い理解あるやさしい言葉で、氷解しやうと決めてゐたのだつた。けれど、第一にお互ひが昔のまゝを現は

して、二人の魂が、愛のかがやかしい調和の中にゆれてゐるのを感じなければならない。只大きな最後の諸音として、彼等の感覺が凡ての關門を破つたとき、情念は二人の間に存在してゐる他人行儀を赤い焰の中で燃えつくして了ふのであらう。

　これは彼女が列車の中で夢見た二人の會合の有樣であつた。然し昨夜の同衾から、ナターシヤは話しをしやうとする希望を失つて了つた。彼女の答へはすべてに元氣がなかつた。

『お前は身體が勝れないやうだね、』彼は彼女の顏を熱心にのぞきながら云つた。

『いいえちつとも、あたしは只疲れてゐるだけなんです、實は充分眠れなかつたものですから』

『そりや氣の毒だね！　僕と一緒に一晩寢たことで、こんなにもお前を疲れさせたのは、どう云ふ理由(ワケ)だらうね？』

　彼がこう云つた時に、その顏には、嘲弄するやうな自信ある笑ひを浮べてゐた。それが又ナターシヤにとつて、眉を顰める程いやだつた。彼女は自分の唇からうつかり不謹法な、いやみある言葉が滑らないやうにと自制するためにもがいた。

戸口にノックがした。セニヤは急いで開けた。

それは一通の電報だつた。

それはアニユタからきたものだつた。

それは普通配達だつたけれども、ホテルの宿所が郵便局に屆出てあつたので、茲まで配達してくれたのだつた。ココチユカが痲疹にかゝつてゐるので、アニユタはたへず附添つてゐたゝめに、彼女は疲れきつたと云ふ意味の電文だつた。

『何時もの通りだ』セニヤは溜息をついて云つた。彼が彼女の前に脚を擴げ、首を屈めて立つた時に、彼の澁面つくつた恰好には、全で子供のやうな所があつた。だから、此の男の生命の大きい個所には、强さと決定的なものがある反面、その些細な點に至つては、弱さと情けないところがあるので、彼に對するナターシヤの古い親切心が再び彼女の全身に漲つてきた。此れこそ本當のナターシヤの愛するセニヤである。此の可憐な依りどころのない人間……

　突然、彼女は彼の傍にきて、彼女の腕に彼の頭を抱いて、眼にやさしく接吻した……彼女は今まで、彼と一緒にゐなかつたものゝやうに、今やつと彼を再び見つけ出したやうに思はれた。

『一寸待つてお呉れ、ナターシヤ、どうか』彼は再び彼女の無邪氣な證明を誤解したのだつた。『僕等は電報のことをよく考へて見なけりやならない。僕は之に就いてどうしたらいゝかね？』

　彼は勇氣を挫かれた恰好で語つた。ナターシヤは自分の手で、その親しい彼の頑固な手をつかみながら吃つて云つた。

『あなたは今感じたのです…恰もあたしが貴下に此の瞬間歸へつてきたやうに、たつた今なのです！　貴下は偉大な方です、セニヤ凡ゆる世界が、貴下には教訓のやうに見える。そして或るこんな小

さな事件が起ると、貴下は全てが孤獨のやうにおなりになる！　あたしは幸福です、あたしは再び貴下を見附けたのだから幸福です、あなたを永久に失つたと思ひましたわ……私は瞞されたと思つてましたわ、そんなことはみんな恐ろしいことでした、セニヤ、けれどやつぱりあなたは此處にゐらつしやつたのですね……』

翌日、二人は他のホテルに移つた。ナターシヤは最初に彼等が選んだ大きなありふれたホテルの帳場に行つた。セニヤは數時間經つてからやつてきて一つの部屋を借りた。彼が此處へきたのは仕事をするためにきたのだからといふので、彼女は彼に氣持ちの良い廣々とした室をと主張した。一方ナターシヤは、小さなあまり好かないけれど、狹いこじんまりした室で滿足してゐた。そして其處にある小つぽけな長椅子の場所を變へたり、自分で携へてきた書籍を配列したり、又草花を貰つてきて活けたりして、彼の來るためにと出來るだけ體裁よく飾りつけた。

何時もの如く、彼は入つてきた、そして机に向つて、ワニエーシユカと約束した端書を書いてゐるナターシヤを見つけた。

『お前の隱れてゐた場所は此處なのかね、僕はもう半時間もお前の部屋を探しながら廊下をあちこちぶらついてゐたんだよ、何しろ部屋の番號が不規律に排列してあるんだからね――例へば五七號は直ぐ八九號の次と云ふのだから……ナターシヤ、お前の部屋は實際魅力があるね、僕は街をぶらついたので、時間をつぶして了つた、で今から晝寢をするには遲い、あゝそうだ、もう、かれこれ六時になるのだから、僕は、之から直ぐに教授の家に行きたいと、思ふのだがね』

『まあ何故？　それなら明朝だつてまだ大丈夫よ』

『いや、いやそれがねいけないんだよ、アニユタの奴、僕が廿八日に家を出たことを教授に通知するに違ひないと思ふんだ』

『そんな場合には、單に貴下が到着した時、直ぐに教授のところへ行かなかつたと奧さんにお話しになればいゝでせう。それで大丈夫よ、私達二人が斷然會はないことを決めたのを知つてゐらつしやる奧さんが、どうして私が此處に居るなんてお思ひになるでせう？』

『そんなことでいゝんですか？お前はアニユタを知らないのかね？いや僕が若し今日教授の宅で手紙を差し出さなかつたら、僕が此處にゐる間平和な氣持ちでゐられないだらう。人といふものはね、そういふ些細なことがどんな結果になるか云はれないものなんだよ。お前がいやであらうがなからうが、僕は之から行かなくつちやならないのだナターシヤ』

そこで、ナターシヤはこれ以上の抗辯をしたつて無駄であることが分つた。日に彼女もゐるのだといふことを、アニユタが想像するだらうといふ彼の恐怖は、全く狂氣のやうであつた。彼女はもう何も云はふとはしなかつた。

『僕が來なかつた間、お前は何をしてゐたんです？　書きもの？』

『さうよ、書きものをしてましたのよ』
彼はテーブルの上に置いてある端書を認めて、彼女の當惑した容貌に、眉を顰めながらもどつてきた。彼等が會つた場合、他に通信することは嚴しく禁じ合つてゐたのだつた。彼等は絶對に信頼の出來る第三者を使つて、通信を送ることを慣例としてゐたのだ。だのに其處には其の地方の風景の上に、直ぐわかるナターシャの筆蹟で街の名稱を認めたワニエーシユカに送る端書があつた。
『その端書は一體誰れに送らうと云ふんですか』
セニヤはナターシャの顏に表はれてゐる煩悶によつて、不快にされたので尋問した。彼は住所を讀まふとして、テーブルの上に身を曲げた。冗談の氣持ちをよそつて、彼女の狼狽を蔽ひかくさうとして、ナターシャは手で端書をおさへた。
『私は貴下に言へないんです。私はそれを見せたくありませんの、此れは私の秘密なのですから』
『秘密？　僕はどうしても見るよ、直ぐ端書を僕に奥れ給へ。僕はそれを要求するよ。僕にどうしても見せやうとしないなら、僕は無理にでも奪るよ』
暫く彼等は笑ひながら小ぜり合つてゐたが、二人の顏には眞劍味があらはれてゐた。
『成る程ね、此れは結構な事ですね、今までに何時お前は秘密を持つてゐたんです？　お前は、僕に手紙を隱しだてするやうなことはしなかつたじやないか？』
『私は貴下に手紙を讀んで頂きたくないのです――それをきゝただす權利は貴下にはないじやありませんか…束縛も甚だしい！』
彼は端書を摑んでゐる彼女の指をおし離して、覗き見やうとしたそしてそれを自分の手に奪ひとつた。
『それをお讀みになつてはいけません、いけませんの、貴下……それは無暴と云ふものです！』
彼の手からその端書をひつたくつた時ナターシャは脣をふるわして、それをずた〳〵にさいて屑籠に投げ入れて了つた。
『ナターシャ！』
彼等はお互ひに怒つたさぐるやうな眼で見た。
『此れは僞りなんです。つまらない僞りなのですわ。ね私の手紙を御讀みになつちやいけません！　絶對に！』
ナターシャは、喘ぎ〳〵云つた。彼女の頰は、上氣の爲に輝き、その脣からは無意識に幾度も幾度も毒々しい言葉を繰り返へした。
『ナターシャ、ナターシャ！　此れは何の意味ですか？　それは眞實なのかね』彼はソフアにぐつたりなつて、兩手で顏を被つた、それは全く悲劇の光景だつた。
『何が本當なものですか？』ナターシャは好奇的に彼を眺めた。
『そりやお前に、別に戀人が出來たといふことさ、お前が戀人を殘してきたと云ふことがさ、お前の好いてゐる男を…？』

『氣でも狂つたのじや御座いませんの？…どうしてそんなことを考へるやうになつたのでせう？』

『僕はね、お前の色々のことを細かに述べた、二本の匿名の手紙を受取つてゐるのだからネ』

『それであなたは夫れをお信じになるの？』

『僕は直ぐに燒却はして了つたがね…だがそのあとで…僕は何を考へるやうになつたか？…僕が玆に入つてきた時の、お前の當惑さ加減、そしてお前の怪しい强情、そればかりでなく此の激しい怒り方…今までにお前は一度だつて此んな調子で語つたことはなかつたのに。あゝナターシヤ、ナターシヤ！ 實際なのかね？ どうして僕がそれを堪へることが出きやう？ お前は他の人を心配するなら、何故來たんです？ 明かに云つて御覽。曖昧じや駄目だよ』

『セニヤ、氣を落着けなさいましよ、貴下は何を云つてゐるか靜かに御考へになつて御覽、どうして私が貴下に僞りを云ひませうか？ 私が他の男を戀してゐるのなら、私は此んな遠いところへなんて來やしない筈よ…お氣の毒なこと』

『お前を氣の毒と思ふのかね』

『貴下はまあよい心を持つてゐらつしやるわ』

彼の顏は苦痛で呻吟し、兩眼はナターシヤが笑はずにはゐられない程、本當の悲しみで一ぱいだつた。

『あなた、馬鹿なセイーシユカ！ 少しの間でも貴下はそれをどうして信ずるのでせう？ 貴下を此私がどんなに戀(オモ)つてゐるか御承知ないのですか？』

彼女は彼の前に跪づいて彼を抱擁し、そして接吻した。最初は彼も抵抗して、彼女に愛撫されたり、惡戲をされたりするのを拒んだ

『そして手紙は？』彼は又疑ひ深く尋ねた。

『手紙？…まあ、セニヤ貴下がつまらないことを飽く迄仰有るのなら、讀んで御覽なさいナ』

彼女はテーブルの所に急いで行つて、屑籠にすてた紙片を床の上にまき散らさうと、それを引繰り返へした。それから二人がその紙片を綴ぎ合すために床に蹲くまつてゐる時、彼女は財政上の處理やワニエーシユカが、彼女に與へた援助についての物語りをした。セニヤは始めてワニエーシユカの何んであるかを知つた。確かに之は張合ではなく、葉書の無邪氣な愉快な調子は、彼をすつかり安心させて了つた。

『どんなにお前が僕を驚かしたかお前には分らないだらう。ナターシヤ、どうか云つてお吳れ此の馬鹿〳〵しい喜劇の意味は何んだつたか？ 何がお前を此んなに合點の行かない樣子にしたのか？』

彼の調子はがさつであつた。

『私が此處から手紙を出せば、貴下は私を怒るだらうと思つたのです。でも彼が私達にして吳れた親切に對して、手紙を出すことは拒めないでせう、貴下もお解りの通り、彼は私達を裏切らないでせ

う。彼が私になした約束があるのですから、他に告げ口なんかするよりはむしろ死ぬでせう』

『さう、解つたよ。だがねナータシヤ此處から手紙を出すなんて非常に不注意だね、何んなことが起るか人は決してわからないものだよ。葉書が運悪く、無分別な人の手に渡るかも知れないからね……とりわけ、ワニエーシユカは何んと考へるかね……？』

『でもどうしたら彼が悦ぶかを考へませうよ、ローマンスを彼は考へるかも知れませんね、誰と？　そんなごと、彼の知つたことじやないわ』

『いゝえ、さう云ふのがいけないんだ、僕が此處にゐるのを見出すかもしれない——どんなことで人は告げるか分らない。それから當て推量や話しがあるだらう。勿論そんなことは隨意だけれど、だが此處からは、誰にも通信を送らないやうに賴むからね。よしそれがワニエーシユカでも駄目です』

かう云つた時の彼の調子はいやに嚴格であつた。殆ど命令的に。

『お氣に召さないのなら、いいわ、私は出しませんから』

セニヤは彼女を探ぐるやうな眼付きですらつと眺めた。

『ナターシヤ、お前は氣を悪くしてゐますね。思ふに指圖をうける主人を見出したからでせう』彼は彼女を抱擁した。『お前の樣な婦人をどうしやうとするのかね？　人は一寸の間でも他の方を見る必要があるのだよ。だのにお前はこんなことをするのだからね。今は如何かね？　再び氣に障つたのかね、』彼は彼女の身振りを知つてゐた——怒つた樣子で頭をうしろにかしげた。

『さあ、僕の戀人、そんなに怒らないで。僕は只ぢらした丈けなんです。僕が怒つてゐないことは知つてゐるだらう。怒つてゐるどころか、僕は幸福なんだ。僕の重荷をとり除いてくれたお前には感謝してゐるんだ。どんなに不安だつたか、そしてどんなにお前の憤怒が、僕を驚かしたか、お前には想像がつかないだらう。僕は……僕はお前を失つて了つたと思つたのだよ。お前なくては生きて行くことは出來ないのだから』彼は彼女を抱擁しながら、彼女の顏を自分の胸に撫でつゝ押しつけた。

『僕はお前と一緒にゐるので滿足してゐる。ナターシヤ、僕は何時もお前の近くにいたいのだがね……だが！　教授だ？　オヤ、もう七時だ、急がなくつちやならない。さよなら、ナターシヤ夜まで』

彼は周章てゝ立ち去つた、ナターシヤは床からワニエーシユカ宛の葉書の片々を集めて、もう一度屑籠の中に考へ込み乍ら投げた。

彼女は非常に疲勞してゐた。何處か意識の中にも、二人は御互に他人になつて了つたといふことを感じて、彼女はまた家に歸へりたくなつた。（續く）



嗤ひを投げ返す

矢田津世子

おきねは井戸端へ出る度に四方八方からの嘲笑を浴びた。彼女は握りしめるポンプの柄が、人々の嗤ひの中でブル／＼顫へるのを感じた。裾からはみ出た赤い蹴出しに、八ッ口の綻から覗く温い乳房に、前身頃の點々とした汚れに、無數の非難めいた冷い眼を覺えて、總身の寒氣立つのを止める事が出來なかつた。

街を歩いても、人々は立止つて、振り返つて、好奇的な眼でおきねを追ひ駈けた。

錢湯へ行くと、湯氣を通して、多くの卑猥な眼が一齊に彼女の皮膚の上を流れた。そして、彼女が湯槽に片足を入れると、人々は慌てゝ滴を拂つて中から飛び出るのだつた。

我家にゐる時でさへ、障子の破れた、雨戸の隙間に、壁の崩れた穴に、田螺のやうな無生彩な視力を持つたいくつかの眼が、彼女を見たさに吸ひ付いてゐた。

「インバーイ」

子供達は、尻上りの妙な單語を叫び乍ら、大人達の嗤ひの前に立つて、おきねの家へ投石した。小さい彼等は、彼等の本能から、大人達の嗤ひの擴がる程度に比例して、飽く事なく小石を拾つては、投げる事に快感を覺えて、小猿のやうにはしやぎ笑つた。

人々は、おきねを、彼等の知つてる範圍內での最大の惡罵の渦へ投げこんで、其處で彼女の踠くのを見ては、喉の奥迄見せ合つて、抑制の出來ぬ嗤ひを連續させてゐた。



蕎麥屋の娘の手記

京ふみ子

——その頃ブタ箱から放免されて歸つて來る同志達は、先づ第一大變なブタ箱の御馳走に腹の蟲の泣き踊りを靜めて、彼の女の家の『そば』の香味を舌の上にまろばせながら、此の河岸なるふるぼけた『そば屋』の、のれんをくゞるのだつた。

あめ玉をなめるKさんはバットを買つたおつり三錢の中たつた一

隣りの家の時計が壁を傳つて十二時を知らせてくると、おきねは始めて顔を上げて、人差指で眼を痛い程こすつた。

シヤルムーズの肝心な褄先きがうまくゆかないで、三度やり直したし、布が弛んで四度目には益々不格好な褄が出來上つてしまつた。おきねは、充血した眼を手の中の布へ移し、化石したやうに身じろぎもせず、疲勞で放心してゐた。彼女の意識の表面を、歪んだ褄先きと、衣裝の派手な色彩と、それに混つてお得意先きの奥さんの氣難しい額の八の字と、その間を小うるさく四つの五拾錢銀貨が躍り始めた。睡い彼女の神經が、まだるつこく廻り始めるそれ等の行列を手鈍く整理していつても、しつつこく銀貨だけは彼女の腦裡に蛭のやうに吸ひ付いて、離れやうともしなかつた。

泥のついた薩摩芋の一つのやうに、膝元にたわいなく轉つてゐた赤子のけたゝましい夜泣きに、はつきりした意識を取り戻したおきねは、慌てゝ八ツ口から手を入れて乳房を摑んでみた。併し、一滴の乳も指先きを濡してはくれない。おきねは念のためもう一度乳房を指で挾んでみた。が、やつぱり乳は凋れて出てない。彼女は、萎びた口元をヒク／＼させてゐる赤子を、弛んだ視力で見下した。指先きを充てがふとかぶりつく。歯のない口でそれを噛らうとする。

「腹がへつてるんだな。」

泣聲も凋れ切つてしまひ、それでも勢一杯ヒーヒー喉を顫はせてゐる赤子を抱き上げて、唾液で濡した唇をそつと乾いた赤子のそれにあてゝやると、下唇が痛みを覺える程激しく小さい熱ぽい口中へ引つ張られる。

「かあいそうに、何も腹に這入つてないんだよ。」

唇をそつと引くと、赤子は再びかすれた喉でしわんだ泣聲を絞つた。おきねは、赤子の絶間ない泣聲に、ふと焦立たしい感情に驅られて、手の中の小さい軀を邪慳にゆさぶつた。

「何だつて泣くんだ。腹のへつてるのはお前ばかりかい。この餓鬼！」

赤子は益々老人のやうな口元を大きく開けて泣き叫んだ。すると、おきねは、その泣聲から、自分自身の空腹をつく／＼感じた。

「おい、赤を泣かせるんぢやねえ、つてことよ。」

次の四疊半をし切つてある棧の取れた障子の破れから片目を覗かせて留吉が聲をかけた。

「水でも飲まして騙してやんな。」

おきねは、動かない眼を夫へ向けると、赤子を抱いた儘立上つて、流し元へ下りて行つた。

「俺にも水を一杯くれ。」

枚持つて平氣な顔で買ひにいつて向ふの駄菓子屋の若い娘さんに、へえ？ 一錢のあめ玉を一つーと笑らはれて、プロレタリア、プロレタリアと歸つて來る勇敢さ——

子供と一緒にたはむれて遊ぶ、かつてはセンチメンタルな詩人だつたが、一たび鬪爭の火ぶたをきつたら、最若年だがやぶにらみに睨めつけられてゐる御大將だ。

『俺はブル樣の娘樣を好む。思想に共鳴しなくてもよい、當分の小使と演說會に行く汽車賃と煙草代のない俺に金をくれる女だつたら、女と名のつく者だつたら幸せだ』

ある雜誌社の、どんな妻をのぞむかと云ぶハガキ回答に、こう書いた組合の書記Mさん——女性を門澒する者也と、彼れがチョンビリほれた女性から抗議を持ちこまれて、謝つたと云ふ、組合一番のヨタリストだが鬪爭の精神みじんもゆるがず。

立禁反對演說會で、處女演說を美事しくじつた、あはて者のSさん——

彼れの演說にイワク「すみぞめの衣をまとふ——までは百人一首の句調、さて

留吉の聲つぽい聲がおきねの背へぶつかつた。
「腹が空いてるんだ。皆、腹が空いてるんだ。」おきねは、朝二杯の芋粥を充てがつた切りの病床の夫が急に不憫に思はれ出した。彼女は、水甕から杓子を取り上げると、それの半分以上をまづ無中で自分の口へ流し込んだ。

2

おきねは動悸がやまなかつた。

朝、八百屋の店先きで逢つた昔友達から聞いたあの事を思ひ出す度に、彼女は胸を兩手で締めつけて考へるのだつた。(今、四五圓の金が這入れが、皆が鱈腹食つて、殘つた金で、米を五升と、味噌を二百〆、それから昆布巻きと薩摩芋も大部買ひこめる)金が手に這入つた時の事を考へて、おきねは心が勇んだ。三人の子供の充分に食つた滿足げな顔も久し振りで見度いし、病床の夫への二日分の塗り藥も用意したい。金を假想しただけでも、もう多くの慾望が彼女を取り卷くのだつた。金、金、金を通して彼女のあらゆる慾求が得られる。赤子にとつての綿ネルの一枚も。冷めたい素足を晒らしてゐる二人の子供に穿かせる足袋も。彼女の望みは次第に増してゆくのだつた。が、決心した今夜からのつとめを考へると、彼女は夫に恥ぢ、子供に詫びたい心で苦しまねばならなかつた。併し、

「とにかく親子五人が食はなけれあ……」

で、おきねは今夜からのつとめを堅く誓つた。

「お前さん、一寸出かけてくるよ。」

うつらうつら寢入つてゐた留吉の鼻先きへ顔を近づけると、おきねは良心の苛責に耐えかねて、半ば泪に濡れた聲で呼びかけた。

リングのベルトで腕を卷かれて、自己過失の理由で事務所から二十圓の涙金を押しつけられ馘になつてから、始めて莫迦氣た自分の役割に氣が付いて掛合ひに行つて、ひどく毆られて歸つてきた弱氣な夫を、その當座は、おきねも噴怒を耐えてみてゐたが、この夫のかうした弱氣を恥ぢる一方、彼女はそれをかあゆく思つてゐた。何故なら、おきねは、留吉の二十四の若さのあの時のものやさしは今でも懷しんでゐたから……。捥ぎ取られた腕のその切り口の不養生からそこが化膿して、身動きのならない狀態になつてからもはや半月以上にもなる。勞働から見離された夫と、發育盛りの子供を抱えたおきねは、彼等の露命を繋くにはあらゆる努力をしなければならなかつた。

「働けるだけ働かう。それでも食へなければ、その時は一家が揃つて飢え死にする迄だ」おきねは、それを常に心の壁に刻みつけてゐた。

「何處へ行くンね。」

××寺のなまくさ僧侶は、ぼうずのくせに地主と、ぐるになつて我々農民の生き血をすひとる、にくきぼうずだ！ 鬼だ！

『やつらを、たほせ』

と、名演説の最中、チョボヒゲ××長の

中……止、中止だ……の聲に、なれない悲しさ、まごついて、六尺近くある大の男があはてゝ。

『へイ……へ、へ、へ、へイ……』

とピョコンと頭をさげたと、子の代、孫の代までのこる、語り草。

されど、この人もまた勇敢なる闘士なり。

等々……闘爭のひまに、彼の女の家に集る、常連は、ヨタを飛ばしてたのしむのだつた。こゝへ來る一つのたのしみだつた。

命の洗濯——命の洗濯だそうです。

同人雑誌を共に出して居たKさんが、階級運動へ入る様になつてから此の文學そば屋の常連に、組合の人達がまじる様になつた。

なつかしいその頃の『そば』の味と共に、彼れ等の同志もまた蔭ながら、行動を共にして來たそばやの娘を忘れないであろう。左翼ファンの彼女もまた彼等を忘れない。

うつろな、肴のやうな生氣のない眼をぎろり動かして、腿で黄色くがわつ いた繃帶を左手で撫り乍ら、留吉は女房の間近な顏を仰いでゐた。

「うん、何處へ行くンネ。」

おきねは、先刻五錢で買つてきたパッチリの、つけた後の引つぱられるやうな皮膚の痛みに當惑し乍ら、自分のひどく白い顏が夫の眼にどんなに寫つてゐるかを懸念した。

「峰さんに聞いたがね。金になるいゝ商賣があるよ。すぐ歸るから、子供が泣いたら枕元の芋を嚙んでやつておくれね。金を摑んでくるから、歸りにあ塗り藥を買つてきてやるさ。」

夫に喋らせないやうに早口に疊みかけると、八燭光の赤い電燈の下で、空腹を耐えて寢込んでしまつた三人の子供の裾を氣忙しく跨いで。おきねは十一時過ぎの街へ出て行つた。

3

「なあ、おい、他にいゝ仕事がなんぞないものかな。」

錢湯から歸つて、曇つた鏡の前へ坐つて、鉛の多い白粉を溶いてゐたおきねへ、留吉は障子の穴から呼びかけた。彼は云つてしまつてから上目を使つて、頭の上の窓障子を見やると、その儘眼を伏せて額に深い皺を刻んだ。舌で破つた穴、指で突いた跡、小石の飛んできた裂け目、それ等は全て鈍い嗤ひを含んだ眼で塞がれてゐる。

「なあ、お前に働いて貰つて文句も云へねえが、この、この商賣だけはやめられんのかなあ。」

留吉は、もう一度窓へ眼を向けてから躊躇ひ乍ら低く云つた。

「探してみたら何かいゝ仕事があるかしれねえ。なあ、俺の氣にもなつてみてくれ。俺あ切なくて……」

おきねは、子供達の寢息に混つて微かに聞えてくる夫の嗚咽を耳にすると、共に泣きたい心を失つて、寧ろ肚立たしい憎悪から夫を大喝してやり度い焦燥で苦しんだ。

「お前さん、ね、泣きごとはおよしよ。私あお前さんから泣きつかれやうとは思はなかつたよ。私達あ泣くどころか喜ばなければあいけないんだ。食つてゐるんぢやないかね。餓腹食つて生き延びてゐるんぢやないかね。それあ、私にもこのつとめがいゝ事か、わるい事か位は解るよ、だけどね、お前さん、私には仕事をえり好みする暇なんかありやしない。充分に食つてゆければあ、ね、それでいゝぢやないか。だが、私が好きこのんでこのつとめをしてると思つちや大間違ひだ。誰れが喜んで、こんなあさましい生道へ足を踏みこむもんかね。誰れが好んで……」

小花瓶

○三上於菟吉が勤勉な學生だつたころ、試驗勉强で徹夜して早暁戸山ッ原へ頭を冷しに出たら、土堤の上に現はれた一匹の野犬、白地の浴衣の蒼ざめたる男をなんと見たかワンとばかり集れの一聲、山たわ〳〵戸山名物の宿無し犬六七十匹の猛烈な包圍攻擊、於菟吉青年悲鳴を發して同じくワンワン、ワンワン、土を這ひ廻つてお仲間のごとく巧みにワン公をくらまし身邊を保守數時間――と思つた。何しろあんまが喰殺されたといふことを聞いてゐたんで――すると、たしかに人間の笑ふ聲がする振りかへると二人の牛乳配達夫が棒をもつて助けにきたが……なのである。百匹もゐましたかねと牛乳配達靑年たちは笑つてゐたが泥まみれの於菟吉青年口をきくどころでなく發熱四十度――君たちまで笑ふなんて、だから今日まで話さなかつたのだ。

大池みどり名古屋大須の觀音樣へ參詣して、鳩の豆のお皿を手にすると、なにしろ鳩は翼があるもんなので、大木と間違へた譯でもなからうが、パタパタとまりつかれてキヤア〳〵、あゝ痛い痛い引

最初に出した强い語句が、後は涙に曇つてうるんでしまつた。

窓の外では霙きが起り、一齊に吸ひついてゐた眼が障子を離れたかと思ふと、以前とは違つた眼が再び穴を塞いでゐた。

「俺あ、やつぱり意氣地のねえ男よ。からきし駄目だ。行つておくれ。な、俺あ物事を考へる餘裕つてもンを持たねえんだ。俺が悪かつたよ。ほんとうになあ。」

留吉は、哀願するやうに、布團の中へ顔を埋めて呟いた。精紡工場で働いてゐる内お互に好き合つて夫婦になつた頃の、あの樂しい追憶が、ふとおきねを留吉に對する愛情で溫めた。鏡に向つて白粉を溶いて、涙で濡れた頬へ塗りつけるおきねの胸は、あの時のやうに脹らんで、しめつぽい聲を出してゐる夫が急に戀しくなつた。

「お前さんを一日でも早く快くしてやりたいからなあ——」

「俺は意氣地がねえ。お前にばかし苦勞をかけてる男だ、すまない。すまない。」

「何を云ふの。お前さん。私は出來るだけの事をしてお前さんに盡したいよ。お前さんさへ我慢してくれたらね。それに、軀を賣つたつて、心はお前さんのために大切にしまつてあるよ。」

おきねは、沸いてくる歡びに瞳を輝かし乍ら、一方、一人切りの心の悲哀を思つて涙に咽んだ。

× × ×

赤味のついた近頃の子供達の皮膚、健康そうなその寢息、おきねは夫の繃帶を新しいのと取り換え乍ら、それを充分意識して、悲しい滿足の微笑を浮べてゐた。

「ぢや、お前さん、後を頼ンますよ。一時頃迄にや歸れさうだ。今夜のやうな吹き降りには客もないからね。」

派手なモスの藤色の袷を着た女房の後姿を、障子の穴からぼんやり留吉は見送つてゐた。

人々の嗤ひは、相變らずおきねの軀の動くまゝに、秋の蠅よりもうるさく付いて廻つた。併し、彼女は、人々の嗤ひの礫の中に悠然と立つて、何時もかう叫んでゐた——

「嗤ふがいい。存分嗤ふがいい。お前さん達のその嗤ひに一々應答してゐたら私達あ飢え死んでしまふよ。私達は食つて生きたいんだ。食ふんだ。食ふんだ。私には今お前さん達を相手にしてゐる暇なんかない。勝手に嗤ふがいい。だが、時折りは私にもお前さん達を嗤ひ返してやるだけのほんの一寸した暇位はあるよ。何て世の中には、ものの好きな、閑人が多いことだらう。つてね。ハハハハ。」

一九二九、十二、二〇

つかれちやつたと悦ぶ。熱田の大神宮様へ行くと、そこの鳩は空高く梢高くすましてゐるので、どうしてでせうをんなじ鳩なのにといふ。はて知れたこと、大須のはプロレタリアで自分で働らかなければ食べられないからさ。なあるほど、なるほどさうだわ、熱田の官僚で、ブルジョワ鳩か。

ニースにて　長谷川春子

個展で疲れたので日のバリより長い南の海邊へ閑居讀書しに當分留ります。ニースには、マテイスがよく描くあの構圖以外には何のモテイフも見當りません。散歩道からは英米獨語が余計聞えます。彼等は高價にして取合せ拙き服裝をして故にニースの商品はやゝかすかに巴里にてすたれかゝりし高價品が並びます若さ美しき人見當ること少なきは甚だつまらなし本場よりはすてしかなしきヤシの木シヤボテンにあやめあをひ、水仙ばら、常夏の地めかしく咲きます然し明るいイタリーはすぐ近くです昨年中でうなづいた藝術家はピトエフ夫人とミスタニゲット丈近々それについて書きませう。中條さんモスコーへかへり日本語でほんとの會話をする友人なし。

泥沼に墮

——移民

松村



1

赤と青のアップル。水つぽいブドウ。甘いカリフォルニヤ、オレンヂ。新鮮なアスパラガス、等、等、の山の中で、四人の白人娘と共に働いてゐる玲子は、隣りの牛肉店のゲリー・クーパー、や、キャンデストアの、ジユン・マローやドリス・ヒル達とも、すつかり仲よくなつて支配人の眼を盗んで、シネマの話に興じられるやうになつたのは最近のことだ。桃割れ娘の思想と內氣さを持つ玲子は、牛肉店のクーパーの長い足が、チヤールストンを踊つても、微笑むことがすべてだ。

玲子は第二街のストアからメナード街のホテルまでの闇を自動車の警笛の中を歩いて歸つて來た

ビルデングの掃除人夫の良人の康平は、曉方のシーツの皺の中で腹這ひをして、煙草の煙りを瞶めてゐた。南京トバクの賣り子の大崎は、ニラ臭い口を開いた。

『ミセス、やつと、捕まえたさうですよ』

『まあ…やつぱり…』

今朝、店先きで、ふみにぢられたアスパラガスから、ミセス野津の後姿を思ひ出した玲子はあの時の豫感に思ひあたつた。

『熊井さんの電話によると、バンクーバーから、日本へ行くつもりで、テケツを二枚、買つて居たさうですが。何んでも支那人街（チャイナタウン）のホテルへ泊つて居たのを、寢込みを襲つて捕へたさうですよ。』

『熊井さんも、無粋ぢやないか。折角たのしい夢を見てゐる二人の寢込みを襲つたりしてアハ…』

『アハ……』テーブルで、カード占ひをして居た六十男の安井まで、ベッドのスプリングの音を思ひ出した。內氣な玲子は、アルミニユームの釜の米粒に烈しい憎惡を投げ入れた。

二階の共同ケチン、ルームには、三人のミセス連が、夏の蛙のやうに騷いで居た。

『久保井のミセス、野津のミセスが、とう／＼捕まへたさうですね。』

ユダヤ人のレストランのハーツ、ケーキのやうな唇を持つたミセス山本が、玲子に話しかけた。

『さうですつてね。』

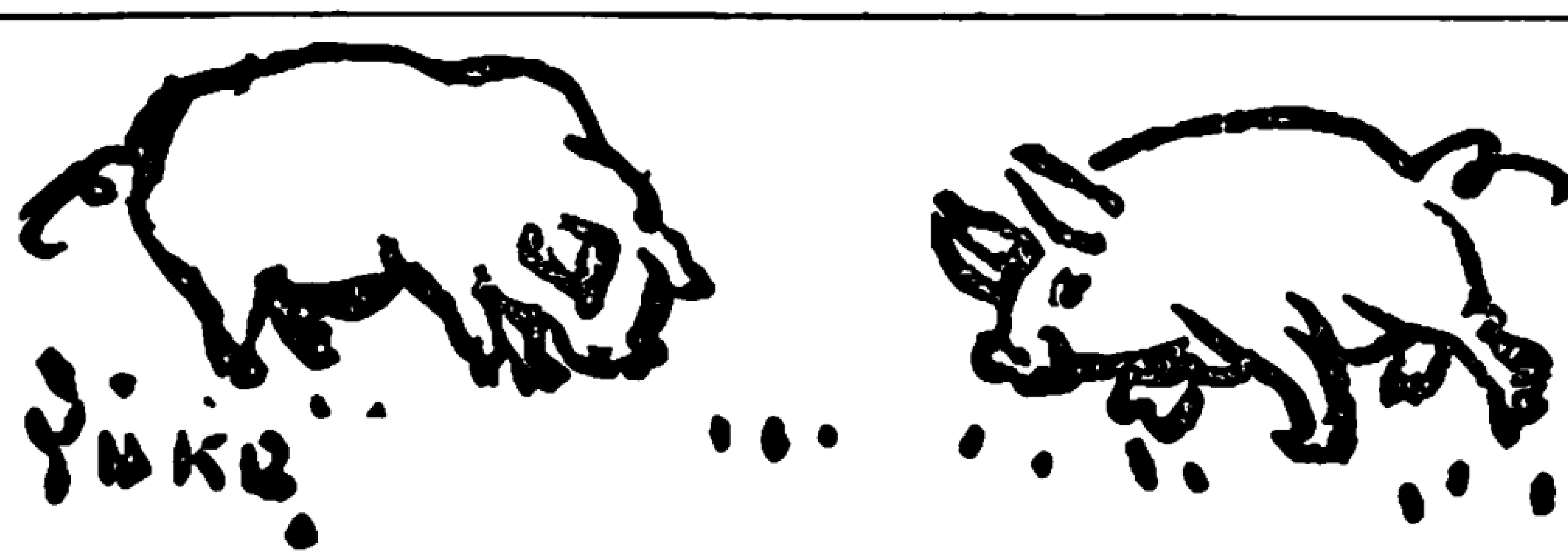
『あのミセス、子供が四人もあるのに、あんな若い男と逃げて、馬鹿ですね、野津のミスターは、クラブでも巾をきかせて居るし、仕事の方からだつて、良人の倍のサラリーをもらつてゐるんでせう。そんな金のある亭主を捨てゝ、男前こそ美くても、たつた四〇ドルの原と逃げるなんて、私なら馬鹿くさくつて、嫌ですがね。』日本の私娼と同じ事をしてゐる料理屋の仲居の太田が、皿洗ひの手を休ませた。



ちたノラ

生活——

シズ



『あの女、なかく別嬪ですから浮氣もしたでせうよ。原の外にも、二三人男を持つて居たさうですが、原が一番若かつたのでせう。女學校を出てると思つて、途中ですれ違つても、ツンとして物を言はないのですよ。』

『今夜、ミスターと自動車で歸へつてくるさうですが、どんな顏をしてゐるか、見てやりたい。』

『今頃の女學校ぢや、間男をすることを、敎へるんですか？アハ、、、。』

一昨日の今日、日本の新聞記者より鋭敏な彼女達によつて、事件の乏しい同胞間は、一組の馳落者の流言蜚語で充滿してゐる。ホテルの年長で過去のモダン、ガールのミセス安井は、七人前の魚の切り身を鍋にならべてから、腰をたゝいた。

『あんた達、あんまり騷ぐもんぢやないよ。年老つたミスターを持つてゐたミセス野津のことも少しは、考へて上げるものさ、ぢやが四人の子供のことを考へなかつたのは、いけないね、かうなると子供が一番、あはれぢやからなあ。』

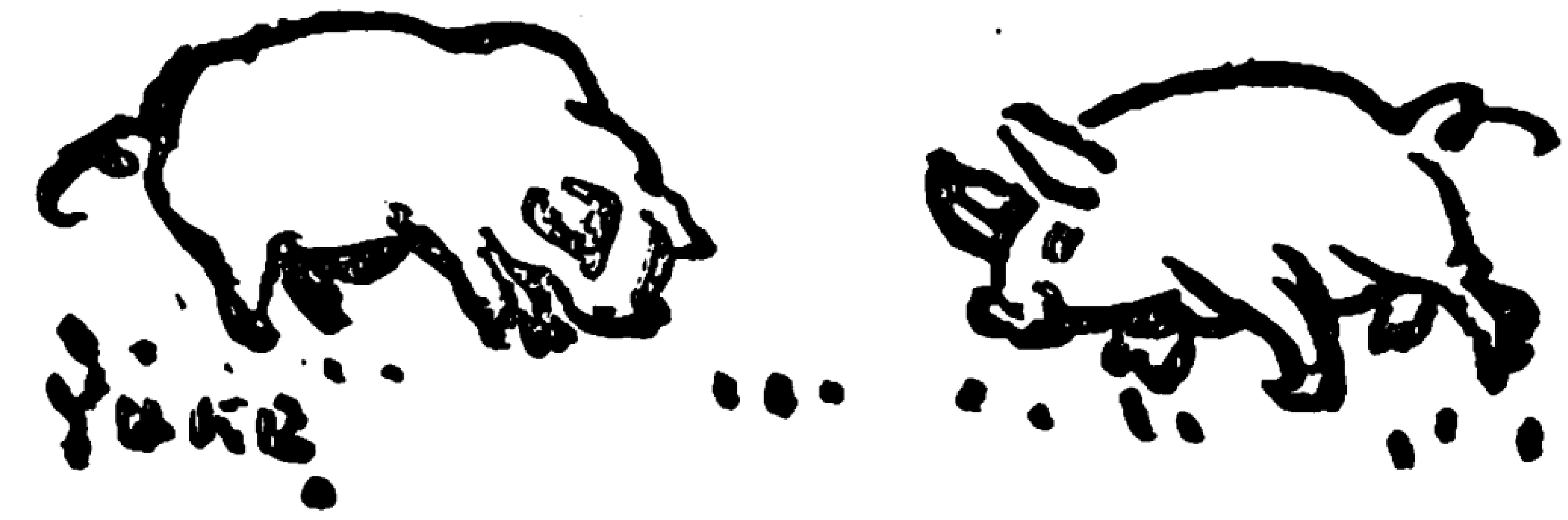
過去のモダン、ガールも、五人のマヽである。

『子供より、若い男の原がよかつたのぢやらう。アバ、、、』

ミセス山本の哄笑は、洗はれた、スペニチと一緒に、ルームへ姿をかくした。ミセス山本の哄笑からダブル、ベッドの、若い良人の唇を思ひ出した太田のミセスは、慌てゝ去つた。流れかけた二粒の米を拾つた玲子は、ミセス安井と、ルームへ急いだ。

『久保のミセス、ないしても、ミセス野津は氣の毒ぢやなあ、わしに云はすと、日本へ逃げるのは、どうして失敗するのは決つてゐるのぢや。モンタナ、ソート、レーキ、の方向へ行つたら、よかつたなあ。今まで日本へ逃げやうとした、十人の中で八人までが失敗して、中西部に、逃げた者は、十人が十人成功してゐる。勉強をうんとしてゐるミセス野津と、日本語さへ、ろくに書けんミスター野津ぢやもの。二人があはんのは、初めから解つてゐるがな。ミセスも、よつぽど、苦しかつたのぢやらう。わしかて、日本を出た時は十七で、日本の女といふたら人がふり返つてみる程、少かつたのや。そんな時ぢやから、男がワイくいふて、どうしても、亭主だけですまされんやうにするのぢや。二度ほど逃げた事もあつたが、パヽが追つて來て連れて歸へる。子供が生れる。年を老つた。來年こそ日本へ歸へらうと思つてゐるうちに二十五年が過ぎて、折角、辛棒して建てた日本の家は火事で燒かれる。長男の健は、日本の大學校へ入れてやつたのに、親が汗水たらして貯めた金で學校に行きながら、社會なんとかいふ





ものに、なつて、たつた先日、カンゴクに入つたさうな。わしも、一生日本へ歸へれんのだらうよ。ミセス、日本は、もうセルぢやなあ。』

『エヽ、今が一番、よい氣候ですね。』

ミセス野津の話は、傍道に入つた。テンポの早いミセス安井だ。康平が辨當箱を持つて出て行つた。玲子はホテルのミセスに借りた四月號の改造のページから、戀と青春を、探した。パーラーの時計が十二時を打つた。ホールを誰か歩いてゐるらしい。四二號室の白係ロシヤ人であらう。

2

サタデーの夜である。玲子は夜勤が九時の時計と一緒に[illegible]ると、歸つて來た。狹い一室のルームに、四五人の男女の息と煙りと、スチームが交互してゐた。クラブの首腦株で、康平の友人、熊井の顏は、玲子に、玉葱(オニヨン)を聯想させた。彼れは、玲子が大好きであつたから、コートをぬいで居る玲子の兩脚を賞めた。

『オイ婆さん』――二十二の玲子を康平は、さう呼んで居た――

『菓子を貰つてこいよ。』

玲子は、スエターに袖を通した。

久保井、仕事から歸つたばかりの若いミセスを使ふものぢやないよ。野津のやうに逃げられたらどうする、アハヽヽヽ』

皆が、笑ひを爆發させた。須山といふ四尺八寸の男は、熊井に媚びる爲に、云つた。

『久保井さん、あんたのミセスは、野津のミセスより若くて、美しいから、箱に入れておかないと、惡い虫がつくよ。』

『此のミセスだけは、大丈夫ぢや。こんなに美しゆうても、若い男にちつとも氣がないからな。』

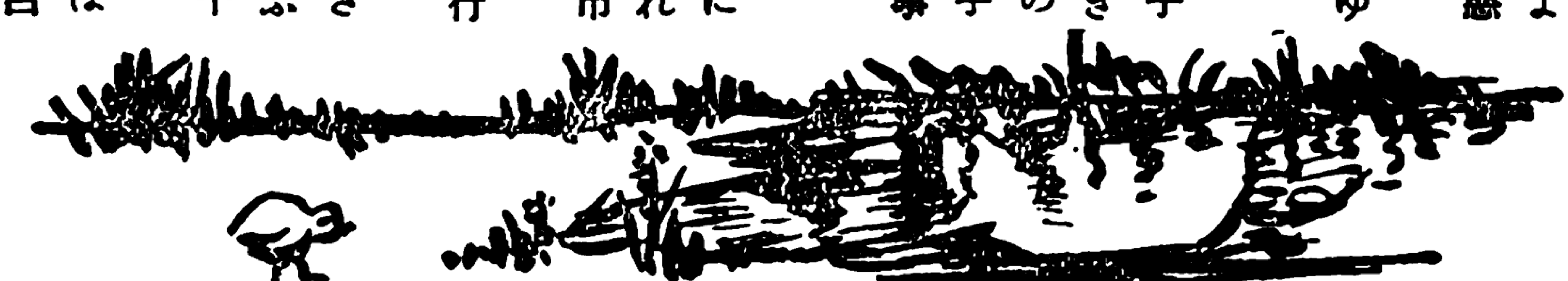
『それぢや、お前のやうな老人が好きかな。』

前よりも烈しい哄笑の渦巻きから逃れて、玲子は、ステップスを下りた。瞳の奥が少しうるんできた。日本のセンベイを持つて上つて來て、五人前の茶わんに茶をくんだ。一本十五仙のシガーと、左手をチヨツキにかけた熊井が、農村視察の日本の知事の偉大さを見せて語つて居た。

『桑港(サンフランシスコ)へ、逃げるつていふ説もあつたが、俺は、原の足を想像して行きはすまいと思つたが、用心に若い者を二つの停車場へ張り込ませて、須山とおれはタコマ、ポートランドを探した。すると、バン市の南さんから電話で直ぐ來いといふのだ。』

熊井の手がセンベイを握つた。知事も、農村へ行くと、センベイでも食べるだらう。

『野津の自動車で須山と三人が飛んで行つた。南さんの話だと、原らしい男が日本行きのテケツを貰ふのを見た、といふだけの話だ。これから皆が夜の十二時迄手を分けて探したが皆目解らないので明朝、船に乗り込む所を押へることに決めて、ベツドへは入ると、間もなく、支那人街で、足の惡い靑年と白





人のやうな背の高い日本の女が飯を喰つたのを見たといふ人間が居たといふので、その人間に案内させて、飯屋へ行き泊つたホテルも開き出して行つた時は、二時廻つてゐた。萬一を思つて兩側のルームに二三人づゝ張り込んで二人のルームのドアーをたゝいた。すると、スーツを着た、原が覗いたから、いきなり、つき倒して、ルームにをどり込んだのさ。ベッドの中に、ミセス野津が、ドレスを着て、酒し込んでゐた。嫌がる二人を連れて、クラブへ歸つて、手を切るやうに懇々と說諭したが、原もミセスも一言も話さないでゐる。　野津に謝罪まれば、許すからつて云ふとミセスが「私は、貴方に謝やまるやうなことをした覺えはありません。」つて、シヤアくとしていふのだ。おとなしい野津もたまりかねたと見えて、ミセスを毆つたよ。四時が打つてもミセスが謝やまらないから皆、寢られない。すると南さんが「あんたは、子供を思ひ出しましたか。ベビーは每晩泣くので、マリコさんが、泣くくあやして居るさうですよ。」つて、いふと、ミセスが突然、ワアッと泣き出した。　俺は氣が狂つたのかと思つたよ。それでどうやら落ちついて、歸つてこられたのだがね。「女には、子供のことをいふのが一番、利きますよ」こう南さんが云はれたが、俺も[illegible]持ち女を口說く時には一ッ利用してみるかな。アハヽヽヽ」

熊井の笑ひ聲から、自惚れが顏を出してゐた。

『ミセス野津は、ミスターが優しかつたから、よかつたなあ。子供もあるから、これで落ち付けるだらう。』

ミセス安井は、家族主義だ。

『皆が、朝、シヤトルへ歸へらうとして、自動車に乘り込んで居ると、蒼い面した原が「僕は、ミセスを愛して居るのです。今、お別れしたら、當分逢へません。どうかお願ひですから、お別れのキスさせて下さい」、といつたので、皆大笑ひさ。熊井さんが笑ひながら原を押し倒しなすつた。すると、ミセスが立ち上つて、止めるひまもない位に敏捷に原の胸へ飛びついた。野津さんが慌てゝ、ミセスの頭をつかんで自動車へ入れたがね。車が動き出してから「原さん、どうか待つて居て下さい。屹度、貴方の所へ逃げて行きますよ」つてミセスが、いふぢやないか。まるで、浪子と武雄の別れみたいさ、アハ……」

『キスさせて下さい、は、よかつたね。アハ……』

康平は顏全體に玲子の唇の觸感を思ひ出させた。

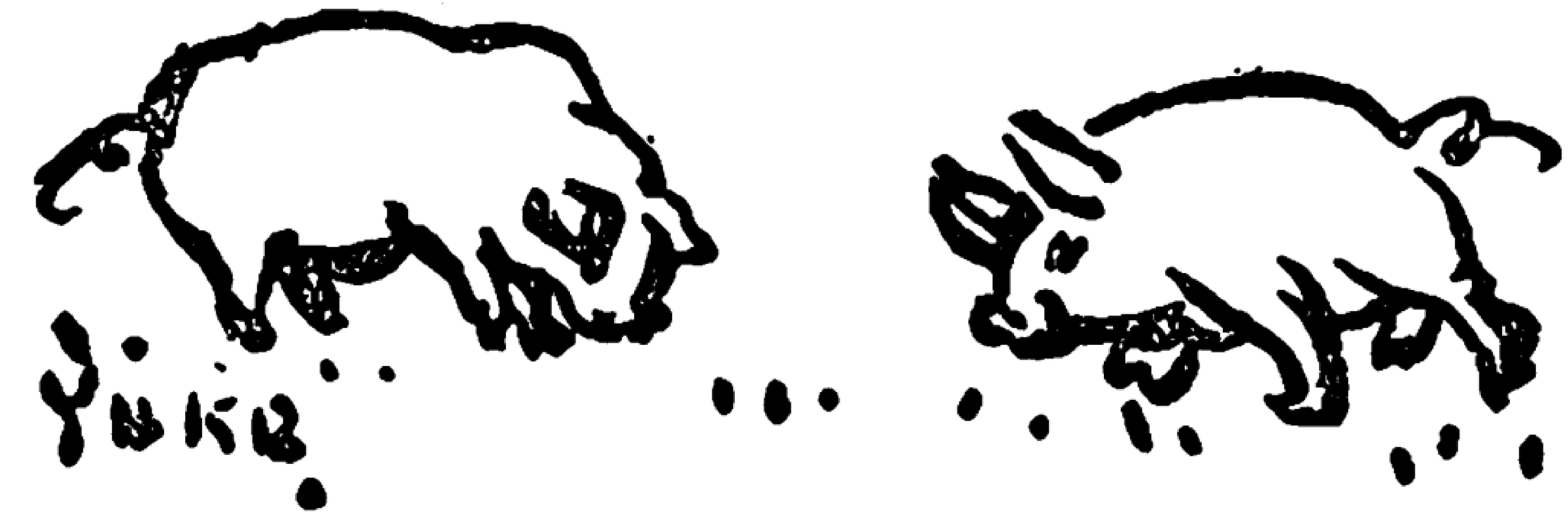
3

七月の明るい太陽は、街を輝らした。毛皮のコートが慌てゝ姿を消して、輕いサンマ・コートと柔いソフト帽子の觸感は若い女の頰の感じだ。

玲子は、ミセス野津事件後は、凋んだ櫻ン坊のやうな新鮮さと、水々しさを失つた。

ストロ・ベリーが、おごれる女王として、店先きに坐り、可憐な櫻ン坊が、行儀よくボックスに入つてゐる最近の、フルーツ、ストアは戰場だ。





玲子と交替のイタリー娘は、内氣な戀をしてゐたが、夏が來ると急速度に男の心が傾いてきた。だから、娘は戀に急しかつた。朝から、野兎のやうに働き續けた玲子の、エネルギーが、三時打つと、絶えさうになつた。四時が打つた。玲子は機械的に、手を動かして居た。五時が打つと足が動かなくなつた。ツバの狹い帽子から金髮を覗かせて、白い額の汗を拭きながら娘がやつて來た。

市場（マアケット）をぬけると、明るい第二街のアスフアルトが、玲子の眼に痛かつた。工場街から、勞働者が流れて、明るく愉快に談笑しながら、玲子を追ひ越して行つた。ジヤクソン街の汽車の停車場まで來ると、幾人も電車に乘る爲に走つて來た。玲子は、自動車を避けやうとして二歩退つた。走つて來た二人連れの青年とぶつつかつた。青年の體格は頑丈だ。

『ごめんなさい。ミス。』青年は、倒れてヒザから血を流し、スタツキングを汚した玲子をいたわつた。血は、止らなかつた。青年は、ハンカチを出して結んでくれた。結んで居る手の肌と、指の觸感から、青年が、日本人である事を知つた。

4

昨年の七月、縣人會のピクニツクの時、數江達と、巻ずしやタケノコを食べて居た。男に對して異常に銳敏な數江が、久保井のミセス、今、アイスクリームを持つて此方へ來る、白いシヤツの人ね、有名なお金持の淺沼さんの子息さんですよ。隨分美い男でせう。日本人の間にあんな美しい青年が居つと思ふと、力強いわね。』

『久保井のミセス、彼の人「パリーのアパッシュ」に出た、ジヤツク、カトランにそつくりね。』

シネマ通の數江は、さう云つて見送つてゐた。玲子は、ジヤツク、カトランより、もつと新鮮さを持つた青年の長身が、心一杯に浸みてきた。

『あの、貴方は、淺沼哲さんとは、おつしやいませんか？』

兩脚から白人だと、思つて居た玲子の日本語に、青年は不審さうに眉をしかめた。空色ドレスの細そりとした玲子の姿から、青年は仕事着のフルーツ、ストアの女を思ひ出した。

『やあ、貴女は、久保井のミセスでせう。道理で、白人の娘さんにしては優し過ぎると思ひましたよ。』

『まあ……オホ……。』

疲勞と、重い心が、笑ひと一緒に、流れ出た。

『私を、御存じですの？』

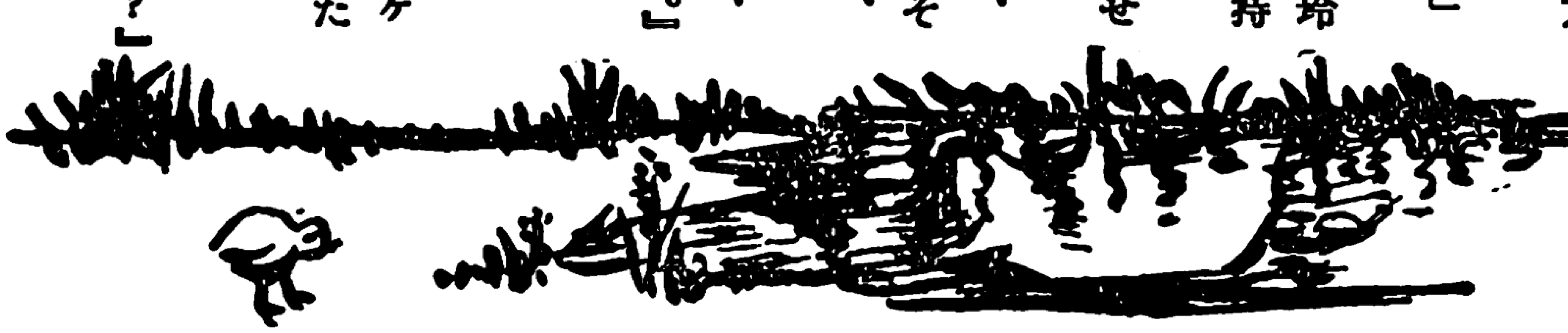
『エヽ、シヤトル日報の關口君と、一緒にマアーケツトに行きました時、關口君から、敎へて戴いたのです。』

玲子は、淺沼の總てに、好意を感じた。

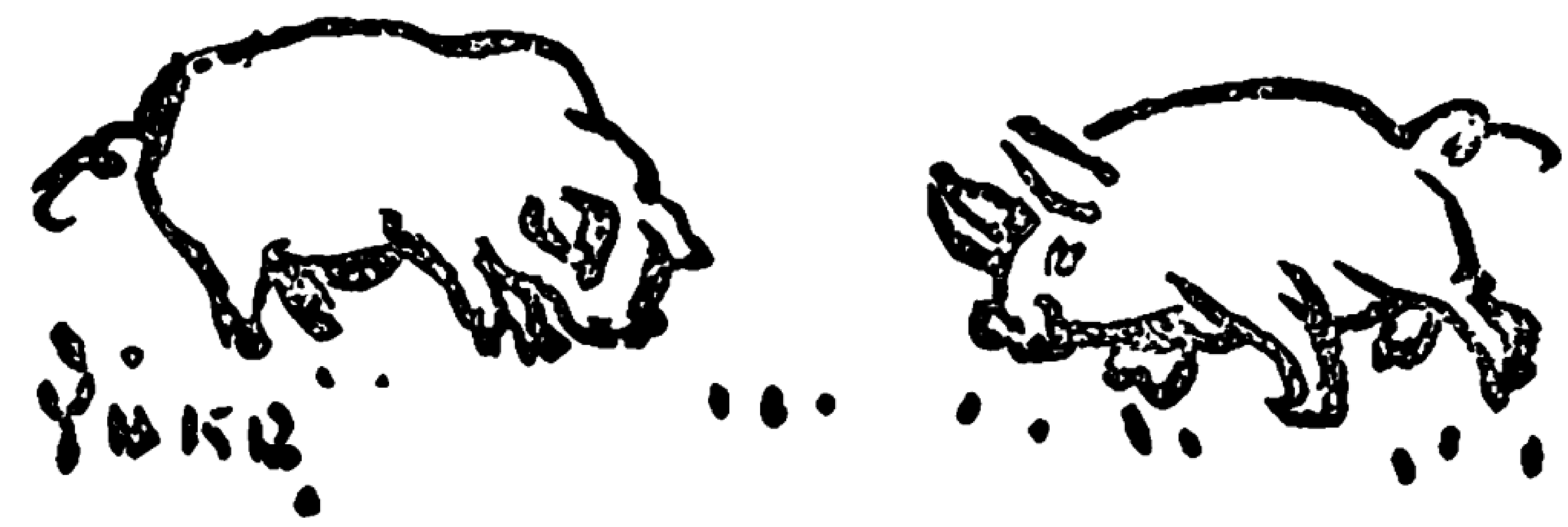
『どうも、失禮しましたね、まだ、疵が痛みますか？』

『イヽエ、そんなに痛みません。』

『お宅まで、お送り致しませうか？』



玲子とならんだ淺沼は、肩を貸さうとした。
『私、メナードですから、一人で充分歸へりますから、どうぞ、貴方は、お歸へりなすつて下さい。』
大丈夫ですか。お困りぢやありませんか？』
『ほんたうに、大丈夫ですから、どうぞ、お歸りなすつて下さい。』
『さうですか。ぢや、失敬します。』淺沼の電車が去ると、玲子は、新らしく疵が痛み出した。



5

アルカイの岬が、曇つて見えない日が續くと、玲子の哀愁も深くなつた。數江の父親、日本人會の副會長、今井庄二郎が、二十年振りの日本を訪問して歸つて來た。利害關係の深い人達が、夕食に招かれた。床の下から出たコウジ臭い濁酒がテーブルの上を飾ると、ダイニングルームの空氣がゆるんで、庄二郎の、日本での豪遊談を、羨しさうな顔して聞き惚れてゐるのが、シヤトル一流の名士連だ。玲子が數江に招かれて、ルームへは入つて來た。

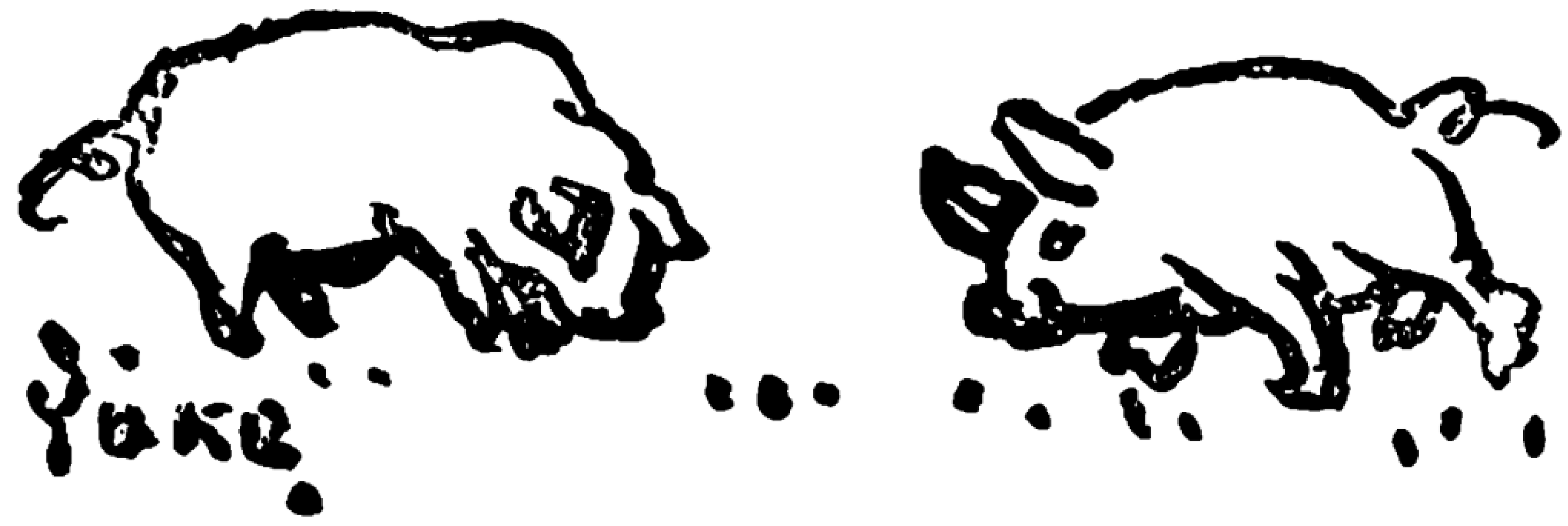
酒の飲めないシヤトル日報の關と、庄二郎の故里の金持淺沼雄吉の長男、淺沼哲の二人が、紅茶を飮んでゐた。
『ミセス、先日は、どうも失禮致しました。』
『イヽエ、私こそ。』
『あら、お二人は、もう御存じなの？』數江は、小柄な身體と、細い瞳一杯に、嫉妬をこめた。
『先日、ケガをしたでせう。あの時、淺沼さんから、お世話になりましたのよ。』
『さう。ぢや、紹介する必要は、ないのねエ。』

女學校出の數江を中心に、日本文壇の話が二人の男に玲子の存在を忘れさせた。

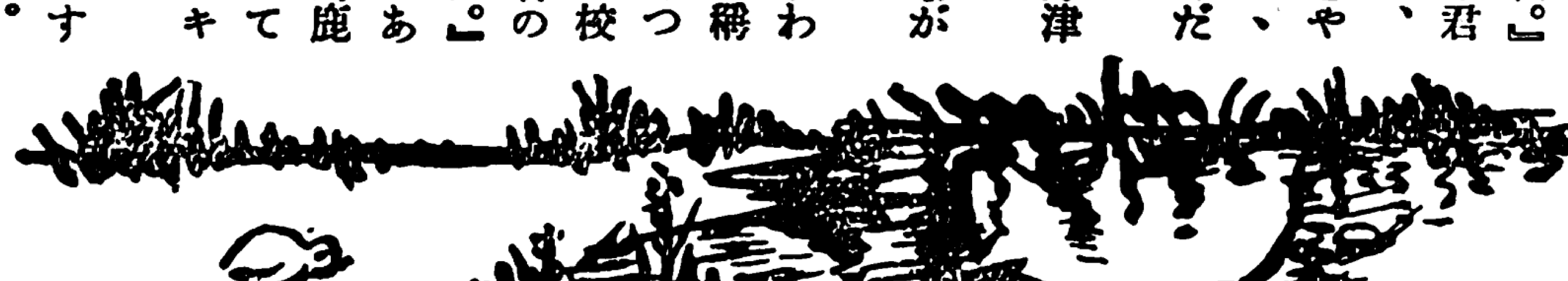
玲子は、淺沼の男性的な横顔の線に、見惚れた。

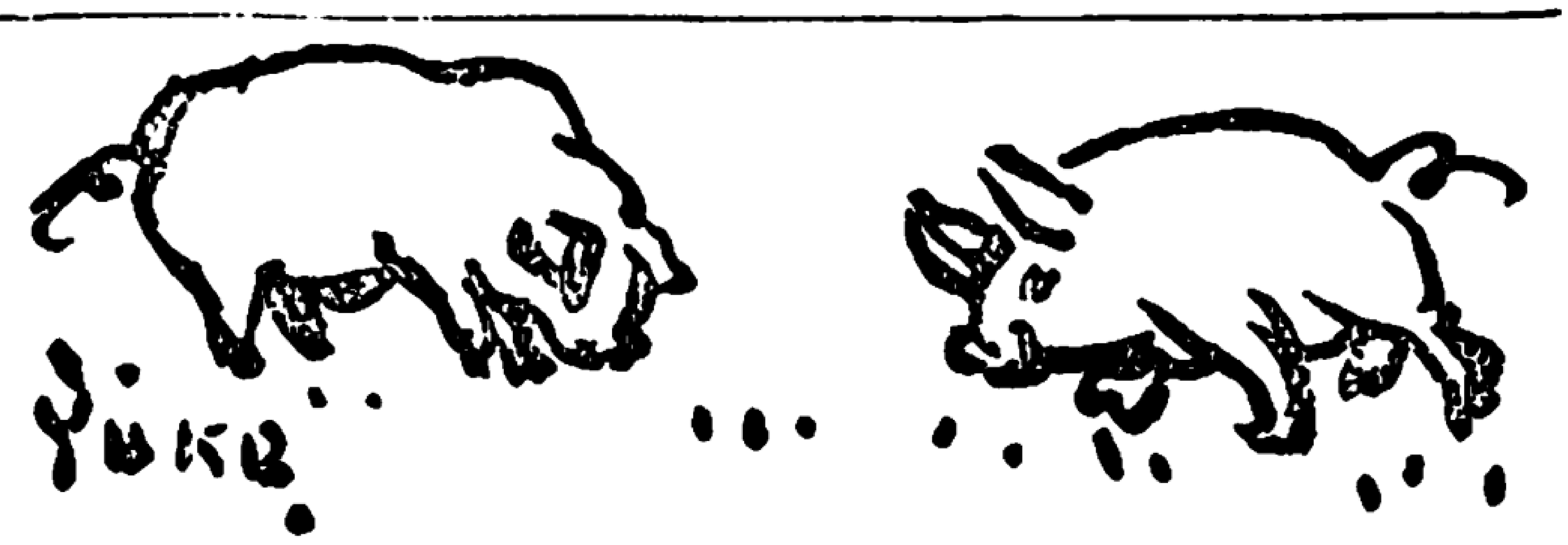
浮氣な女の首飾りのやうに話題をかへる數江は、關と、淺沼に媚を送つてから、云つた。
『あれから、野津のミセスは、どうしてゐるでせうね。もう二ヶ月になりますわ。』
『先日、フレデリツクネルソンで逢ひましたが、やつぱり美しい顔をして居ましたよ。』
『いやな、關さん、貴方は、どんな時にでも、女の顔の美醜ばかり氣にかけて、ゐらつしやるのね。』
『アハ……、日本を離れると、日本女の美に飢えますからな。それにアメリカに來てゐる日本の女には、不思議と美人が居ない。時々見受ける女も一眼みて、美しいと思つて、二度目に逢つて見るとちつとも美人でない、所が、ミセス野津は逢ふ度に美しいと思ひます。顔全體から受ける感じは、敎養高い女のみが持つノーブルさですからな。ミセス野津と逢つた意味で、久保井のミセスも美しいな。』
『さうよ。久保井のミスセは、何處となく初々しいでせう。』
『野津のミセスは、熟れたアンズの觸感を持ち、





ミセス久保井は、高山植物の新鮮さを持つて居ますね。』
『淺沼君の、云ふ通りだよ。』率直な淺沼の言葉は、闘を喜ばせ、玲子の頰は新鮮な朱をのぼらせ、數江に、唇をかませた。玲子は、新しいケーキを取りに、ケチンへ行つた。
運んだ、レモンパイと熱い紅茶は美味しかつた。
『僕は、ミセス野津は、眞實に目覺めては居ないと思ふ。彼女は、三十近い女の持つ豐滿な肉のはけ場が、若い原を、迷はせたゞけのことだと思ふよ。彼女の過去は、僕の言葉を裏書してゐると思ふがね。』
ミセス野津の美を稱へた闘は、淺沼の意見に反對だ。明らかに挑戰的態度を持した數江は、淺沼の美しい顔に細い瞳から視線の火花を送つた。
淺沼さんのおつしやるやうに、眞險に、目覺めてゐるといふ事は、私には認められません。子供を四人もつくれる程の結婚生活を續けて來た女性が、美しく若い青年の出現で、浮氣な虫の徒ら心から、家を飛び出しただけでせうと思ひますわ。淺沼さんの說の通りなら過去に於て飛び出すべきチャンスは充分あつたと思ひますわ。』
淺沼は、數江の視線を冷然として、はね返してから、云つた。
『人生つて、貴女がおつしやる程、單純に行けば、鬪爭もなくなつて、平和になるでせうがね。ミセス野津は、幾人かの同性によつて失敗されて居る事を充　知りながら、同じ經路をとらねばならない程苦しかつたのでせう。あれだけ敎養高い女性が、一時の享樂で自分の一生を迷ふとは思はれませんね。』
『それは、ミセス野津の側面を觀たばかりだから君は善意に解釋してゐるがね、移民地の女つて奴は、虛榮と嫉妬と金の爲には、平氣で操の切り賣りをやるのさ。ミセス野津も、賣り過ぎたのだよ。アヘ、、、見てゐたまへ。これでミセス野津も落付くだらうからな。』
『僕は、移民地の多くの女と同一には、ミセス野津を考へたくありませんね。』
レモン、パイの大半を食べた數江は、冷笑しながら云つた。
『オホヽヽヽ。美人といふものは、隨分得ですわね。若い男と不義をしても、目覺めた女だつて、稱めてもらへてね。私、あんな女はどんなに美しくつても、斷然嫌ひですわ。あのミセスのおかげで母校の名まで、汚れてしまひましたわ。あんな勞働者の妻君になる位なら、女學校も出なければよいのに。』
淺沼は、敎養があると思つた數江の人格がゼロであるのに氣が付いた。これ以上、相手にするのは馬鹿らしかつた。淺沼の消えて行く煙草の煙りを追つてゐた。玲子は、數江の挑戰と、友人の爲に、ハッキりとした物靜かな口調で云つた。
『私なども、學歷としては、尋常科を出ただけですが、人間としての向上心は、失はないつもりですわ。





野津のミセスが、享樂的だ、一時的だと、おつしやいますが、彼の人の態度や行動は、それを消してゐるぢやありませんか。あゝした事をした女性が對社會から、どれだけの壓迫と冷嘲されるかと、いふこと位は、賢こいミセスは知つてゐる筈です。それですのに、あゝした行動に出ずには居られなかつたミセスの眞劍な戀を、第三者の人達が騷ぐ必要はないと思ひます。戀は社會的なものぢやありませんわ。女として、人間として、眞實の道に突進しやうとしたミセス野津の氣持は尊いものだと思ひます。多くの移民地の女のやうに良人に同化して金を追つて移民地化することの出來ない女性は、長い人生を、どうして暮して行けばよいのでせう。貧しい生家を持つて居る多くの人々には、物質的に豐富な現在の生活は、大きなミワクですわ。それから、逃れ得ないで、どんなに苦しんで居るかお金持の人々には、解らないでせうよ。勞働者の妻だつて同じ女であり人間です。學問がある事は、ちつとも誇りにはなりませんと思ひますの、私などは、ミセス野津ほどの……』

玲子は、話の中途から、すつかり興奮して自分の苦惱を語る愚な態度に、氣付いて、口を緘した。

オヤ、ミセス久保井は、小鳩ぢやなかつたぞ、なか／＼確つかりして居るな、と、關は感心した。

此の人、淺沼さんに好かれやうと思つてゐるわ、と數江は思つた。

淺沼は默つて、玲子の黑い髮をみつめて居た。

6

シヤトルの冬は、第一街を步く女のコートの襟からやつて來た。

街は、クリスマス、デコレーションで飾られ、街路燈の釣り鐘が、雪を重げに坐らせてゐた。隣りの牛肉店（ミートストア）は、ハダカの七面鳥（ターキー）と、その三十倍の人間とのジヤズだ。玲子を、スペイン娘と信じてゐるゲリークーパーは、血眼になつて、長い足を踊らせて居た。

玲子は、ボンヤリと、店先きに立つて居た。

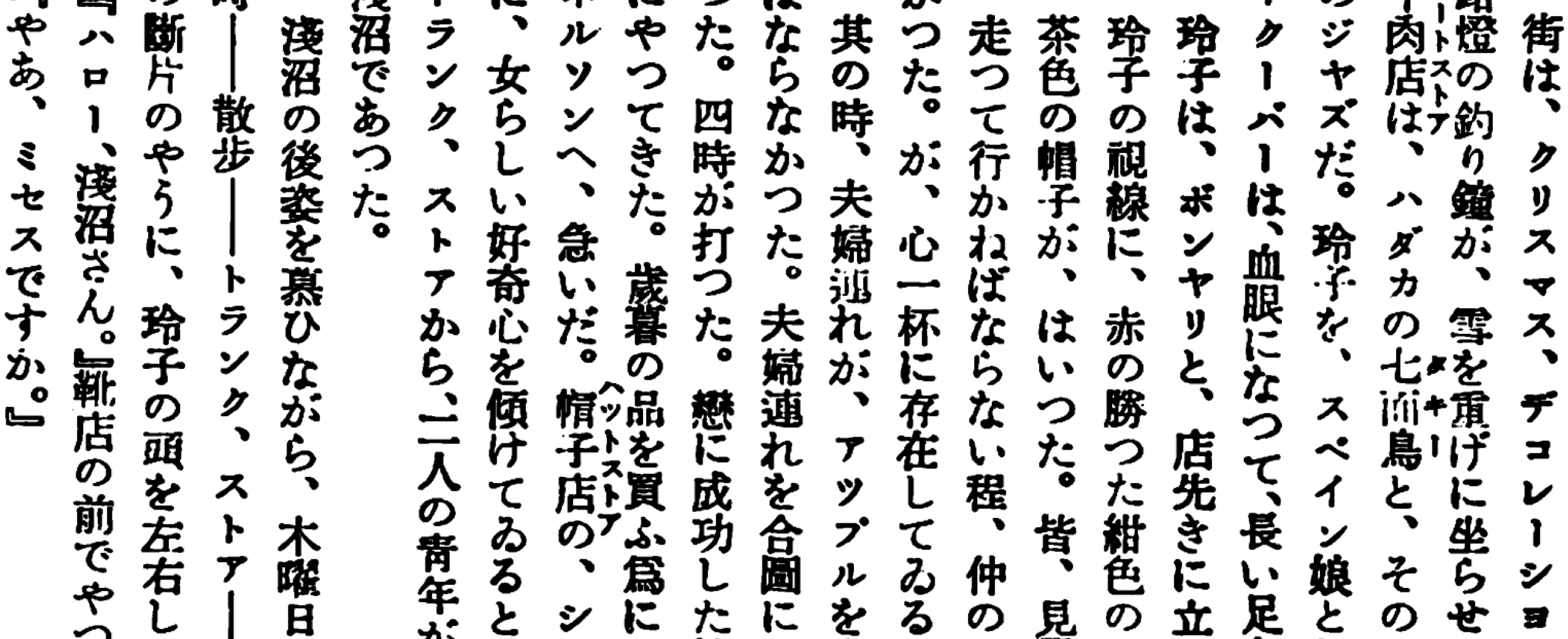
玲子の視線に、赤の勝つた紺色のスーツ、コート茶色の帽子が、はいつた。皆、見覺えがあつた。走つて行かねばならない程、仲のよい友人でもなかつた。が、心一杯に存在してゐる人の後姿である。

其の時、夫婦連れが、アツプルを求めた爲動かねばならなかつた。夫婦連れを合圖に、又、忙しくなつた。四時が打つた。戀に成功した娘は、踊るやうにやつてきた。歲暮の品を買ふ爲に、フレデリツクネルソンへ、急いだ。帽子店（ハツトストア）の、ショウ、ウヰンドに、女らしい好奇心を傾けてゐると、四五間先きの、トランク、ストアから、二人の靑年が出た。一人は、淺沼であつた。

淺沼の後姿を慕ひながら、木曜日――工場――三時――散步――トランク、ストア――と、フイルムの斷片のやうに、玲子の頭を左右した。

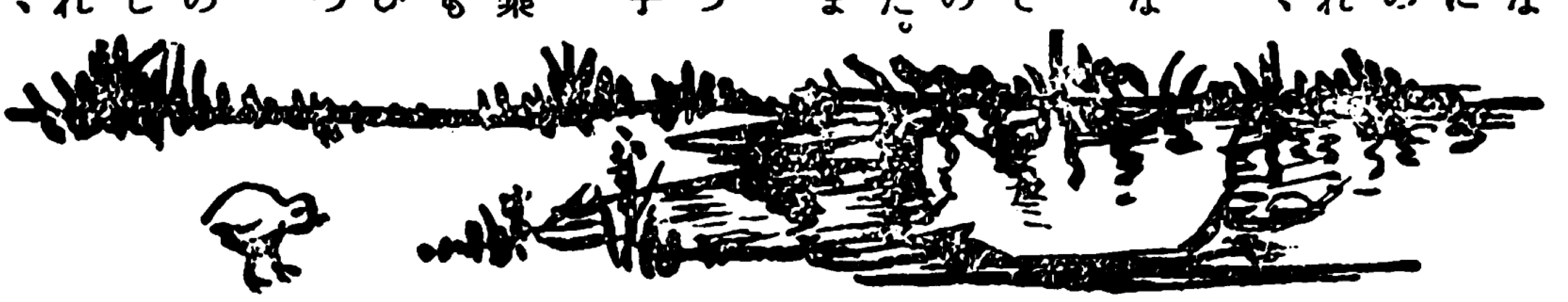
『ハロー、淺沼さん。』靴店の前でやつと、追ひつけた。

『やあ、ミセスですか。』





『今ね、あそこのストアからお出になりましたので、後を追ひましたのよ。』
『さうですか。ちつとも知りませんでしたよ。どちらへ？』
『フレデリック、ネルソンへ行きますの、貴方は？』
『僕もで…。御一緒に行きませう。』さう云つてから、連れの青年を紹介した。第二世らしい連れの青年は、アクセントのある日本語で、挨拶をした。
　買ひ物を濟して、青年は去つた。一二軒立ち寄るストアのある玲子の爲に、淺沼は雪の中を歩いてくれた。
『寒いことですね。』
『ほんとうに、今年の寒さは特別ですわ、なんでも十五六年ぶりの寒さですつてね。』
　平凡な會話は、足を速めた。
　向ふの道へ渡らうとした玲子は、急カーブした自動車の、車輪の下敷になりさうであつた。
『危い！』淺沼が驚いて、抱き止めた。自動車の女は輕く頭を低げて行つた。淺沼は、直ぐ手を離したが、左の頬にかゝつた白い息と、力強い腕の觸感は、玲子の胸ををどらせた。
『ミセス、もう直ぐ、正月ですね。僕は、二年ぶりに日本で正月を迎へます。』
『エ、？』をどつた胸に驚きが、フタをした。
『明後日の船で、日本へ、歸へります。僕は、御承知でせうが、親父の名譽と、同志の一人の裏切りから、渡米してきたのです。日本へ今歸へる事は、ブタ箱には入る爲に歸へるやうなものです。しかし、黄金の渦卷いてゐるアメリカに居ることは、友人の一人もない僕の氣弱さは、僕の精神を墮落させるやうで、たまらないのです。それに、闘爭で多忙な同志は、僕といふ小さい存在など、忘れてしまふでせう。たつた二年でさへ、十年も、おくれてくるやうな氣がして此れ以上は、ゐたくないのです。』
　淺沼の話で、玲子の先刻の豫感は馳け足でやつてきたのだ。玲子は、足元の雪が蒼く見えた。玲子の細いからだと、顔色は淺沼の服にいぢらしく映つた。
『ミセス、貴女は、此の夏から見ると、隨分やせましたね。何處か、お惡いのではありませんか？』
『イ、エ』玲子の、大きい黒い瞳が淋しさうであつた。寒さうに、コートのカラーを合せてから、玲子の爲に快活に話しかけた。
『ミセス、野津は、又、失敗でしたね、折角船に乘り込んで一日目に、捕まえられるなんて、彼の女も不幸でしたね。オ、、呪はれた飛行機よつて、云ひたくなりますね、アハ、、、、。』心は、苦しかつた。が、沈默は今の場合苦惱の二重層だ。
『二度が二度とも、不幸に終つて、ミセスもお氣の毒ですわ彼の船がビクトリヤを出て、五時間位して、飛行機で追つて來たミスターに、連れ歸へられたさうですつて。昨日お訪ねしましたら、「私ね、





又、逃げるのよ。どんなに頼んでも離婚してくれないのですもの。私は、逃げ出す度に、強くなつて行けさうですわ。』つて、微笑んで居らつしやいましたが、すつかり痩なすつて、どんなに苦しんで居らつしやるだらうと思ひますと、お氣の毒でなりませんの。』

『女もあの位、強くなくては、いけませんね。だが、ミセスは、同じ事を繰り返へしながら、結局、移民地で埋まるのでせうな。移民地といふ所は、泥沼と同じですよ。喘へげば喘へぐ程、逃げられなくなりますからな。ミセス野津も、ノラにならんとして、ノラになり得ず、泥沼に墮ちて行くのでせうなあ。』

淺沼の瞳と、眉が、ちよつと曇つた。薄い肉色のスタッキングの先きから、寒氣がヒシヽヽと全身に浸入して來た。それ以上に、玲子の心は、寒く佗びしかつた。

『淺沼さん、私には、ミセス野津の情熱が羨しいのです。私は貧しい小作人の長女に生れて、十八の春、渡米しました。二十七と思つた花聟が四十一でした。病身な兩親と、澤山の弟妹のことを考へると、牛馬のやうに働いて行かねばならない私ですの。金と、バクチと、女に二十幾年を過して來た良人には、講談本の岩見重太郎の低級さを、嬉しがつてゐます。ですから、私の讀書は制限されて、長い間、一册の本すら讀みませんでしたの。それで、又平氣で居た程、無智な私でした。けれど、最近、數江さんから拜借して、日本の改造を讀んで居ます。でも、解らない箇所ばかりですの。それを教しへて下さる方もありません。教養も節操も、ドブへ捨てた良人と、どうにかして、向上しやうとしてゐる私との結婚生活では、結局、私が負けてきさうで、たまりませんのよ。氣の弱い私でも、ミセス野津のやうな烈しい情熱を持つてゐたら、何も彼も振り捨てるでせうに。でも、ミセス野津のやうに情熱の導化線になる戀もありません。私など……』

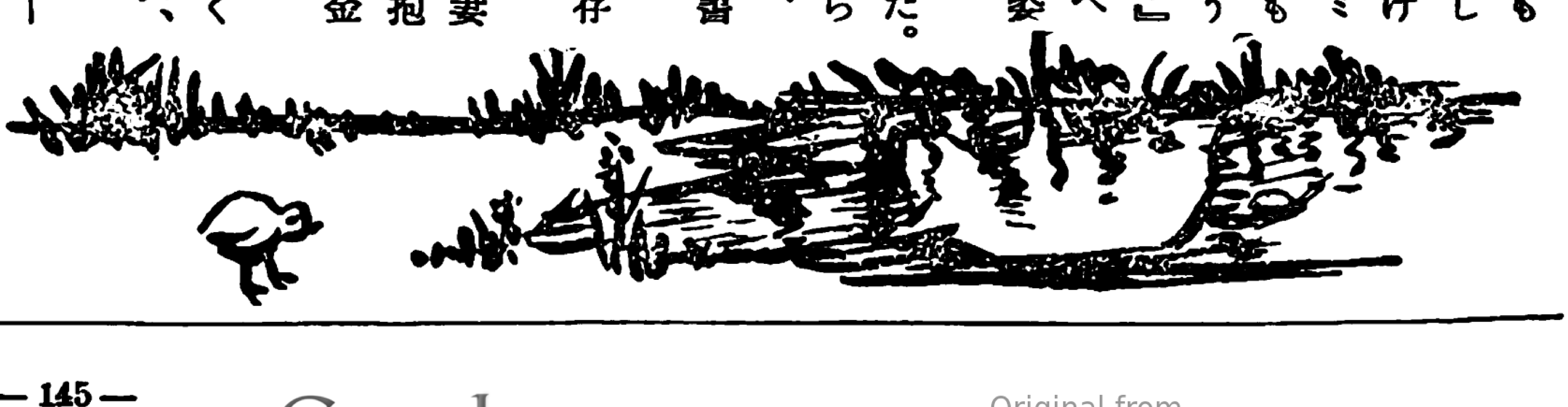
玲子は、それ以上、云はなかつた。明後日日本へ歸へる青年を、戀して惱んで居る自分の慘めな姿を、思ふとたまらなかつた。

淺沼は、格好のよい高い鼻の横に、涙を見つけた。此の女も苦しんで居る、誰かに戀をしてゐるのだらう、そんなことを思つた。が明後日の日本行きは、淺沼の興奮剤だ。左手の包み紙には、四五册の英書が、淺沼の瞳を待ちこがれてゐる、玲子といふ人の存在などよりも、明日、送つてくるトランクの存在の方がより以上必要なのだ。

自動車と、電車との雜音の中を、親に、子に、妻に、良人に、愛人に、クリスマスのプレセントを抱いた人の波が、百貨店から、十仙ストアから、貴金屬店から、吐かれて吸はれてゐた。

高い百貨店と、ビルデイングの間から、間斷なく降る雪の子を、一人は明るく、一人は暗く、オーバ、シユースの足を運んで行つた。

一九三〇—一一—一二—





造花の

──御大典側面・

岩上

1

赤と、青と、廊下の端から端へ延びた棒縞の絨毯から、熱つぽい昂奮が發散してゐる。

『桃山』の食堂の三階――透明なシャンデリアの光が、きらびやかな四圍の金鋲に映える。雪白のテーブルクロスに、切口の青くした竹筒が置かれ、黄菊白菊が盛れこぼれてゐる。小奇麗にナイフとフォークを動かしながら、色の白いまだ獨身だといふ諸國公使附の辻が、隣の男に話しかける。

「今夜はお休みとするかな。ゆうべはとうとう一睡もしなかつたよ。」

「ふふ、何しろ歸つてきたのが曉方だつたからな。」

「……どうも、若い人達は仕様がないねえ。」

物臭くテーブルに倚りかゝつて料理の叱言を言つてゐた、英國書記館附のお留婆さんが小さい白眼をぢろりと動かす。大使附の竹内は、七十の鬚を品よく具へてゐる。

「さしづめ、私は監督役だが：…。」

「第一、安價いですよ、京の女は全く。」

これは又ひどく實際的な隣の男が、ふところ工合を暴露する。と、丁度背後に立つてゐた給仕長が

「ですから、此の年齢になつて私はまだ獨身でゐるつていふ次第なんです。」

我も人もにや／＼する中で、房江はひとり冷たく頰を澄ませてゐた。

「いや、男といふものは馬鹿なものです……。」

半ば自嘲的に、半ば辯解的に、辻はどこまでも眞面目である。

「しかしまた、これでなか／＼さうでもないところもあるんですが……。」

まともに、熱心に、注ぎかける視線を、花の蔭に避けながら、房江はひそかにどこか脂の拔け切らない言葉の氣取を氣にしてゐた。土耳古附の妙齢のミスが二人、小ざつぱりと服を着變へて入つてきた。

「グッドイブニング」

如才なく、竹内さんが聲をかける。

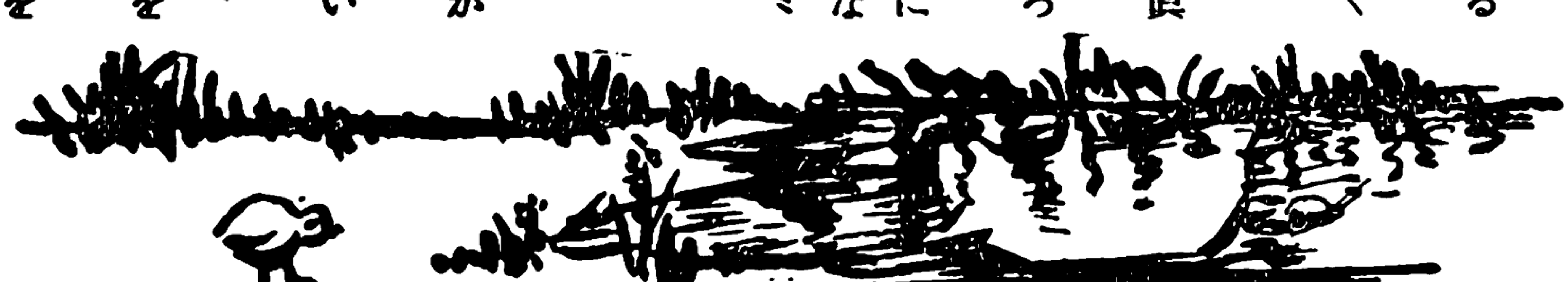
「遲うございましたね。」

年齢下の活潑なのが、向ふのテーブルにつきながら金髮をくねらせて

「イエス、私共のマダム、大變、むづかしうございます。」

和蘭附の太つたお大さんが、大きくうなづくと、おかしな身振でドレスを着たり脱いだりする眞似をして見せる。

「うちの奴、今日大禮服を着ちやつてから、勳章を



ように・



Kホテル風景——

登喜

つけさせやがつた。癪に障るから拳骨をぐいつと突込んでやつたら、うーむとか何とか言つたよ。」伊國附の若い氣さくなボーイが、左手に握り拳しを作つて見せると、一座他意なくふき出してしまふ。

「……あとが恐いぞ。」

「何卒お遊びにゐらして下さい。七階へも。」

ナプキンを置いて立上つた、二杯目の麥酒にまぶたを染めた瀟洒な辻の後姿を見送りながら、

「きれいなボーイさんだね。何國のだい？」

お留さんがさゝやくと、お安さんは眼をきよろくさせながら、大袈裟に胸を叩いて言つた。

「あゝいふ體裁のいゝ人はね。危ないよこゝが。」

2

ブラジル書記官の若いマダムは、トランクの中へ澤山玩具を詰め込んできた。水淺黄の帽子を横つちよに被つて、『お預け』をしてゐる斑犬や、細長い尻尾をぴんと跳ねた黒猫や、赤いリボンを結んだ白熊などが、華奢な化粧臺の上に所狭きまで並んでゐる。鏡の中には、向ふ側の壁にかゝつた大きな十字架が、ピンクのリボンで飾られて、これもあでやかに映つてゐる。

大使夫人の廣間には、はるぐ〵籠に入れて連れてきた、メキシコ產の小犬が大切に飼はれてゐる。價數千圓。世界に比類ないものだといふ。紅羽二重のちやんく〵を着て、夫人の香水のしみた贅澤なうすものゝ下で眠つてゐる。然るべき方面から贈られた、見事な竹編の果物籠から、溫室出來の靑葡萄や水氣の多い西洋梨がとり出されて、骨張つたペトロの、又はペンヂンに腫れたエリザベスの掌が、朝夕、小犬の飢えに奉仕する。

ある朝、琵琶湖の船遊びに主人達が早く出掛けてしまつたあと、まだ暖もりの去らない夫人の寢床へ、犬がのつそり這ひ込んだ。いつものことゝて仕細なく、ふわり毛布を被せて、エリザベスは窓際の仕事臺に向つてゐた。

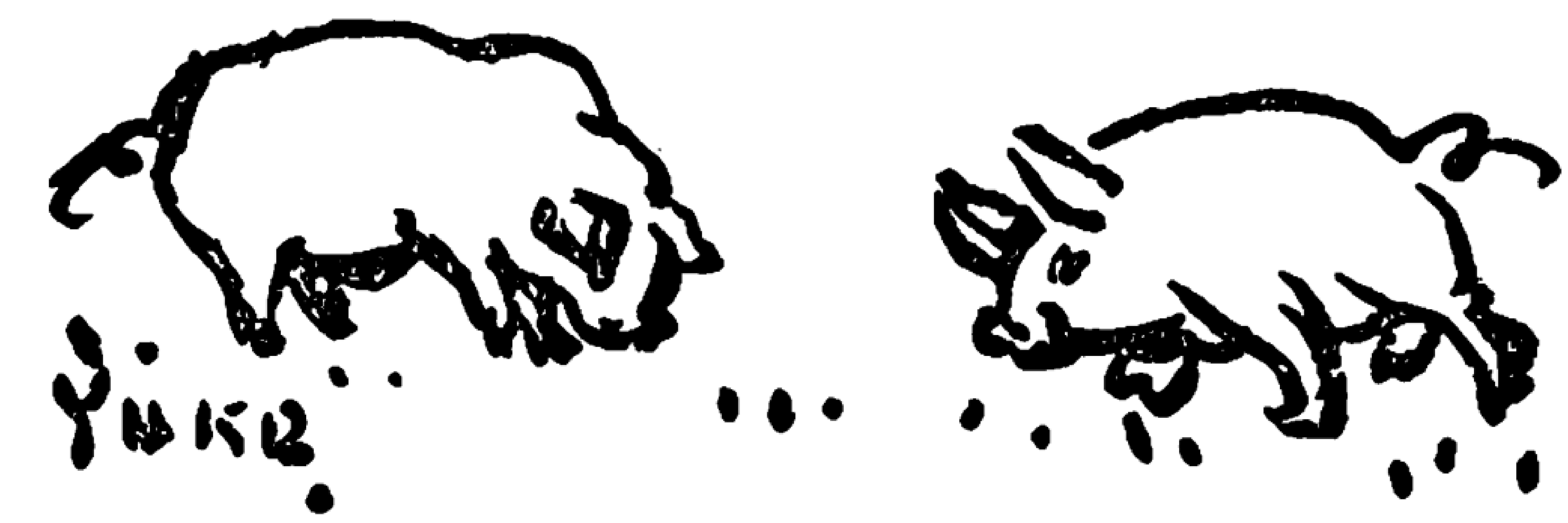
暫くして、玄關の見送りを濟ませて歸つてきたペトロは、未だ直されてゐないベッドの樣子に、何心なく近付いて毛布を剝つた。ばたり激しい音を立てゝ小犬は床に轉げ落ちた。肉の薄い肋骨を搏たれて、一聲きゆうつと鳴いた。

物音に驚いて振り返つたエリザベスの眼には、すつかり血の氣の失はれた、鬚の濃い、ペトロの顏が、殺氣立つて物凄く映つた。

「もしも此の犬が死にでもしたら、自分も亦六階の窓から飛降りてしまふのだ！」

わなゝく指先でその窓を示したペトロには、五人





の子供とその母親とが、待つてゐるのだ。

その晩三つの夜具をのべた自分達の部屋で、エリザベスから此の話をきいて、房江は何かしら、胸に熱いものを感ぜずにはゐられなかつた。

3

なごやかな熟睡を、硝子戸の激しいノックでお安さんが第一番に跳ね起きた。

「エリザベス！エリザベス！」

ペトロが呼んでゐた。

「ノー、馬鹿。」

奥の寢床に半分起き上つて眼を摩つてゐたエリザベスは、澁團を被つてしまつた。ペトロは、何か西班牙語で叫びながら行つてしまつた。

きのふ夕食のときエリザベスは眼を眞赤に泣き腫らしてゐた。夜、十二時過ぎ、マダムの部屋から歸つてきた彼女は、風呂にも入らずに

「きちがひ婆あ奴！」

怒鳴りながら寢てしまつた——。房江は向ふむきに寢たまゝ、腕時計を覗いて見た。六時四十分。窓外はしめやかな雨である。

誰か七階で電話をかけてゐる。

「……………十九日に歸るからね。うーむ、一日中子守で閉口してゐるよ。弱つたぜ、全く。」

メキシコ公使は、病身な末娘を手離す事が出來ないで、連れてきてゐる。がらりと硝子戸があくと、又ペトロが鬚面を覗かせて、頻りにエリザベスを叱咤する。負けずに怒鳴り返しながら、肌襦袢に腰巻一枚で彼女も漸く立上つた。

「お孃ちやん、お孃ちやん、教會へ行きませうつて。」

「もう遲いわ。」

房江は、眼をつぶつたまゝ答へた。

「ぢやよさうかしら。ペトロが迎へにきたの。」

「まあ、それぢやあ氣の毒よ。行つてらつしやい。私は九時のに行けたら行くわ。」

エリザベスは顔も洗はずに、着物を引掛けて出て行つた。厚い、重たい絹夜具を疊みながら、お安さんが話しかける。

「お孃さん、一緒に行くものぢやありませんよ。」

「どうして？」

「だつてあの二人は……… 二人だけが いゝんです、とさ。」

頓狂な眼をくるりとまわして見せる。

「まあ、そんな事ないでせう？」

ペトロはもう五十だ。二人とも信者ではないか？

「ところが、それがそうぢやないんだつて。きのふ食堂で、ある人に注意されちやつた『あんた知らないの？他ぢや大評判だよ』つて。『年齢甲斐もなく氣が利かない』つて、大分私あ攻擊された、のさ。」

「へーえ、さうでせうかねえ。」

「さう言はれて見れば、いろ／＼おかしな事に氣が付くのでね。」

——つまらない絵葉書を一時に十組も買ひ込んだ



り、襦袢一枚で男に對したり、髮の結び方、白粉のつけ方、一つ一つの細かい仕草に、房江はエリザベスの無神經な、しまりのない性格を觀察してゐた。

しかし、あの滿面あけひろげたやうな態度の裏に、秘密を持つとは思れなかつた。ことに、ペトロの恐い鬚面を崩して笑ふ赤兒のやうに無邪氣な表情…。

房江は、半信半疑のうちにも、食堂でしたり顏に噂したにちがひないお留婆さんの横柄面を、心悄く思ひ浮べた。

——ボーイ室の方で、珈琲茶碗の音がさわやかにひゞき初める。



4

一階大食堂入口の左手に、小さな部屋を區劃つて、美容師アンナが出張してゐる。書記官夫人はお安さんに連れられて、ウエーブを直しにやつて來た。ブロンドのマダムが、奥の間の鏡の前で頻りに鏝を當てゝゐる。茶と綠の綺麗なうす物をまとつたアンナは、恭々しく腰をかゞめて拜見の體。

散々鏝と髮を弄んだのち、マダムが次の小間へ移ると、書記官夫人はお安さんに附添はれて椅子に直つた。アンナの冴えた指が動く。小間では美しい女弟子が、禮儀正しく裝つた和服の裾を折つて、マニキユアにとりかゝる——。

と、表の紅い帳りがひらいて、可愛らしい侍女が、一葉の名刺をさし出した。ブロンドのマダムは、澄まして美容師から名刺をとり上げる。

「Mme. gaston Lavigne.

Who is she? Do you know?」

「Yer, she is Bragilian——」

「Hah that Kall, slim lady?」

あからさまな、輕蔑の表情。アンナは、茶と黑のヘーヤネットを取りまぜて侍女に渡した。

奥で、夫人のウエーブがほゞ出來上つたとき、小間にはもはや人影もなかつた。午後四時過ぎ、さしもに出入の激しい正面大玄關の扉も、ひつそりと靜まりかへる——。

と、表ての帳りに近々とさしよる二つの影。

「To-night, can me have any…?」

「Yes, but he careful.」

此の正月、結婚したばかりの××公使夫人に、ピンクの薔薇のやうな色香をふりまく。男は——年輩の××武官である。

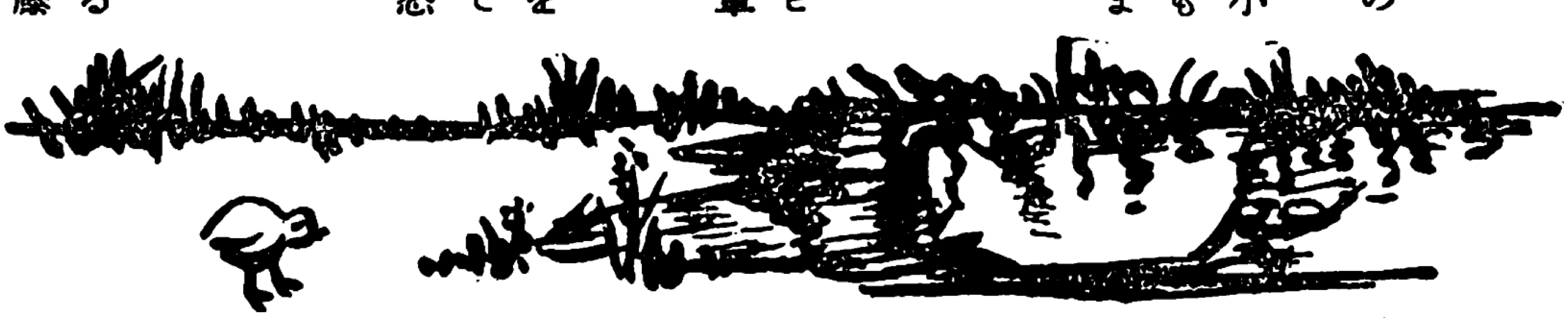
夫人は、帳りの蔭で竊みきいた情事の一什始終を夫に語つた。まだカラーもつけずに紙卷を燻らしてゐた無精な書記官は、いきなり立上ると、奮然と怒鳴り初めた。

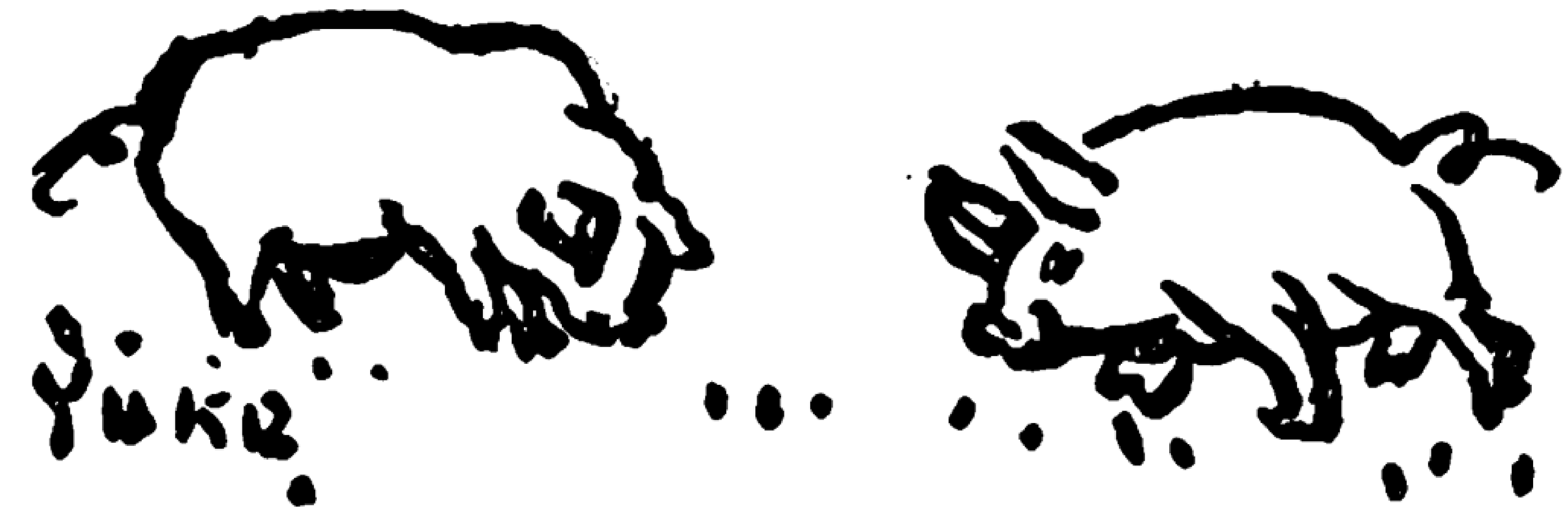
「He is not a gentleman!

He is not a gentleman!!」

5

群青に晴れ渡つた空。星がまたゝいてゐる。はるか地平の盡きるあたり、すんなりした山々の線が藤





墨色に浮ぶ。山紫水明、朗かにやさしく澄んだ、こゝ京の町も、今宵は滿目のイルミネーションに、湧き上るどよめきを反響して、一大不夜城を現出してゐる。

六階の窓から見下ろす河原町通りには、赤や、青や、引きも切らぬ花車行列。遠く四條の方からは、明るい花電車が、一臺、二臺、三臺……とつらなつてやつてくる。

ホテルの廣場では、ほゝづき提灯の波が叫んでゐる。

「ばんざ――い。」

「ばんざ――い。」

房江は、我にもなく心を浮立たせて、階段を驅下りた。

露臺には、黑い人影が寄つてゐた。着流しのお召の肩に、ほの蒼い夜風がひんやりと觸れて行く。石の手欄に吊された、柄の長い提灯を一つはづすと、彼女もまた人々の聲に和した。

「ばんざ――い」

「ばんざ――い」

赤い提灯の波は、はるか寺町の通りから西の河原まで、畝々と續いていつ果てるとも知れぬ。彼女は幾度か空を仰いで、熱狂した民衆の叫びをきいた。自分の胸にも、不思議な歡びが躍つてゐる…

燃える、燃える。一つ、二つ。手毬のやうに宙に跳ねる赤い提灯が――。彼女も亦、細竹の柄が千切れるばかり、手欄によつてふりつゞけた。

廣場の隅から、寫眞機のスパークが、パッパッと時ならぬ明るみを閃かしてゐる。

――いつか行列の波も退いた。露臺の人影も疎らになつた。夜空の星から、しん／＼と寒さが降る。と、ホールの硝子戸が音もなくあいて、可愛らしい金髮の兒が、双の手に二つづゝほゝづき提灯をゆら／＼させて辷り出てきた。メキシコ公使の愛孃である。公使夫人は、美人の評判が高い。

ツーステップスの足取りで、輕やかに露臺の上を一めぐりすると、ぼんやり見惚れてゐる彼女の前にきて、左足を引きながら兩手を反して氣取つた挨拶の身振り。房江は我知らず長い睫毛の奥に見入つた。

人影がバラ／＼と取り卷く。食堂の給仕女がすゝみ出て

「お孃さま。ダンスを見せて頂戴」

可憐な足を組直して、瞳を華奢に外らしながら

「わたし、ダンス、知りませんわ」

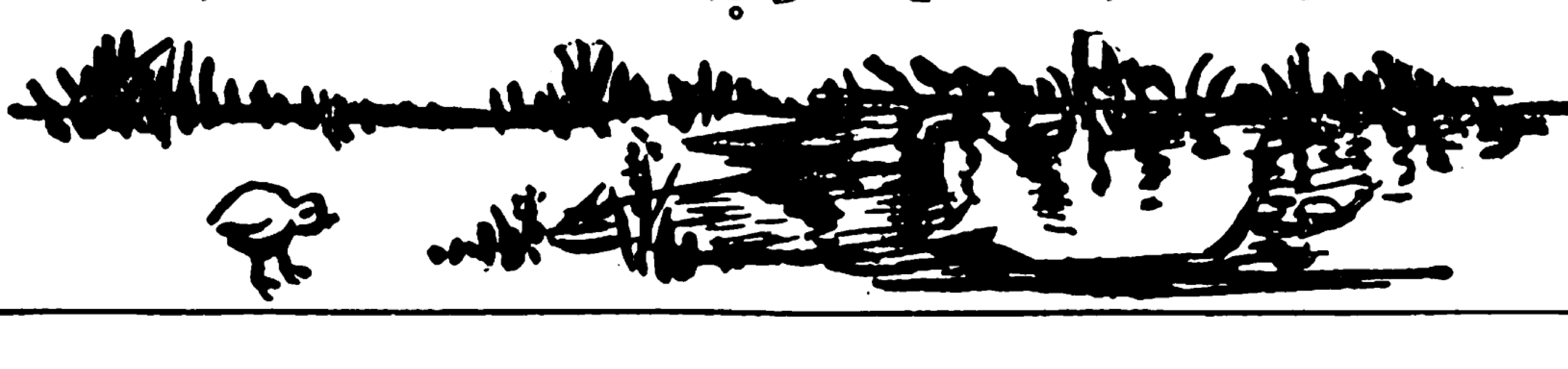
人垣はなか／＼退かぬ。

「こぅばぁやぁしぃ――つ」

巧者な小ダンサーは、急に口を尖らせたと、ありつたけの大聲で彼女のボーイを呼び付けた。

6

最終の行遊地奈良へ思ひ／＼に主人を送り出して





しまつたあと、ほつとした安堵の色と閑散な氣分とがホテル中に漲つた。エレベーターの少年運轉手は玄關脇の酒場に入り込んでしまふし、各階のボーイ部屋はガランと明け放されたまゝ人影もない。時雨れかゝつた天候に、遠出は斷念して、見殘した金閣に行かうか、淸水にしようかと相談中、ジリ〳〵と卓上電話が鳴り出した。受話器を置いて向き直つたお安さんは、不平顏。

寫眞を撮るからすぐ階下へ來て呉れつて。馬鹿にしてるよ。足許から鳥の飛立つやうな事を言つてさ。」

「まあ、ぢやエリザベスを呼んでこなくちや。

「お待ちなさいよ。着物も着更へてありやしない。私あとにかく五階の女達のところへ行つて聞き合せてくるから。」

ガラリとあけ放したまゝ出て行つた戸口もそのまゝ、房江はそは〳〵と化粧間の鏡にむかつた。白粉を直し、眉を引いて、丹念に髮のほつれを搔き上げてゐると、いつのまにかかへつてきたお安さんがいきなり背後から

「お孃さん、私はよしましたよ。五階の女達も撮らないつて。貴女もかういふ下級の人達と一緒に寫眞を撮つたりするのは、品格を落すやうなものでせうね？」

「……でも、それでいゝのかしら。」

「いゝも惡いもありやしませんさ。今も階下の女達が言つてるんですよ。第一、あの若い男達が好かないつて。まあ、とにかく、私あお留さんに駄目を押してきたんだ。『變代へると承知しないよ』つて。」

「お迎へに上りました。」

戸口に辻の聲がする。房江は突嗟に座敷へ辷り入ると、膝の上に新聞を擴げた。

一しきりお安さんと押問答の末、隔ての襖がすらりとあく。房江は頰をかたくした。

「ぢやあ貴女だけでもどうぞ。曲解なすつちや困ります。僕たちこれでお別れすれば、永久的或は半永久的にお目にかゝらないんですから、この儘ぢやあ餘り飽氣ない。御大典の紀念にもなるし、皆で揃つてとり度いのに、女の方が一人もお入りにならないなんて、非常に遺憾ですから。

ほの白い顏に薄い紅さへ浮べて、向きになつて言ひ寄る男の前に、房江は何がなしにわなゝいた。活字から眼を外らさずに、調子を落して

「でも困りますわ。皆さんが揃つていらつしやるならば勿論入りますけれど、階下の方もお撮りにならないつて言ふし、飛入りの私一人が出娑婆るなんて、」

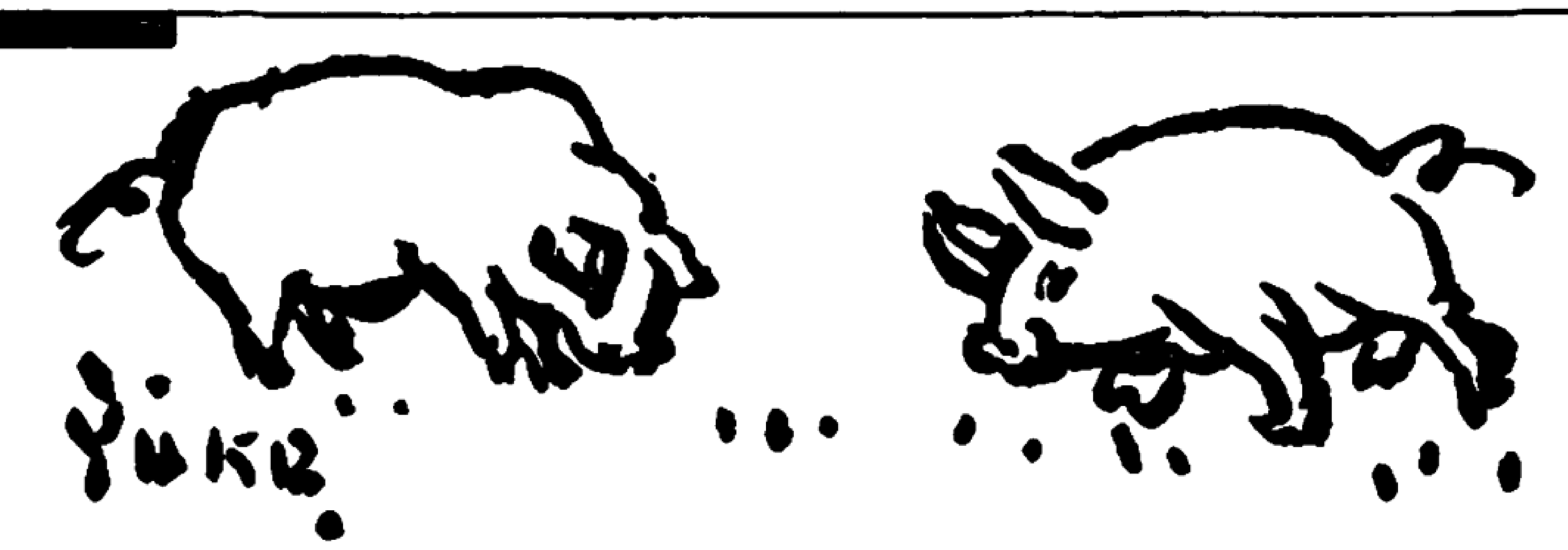
「さうですか。ぢやあ仲間にお入り下さる意志がお有りになつたといふ事に滿足して引上げよう。」

氣拙い沈默ののち、他の年長の男がうしろからなだめるやうに辻を誘つた。

出て行く姿を見送つて、ほつと心の緊張を解くと、我にもなく詑しい氣分が沁み込んでくる。

——突然、階下の部屋の一番年若なお勘さんが飛





込んできた。
「おばさん、おばさん。お大さんと私、撮る事にしたの。」
房江は驚いて立上つた。
「だつてね。貴女方が入らないから階上の方たちが入れないんだつて言ふんですもの。」
化粧間で、うすい髪を解いて梳き初めてゐたお安さんは、鏡の中で皮肉に笑つた。
「そうれ御覽。やつぱり若い女達が引込み度くつて。お孃さん、貴女が行けばみんな側へ集つてきてしまひますよ。」
「まあゝゝゝ。」
ガラリと硝子戸があく。ぢつと眼を伏せてゐる彼女の側へ、辻がうしろから近付いて
「いゝでせう？階下の方達も一緒だから。」
房江はそつと身を退いた。
「私、エリザベスを呼んで來なくちや。」
強い葉卷の香の漂よふ主人夫婦の部屋へ駈け入ると、內から固く鍵を卸す。ふつくらした安樂椅子に身を埋めた。
窓ガラスに、忍びやかな雨脚がうち初める。

7

最初の夜、大切な嬪粉(ヒフン)の服を裂いてから、夫にかたく禁じられてしまつた書記官夫人も、今宵を最後の大舞踏會には、躍る事をゆるされた。晝のうちからお安さんは、もう一つの金糸を編んだ舞踏服にアイロンをかけたり、花を縫付けたり、丹念な用意にとりかゝつた。

エリザベスは、小犬の脇の仕事臺で、太つたマダムの足が毎夜穴をあけてしまふ靴下のつくろひに餘念がない。十八の娘が東京に待つてゐる武官夫人は、染めた斷髮を丁寧にブラシして、キラ／＼一面にビーズを縫付けた重いピンクの舞踏服をまとつた。うすいろの靴下に銀の舞踏靴、眞珠の首飾に華奢な金の耳環。あでやかに裝ひ終へると、壁にかゝつた姿見の前で右見左見、さま／＼な嬌態のお稽古。
スモーキングを着込んだ武官は、安樂椅子にかけてぽかんとその樣子に見惚れながら、例の渡航時代に覺えた口笛を吹いてゐる。姿見から離れて、すつかり陽氣にはしやいだマダムは、前夜、背の低い大使夫人が大男の日本人と踊つた滑稽な恰好を、おかしな身振で眞似て見せる。やがて時間がくると、もう一度毒々しい迄に濃く口紅を塗り直して、ケープを取り上げる。
『レデイ・ス・フアウスト』
一歩ドアの外に出れば、風さへ近付けぬ、肅然たる貴婦人である。
大食堂前のホールでは、活動寫眞が始まつた。電氣を消した薄闇燈の中で急霰のやうな拍手と、高らかな笑聲がおこる。スクリーンの上に次々とあらはれる自分たちの姿に、抑へ切れない得意と、喜びの



絶頂に達してゐる紳士淑女たちの群。濛々と立つ葉卷の煙のうちに、夜會服の白いあらはな腕が浮いてゐる。

華かな晩餐の食卓が片寄せられて、大食堂は今や大舞踏場に早變りしつゝある。白い卓布の上に、樣々の高價な酒の壜と、カクテールのグラスが並ぶ。つや〳〵と磨かれた寄木細工の床には、白い粉が敷かれる。赤い風船が飛ぶ。

二階の踊り場には、海軍の軍隊の赤ズボンが陣取つた。桃色の岐阜提灯が、可憐にゆれてゐる。



度の強い近眼鏡の金縁をきらりと光らせて、指揮者は第一指を振ふ。浮き〳〵したジャズが、唆かすやうに鳴り初める。一組、二組と躍りの群が流出る。晝をあざむく大飾燈の下に照し出される、うすもの〻肩の動き、微妙な爪先の表情。しとやかな振袖姿もまじつてゐる。歡樂に醉ふ舞踏者達の上に、五彩の絹糸がふはり〳〵と投げられる。

はた、と音樂がやむ、組んだ腕を解くと、丁重な會釋を交して、男達は相手を周圍の椅子に招じる。冷たいカクテールのグラスをのせた給仕盆が、忙しく動く。次の曲が、勢よく鳴り出す。男達は異つた相手を求めて席を立つてゆく。相手を失つた貴婦人は、とり殘されたセルロイドの人形のやうに、ポツンと宙をみつめてゐる。

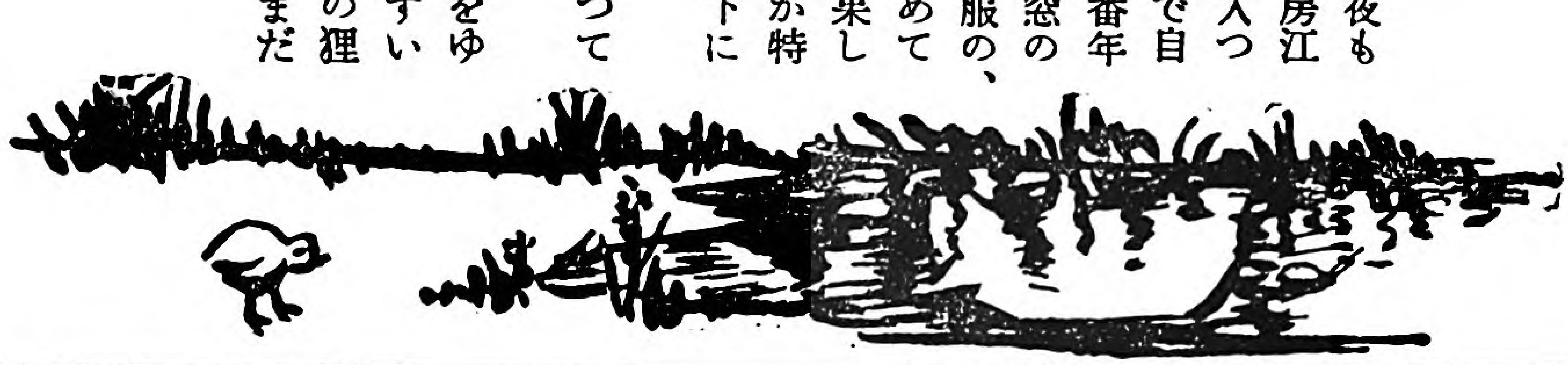
比較的達者な棲さばきを見せてゐた、ある日本婦人は、わざと道化た紙笠を被り、赤い風船を襟に結んだ。やんやと喝采がおこる。房江は我事のやうに情なくおもつた。

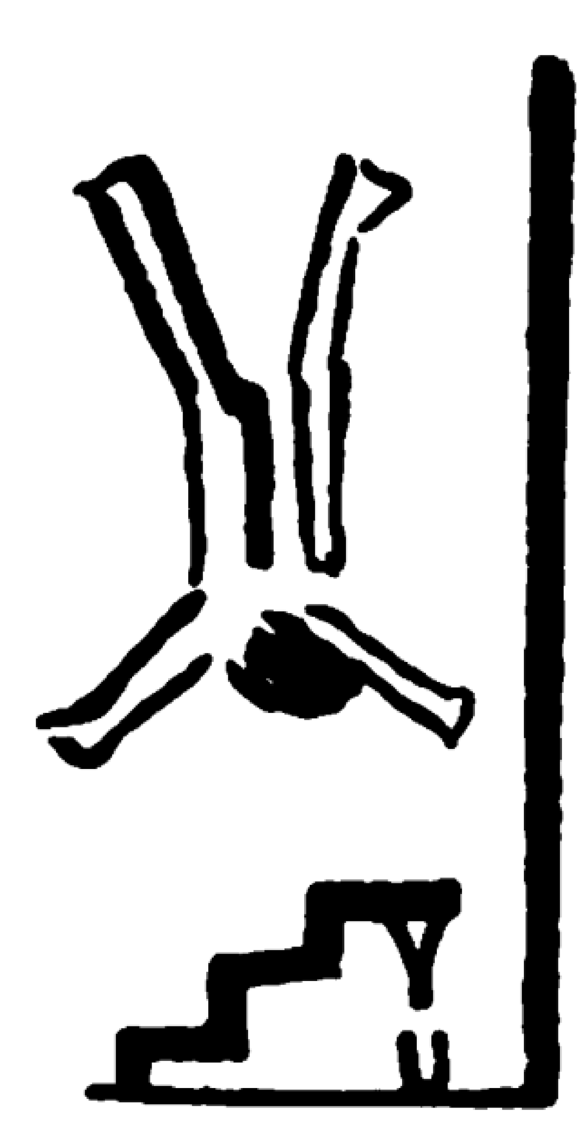
『あれが、××伯夫人か？』

階下では、まだジャズの音が鳴りやまぬ。今夜もいづれ、二時、三時頃まで踊り拔くのだらう。房江は今一度、主人夫婦の寢間の支度をあらために入つた。ドアをうしろにしてふと見透すと、先刻まで自分が掛けてゐたスチーム管に、ボーイ部屋の一番年若なボーイがひつそりと乘つて、同じやうに小窓の外を眺めてゐる。何を考へてゐるのだらう。白服の、どこかまだ世馴れない肩つきをうしろからみつめてゐるうちに、毎日〳〵よく從順に自分の用事を果してくれた、弟のやうに可憐なこのボーイに、何か特別の好意を示し度い衝動が湧いてきた。廣い廊下には他に人影もない。

房江は、つと部屋に戻ると、きのふ武官が買つてきた高雄みやげの瓢逸な玩具をとり上げた。

ドアの蔭に半分身體を隱したまゝ、細長い竿をゆら〳〵と振つて見せる。赤や、青や、黄や、うすい短册がひら〳〵と舞ふ。おどけた笠の下で、綿の狸がふか〳〵とゆれる。ボーイは何も知らずに、まだ窓の外を瞶めてゐる。





支那街の明暗

林禮子

一

迷路に似た薄暗い廊下を、季順姫は一人の毛唐と腕を組んで歩いた。出口に近づいた時、毛唐は腰を屈め女の唇を求めた。

『プリズ…カム…アゲーン』

やつと覺えた職業的用語が、囁きながら順姫の口から洩れた。天井の青白い電球が彼女の長い睫を頬にまで映した。

毛唐は答へるかはりに、もう一度強く手を握り扉の向ふに消えた。

暗の中から一人の男が近づいて來た。

『オイオイ、あんまり、いゝとこ見せつけるない』

順姫は羞いて立止つた。

『マ、横瀬さん、いつ來たノ』

『ハヽヽ、お前も隨分稼ぎ手になつたね』

『あなた人がわるいワ』

『とにかく今夜は急ぎだ。ちよつと、こつちへ來とくれよ』

帳場の扉が開いて流れ出す光の中から、このホテルの主人が顋で招いた。順姫は怖るおそる二人の間に座つた。

『なに、悪い相談ぢやねえんだ。今お前の横瀬さんとも話したんだが、お前の親父だがね、よかつたら一つ横瀬さんが、使つてやらうかと仰るんだ。どうだい』

彼女はよろこんで主人と横瀬を見た。

『ありがたう。わたし嬉しい。お父さんも、きつと嬉しいワ』

『差支へないね』

『えゝ、でも父さんに出來る仕事?』

『ごく譯のないことさ。荷物を運びさへすりやいゝんだ。…月給、さうだな、百圓位ならやれる』

『マア父さんが百圓!』

順姫はよろこびのために、梨の花のやうな美しさを増した。

横瀬が一ケ月前、まだ來たばかりの順姫を始めてホールで見た時、彼女は水色の上衣につゝまれ、片隅に眼を伏せてゐた。

『踊らないか?』

『オドレナイ』

彼女は微に笑つた。その眼は遠くの一點をぼんやり見つめて動かなかつた。

『いつ日本へ來た?』

『コナイダ』

彼の獵奇的な心は、すばしこい表情に富んだ混血兒娘のエレナから、この朝鮮娘に移つていつた。間違つて前世紀の人間が生き殘つてゐたやうな、この動かない女を一人で暫く享樂して見たかつた。

『ヨコさん、こつちへいらつしやいよ。何してるのさ』

エレナが遠くから不機嫌に口を尖らせた。

『待つてくれ、このムスメと話してるんぢやないか』

『およしよ。この性悪る!』

『性悪るついでに、ちよつと今晩だけ、このムスメと…。いゝだろ』

突然エレナの眼と眉が、くしやくしや引歪み、駈け寄つて横瀬の腕を荒々しく引つぱつた。

『たつた一度だけ』

エレナは大きな眼で横瀬を睨み大聲に何か叫んだ。彼はそれですつかり、エレナが厭になつた。

『よし、ぢや、パパに談判して來

るだけさ』
　彼はいつか本氣になり帳場へ出掛けていつた。エレナは一人あらゆる惡罵を、彼と順姫に浴せかけ惡鬼のやうにウヰスキーを飲んだ。順姫は薄く涙ぐみ、遠くからエレナの劍幕を見てゐた。
　一時間の後、彼はまた當分この女だと考へながら、新しい靴下と取換へた氣になつて、順姫の室から出た。
　――かういふ人間ばなれした女も、五月蠅くなくて扱ひ好ひ。だいゝち言葉は解らないし――
　彼はその時と同じ事を、また新しく考へた。
　横から主人が云つた。
『ぢや、さう話が極つたら、明日わたしが支那街へ行つて、とつつあんに話して來ませう』
『ぢや、さうしてくれ給へ、萬事は……』
『えゝ、解つてます』
　横瀬は順姫の手を引寄せ暗い廊下へ出た。
『ちよつと、お前の部屋へ行きたくなつた』
　順姫は切れ長の眼をあけ、すこし笑つた。二人はベッドのある薄暗い、順姫の部屋へ消えた。

2

　群立した常盤木が、午後の陽を斜に吸つてゐた。群がつた人々の顏はトタン塀とゝもに溫りながら乾燥した。一樣に褐色を帶びた黄色人の顏が、熱心に一方に向ひ動かなかつた。
　今一尺五寸の舞臺の上に桃色絹の支那服の女が、ゆるやかに舞ひ黑い上衣を着た武官が、威嚴をつくつて時々頷づいた。哀音を含んだ、とんきやうな唄が、鉦の音に絡まり、舞臺を緊張めた。人々は解らない唄に色々の意味を考へた。
　武官は立ち上り踊りぬく女に、直線的の身振りで絡んだ。唄の音律が女の聲となり、武官の聲となつた。緩慢な唄聲が次第に甚しく大きくなり、ぐわんと人々の耳を劈いた時、武官が長い刀を拔いた。美人はベールをすつぽり被りしなやかに背後の揚幕の中に隱れた。更紗模樣の褪せた緞帳が、箱の天井からスルスルまるまつて下りた。
　舞臺を支へた屋臺車の下から、顏の脂切つた朝鮮人が、のつそり出た。足で鉦を叩き、兩手をさし上げて人形を使ひ、今まで多忙だつたこの藝術家を、人々は胡散臭く眺めた。朝鮮人は長い柄のついた柄杓を、前に突き出した。
『ワタシ人形、ミナサン、ミテクレマス、タイヘン、ウレシイ。モット、シバイ見セテアゲタイデスガ、ワタシ、メシヲ食ハナケレバ、腹ガヘリ、ダメデス。ドウカ、ミナサン、コノ中ヘ、スコシデモ入レテクダサイ。オネガアイ……オネガアイ……』
　彼の體は柄杓とゝもに弧を描きつゝ、二三度ピヨコピヨコ頭をさげた。彼の喋つてゐる間に群集はゆるぎだし、或者は大きな欠伸をし、或者は狡猾さうに、こそこそ四散した。彼の柄杓には銅貨と銀貨が僅かにのつかつた。
　彼は集つた廿錢足らずの金を、無造作にポケットに投り込み、まだ殘つてる人々には眼もくれず、屋臺車を引攫ぐと、すたすた居酒屋へ飛込んだ。二杯の泡盛が彼を元氣づけ、逃げ去つた青春を呼び返した。
　彼は國に居る頃好きで習つた人形使ひの技が、さう下手なものとは思はなかつた。もつと盛り場へ出てゆく事が出來さへすれば、いゝ金になり、どうにかやつてゆけない事もないと思つた。だが彼は鮮人なるが故に、野師の親方からいゝ場所を與へてもらふ事が出來なかつた。何彼につけて横暴なのは日本人だつた。
　彼は親の代から京城に近い處に小さな雜貨商を營んでゐたが、續々入り込んで來た資本家的な內地人に、次第に顧客を吸收され、彼の店舗は年々衰微していくばかりだつた。しかし數年前まではとにかく氣息奄々としながらも、店を張り通して來たのだつたが、せつぱつまつて或內地人から金を借りた爲、彼の店舗はとうとう差押へられることになつてしまつた。彼の妻はそれと前後して死んだ。彼は無一物になつてからも、もう一度

何かに取縋らうと焦慮つたが、それはたゞ彼を疲れさせ、益々自暴自棄に陷れるに過ぎなかつた。彼はとうとう住み馴れた土地を引上げ、一人娘の順姫をつれて飄然日本へやつて來た。彼は日本へ來てから、いよいよ日本人を、憎み、恨み、蔑む心が募つていつた。
　彼が、或夜九時過ぎ街を歩いてゐると、或店では店員が火鉢の前で居眠りをし、店の前には廿錢均一の菓子の袋が、山のやうに積んであつた。彼の空腹がその一袋を盗れと命じた。彼は敏捷く盗つてしまへば無事だつたらうが、彼はすこし躊躇した。彼の手がソッと奧を窺ひ袋に伸びたとき、背後から彼の衿髪を攫んだものがあつた。それは私服の巡査だつた。彼は三ケ月暗い處へぶちこまれた。出て來て間もなく仲間の集る酒場の裏で、順姫のくれた金をおいちよかぶにはつてゐると、また其奴がやつて來た。彼はまた廿九日つれて行かれた。――
　彼は無茶苦茶に腹が立つてきた。
『チクショウメ！』
　彼は拳を空で振り廻しドンと卓を叩いた。それが酒屋の亭主には滑稽に見えた。
『崔根さん、今日は好い天氣で上機嫌だね』
　亭主は長い煙管を持つてゐた。
『ダメダメ金にならない。みんなケチ。日本人出す嫌ひ、取るのだけ好き、わたしお國とつた、わたしのオカミサンとつた。わたしのムスメとつた。今度わたしの命とるだけ』
『だが娘さんが、いゝ稼ぎするんだからいゝや。とつつあん働かなくつたつていゝんだから』
『ダメダメ、ムスメ働く、金になつても……』
　崔根は急に暗い顔して默つた。
　もつと泡盛が欲しかつた。が、この親爺か快く一杯の酒だつて貸しつこないことを知つてゐたので、彼は恨めしさうに酒樽を見、奧の親爺を見、腰を持ちあげた。彼のポケットの中で一錢銅貨が二つチヤラチヤラ鳴つた。
『これだけ、サケ、サケ……』
　彼は蹌踉くやうに臺の上に二錢置き、大きなコップを突きつけた。
『困るな、それんばかり計れねえよ。……また出なほして來な。もうお前さんに貸すのは懲々だよ、貸して有難いと思はれるどころか、後であべこべに喧嘩のもとにならあ』
　親爺は獨言のやうに呟いた。
　順姫の雇主がコッコツ靴を鳴らして這入つて來た。崔根は間の惡るさうにニヤニヤした。
『やつと探しあてたよ。お前さんを探すのは、たいがいぢやねえ。……今、もうせんの處にや居ないのかね』
『アーもうゐない。いま、居るときまりません』
『そいつあ弱つたね。……何？酒か？飲みたいのか。……そら……』
　ホテルの主人安井はポケットから五圓札を出し、そつと崔根に握らせた。
『ハ、、時にお前に好い仕事をめつけてきてやつたんだが、やるかい』
『あゝ、やる、やる』
　安井は奧の亭主を見、小聲になつた。
『ちよつと內證で船の荷物を手傳つてもらやいゝんだ』
『ないしようでか？』
『あゝ。だが厭ならいゝんだぜ。こりや、うんと出すよ』
　安井は指で輪をつくつた。崔根は安井が怖かつた。うまく誤魔化し、無代同樣で自分の娘に醜業を強ひてゐる。その上何時の間にか勝手に證文をつくり、向ふ幾年か、順姫の體は借金により束縛された事になつてゐる。
　俺も何か一杯嵌められるんぢやないか。――崔根は彼として賢く、この考へが閃めいた。だが、また飜つて考へてみりや、この俺がよし、どう嵌められたところで……。それよりも腹のへらねえ用心のはうが、肝心ぢやないか。――
『よし、やるやる、金いくらくれる』
『無論、たくさんやる。それも俺の仕事ぢやねえんだから、その雇

主に話して、思ふとほり貰やいゝぢやねえか、とにかく明日午過ぎ俺の處へ來いよ。萬事相談しやう』

『あゝ、解つた』

崔根の頷くのを見ると、安井は殊更に大きな聲で

『ぢや、また遊びに來いよ』

彼はまだ動かない崔根を殘し、外へ出た。

3

暗い夜がやつて來た。

×××號は港に碇泊して、今日で三日經つた。砂利のやうな無數の星を冠り、甲板の闇に二人の男が立つた。一樣に明滅する港の燈に向ひ、黑い水面を凝視した。ボートが一艘懸命に漕いで來た。ボートはやがて船の横腹にぴつたり喰ひ付き、季崔根と横瀨が梯子を昇つた。

『オウ、今晩、オソカツタ。ニモツ、昨夜ノ話ノトホリ、香水……8、ソレカラM、二種アル』

一人のアメリカ人が積み上げられた木箱を指した。横瀨は歩みより、その男と何事か少時囁き合つた。

『オ、、、……』

突如その男の放つた聲と共に、闇の何處からか二人のアメリカ人が出て、荷物を運ぶ崔根を助けた。

横瀨はボートへ駈け下り、安井と數を書き留めた。崔根は數回往復しボートはすぐ一杯になつた。すべてが緊張と沈默のうちに、手際よく進行した。

横瀨は梯子を駈け上つた。

『もうダメ、マタ、アトデ一度來ル』

『ヨロシイ』

アメリカ人は頷き、

『明日デ、シマヒ、タクサン運ブ、ヨロシイ』

『ソウ、税關、アマリ高イ。商賣ツブレル、ハ、、、』

彼は其アメリカ人と握手し、また、ボートに駈け下りた。崔根が最後の荷物を運び込むと同時に、安井がボートを漕ぎ始めた。

ボートは彼のホテルの棧橋に向ひ急いだ。彼等は時々かうして夜船で女達と散歩する事が多かつたから、誰も怪しむ者は無かつた。荷物は崔根が懸命に、裏庭傳ひに安井の部屋へ運んだ。

一イ二ウ三イ……數へて横瀨は滿足した。これでと……四日のうちにや莫大の利益だ。何でも彼でも奢侈税だつて、馬鹿にしてら。俺の店なんざ、ことに貴重品ばかり扱ふんだ。この不景氣に何割とやられちや、まつたく骨折損だ。地道にやつてたつて仕方がないや。

彼は押入の中に積上げられた品物の胸算をし、また立上つた。三人は扉に錠をおろし、もう一度船へ出掛けねばならなかつた。

4

貿易商横瀨又吉商店の事務所は、朝から多忙だつた。ひつきりなしに卓上電話のベルが鳴り響き、小僧中僧が扉から顏を出して用件を喋り、聞き、また廊下をバタバタ往き來した。

番頭の新藏が扉から半身を覗かせた。

『谷へ、トじるし、Bじるし、一荷。……今店へ使ひが……』

『よし、よし』

彼は大きく頷いた。それで十幾年忠勤の番頭は、すべて呑込んで去つた。彼の店は小僧番頭制度であつた。なまじつか學校出の店員ほど、彼にとつて五月蠅いものはなかつた。

また卓上が鳴り響いた。彼は跳ね上つて、受話器を耳にあてた。以外にも電話は女の聲を傳へた。

『……横瀨さん？ あゝ貴郎ね。……昨夜も、おとゝひも、どうなすつたのさ』

『はあ、はあ……忙しいのでね…………』

彼は扉の外で誰か聞いてゐさうな氣がした。

『今夜はきつとよ。すつぽかさないで……』

『はあ……はあ……』

『生返事ばかし、しないでさ。そこに奥さんでも居るの？……』

『いや、いづれ近日……』

彼は面倒臭くなつて、受話器をガチャリと掛けた。

彼は今度、賣物になつた待合を權利ごと買ひとり新築しなほして新に落籍した關内の藝者に經營させてゐた。即ちきらくは彼の浩然の氣を養ふためばかりでなく、種々取引上の相談や、大切な客をするに都合がよかつた。

彼はこの待合の開業祝ひに、彼と關係のあつた藝者十八人を呼び集め、皆の眞中に端然と趺座をかき、――今夜は親族會議さ。みんな、こゝい集つたのは、俺の親類ばつかりなんだ。こゝの女將をよろしく、たのむぜ。――彼は脂さがつて一座を見廻した。皆は啞然とし、誇りを失つて顏を見合はせた。彼は女に惚るとか、惚られるといふ事は面倒だつた。すべて事務的に片付けた。それでも女は金の前に媚を呈し、從順であつた。

扉がまたカタリと鳴つた。横瀨から十八人の藝者と、待合の女將とが飛び去つた。

『タイショウ』

崔根がゆつくり這入つて來た。横瀨は急に不快な顏になつた。

『ゼニ、ナクナッタ、貸シテクレ』

『さう規定以外に取りに來られちや、弱るな。いつたい何に使ふんだ』

『ワタシ働ク、アナタ、タクサン儲ル。アナタ、タイヘンズルイ』

『馬鹿! またバクチで取られたんだな』

『違フ、今日ハ違フ。ワタシ友達ミナ貧乏、可哀想、金足リナイ』

『馬鹿め、俺は慈善事業のために働いてるんぢやないぞ。お前の規定の金は、ちやんとやつてある』

『ワタシ、オカミノユルス仕事シナイ。アナタ金クレナイナラ、ソレ喋ル。ワタシ暗イトコヘ行ク、働カナイデモ、飯食ヘル。アナタモ暗イトゴヘ行ク、ワタシヨリ、タクサン困ル』

『ば……ばか!』

彼は無言で金庫に歩み寄り、數枚の札を引出した。崔根は落付いて、それをポケットへしまつた。

『マタクル』

一禮してニヤリニヤリ去つた。

横瀨は兩手で頭をガリガリ掻いた。部屋のうちをグルグル歩き廻つた。崔根の大蒜の臭ひが籠つてゐるやうな氣がして、窓をあけた。不快でならなかつた。崔根は一週に一回は必ずこの事務所へやつて來、金をやるまでは大陸的に動かなかつた。

――いつたい一年足らずの間に俺はいくら彼奴に取られたらう。

それはとにかく、彼奴はさうして手に這入つた金を何に使ふか。今まで食ふや食はずで居た者が、急に金廻りがよくなつたのを、人が怪しまずにゐやうか。――彼は大きく外氣を吸ひ込み、また部屋のうちを歩き廻つた。

コツコツ扉が鳴つた。

小僧だつた。

『安井さんと仰る方が見えました』

『一人でか』

『ヘイ』

彼はまたドキリとした。ホテルの主人が何しに來た? 俺はすこし被害妄想狂に掛つてるのかな。

――

安井が難しい顏して這入つて來た。

『少々御相談がありましてね』

『あゝ……』

横瀨は仰向いて、後頭部を組んだ兩手で支へた。

『實は昨日、水上警察の奴が、やつて來ましてね……』

横瀨の顏にどういふ變化が起るかを慥かめてから、安井は次を續けた。

『お宅では貸ボート屋もやつてるのかつて、皮肉を云やがるんでね。一二度、夜、女をつれて客らしい男が乘つてるのを見た。風紀を亂すから、あんまり、大つぴらにやつてくれるなつて、まあ表向きぢや云つてるんですがね、奴等どこまで嗅ぎつけてるかつてことが問題なんですよ。……そいでまあ、ちよつと一捻り紙に包んで、これで寢酒でもつて云つてやつたら、おとなしく歸るには歸りましたがね』

横瀨は毆るやうに、マッチを擦つた。煙草の煙が出るたびに、鼻孔が土管のやうに圓く脹らんだ。頭が痛み出した。

『そいでね、わたしの考へぢや、當分その「ボートの一件」は中止す

ることでさ。どうも少々やり過ぎたね。あなたも隨分利益があつたんだし……今が見限り時さね』
『俺もさう思つてる』
彼は嘔き出すやうに云つた。
『それから、あの崔根て奴が、どうも、よくないんでね。人間あすこまで落ちちや、怖いものなしさ。いつどんな事喋るかわかりませんぜ。』
『崔根か……』
彼は唸つた。
『ことにあの樽の一件があるんでね、事、穩かにや濟むめえと思ふんでね』
彼は一層、憂鬱になつた。安井が樽の呑口を開け、中に女を入れ熱帶へ行く船に、積み込んだ事を思出した。
『だが、あれは俺の全然知らないことだ』
『知らないつたつて、さうなりや、さうはいきませんぜ。……ところでね……』
彼は急に聲を潜め、
『やつちやいませうか！　奴等蟲けら見たいなものさ。これが名譽とか金でも有る奴なら、穿索も嚴しいが、南京街あたり無警察だあね。あゝいふ宿無しの鮮人を使つたのも、かういふ時の用意でさ』
事も無げに云ふ安井の顏を見返へした彼は、腹の中で急に臟腑が冷却を始めた。

5

御待合きらくの奥座敷では、紫檀の餉臺を圍み三人が談笑した。崔根はふつくらした座布團の上に、醉の廻つた脂切つた額を撫でゝ、かしこまつた。
『お一つ……おとうさん』
女中はまた崔根の前の、空いた盃を滿した。
『あら、いつの間にか目鏡になつて、ずるいわ。さ、おあけ遊ばせよ』
崔根は女の聲を音樂のやうに聞きながら、たゞニヤニヤ笑つた。骨ばつた顏の眼も鼻も、弛くたるんでゐた。
部屋の外に絹擦れの音が起つた。
『こんばんわ、あり……』
『こんばんわ、ヨウさん、しばらくね……』
二三人の藝者が、するする裾を引摺つて、餉臺の前に座つた。
『おつとつと、そつちの、おとうさんにお酌してあげてくれ』
『こちらの？』
若い藝者は七分三分に横瀨と崔根とを、見くらべた。
『いかゞ……』
崔根の前の盃は次から次と滿された。
『その、おとうさんは、それでなかなか、實があるんだよ。ほどはあんまり、よかないがね』
安井が云つた。
『こちら、支那のかた？』
『あゝ、いゝや、……その方は朝鮮のたいへんなお金持なんだが、醉狂で、そんな姿をしてゐらつしやるんだよ』
『まあ、さう、どうりで、すこし變だと思つたわ』
一人の藝者は眼を圓くし、
『さう？朝鮮のおとうさん！……朝鮮にも藝者有るんでせう……何とか云つたつけ……』
『妓生て云ふんだわ』
他の一人が云つた。
『あゝ、さうさう、その妓生と、日本の藝者と、どつちがよくつて？』
『日本の藝者いゝ、みなベッピン、シンセッ』
『こちら、お世辭がいゝわ』
一人が袂で空をうつた。
彼はまだ、こんな美しい女達から、こんなにチヤホヤ話しかけられた事はなかつた。次第に廻つてくる、醉とゝもに、彼はたゞさへ鈍い思考力を失ひ、たゞもう有頂天になつていつた。
どやどや四五人の雛妓が長い袂を、金魚の尾のやうに振つて這入つて來た。絃につれて雛妓は踊つた。崔根の長い間萎縮んだ魂ものんびり廣がり、ふわふわ空中を舞つた。
今まで顏を見せなかつた女將が顏を出した。
『あの、おともが來たんですけど……』
『あゝ』
横瀨はちよつと懷中時計を見、

『ぢや、出掛けやうか』
安井と崔根に云つた。
『あの、貴郞はもつと、ゆつくり出來るんでせう』
女將は漆黑の丸髷を寄せて囁いた。
『いや、また明日來る』
『さう？』
不平さうに女將が云つた。
安井は大きく伸をし、
『だいぶ、そこで揉てますね。大丈夫ですよ。わたしがついてますよ』
『それが、だいゝち危險なのよ』
女將は優しく安井を瞰めた。
『ハ、ヽ、ヽ……』
横瀨は大樣に立上つた。
三人を乘せた自動車は、色々の女の聲を後に、十一時近い街へ滑り出た。

6

ホールの脇の小部屋では、自動車から降りた崔根が、ベロベロに醉つぱらひ、軟い綠色の長椅子に不調和に長く伸びてゐた。
『今夜は蒸すぢやないか。舟ん中で、やりなほしたいな』
横瀨は大きく欠伸した。
『いきませうか、こつそり。とつつあんはどうかな。……おいおいとつつあん、舟の中で飲みなほすんだとさ。いくかい』
安井は崔根の肩を搖つた。
『ウン、イク。酒ナラ、マダ、イクラデモ飮ム』
崔根は勢いつぱい笑上つたが、床が浪のやうにうねり、すぐによろよろ蹣跚いた。
『もう醉つたのかい、弱いぢやないか。ハ、ヽ』
横瀨が笑つた。
『オトウサン、アブナイ……』
順姬は立上り崔根に近づいた。小波のやうな美しさが彼と並んだ横瀨に、靜にうち寄せてきた。
『お前も行くのか』
横瀨が云つた。
『お前は風邪引いてるんだらう。それに女が乘つてると、またうるさいからな。部屋で待つてるはうがいゝよ』
安井が云つた。順姬は默つて頷いた。

小さな酸漿提燈を搖りながら、ボートはゆつくり海の中を進んだ。
『飮めよ、とつつあん……』
横瀨は强烈な酒のグラスを、幾度か崔根に差した。
『ア、ヽ、ヨウタ、ヨウタ……ウイ……』
崔根は何か解らぬ唄をうたひながら、クタクタ舳にくたばつたきり動かなくなつた。
『とつつあん、もう參つたか』
横瀨は崔根の肩を搖ぶつて見たが、正體はなかつた。
安井はボートを漕ぐ手を休め、四邊を見廻した。風の爲酸漿提燈に火が移つたか、パッと燃えあがり、水の上を一際明るくした。後は一面の闇の層だつた。その中に三つの呼吸と、饐た酒の臭ひのみが動いた。
安井と横瀨は無言で舳に屈み、重い崔根を抱きあげた。彼はムニャムニャ低く呟いたきりだつた。
二人は抱きあげた崔根をそつと水面に投げた。バチャン……、音と共に水煙が二人の腕を濡した。

× × × × × ×

ボートが狂つたやうに動搖を始めた。二人は闇に馴れた眼に水面を見つめた。
一度沈んだ崔根が、ボッカリ五六尺先に浮んだ。彼は兩手を搔き舟べりに取縋らうと、搔いてゐるやうだつた。安井のもつたオールの尖端が、强く彼を突いた。
彼は鉛のやうに、たわいなく沈んだ。それつきり浮きあがつて來なかつた。
二人は、ほつと顏を見合はせた。
——奴さん、今夜は美人にや、もてるし、いゝ往生だ。奴等生きてるより、そのはうが、よつぽど幸福だらう。——
横瀨は考へたが、醒めぎはの酒が、彼を身震ひさせてゐた。
安井はまた落付いて漕ぎ始めた。



俊枝のグルツペ

——三幕七場——

辻山春子

時　現代　五月なかば

所　地方のある都市

人物

俊枝　廿三　藤澤の妻

久枝　廿一　俊枝の妹

京子　廿四　大川の妻

左千代　廿三　本野の妹

政乃　卅一　本野の妻

道子　廿四　田原の妻

田原の母　五十四六

保子　十八　罷業員

信子　廿二三　同

女工二人　同

本野　（登場しない）　日本公衆黨支部長
田原　卅五　日本公衆黨員
大川　廿八　同
藤澤　廿七　同
林　卅二三　應援
畑　卅五六　罷業員
罷業員　大勢
若い黨員　二人
バーの客　數人

——第一幕　第一場——

情景　齋藤印刷株式會社從業員爭議團の事務所にあててある日本公衆黨××支部內の臺所に近い一間、左手のすゝけた臺所に茶碗、皿、箸等澤山入れてあるざるが二つ三つ、大きな鍋、おひつ三つ四つ等が見える。右手は便所に續いてゐる。奥は非常に騷々しい、放歌、演說、談話の聲が絕え間なく聞えて來る。午後六時頃の事である。

奥から罷業員三人と若い黨員が一人、めいめいに宣傳びらを一重ね持つて登場。罷業員三はびらを置いて便所へ行く。

罷二　（宣傳びらを讀みながら出て來る）……決行するに至り御迷惑をかけ申譯なき次第であります。爭議は未だ解決の曙光も見えず日々回答を迫つてゐます。此の際同業組合なるが故に組合長たる齋藤壯五郎を社長とする齋藤印刷株式會社に御同情なさる事と思ひますが、眞に齋藤印刷を助けらるるならば罷業破り職工を送る事よりも、社長齋藤壯五郎の貪慾なる資本家根性を反省させる事に努力して頂きたいと思ひます。

若い黨員　おい、それは四かい、

罷二　いいえ、五ですよ、

若い黨員　君のは、

罷一　俺のは四だよ、

若い黨員　變だな、僕のは三だ、（罷業員三のおいて行つたびらをのぞく）これも五だ、君、一寸題を讀んでくれ給へ

罷一　ええつと（少し節を付けて讀む）齋藤印刷株式會社に雇はれんとする職工に宣言す、吾々今回の爭議は單に齋藤印刷職工のみの利害問題ではない、正に全印刷勞働者の問題である、彼齋藤——

若い黨員　もういいよ、すると四が半分足りないわけだな（奥へ云ふ）ねえ、藤澤君、そこに「齋藤印刷に雇はれんとする職工に宣言す」つてのが殘つてますか、

奥で聲がする、分らない

（藤澤登場）

若い黨員　どうも足りませんよ（退場しかかる）

藤澤　何だ何だ、

若い黨員　四が足りない樣ですよ（罷業員一のびらを指す）あれきりです、

藤澤　そんな筈はないがね（罷業員一、二、三のを一つ一つ見る）

若い黨員　それに僕のは三ですよ、

藤澤　三は配つてしまつた筈だよ、變だね、（若い黨員のを取つて讀む）市民諸氏の義俠心に訴ふ、やつぱり三だ、僕、これは昨夜配つてしまふ樣に云つてたんだが間違つたかね、（退場しかかる）

若い黨員　じや三と四と間違つたんですね、

藤澤　田原君に聞いてみるから一寸待つてくれ給へ（退場）

罷一　（前から續けて讀んでゐる）彼齋藤社長が印刷同業組合の代表者である事を記憶せよ、此の戰の勝負は全印刷勞働者の興敗にかかるのである、從つて又全無產階級の共同の利害問題である、故に爭議中の齋藤印刷に臨時雇として雇はるる事は取りも直さず全印刷勞働者の勝利を妨害するものであり、全無產階級の利益を裏切るものである、吾々は幸にして今日まで一人の裏切者を吾々の仲間から出さなかつた事を喜ぶ。今後萬一一人にても裏切者妨害者出でんか、吾々は斷乎としてこれを糾彈す、右宣言す、齋藤印刷株式會社從業員爭議團、うまい。（藤澤と田原登場、藤澤は手に一重ねのびらを持つてゐる）

罷一　（飛んで行つて藤澤の肩をたゝく）宣傳部長、ばんざあいだ（一人で躍り上る）

田原　昨日はお晝と夕方と晩と三邊出した筈だがな、三は一體何枚すつたんだい、

藤澤　三だけが多いんだ、六百すつたんだから、

田原　じや、丁度いいじやないか、二人づつ六人出したんだよ、

罷三　びら配りは昨日はたしかに六人出ましたよ、

田原　ねえ、さうだらう、

若い黨員　（藤澤の手からびらを取る）おや四があつたんですね、じやこつちはどうしませう

藤澤　どうして三が殘つてるんだらうな、兎に角それも配つて來てくれ給へ

田原　晝に配つた者が一重ねを二人で分けたのか分らないね（退場）

藤澤　こんなのはどうでもいいが明日の演說會のびらは間違へたら大變だ

若い黨員　じや　配つて來ませう、

藤澤　人數が一人足りないだらう、

罷二　ええ　足りませんね

藤澤　じや田原君に云つて一人增してもらつてやらう（退場）

若い黨員　僕と君は（罷業員二に）電車の交叉點の所に行かう、後の人は活動館の近くに行つてくれ給へ、

罷一　よしきた、それではお前さん達はもう行つたらいいだらう、

罷二　じやあ僕達は出かけませうか、

若い黨員　行かう（元から持つてゐたびらを罷業員一に渡して罷業員二と共に裏から行きかかる）君達も裏から出るがいいよ、表はうるさいからね、

罷一　合點承知之助ですよ、どうも御苦勞さん、

　若い黨員と罷業員二退場

罷三　遲いなあ

罷一　表へ出たんじやねえかな（奥へゆく）

罷一の聲　びら配りは誰だあい――こつちだ、こつちだ、裏だよおつ

　罷業員一と罷業員四登場

罷三　おや　お前か

罷一　さあ　出かけたり　出かけたり

　三人はめいめい一重ねのびらを持つて裏へ退場。直ぐに保子登場。室の一隅に坐つて悲しさうに考へこむ。奥の演說の聲が一つはつきり聞えて來る。「脫衣場がない、食堂もない、ゴミと鉛粉の立ち舞ふ中で飯を食はせる工場が、何處にあるか、洗面所もない、便所もたつた一つきりない、通風と採光の惡い……」、信子と罷業員五登場

信子　お晝もたべないでひもじかつたでせうね、――あら、保子さん、此處だつたの、（臺所からおひつ、お膳、お椀、澤庵など持つて來てよそつてやる。）

罷五　有難う（食べる）

信子（保子に）あんた　何してるの（保子の橫に坐る）

保子　なんにもしてない

信子　又ふさぎの虫？

保子　――

信子　ねえ　お止しなさいつたら、

保子　ええ、

信子（罷業員五に）この人はお母さんのお乳が戀しくつてふさいでるのよ、ストライキにでもはいらうつて人が意久地がないのね、

罷五　若え女だもの、無理もないよ、

信子　あら、そんな事云つちや駄目、もつと叱つて頂戴よ、

罷五　それに保子さんの親爺さんは社長の御氣に入りだから、一寸具合が惡いだらう、

信子　保子さんのお父さんは惡い人じやないけど――

罷五　いい人でもないだらう、（笑ふ）

信子　長い物には卷かれろ主義でどうも（笑ふ）

保子（泣き出す）

信子　まあ、どうしたの、御止しなさいな、――ねえ、保子さん、あんたはストライキにはいつた事を後悔してるんじやない？

保子（首を橫にふる）

信子　だつたらいいけど――泣いたりなんかしちや他の人が氣を惡

くしてよ、さうでなくつてさへみんな氣が立つてるんだから、あたし達女の方からなるべく快活にしてゐなきやあね。

保子 ええ――御免なさい

信子 あら、詫びなくつたつていいわ、あたし達は正しい事をしてるんだから心配しなくつてもいい筈でせう、それに今の時代はもう正しくない親の意見に從ふのが孝行じやなくなつたのよ、

龍五 その通りだよ（飯をすまして片付け樣とする）

信子 いいのよ、あたしが片付けるから（立つて行く）

龍五 有難う――保子さん、心配しなくつたつていいよ、なあに、ストライキに勝ちさへすればお父さんだつて何も云やしないからね（退場）

信子は後を片付けて臺所へ行く、お椀や皿を洗ふ音、田原、大川、藤澤登場

大川 （保子を見て）おや、しよんぼりしてゐますね

保子、あら、いいえ（立たうとする）

田原 いいよ、そこに居給へ、又君達にお使ひしてもらうか分らないから、

三人坐る、信子も臺所から登場

藤澤 （煙草を出す）どうしたんだい、

田原 今夜の委員會は此處じや駄目だよ、

大川 僕も今考へてゐた所だ、今朝から見張りがとつても嚴しい、

藤澤 さうかい、じや何處でしよう、

田原 第二の所がいい、本野君も終列車で歸る筈だから

大川 早く林君に知らせなきやもう出て來る頃だらう

藤澤 もう出かけてやしないかな、林君さえ來れたら後は自警團を增して警戒すればいいんだが、

田原 なあに、まだ出てやしないよ、今夜は明日の晩の演說會の打合せや、大川の方の財政部から報告があるからどうも此處では危險だね

藤澤 さうか、じや第二にしよう、

大川 それがいいだらう、

田原 では宮口さん、今村さんと二人で又林君の宿に行つて來て下さい

信子 え、行きませう

藤澤 急いでくれ給へ

信子 はい、保子さん、行きませう（立つ）

保子 え（立つ）

二人一寸身づくろいして奧へ行きかかる、保子だけ思ひ切つた樣に復歸る

保子 あの、あの、歸りに一寸家によつて來ていいでせうか、

藤澤 家に、さあ、

田原 いいさ、宮口さんについてつてもらつてよつてらつしやい、

保子　すみません

大川　その變り裏切者にならない樣にね（氣輕く笑ふ）

保子　あら、あたしそんな、――

　信子と保子奥へ退場する

藤澤　何だかおどおどしてるね、

田原　若い女のデリケートなんだよ

藤澤　さうかな、

　演說の聲が一つはつきり聞えて來る「我々は橫暴なる會社の迫害と、下劣なる切崩しとに反抗しながら、握飯に漬物を食つて、又夜は冷い莚をしとねとして苦鬪を續けてゐます、我々の要求が――」

大川　勝ちたいなあ

田原（すつくと立つ）勝つてみせるよ、

――溶暗――

――第一幕　第二場――

　情景　第一場と同じ舞臺、第一條から數時間後の夜、十二時に近い頃である。奥は靜かである、しかし時々小さな話聲が大小の鼾にまじつてぼそぼそと聞えて來る、室の隅に二人の若い女工が抱合つて敷蒲團もなく薄い毛布を掛て丸寢してゐる、信子も薄つぺらな蒲團を着て丸寢してゐる、その枕元の襖にまるで吸ひこまれさうに保子が坐つてゐる。

信子（首をもたげて）さあ、おやすみつてば、

保子　ええ

　間

信子　まだなの

保子（涙をふく）先にねて頂戴な

信子　駄目よ、あんたがそんなじや心配でねむれやしないわ、

保子　心配しないで頂戴、あたし悪い事なんか決してしないから、

信子　だつて――

保子　あたし、逃げ出したりなんかする樣な卑怯者じやないわ、

信子　そりや分つてるわ、

保子　どんな事があつたつて、あたし、決して裏切者にはならなくてよ、裏切る位なら死んでしまふわ、

信子　お止しなさいよ、そんな緣起でもない事、

保子　本當なのよ、あたし、さう思つてるわ、

信子、だからさ、それだけ決心してればそれでいいじやないの、今は唯、早くやすんで明朝早く起きて、御飯をたいて男の人達の心を少しでも愉快にする樣に心懸ければいいのよ、この爭議に勝ちさえすればあんたの心配なんかさらりとなくなるわ、

保子　だつて、あたしがストライキにはいつたつてので、お母さんは病人みたいになつてるし、お父さんはまるで氣狂ひだし――あ

たし、今夜は何だか眠れないのよ、三四日見ない内にすつかり痩せてしまつたお母さんの顔が目の前にちらついて仕方がないんだもの

信子　氣が小さいのねえ（起て坐る）あたしが表で待つてる間にあんたはどんな事云はれたの、

保子　何つて云はれやしないわ、お母さんにくやまれて、お父さんに叱られただけ、

信子　何て叱られたのよ

保子　だつて――あんたには分らないわ、

信子　そんなに見くびらなくつたつて――

保子　いいえ、さうじやないの、あたしのお父さんの氣持なんかあんたには分つてもらへないだらうと思つて云つたのよ、

信子　同じ事だわ、ねえ、さう考へこまないで云つてしまつたらどう？　そしたらあんたの胸も少しはすうつとするわ、

保子　だつて何でもないのよ、唯ねえ――

信子　ええ

保子　怒つちや駄目よ、あのね、自分が今の地位までになつたのは二十年間、骨身惜しまず働いたお蔭だ、だのにあたしの爲に一遍で社長の信用を落してしまつた、だからあたしはお父さんを又もとの不仕合せに落した敵だ、お父さんだけじやない、今村一家の敵だ、死んでしまへつて――

それからあんな社會主義の國賊の家に、しかも多勢の男と一緒に泊る樣な恥知らずは娘じやない、淫賣より惡い奴だつて――

信子　まあ、そんなひどい事を――

保子　お父さんはなんにも分んないのよ、

信子　そんなひどい事云ふんだつたら、此處に引つぱつて來てみるがいいわ、みんながどんなに眞劍な氣持で正義の爲に戰つてるかが分るわ、

保子　だつてお父さんは自分だつて長い事食ふや食はずで働いたんだつて、

信子　それがあんたの御父さんの御咔だわ、自分もして來たからお前達もしろつてのでせう、二十年の間一懸命に社長の御氣嫌取つて、少し拔擢されるといい氣になつて職工をいじめたりなんかしてさ、まるで資本家の犬だわ、

保子　でも、

信子　あんたはあんなお父さんの云ふ事をへいへい聞いて來たの、あきれてしまふわ、あたしだつたら云つて云ひまくつてやるのに、

保子　そりやあたしだつて――

信子　社長の娘を見て御覽なさいよ、やれお芝居だ、やれお琴の演奏會だつて毎日毎晩錦紗づくめで遊び歩いてるのに、同じ年のあんたははした錢の爲工場の隅つこで、一日中活字拾ひをしてさ、あんたはそれでも今の世の中が當り前だつて思ふの、

保子（泣く）だから、だからあたしストライキにだつてはいつてるじやないの、

信子　だつたら、そんな敵の片破れみたいなお父さんの事なんか考へないで、さつさとやすむがいいわ、あんたがそこでめそめそしてると癇にさわつてねむれやしないわ（ころりと横になつて蒲團をひつかぶる）

保子（聲を忍んで泣く）

　　間

保子（思ひつめた顔で立つてそこらをうろうろする、信子の枕元にかがんで小さく呼ぶ）信子さん――もう、ねむつてる――（又立つて臺所や便所の方までうろうろする便所に入る、直ぐ出て來て赤い腰帶をといて又便所に入る、つひに出てこない）

　　靜かな間――ごとごと音がして裏の暗がりから京子と俊枝登場、邊りの貧乏臭さに似ない華やかな姿である、彼女達はウエートレスをしてゐるのである

京子　ああ、つかれた（邊りを見廻す）今夜は妙に靜かだわね、

俊枝（上ると直ぐぺたんと坐る）ええ

京子　今夜の爭議委員會は此處の筈でせう、

俊枝　ええ、

京子　すんだのかしら（奥へ入る）

俊枝　ああ、いやだ、いやだ（大げさにバタンと倒れて横になる）

京子（出て來る）見張りが嚴しくつて應援の林さんが這入れないから、第二の場所に變更したんだつて自警部の夜勤の人が云つたわ、

俊枝　さう

京子　第二の所つてのは支部長の家でせう、

俊枝　ええ

京子　それじやあの人達は今夜は泊つて來るか分らないわね、

俊枝　さうね、

京子　もう寢ようじやないの

俊枝　ええ

京子　俊ちやんつたら張合ひのない返事ばかりするわね、

俊枝　――

京子　あんた、氣分でも惡いのじやない、

俊枝　さうじやないわ（くるりと起る）

京子　此の頃、いやに元氣がないのね

俊枝　だつて食べ物はろくに食べないし、體が惡るくつても一日だつて休まないで働くでせう、その上夜は夜でちつとも眠らないんだもの、苦しくつて、苦しくつて、かうして歸つて來ると一寸だつて起きてをれないのよ、

京子　だからあんただけパンを買つてるじやないの、

俊枝　だつてパンと砂糖じや咽喉につかえてはいらないわ

京子　さうあんたみたいに我儘云つたつて仕方がないわ

俊枝　ああ、一日でいいから靜かな處でゆつくり休みたいなあ

京子は押入から不斷着を出して着變へ始める

俊枝　家は家でこんなだし、バーはバーでくだらない奴のお相手だし何處に居たつて頭ががんがん鳴つてたまりやしない、――ねえ京ちやん、一日でいいからあたしを一人にさせて頂戴、

京子　そんな無理な事云つたつて仕方がないわ、

俊枝　あんたは何でも仕方がないで逃げてしまふんだもの

京子　だつてこの爭議が解決する迄はどうにもなりやしないわ

俊枝　一體爭議はどうなつてるの、少しは目鼻がついたのかしら

京子　まだなかなからしいわ、

俊枝　でも、何だかみんなの氣分がだれかかつた樣じやないの

京子　だからもう二三日の內に解決しなきや困るんだつて大川が云つてたわ、罷業員の氣分はどんなにしてでもまとめられるけれど、もう財政が續かないらしいの

俊枝　勞働者なんてちつともしつかりした意識がないのね、くだらない奴ばかりだわ

京子（手で制して）しつ、聞えてよ、

俊枝　だつて本當だもの、あたし、お孃さん育ちの無鐵砲から飛込んでみたけど、この世界にも失望するばかりだわ、

京子　そりやあんたがインテリだからよ、私はもう今の勞働者は生じつかな指導者なんかない方が、確かりと團結出來ると思ふわ、あんただつて團結した場合の勞働者の迫力は輕蔑出來ないでせう

俊枝　ええ、大勢の力は認めるわ、でも勞働者を一人一人見た時生噛りな癖に餘りにもがさつな神經なんだもの、とてもあたしには御相手なんか出來ないわ、

京子　あんたみたいにデリカな神經の勞働者がゐたら大變よ、（笑ふ）あんたはいつまでたつてもプチブル性が拔けないのね、その點藤澤さんは感心だわ、すつかり藝術家氣分を淸算してしまつたんだもの、

俊枝　駄目よ、藤澤なんか、まだセンチメンタルがのこつてるわ、

京子　あんたみたいにさう誰も彼も輕蔑しちやいけないわ、

俊枝　だつて誰も彼もくだらなくつてね、（笑ふ）マルキシズムの餒骨か夢からさめきらないロマンチストばかりだもの、實の所、あたし、段々分らなくなつたのよ、あたしみたいな人間はあるがまゝの世の中をあるがまゝに受入れるか、山の中にでもはいつた仙人みたいになるかだわ、

京子は俊枝の言葉を聞かうともせず押入から蒲團を出して一組敷く

京子　あの人達が歸らなきや蒲團が一枚餘るわ、あちらの人達にかけといて上げようか、

押入から一枚出して毛布を着てゐる二人にかけてやる

京子　さあ、早くやすまふじやないの、又明朝騷がしくつて眠れな

いから、

俊枝　ええ（目をつぶつてぼんやりしてゐる）

京子（床の上に長くなる）ああ、いい氣持、

間

京子　俊ちやんつたら、何してるの、

俊枝　ええ——（立つて便所へ行く、直ぐに叫聲を上げて室の入口に走込み、倒れる）

京子（はね起きる）俊ちやん（走りよる）どうしたの、俊ちやん、俊ちやんつ（俊枝を抱き起してゆすぶる）

女工の一人がはね起きて坐る

俊枝（目を開いて變な聲を出しながら便所を指す）

京子　はばかりに何があるの（立つて便所へ行く）あつ（二三歩退く、又進む、じつと見る、）あつ、大變だわ、保子さんて人よ、（室に來て起きた女工に）あんた、保子さんが首くくつてるのよ、（奥へ走り込む）

女工　えつ（飛上つて便所へ行く）わあつ（飛込んで來て横にねてゐる女工を起す）大變よ、大變よ、あんた、起きて、

この間に俊枝はふらふらと立つて、狂的な顔付で信子の體をふみ、室の一隅に行つてつつ立つてゐる、信子は目を覺す、も一人の女工も起きる、その時奥からバタバタと四五人の自警部員が飛込んで來る、ゾロゾロと便所をのぞいては引返して來る、京子も一度行つてよく死體を調べて出て來る

自警部員　口々に、大變だ、もう冷たくなつてる、息はない樣だ、どうしよう、畜生、馬鹿な事をしやがる、けちをつけやがつたんだ、

信子や女工二も便所を見て來る

信子　あたし、惡るかつたわ、惡るかつたわ、寢なきやよかつたんだけど（誰に云ふともなく）あたしの枕元で保子さんが泣いてたんだけど、つかれてたもんだから、つい眠つてしまつたわ、惡るかつたわ、惡るかつたわ、

自一　夕方から泣いてた樣だ、

信子　そんなに思ひ詰てるとは知らないものだから、餘に慰めもしないで先に寢てしまつて、あたし、あたし、どうしよう（泣く）

京子　泣いたつて仕方がないでせう、それよりも皆さん、靜かにして外の人が見を覺さない樣に氣をつけて下さい、騒いだつてもう冷たくなつてるんですから——さあ、落付いて下さい、知らせる所へ知らせなきやなりませんわ、

自二　警察でせう、

自三　今村のおやぢの內にも、

京子　警察はまだいいでせう、明朝誰かがはばかりに行つて氣が付いた樣にしてもいいから、それよりも委員會のあつてる支部長の家に知らせて下さい、そして支部長がもしゐなきや組織部長の田原さんの指圖通りにして下さい、警察や保子さんの家に早く知ら

せる方がいいんだつたら歸りに廻つても遲くはありませんわ、ねえ一寸俊ちゃんそれでいいでせう（俊枝をさがす）そんな所で何してるの（行く）俊ちゃんつたら（ゆすぶる）

俊枝　（ふくんだ樣な聲で笑ふ）あの人はなぜ自殺したの

京子　え（じつと俊枝を見る）

俊枝　やつぱりあたしみたいに靜かになりたかつたのね、ゆつくりと身も心も休めたかつたのよ、きつと、

京子　まあ、あんたは（抱きしめ樣とする）

俊枝　（くたくたと坐りこむ）京ちゃん、あたしも首くくつたら靜かになれるわね、

京子　まあ、何を云つてるのよ、（俊枝の體をゆすぶる）俊ちゃん、しつかりして頂戴、一寸、俊ちゃん

自警部員や女達ひそひそ囁く

俊枝　（笑ふ）あたし、しつかりしてるのよ、でもね、騷がしい處に行くと頭が痛んで變になるの、困るわ、皆さん、どうぞ靜かにして頂戴ね

京子　まあ、この人つたら（絕望的に立つ）誰か早く知らせて來て下さい、さあ、早く若い方二三人走つて下さい、

自四　俺が行かう

自五　僕も行きませう、

二人奥へ走りこむ

京子　お願ひします、（坐つて俊枝の肩を抱く）可愛さうに、こんなになつちまつて（啜泣く）

——溶暗——

——第一幕　第三場——

情景　小じんまりした大小の二間、大きい室の應接臺を圍んで田原、大川、藤澤、畑、林の五人が話してゐる、藤澤と林とは時々煙草をのむ。小さい室で政乃が縫物をしてゐる、その横に敷いてある蒲團に彼女の子供がやすんでゐる、前場の直ぐ後、卽ち夜の一時過ぎである、

田原　（ノートにペンを動かしながら）するとＹ市の連中は明日會場へ眞直ぐ來るとして、人數は何人だい、

林　（懷から電報を出して見る）三人だ、

田原　たしかな所だね、

林　大丈夫だらう、

田原　すると罷業員から——

畑　わたし共六人です

田原　三人と六人で九人、藤澤君に木戸君で十一人、林君で十二人、——丁度いいだらう、十五分づつとして三時間だ、

林　僕はたしかには分らないよ、先生の所にかくれてるんだからなるべく用心したいんだ、もしつかまつて先生に迷惑でもかけちゃ

ならないからね、
藤澤　だから、その時の都合にし給へよ、來れる樣だつたら來て、しやべつたら直ぐ窓から飛出すさ（笑ふ）
林　僕より君こそ用心しろよ、君達が今つかまつたら後がどうにもならないからね、
大川（藤澤に）中止を食つたら用心の爲君も窓から飛出せよ（笑ふ）
藤澤　そりやさうと馬場君は一體どうしてるんだらうな、
大川　爭議の事は知らせたんだよ、ちつとも顏を出さないなんてどうも不都合だ、
田原　あんな奴は出ない方がいいよ、あんなおつちよこちよいにまぜかえされた日にやこつちが助からない、
藤澤　田原君演說の順序をきめようじやないか、
田原　うむ（書く）
林　畑さん、罷業員の元氣をお付けなさいよ氣勢が拔けたらそれつきりですからね、
畑　さうですね、
林　家の事を氣にかけてるものが多いでせうね、
畑　どうもそれが多くつてね、
林　演說でも角力でも、碁でも將棋でも何でもいいから、なるべく退屈させない樣にする事ですよ、
田原　これでいいだらう、林君、君は都合のいい處にはいり給へ、

表を叩く音「御免下さい」といふ聲

政乃　はい（立つて大きい室の襖をしめて玄關にゆく、戸を開ける）どなたですか、
自五　罷業員ですが、田原さん達はいらつしやいませんか
政乃　一寸待つて下さい
畑（立つて行く）おう久公、今頃どうしたんだい、
自五（入つて來る）大變な事が出來たんだ、今村の娘が首くくつたんだ、
畑　えつ
政乃　まあ、
自四　それから――

皆立つて來る

畑　自殺があつたんださうです、
田原　誰です、
自五　今村保子つて人です、それから
藤澤　やつたな
田原　しまつた（舌打）
大川　何だか沈みこんでたよ
林　いくつだ
畑　十七八でせう
林　爭議に入れるには少し若すぎたね

自四　それから俊枝さんといふ人が變ですよ

藤澤　變て？

自五　何だか氣が變になつたんです、

藤澤　俊枝がですか

田原　なあに、驚いて取りのぼせたのさ

自四　氣が狂つたのじやないですか、京ちやんて人が泣いてゐましたよ、

大川　兎に角大急ぎで歸らうじやないか、

藤澤　歸らう

　この少し前に派手な風の左千代登場、彼女もウエートレスである、政乃の傍によつて囁く、政乃説明する、皆それぞれ歸る仕度をする

田原（政乃に）それじや奥さん、引上げます取散らしたまゝですみません、

政乃　いいえ、じや、あたしも行きませう、京子さんが一人で困つてらつしやるでせうから、

田原、こんな夜中にいいんですか、

政乃　關ひません、妹が歸りましたから、本當はあたし、晝間だけでなく夜も加勢に出たいんですけど、子供がゐるものですからね、

　皆外へ出る

政乃　じや左千代さん、一寸行つて來てよ、

左千代　行つてらつしやい、田原さん、御心配ですわね、

田原　有難う、本野君がもし終列車で歸つたら直ぐ事務所へ來る樣に云つて下さい、

左千代　ええ、云つときますわ

　田原と政乃退場

左千代（表戸を閉る）けちがついたわ、又負けるんじやないかしら

——溶暗——

——第二幕　第一場——

情景　二間ばかりの狭い田原の家である、一方の室の壁にくつつけて敷いてある蒲團の中に俊枝がやすんでゐる、枕元で藤澤が雜誌か何か讀んでゐる、一方の室で道子がお化粧をしてゐる裏のぬれ縁の所で田原の母が張り物をしてゐる、第一幕の翌日の午後四時頃の事である、

母（一枚張り終へて日向に出す、それから縁にかけてきせるで煙草をのむ）いいあんばいに眠りましたね

藤澤　ええ（雜誌を置いて縁に出て行く）小母さん、どうもすみませんね、こんな病人をつれこんで來て、

母（煙草をすいながら手を振る）

藤澤　唯、靜かな所でゆつくり休みたいの一點張りでしてね（自分も巻煙草を出す）

母　へえ、可愛さうにね、

藤澤　夢中でそればかり云ふんです、外に置く所がないものだから田原君の言葉にあまえてつれて來ました、

母　お互ひですよ、こんな處でよかつたらゆつくり養生さしてお上げなさい、

藤澤　すみません、爭議の方が解決したら何とか方法を考へますから、それまでお願ひします、

母は一服すると立つて又張物を初める、道子は髮と顔を美しく作つて立つて來る、

道子（俊枝をのぞきこんで）さつきのお藥がきいたのね、

藤澤　ええ、ぐつすりです

道子（枕元に坐る）可愛想に、この間逢つた時よりずつと瘠せてるわ、

藤澤　つかれてますよ、身も心もしんからつかれきつてゐます、

道子　あんな生活は女にはとつてもこたへるものよ

藤澤　さうですかね

道子　女はやつぱり平凡でもいいから平和なくらしがしたいものよ

藤澤　その平和つてのは僕等には一生來ませんね、

道子　うちだつてさうだわ、あたし始めは何でもない事だと思つて田原と一緒になつたんだけど、段々苦しい事が分つて來て、時には無産運動なんか止めてくれたらと思ふのよ、あたし、貧乏よりもあわたゞしさの方がたまらないの、でももう此の頃はあきらめがついたわ、

藤澤　仕方がないですよ、僕等から運動を奪つたらそれこそ死んだのも同じですからね、それにこの生活に飛込むには誰だつて相當の犧牲も拂つてますから、

道子　犧牲つていふと？

藤澤　例へば温い親兄弟から離れたり、學校を止したりね、僕なんかのらくらの美術學校だからいいけど、大川君は高等商業を卒業前に止めさせられたんですよ、俊枝だつて温い家庭を捨ててなきや、こんな時には直ぐ歸れるんですけれどね、この生活がまあそんなにして迄あがなつた僕等のたつた一つの樂しみですよ（笑ふ）傍から見たら苦しんでいらぬおせつかいをやくとおかしいでせうが、飛込んで見ると反抗心はそそられるし、今の社會組織の惡い事は益々分つてくるしね、

道子　むづかしい事は分らないけれど、あたしだつてちつとも惡い事とは思つてないわ、田原だつて六年も刑務所にはいつたつていふのに、懲りもしないで又やるんでせう、それ程好きな事ですもの、決してとめやしませんわ

藤澤　とめない方がいいんですよ、

左千代登場

左千代　こんちは（さつさと上りながら）俊ちやんはどんな？（道子

の横に坐る）
道子　いらつしやい、
藤澤　睡眠劑がきいてこの通りぐつすりねむつてるよ
左千代　あんた、心配だわね、でもあたし、氣が變になつたつていふでせう、だからあばれてるんじやないかと心配して來たわ、
藤澤　亂暴なんかちつともしないね、
左千代　さう、そして醫者に見てもらつたの
藤澤　今朝、大學の精神科に行つたんだ
左千代　そりやよかつなわね、そして病氣の方はどんな？
藤澤　やつぱり少し悪いさうだ、營養不良と心身の過勞が原因なんださうだ、
左千代　さう云へば何だか此の頃ひどく大儀さうだつたわね一體よくなるの
藤澤　今ならなるさうだ、しかし大分金がかかるね
左千代　お錢はどうにかなるわ（道子に　あんた着物着變へない！
道子　ええ、今用意した所なの、（立つて一方の室で派手な着物と着變へ初める）
左千子　小母さん、御精が出るのね
母　左千代さんもう、お出かけ？
左千代　ええ、俊ちやんを見舞ひかたがた早目に來たのよ、小母さんとこ大變でせうけど俊ちやんを御頼みしますわ
母　ええ、行きとどかないけどね
左千代（藤澤に）入院なんかさせなくつてもいいの？
藤澤　そんなにしな、てもいいらしい、唯、刺戟しない樣に注意して充分營養を與へればいいさうだ、
左千代　じやおあしは大していらないじやないの、可愛想に、しつかり養生させなきやだめよ、
藤澤　當分の間毎日注射しなきやならないんだ、藥の方は睡眠劑だけでいいさうだけれどね、
左千代　それつ位あたしだつて稼いであげるわ、あたしこれでも腕が凄いんだから日に三圓や五圓は取れてよ（笑ふ）
藤澤　僕も出來るだけは養生させるつもりだけどね、しかしこれが働かないと、早速その日にも困る位だから、
左千代　そんな事云つたつて好んで病氣するんじやないもの、あたし達はどんな無理しても倒れた同志は起さなきやならない筈よ、あたしは浮氣者だからあんた達から日頃輕蔑されてるけど、さあつていふ時はあたしだつてどんな事でもするわ、
藤澤　有難う、君の氣持は分つてるんだ、しかし僕にしてみれば自分の妻だもの、養生させたいのは山々だけど、みんなにまで迷惑をかけて、そんな事にお金を費ふのは氣の毒でね、
左千代　じやどうするつていふの、放つとく譯にはゆかないでせう、
藤澤　だから本人が承知するなら、暫く家に歸さうかと思つて、今

朝、國に知らせたんだがね、

左千代　駄目よ、勝氣な俊ちやんが家になんか歸るものですか、又あんたもあんただわ、飛出した家に今更歸すなんてあんまりといふものよ、

藤澤　僕はそんな女らしい意地はいらない事だと思ふね、しかも貧乏なら兎も角田舍の大金持なんだもの、そんな意地を立てて苦しむよりも、素直に詫びて暫く養生して來た方が俊枝の爲にもよくはないかと思ふよ、

左千代　あんたは隨分打算的な人ね、でもどう云つたつてあたしは歸す事は不贊成よ、だつて考へてご覽なさいな、我々の爲に倒れた人は我々の手で起すのが當り前じやないの、

藤澤　何もさうむづかしく考へなくつたつていいさ、しかしまあ、これは本人の意志次第の事で、僕だつて無理に歸すわけじやないよ、

左千代　あたし、俊ちやんはきつと歸らないと思ふわ、

道子（着物を着變へてしまふ）だつて歸らないとも限らないわ、

左千代　あんたなら歸るだらうが、俊ちやんはあれでも百パーセントのマルキストだからね、

道子　御挨拶ね、でもあんただつてどうもマルキストじやなささうよ、

左千代　分つてるわ、あたしは昔だつたらこれでも姉御つて云はれる樣な女になるんだけどね（笑ふ）さあ、すんだら行かうじやないの（コンパクトを出して顏を直す）

道子（藤澤に）じや、あたしは出かけますから御用があつたら遠慮なくお母さんに云つて頂戴ね、

藤澤　ええ、有難う、

道子　お母さん、行つて來ます（さつさと先に出る）

母　ああ、行つておいで、

左千代　藤澤さん、俊ちやんを御大事にね、じや、小母さん、さよなら（急いで道子の後を逐ふ）

母　陽がかげつて出來やしない（仕事をやめて片付ける）

表の標札を見たり等うろうろしながら久枝登場

久枝（表から）御免下さい、一寸お尋ねしますが田原さんて仰申る御家は――

藤澤　此處です、

久枝（ホッとした樣にはいつて來る）

藤澤　どなたですか

久枝　あの、御宅に石川俊枝つて云ふ者がゐますでせうか、

藤澤（立つて來る）ええ、居ります、貴女は、

久枝　俊枝の妹なんですが（床を指して）あのこれが――

藤澤　やあ、さうですか、しかし此處にゐる事がよく分りましたね、

久枝　あたくし公衆黨の事務所に參りましたの、そうしたら此處を

くわしく敎へて下さいました、

藤澤　ああ、さうでしたかさあ兎に角上つて下さい、

久枝　ええ（上る）

田原の母も裏を片付けて上つて來る、久枝に座蒲團をすゝめたり等する

久枝　あの、電報では委しく分りませんが一體どうあるんでせうか、

藤澤　大した事ではありませんがね、――實は頭なんです、

久枝　頭つて？

藤澤　どうも少し氣が變になりましてね、

久枝　まあ、氣が違つたんですか、

藤澤　まだひどくはないんですが、今養生しないと取返しがつかなくなるさうですから、

久枝　まあ（俊枝をのぞきこむ）

藤澤　今、薬で眠つてます、

久枝　さう――どうして姉はそんな事になつたんでせうか、

藤澤　先生のお話では營養不良と心身過勞から來てるさうですが、實は昨夜、黨で女の人が首をくくつたのです、それを俊枝が一番に見やちつて驚いたものだから、急に氣が變になつたんです、

久枝　まあ、さうでしたか――實は父が電報を見てカフエーなんかにゐるんだから大方、あの、赤ちやんでも出來たんだらうからかまつてはならないつて怒るのを、母がなだめすかしてやうやくまあ、あたしが樣子を見に來ましたの、

藤澤　（苦笑しながら）さうでしたか、

久枝　母にしてみれば繼母つて義理があるものですから、世間の手前放つてもおけないでせう、

藤澤　はあ、

久枝　うちにじつとしてればいいのに姉があんな氣性だものですから――求めてした事だ、かまつてはならないつて父は怒りますの、

藤澤　さうですか、しかし、主義は主義愛は愛ですからね、實は金があればお知らせしないで、こちらでさつさと養生させるんですけれど、

久枝　いえ、そりや萬一つて事もありますから知らせて頂かなきや困りますわ、それに父は兎も角、あたしは姉の氣持だつて少しは分りますから、

藤澤　貴女はお泊りになつてもいいんでせう、

久枝　え、二三日位、

藤澤　それじや後で、又ゆつくり相談しませう、實は今黨の方である印刷工場のストライキを應援してゐるものですから、僕、とつても忙しいんです、俊枝がこんなだから今日は仕方なく坐りこんでましたが、今夜の演說會の用意もあるし、こうしちやをれないんです、

久枝　まあ、さうですか、

藤澤　ですから僕は出かけて來ますから、貴女すみませんが此處についてゐて下さいませんか、
久枝　ええ、ようございますわ、あたし二三日は看病するつもりで來たんですから、
藤澤　じやお願ひします、(立つて帽子を取つたりしながら)俊枝ももう目を覺す頃でせう、
久枝　さうですか、
藤澤　じや小母さん、僕、行つて來ます、どうせ演說會がすまなきや歸れないでせう、
母　さうでせうね、じや行つてらつしやい、
藤澤　お願ひします(退場)
母　(お茶を入れて久枝に進める)御心配ですね、
久枝　本當に御迷惑をおかけします、
母　いいえ、御宅でもさぞ心配してらつしやるでせうねえ、
久枝　ええ——あの、今の方は、
母　藤澤さんて仰申るんです、實は俊枝さんと一緒にいらつしやる方なんですよ、
久枝　まあ、さうですか、道理で俊枝つて仰申つてましたわ、
母　いいお人ですよ、

俊枝、寢返りしてポッカリ目をあける

母　おや、俊枝さん、目が覺めたの、
俊枝　ええ(起きながら)ああさうさう、此處は小母さんとこだつたわね、(久枝を見る)あつ——久ちやん、
久枝　姉さん(つとめて何でもなささうに)あたしよ、御加減はどんな？
俊枝　——
久枝　ねえ、御氣分はいいの？
俊枝　あんた、どうして、一體どうして來たの、
久枝　だつて姉さんが病氣つて知らせて來たんですもの、
俊枝　病氣——噓、あたしは何ともありやしないわ
久枝　まあ、
俊枝　ねえ、こんな處に何で來たの、
久枝　だから、病氣つて電報が——
俊枝　噓ばつかり——さあ、そんな事はどうでもいいからお歸り、此處はあんたなんかの來る所じやないわ、
久枝　だつて、
母　俊枝さん、そんな事云ふものじやないよ、
俊枝　いいのよ、いいのよ、久ちやんなんか今のお母さんの御氣嫌でもとつていい子になつて暮す方が似合つてるわ、
母　まあ、お止しなさいつたら、
俊枝　本當にどうして來たんだらう、
久枝　だから云つてるじやないの、姉さんが病氣つて——

俊枝　違ふつたら、あたしは病氣なんかしやしない、唯、つかれ過ぎたから二三日靜かに休みたかつただけよ、だのに藤澤が大學なんかに連れて行くんだもの、いやになつちやう、

久枝　うちでもみんな心配――

俊枝　うちの事なんか聞かなくつていいわ、さあ久ちやん、お歸りお歸りつたら、

久枝　それが病氣なのよ、そんなに痩せてつかれきつて――

俊枝　いいつたら、あたしの事なんかかまつてもらはなくていい、さあ、あんた、歸つて頂戴、お歸りつてば、

久枝　（泣く）

俊枝　いいわ、あんたが歸らなきや、あたしが出てゆくから（立つ）

母　まあ、俊枝さん、何ですよ、そんな事云つてさ、折角いらつしたんだもの、ゆつくりお家の話でもなさいよ、歸つて頂く方がよかつたら明日だつていいじやありませんか、

俊枝　だつて、

母　だつてじやありませんよ、さあ、も一度ゆつくりお寢みなさい、

俊枝　ええ――（しぶしぶ横になつて蒲團をひつかぶる）

久枝　（泣いてゐる）

――溶暗――

――第二幕　第二場――

情景　京子と俊枝が勤めてゐるバーの一隅一つのテーブルで若い男が二人洋酒をのんでゐる、その横に京子が立つてゐる、前場から數時間後の夜、十二時近くの事である、奥で蓄音器のジャズがなつてゐる、

京子　まあ、それじや大成功だつたんですね、

客A　割れる樣な入りだつたよ、

客B　僕はやじが面白くつてね、演説のうまいのは二三人しきやゐない

客A　別府とか藤澤とかつてのは一寸うまかつたじやないか、それから一番終りの半分で中止をくつた林つてのも、

客B　うまいつて思ふのは直ぐ中止だからな、

京子　そして檢束者を出しましたか、

客B　あつたらしいね、

客A　八幡か何處かから應援に來た奴が二三人やられたらしいね、

京子　まあ、さうですか、

客B　君も赤い方が好きと見えるね、

京子　これでもマルクスボーイではない、エンゲルスガールのつもりですよ（笑ふ）

客A、（飲み終る）さあ、出ようか、

客B　出よう（ぐつと飲みほす）

一方が札を置く、二人立つ

京子　あら、もう御歸りですか、じや又いらつしやいましね（送つて行く）さよなら（歸つて來てテーブルを片づける）

林登場

京子　あら、林さん

林　ええ（入口から見えない樣なテーブルを物色して腰かける）

京子（林の前に腰を下す、小さく）どうなすつたの、

林　つけられてるらしいんです、暫く休ませて下さい、

京子　ええ、いいわ、何か上げませうか、

林　さうですね、何か輕いものを下さい、

京子（洋酒のグラスを持つて來る）演說會は大入だつたさうですね、

林（うなづく）

京子　誰か檢束されましたか、

林　Y市から來た連中が三人共やられました、實は停車場から直ぐブタ箱に送つて會場へは出さぬつもりだつたらしいが、奴さん達が一驛前で下りたので出しぬかれたんですよ、

京子　まあ、じや、藤澤さんは――

林　知らない、しかし土地の者は大丈夫でせう、より僕の方がとつても危かつたんですよ、

京子　まあ、さうですか、

林　裏から飛出して來ました、

京子　でも、つかまらなくてよかつたのね、

俊枝登場、前場の下げ髮にリボンをかけ、着物を着變へてゐる

俊枝　京ちやん、なぜ妹なんか呼んだの、

京子（振向く）まあ、俊ちやん、

俊枝　一體、誰が國へなんぞ云つてやつたのよ、

京子　あんたどうして出て來たの、ゆつくり休んでればいいのに、

俊枝　だつて休んでなんぞをれないんだもの、妹なんかと一緒にゐるんだつたら働いてる方がまだいいわ、

京子　じや、お國から妹さんがいらしたの、

俊枝　何だ、知つてる癖に白つぱくれて、

京子　まあ、いやな人、そりやあんたの家に電報は打つたわ、

俊枝　そら、知つてるじやないの、みんなであたしを病人にしてしまつて國へなんぞ知らせるんだもの、馬鹿にしてるわ、ねえ、林さん、あたし、これでも病人に見えて？

林　さあ、何だか大變つかれてる樣ですよ、暫く靜養した方がいいでせう、

俊枝　多分神經衰弱にかゝつてるんだわ、（林の横に腰かけてぐつたりなる）

京子　苦しかない？

俊枝（いやいやをする）

京子　一體どうして出て來たのよ、小母さんや妹さんはゐなかつたの、

俊枝　ゐたわ（笑ふ）二人の飲んでるお茶にあたしの眠り藥をどつさり入れたのよ、そしたら二人共フラフラ居眠りするの、とてもおかしいつたわ（笑ふ）

京子　まあ、何て事をするの、

林（笑ふ）痛快だな、

俊枝　おかしくつておかしくつて（止めどなく笑ふ）

京子　困るのねえ、目を覺したらどんなに驚くか分らないわ、

俊枝　いい氣味だわ、

京子　ねえ俊ちやん、あんた當分お國へ養生に歸らない？

俊枝　知らない、

京子　妹さんと一緒に歸つて暫く樂にして來るといいわ、

林　それがいいでせう、大分體が弱つてる樣だから、田舍で靜養する事を僕も御進めしますね、

俊枝　いや、

京子　だつて、靜かな所でゆつくり休みたいとしよつちゆう云つてたじやないの、さうなさいな、

俊枝　駄目つたら、國へ歸る位なら今の赤いまゝの方がいいわ、

京子　何を云つてゐるのよ、ねえ、大學の先生が云つてらしたでせう、色んな事考へないでしつかり體を御作んなさいつてね、

俊枝　だつてあたし、國へ歸るなんて出來ないんだもの、自から赤になつて赤がつまんないからつてもう元へは歸れないわ、今度は黑にでもならなきやね（笑ふ）

京子　俊ちやんがそんな事ばかり考へるから病氣になるのよ、お止しなさいつてば（俊枝の肩に手をおく）

俊枝　京ちやんの意地悪、あたしを過去の世界へそんなに歸したいの（泣く）あたしの氣持は誰にも分らないのね、

京子　あら、泣かなくつたつていいわ、――困るのねえ、

林　さあ、兎に角歸らうじやありませんか、みんなが心配してるでせう、

京子　さうね、じや林さんに送つて頂くといいわ、ねえ俊ちやん、もうお國の事進めないから氣嫌直して歸つといて頂戴ね、

林　さあ、一緒に歸りませう、

俊枝　いやつたら、歸らない、歸らないつてば（劇しく泣く）

林と京子は顏を見合せる、三人連れの醉つた男がどやどやと入つて來る、止んでゐた蓄音器のジヤズが又なり出す

――溶暗――

――第三幕　第一場――

情景　第一幕の一二場と同じ舞臺、第二幕から二日ばかり後の夜、十二時近くの事である、便所へ行くぬれ緣の邊りに信子、室の隅に女二人が坐つてしよんぼりしてゐる、奧の方も第一幕の時より大變靜かである

信子（大きくと息する）こうしてみんなと一緒に居るのも今晩きりだわね、

女工一　ええ、苦しい事もあつたけど樂しみもあつたわね、

信子　ほんとうに——あたし、今度は色んな勉强をしたわ、

女工二　あたしもだわ、何だか世の中が分つた樣な氣がするわ、

女工一　たつた十日足らずの内に隨分色んな事があつたわねえ、

信子　保子さんがあんな事してから、あたし何だかけちが付いた樣で氣持が惡るかつたのよ、

女工二　藤澤さんの奥さんだつてこんな時に氣が違ふなんてねえ、

女工一　あの晩からあんまりいい辻うらじやなかつたわね、

信子　でもあたし、いい經驗になつたわ、

田原奥から登場、裏の暗がりをみつめてじつと立つてゐる

政乃（奥から出て來ながら）本當に遲いのねえ、

藤澤（政乃の後から來る）待つてるものだから猶更遲い樣ですね、

政乃　少しでも有利に交渉して來るといいんだけど、

田原　本野君は腰が弱いから駄目ですよ、

政乃　だから貴方も行つて下さる樣にあんなにお願ひしたじやありませんか、

誰からともなく坐る

田原　しかし僕の意見はもう二三日がん張る事でしたよ、今折れちや向ふにつけこまれるつてあれ程云つたのに、馬場君なんかの言葉を入れるから僕等の折角の作戰もくづれてしまつたじやありませんか、一體大事な時は出て來ないで今頃になつて、ひよつこり顔を出す馬場君も馬場君だけど、あんなおつちよこちよいの言葉を用ひる本野君も本野君ですよ、

政乃　いいえ、本野は何も馬場さんの言葉を用ひたわけじやありませんよ、もう財政が續かないつて事は何遍も何遍も繰返して云つたじやありませんか、貴方だつて知つてらつしやる筈でせう、昨日今日の費用だつて妹が着物全部を質に入れて作つたんですよ、

田原　そりや知つてます、左千代さんに氣の毒だとも思つてますよ、しかし勝負はもう二三日の内だから是非やらうと思へばやれない事はない筈です、一體本野君は僕に非常に反感を持つてゐますよ、だから、もうひとふんばりつて事は知つてゐながら僕の意見に反對して馬場君なんかの言葉を用ひるんです、分つてますよ、

政乃　それは貴方の誤解でせう、本野はそれ程不純じやありませんわ、

藤澤　田原君、そりやあ云ひ過ぎじやないかね、

二人の女工ひそひそ囁きながら奥へ退場、信子も續いて退場

田原　しかし輕蔑されてるのは確かですよ、長い間刑務所にはいつてたから僕はもう時代に取殘されてるさうだ、

政乃　いいえ、そんな事は貴方の僻みですわ、誰がそんな事を思ふものですか、

田原　成程、僕は時代には後れたかも分りませんね、しかしストライキでも起したら反動を殺した若い時の樣な元氣は今だつてありますよ、

藤澤　しかし今度の爭議は工場に組織が充分でなかつたので總罷業がやれなかつた點や、罷業員の結束が中途からくづれたりしたせいもあるだらう、何も我々の元氣が足りない爲ばかりじやないと思ふね、少なくとも僕は全力を注いだつもりだよ、

田原　だからいいじやないか、本野君がどんな調停をして來るか知らないが、どうせ我々の折角の苦戰もむだになるんだから、

政乃　そんなに迄仰申るんだつたら口でばかり强がらないで、少しは貴方もお金の工面でもして來たらいいじやありませんか、道子さんの御氣嫌ばかり取つてらつしやる癖に、

田原　何ですつて、

政乃　さうじやありませんか、御自分は我々の仕事に何の理解もないあんな人と一緒になりながら、人のする事には一一不平ばかり仰申つてあんまりですわ、

田原　じや貴女は左千代さんの樣に道子の着物も質にでも入れろつて仰申るんですか、折角ですが道子は着物なんか持ちません、一人の收入で三人も生活してるんですからね、第一左千代さんの樣に一人者じやありませんよ、貞操の共產が出來ませんから收入もずつとずつと少ないんです。

政乃　左千代の攻擊は止して下さい、あの人が貞操をお金にかへたからつて決して心までは賣つてませんよ、一體バーなんかの酒しや者にしてればどつちだつたつて五十步百步の違ひでせう、道子さんより、むしろ左千代の方が精神的にはどんなに潔癖で純眞だか分りませんよ、

藤澤　奧さん、貴女ももうお止しなさい、そんな個人的な事まで持ち出してたらきりがありませんよ、田原君、君ももう今度の事はすんだんだから不平なんかさらりと水に流してくれ給へ、そして善後策でもこうじ樣じやないか、どうせ少なくとも五名位の犧牲者は出るよ、

田原　――

政乃　あたしだつて何もこんな事云ひたかないけど、田原さんが自分の事は棚に上げてあんまりな事を仰申るものだからつい口に出るんですよ、

田原　奧さん、分りました、僕は今迄皆からそんなに輕蔑されてるとは知りませんでした、よく分りましたよ、此處は僕の樣な單純な感情の人間には向かない樣です、僕は今夜限り黨を脫退しませう、

政乃　まあ、そんな――

藤澤　君、何を云つてるのだ、そんなに興奮しなくてもいいじやないか、脫退の何のといふ程の事じやない筈だよ、

田原　いや、僕は脱退させてもらおう、僕の様な愛に於ても、運動の方にしても感情のいつわれない人間は駄目なんだ（腕を組んでうつむく、泣いてゐるらしい）

藤澤　さう深く考へないで思ひ直してくれ給へな、君の生一本な眞正直な事は誰だつて知つてるよ、それを輕蔑したり、惡く思つたりしてる者は決してゐないんだ、

政乃　そんなにあたしの云つた事を根にお持ちにならなくつてもいいでせう、まるであてつけてらつしやる樣だわ、

藤澤　ねえ、田原君、奥さんも心配してゐるじやないか、止し給へな、君はあんまり一づに思ひ込み過ぎるよ、

田原（うなづく）有難う、分つてるんだ、しかし僕は何だか大變考へなきやならない事がある樣だから、兎に角暫くの間でもいい引込んでみよう（立ちながら）本野君には君からさう云つといてくれ給へ、

藤澤　君、歸るのかい（立つ）しかし脱退するにしてもこんな方法では僕はいけないと思ふね、もつと穩かに話し合つて出るべきだよ、爭議の方にしたつてもう直ぐ解團式をやるんだから、それ迄でも待ち給へな、折角此處迄漕ぎつけたんじやないか、

田原　さあ、――それも止さう、僕はこんな負爭議には涙の方が先に出て困るから（奥へ退場する）

藤澤　おい、田原君――（後を逐つて奥へ入る）

政乃は考へ込んで動かない、裏から京子登場

京子　唯今、

政乃　おや早かつたのねえ、

京子　ええ、急いで歸つたのよ、爭議はもう解決しましたか、

政乃　まだなの、あちらに行つた人達がまだ歸らないから、

京子　まあさう、一體誰々行つたんですか、

政乃　罷業員の方から畑さんと高田さん、調停者として本野、それに本野の尻おしに大川さんついてつたのよ、

京子　ぢや田原さんは？

政乃　あの人は駄々こねてどうしても行かなかつたの、

京子　まあ、まだ怒つてらつしやるの。だつてやれるだけやつたんじやないの、仕方がないわ、

政乃　その上今ねえ、黨を脱退するつて歸つてしまつたのよ、

京子　まあ、困るのねえ、

奥が急に騷がしくなる

京子　歸つたらしいわ、

政乃　さうね、

奥で「横暴なる資本家め」『我々の最後のパンの一片さえもぎ取ると云ふのか」「畜生、はかられたのだ』『正義が負ける世の中だ、太陽よ、西から出ろ等といふ叫び聲がはつきり聞えて來る、政乃と京子は緊張して聞いてゐる、大川と藤澤、

悲痛な表情で奥から登場、無言で坐る）

大川（ポケットからノートを出してみる）

政乃 あまりよくなかつたんですね、

大川 ええ、どうも、

京子 みんな興奮してるわ、

藤澤 犠牲者八名つてのは一寸思ひがけなかつたらしいのだ、僕達はそれ位ありやしないかと思つてたんだがね、

京子 まあ、八人も首切られたんですか、

藤澤 ええ、

政乃 十三ヶ條の內どれどれ入れられたんですか、

大川（ノートを指しながら云ふ） 第一項の政黨及び組合加入の自由つてのは通りました、二番目の工場設備改善つてのはまあおいおいするつて云ふんです、それから最低賃銀制定、夜業料割增、解職金支給率制定、中食休憩時間の延長、婦女子の每月云々の五ヶ條は印刷同業者組合と協議の上つてのです、だからこれはまあ駄目、次の靑少年の賃銀增額と定期昇給法の件の二つは通りました、それから工場選出委員に依る交涉權容認つてのと、各部長廢止の二つはまあ研究の上つてのです、が、これも一寸駄目でせう、それから共濟組合の會社負擔つてのは會員相互に制定實施しろつて云ふんです、それと今度の問題を起した三名の馘首職工の復職は駄目、その上爭議の犠牲者五名都合八名の解職者を出したわけです、

藤澤 立派に通つたのはまあ三四ヶ條位のものだ、

大川 餘り滿足の出來る條件じやないね、

京子 だつて今度は罷業員の腰も餘りしつかりしてなかつたんだもの、仕方がないわ、

大川 犠牲者に對しては勤續年限一年に對して一週間分の解職手當と、二週間分の豫告手當を出しました、それから罷業中の費用の半分は出すさうです、

政乃 さうですかじや畑さんなんか、止めさせられたんでせう、

大川 ええ、氣の毒で何だかあちらにをれません、

藤澤 田原君じやないが負爭議つていやなものだなあ、

若い黨員奥から登場

若い黨員 大川君に藤澤君、來給へ、解團式をやるさうだから、

大川 さうかい（立つ）

藤澤（立ちながら） おい、景氣直しに勞働歌でも歌はふじやないか、

大川 うむ、よからう

三人奥へ退場、奥が一寸靜かになる、直ぐ多勢の勞働歌が聞えて來る、左千代裏から登場、

左千代 まあ、いよいよ解決したのね、

政乃 お歸り、今解團式が始つた所なのよ、

左千代（飛立つて） ああ、本當によかつたわ、

冴子　鬼に角曲りなりにしろ解決してみんな安心だわね、

左千代　こんな時俊ちやんがゐると喜ぶんだけど、

京子　なあに、あの人はあんたみたいにのぼせ者じやないから、いつもの冷たい口調で皮肉でも云ふんだわ、

左千代　さうねえ（笑ふ）

政乃　そりやさうとお別れにお茶でも入れてお菓子位出したいけれどねえ、どうかならないかしら、

左千代　あるわあるわ、さつきブルジョアの馬鹿息子からまき上げたおあしがたんとあるわ、さあ京ちやん、お菓子を山の様に澤山買つて來ようぢやないの、

京子　あら、おあし持つてるの、じや二人で買つて來よう、

政乃　まあ、そりやよかつたのね、ではあたしはお茶の用意をしようか、

　　左千代と京子勢よく出て行く、政乃は臺所に行つて茶碗等ガチヤガチヤと用意する

——溶暗——

——第三幕　第二場——

情景　第二幕の一場と同じ舞臺、前場の直ぐ後、即ち夜の一時過の事である、一方の室の蒲團に田原の母がやすんでゐる、別の室の元のまゝの赤い蒲團に俊枝がやすんでゐる、少し離れた處に田原と道子が坐つてゐる、久枝が臺所から二枚の白い皿に洗ひ立ての西洋苺を盛つて出て來る、

久枝　（一方を田原達の前におく）姉がほしいつて云つたので、晝間買つときましたの、お上りになりませんか、

道子　まあ、きれいな色、

久枝　（俊枝の枕元に坐る）姉さん、洗つて來てよ、おあがんなさい

俊枝　有難う、（起る）おいしさうだ事、

久枝　さあ、見てゐないでおあがんなさいな、

俊枝　みてる方がいいわ（ふと笑ふ）

久枝　まあ、いやだ、何がおかしいの、

俊枝　——（クスクス笑つてゐる）

道子　（田原に）ねえ貴方、いたゞかない？

田原　うむ（考へこんでゐる）

道子　あたし御馳走になるわ（食べながら新聞をのぞく）

久枝　（たべる）

俊枝　惜しいなあ、——でも食べよう（一つ二つ食べて止す）

久枝　あら、もう頂かないの、

俊枝　何だかおいしくないもの、（ふとうつむいて考へこむ）

久枝　姉さん、何を考へてるの、

俊枝　何も考へてゐない、

久枝　さう、でも變な顔してらつしやるじやないの、

俊枝　――

間

田原　ここらも夜は靜かだな、

道子　ええ（新聞から目を放さない）

俊枝（突然ころりと寢る）

久枝　兄さんは今晩遲いのね、

俊枝　兄さん？

久枝　あら、だつてさうじやないの、

俊枝　ああ、あの人の事（笑ふ）お止し、久ちやんには兄さんなんかない筈だわ、

久枝　姉さんは意地が惡いのね、まだそんな事云つて、

俊枝　だつてさうじやないの（笑ふ）

間

田原　これから一つ本でも讀んで少し勉强しようかな、

道子　それがいいわ、あたしが働いてれば何もその日に困りやしないから、

田原　僕も內職でも見つけようか、

道子　お止しなさいな、それより氣が向いたら何處かお勤めにでも出て頂戴、その方がお母さんも安心なさるわ、

田原　うむ、

道子　そりや社會運動もいいけれど一人二人の力で世の中が變るわけじやないんだもの、貴方なんか今迄緣の下の力持だつたのよ。

俊枝（突然大きな聲でいふ）道子さん、お止しなさいな、そんな常識的な言葉で田原さんの樣な勇敢な赤色テロの思想をしばる事は出來ないわ、

道子　まあ、大きな聲で、いやな俊枝さんねえ、

俊枝　田原さん、美しい妖女の魔術にかかつちや駄目よ、

田原　俊枝さん、道子はむしろ美しい人形なんですよ、そして僕は一度手に入れたその人形をもう放す事の出來ない悲しきピエロなんです、

俊枝　あら、貴方は大變詩人だわね（笑ふ）

田原（笑ふ）僕を詩人だと云つてくれるんですか、有難う、嬉しいな、今日は外の人から意久地なしと云はれたけれど、俊枝さんのその一言で何だか救はれた樣な氣持だ、さう云へば俊枝さんと僕とは物事に中途半ぱな事の出來ない所が似てる樣だな、

道子　何を云つてらつしやるのよ、貴方、まだやすまないの、

田原　まだいいじやないか、僕は今夜は厚い白粉を洗ひ落してすつかり素顏になつた樣な輕い氣持なんだ、

道子　まあ、女みたいな事を云つて（笑ふ）どれ、着物でも着變へよう（立つて不斷着と着變へ初める）

表戶を開けて藤澤登場

藤澤　やあ、みんなまだ起きてるね、

田原　うむ、まだ――

久枝　お歸り遊ばせ

俊枝　（床の上に起きる）お歸んなさい、爭議が解決したんですつてね、

藤澤　漸くすんだ、どう、今日は氣分はよかつた？

俊枝　あたし何ともありやしないわ、

藤澤　食べ物はいけたの？

俊枝――（よそを見て呟く）兄さんだつてさ　低く笑ふ）

久枝　今日はパン等少しは頂けました、

藤澤　さう、そりやよかつたね、

道子は抜いだ着物を母のやすんでゐる室のあいた場所で疊み初める、藤澤は田原の近くに坐つてポケットから煙草を出す）

藤澤　マッチはないかな、（邊りを見廻す）

久枝　此處にあります（渡す）

藤澤　有難う（煙草をのむ）ああ、うまい、――今日は忙しくつて煙草もろくにのめなかつた、

田原　解團式はすんだのかい

藤澤　うむ、すんだ――ああ、隨分つかれた、何だか肩の荷が下りた樣だ、

俊枝　（よその方をみながら）家が靜かになつてみんな安心したでせうね、

藤澤　さうさう、京ちやんが來るつて云つてたけど今夜は遲いから止しにしたよ、それから今夜みんなと相談したんだが、君がそんなに國に歸るのがいやなら、歸さない方がいいだらうといふ事だ、

俊枝　分つてるわ、あんたが一人で歸れ歸れいふので、あたしは始めつから歸らないと云つてるじやないの、

藤澤　そりやさうだが、兎に角養生も出來る丈はさせる事にして、

俊枝　いえねえ、養生養生つて、あたしはそんなにひどい病人じやないのよ、

藤澤　よしよし――それから久枝さんは明日は歸つて頂かうじやないか、

俊枝　ええ、それがいいわ

藤澤　久枝さんの樣な箱入娘は早く歸さないと、又君の樣に赤くなつたらお父さんがどんなに怒るか分らないから、

久枝　あら、

藤澤　じやそんな風ですからどうぞ明日、――

久枝　ええ

藤澤　色々御心配かけましたね、

久枝　いいえ、貴方こそ、こんな病人を、――本當にすみませんわ、

藤澤　お父さん方によろしく傳へて下さい

久枝　どうか、どうか姉をよろしくお願ひしますわ（泣く）

俊枝（笑ふ）ませた子だねえ

藤澤　明日は僕等も黨へ歸らうかな、

俊枝　まあ、うれしいわ、あたし、もう二三日も休んだら又働きませうね、

まだいいさ、

俊枝　よかないわ、あたし休んでゐるとやつぱり働きたいのよ、（笑ふ）考へただけでもバーのジヤズが聞えて來る樣だわ、

藤澤（田原に）ねえ田原君、君はやつぱり黨を脱退するのかい、

田原　さうしよう、一度かうと思つたらよせないのが僕の悪い癖だがね、

藤澤　さうかなあ、――惜しいねえ、――僕は今度の事は君と支部長との意志の疏通から來た事だから、もつと突込んでみれば奥には何もないと思ふがねえ、

田原　さうか分らない、しかし考へてみれば僕は幾分か自分で者を僞つてた樣だ、僕、やつぱり、今は刑務所に入る前よりずつとずつと臆病になつてる樣だ、六年間の暗い所の生活は何時の間にか僕の體のみか、心までむしばんでゐたのだ、だのに僕は昔のまゝの赤色テロの假面を着やう着やうと無意識にあせつてたのだ、――僕は決して本野君の奥さんの言葉を怒つてはゐない、しかし僕の此の頃の變化は理解のない道子のせいのみではないと思ふ、奥さんにこの事は傳へてくれ給へ、

藤澤　うむ、しかし全然黨をのかなくつても、

田原　のかなくつてもすむだらう、しかしそれでは僕の心がすまないのだ、僕が何かを見出す迄はどうか脱退させてくれ給へ、

藤澤　さうかなあ、

田原　これから少し勉强したいと思ふのだ、今迄貧しさとあわたゞしさの爲に餘り本を讀まなかつたのがいけなかつたらしい、僕は勉强の事には氣がつかないであせつたのだ、刑務所から出て來ると後輩だつた本野君が支部長になつたりしてるのでね、

藤澤　支部長もそれを云つてゐた、

田原　さうか――しかし藤澤君、黨をのいたつて私としては今後もつきあつてくれ給へね、

藤澤　それはこちらからお願ひする事だ、――そりやさうと今度は俊枝が色々御世話になつたね、

田原　いや、決して、

藤澤　明日は黨へつれて歸らうと思ふ、

田原　さうか。いい人だ、大事にしてやり給へ、

藤澤　有難う、

今迄の間に久枝はいやがる俊枝に藥をのませて、横にさしたり等する、道子は着物を疊みおへて卅の蒲團の横に蒲團をのべたりする、靜かなしみじみした氣分の内に暗くなる

一九三〇、

女人藝術講演會・聯盟・記錄



女人藝術名古屋講演會記

矢田津世子

一九三〇年一月二十九日。期待と希望と歡喜の三重奏の裡に愈々講演會の時間は切迫してくる。開場六時といふに、もう四時半から會場新守座の前には二三十人の若い方達が詰めかけてゐられるとの主催側の名古屋毎日新聞記者の傳言。すばらしいわね。と聯盟の藤原さんと手を握りあふ。東京からの諸先輩の先頭に立つて、滅多に出られた事のない長谷川先生がお出でになるといふので、私達の意氣はツエッペリン伯號のやうに事實すばらしい。開會十分前に始めて長谷川先生と今日の挨拶をかわし、豫想外の御元氣さと活氣に先づ安堵する。絶えず洩れる皆さんの口からの行進曲を、私達も口ずさんでゐると不思議に昨日からの疲勞が消えてゆく。開會前の舞臺裏を、力强い行進曲の音譜がまづ飛び歩く、

懸念してゐた松村氏も見えられて、織本、中島、上田諸氏の他に、林芙美子氏、小池みどり氏の來名された事は一同を歡喜で窒息させてしまふ。こんなに先生を始め皆さんの揃つたことは珍しい事だ。私達と同樣に聽衆もきつと喜んでゐる事と思ふ。六時が打つた。定刻より二十分おくれて主催側の新聞社から記者が立つてこの講演會の挨拶を述べる。滿場靜肅。私はこの機會に舞臺横から今日の聽衆を見渡した。文字通りの立錐の余地なき有樣で、點々と見える正服警官のいかつい顔も、今日の講演會の緊張さを裏付けてゐる。席をしめてゐる八分通りの若い婦人。その人達の熱烈な知識慾は、一勢に舞臺へ注がれてゐるその輝やく幾萬の瞳を見ても解る。名古屋の若い女性達は、今吸取紙のやうに知識を吸收したがつてゐる。何かいいものを、その頭腦へ沁みこませたがつてゐる。プチブル、インテリゲンツイアの比較的に多い此處では、そうした生活で跪いてゐる婦人達のためにも、今日のこの講演會は何物かを彼等に暗示するであらう。「私達へ敎しへて下さい。私達の行く道を……」若い婦人達の輝やく瞳はそれを要求してゐるのではないか。この若い女性達に混ぢつて老人達の尠くなかつた事も異例だ。皺を延ばして、耳を傾けてゐるこの人達の勇氣と熱心さを立派なものだと感心する。八高生の破帽も五六見え、その他男子は會社員型が多かつた。文化的水準を最も多く獲得してゐると任じてゐる彼等インンテリゲンツイアも、現今は苦惱が多い。彼等のその苦惱をこの講演會が幾分でも解快するものと信ずる私は、又、彼等の熱心な耳を愛する。場内の雰圍氣が一樣に緊張した生眞面目なものであるのは何よりも私達を感激させる。この感激が高潮して、「皆さん有り難う。」と大きく叫び度い位。昨日からの眠らない眼に泪を沁ませて藤原さんと微笑しあふ。主催

側の挨拶が終ると、今回の講演會のトップをきつて、まづ小池みどり氏が初登壇。紹介の勞は、市川房枝氏の御令姪、女子タイピストリーグの幹事の堀場氏が進んで引き受けて下すつた事は感謝に絶えない。五尺豐かの體軀と、自稱二十三貫の堂々たる風貌？（といつて、これはいい意味の……）の小池氏現はれるや、場内の空氣は、聽衆の拍手で醉ふ、氏は、齒切れのいい明快な口調で、女人藝術社同人の名古屋來について感想を述べ、次に全女性進出行進曲が一般女性に理解され、歌はるべきである事を叫び降壇するや、再び堂をゆるがす拍子。紅潮した頬を、それでも重荷を下した氣樂さで、舞臺裏へ來られた小池氏の口からは直ぐに行進曲が洩れる。次が私。前以つて先生からの御依頼もあつた事とて、それに今亦お勸めも受けて、何の腹案とてなく、女人藝術のために躍然と、尖端人的勇氣を以つて登壇した。處女講演なので、低聲な故か野次が飛んでくる。「聞えない。聞えない。の聲が私の頬に、頻にぶつかつてくる。「だから今風邪で喉を痛めてる、つて云つてるんです」持ち前の癇癪玉を破裂させて、私は小供つぽく赤くなる。ともかく無難で「健康な大衆文學へ」について約十分程話して降壇。デリケートな言葉の使ひ分けで一苦勞して肩が張つた。次が松村喬子氏。緊張した心から皮膚が稍々青ざめて、登壇されるや、萬場は暫時拍手の鳴りも止まず。やがて靜まるを待つて氏のよく透る聲は場内に反響する。氏にとつては、正に苦難の地であつた名古屋、その名古屋に於て講演するのは涙ぐましいものがある事を推察して同様に胸が迫る。氏の唇が、熱と感激で打ち震ひ、聽衆亦これと同化して白熱に這入るや、突如臨官席より注意あつて、降壇さるや、場内の空氣險惡となり、續けて話される事を口々に絶叫したが、これに代つて上田文子氏直ちに登壇。場内の空氣は元の靜粛に返つた。「新劇の展望」の題下に約三十分に渡つて詳細に過去の新劇界について語り、今後の希望を述べて大喝采裡に終り、續いて中島幸子氏「轉形期の婦人を語る」は、氏の頭腦の明晰から巧妙な語句の使用法で別に臨官席の眼も光らず、聽衆は滿足して傾聽出來た。次の林芙美子氏の出現は、縮みすぎた場内のアトモスフエアを弛めるに大いに役立つた。濶達な氏の辯舌は、ウヰットを混ぢえて大いに場内を笑はせ、感銘させ、プロレタリアのためにも詩は當然あつて然る可きものと萬丈の氣焔をあげ、三篇の詩を朗讀して降壇。氏の去つた後に猶も、縺れ合つた笑ひが場内に漂ひ、次の特別出演松坂屋オーケストラの「東洋の女王」の演奏が始まる迄は、この愉快な笑ひが消失しそうにもなかつた。

少憩の間、ともかく難なく終つた第一部の講演を、長谷川先生は絶えず歡びの微笑で表現してゐられる。皆さんの口からも、知らずに行進曲が歡喜の表現として口ずさまれる。時間の切迫。そら第二部。快い音樂で聽衆は和やかな氣分になつてる。今、第二部のベルが鳴ると、軀を洗つて淸め、朝の神棚へ柏手を打つ前のあの嚴粛さで、場内はひとしく織本氏の登壇を待ち望む。私はこれだけの熱誠のこもつた大衆の眼を見た事がない。貪り取る様に傾聽するその欲つた多くの耳を記憶してはゐない。東京府下龜戸町で勞働女塾を經營してゐられる氏は、近くの女工の生活狀態から資本家の搾取を統計的に述べ、それにまつわる無産階級の悲慘な狀態を詳らかに說明し、婦人の政治的獲得の必然性を强硬に主張するや、臨官席より注意あり、それに屈せず更に話題を、現今の勞農ロシヤの一週五日制七時間勞働から、ロシヤの力學的な勞働方針に迄語られた時、遂に「中止」の傳令があつて降壇される。昂奮し、同化し熱狂してゐた萬場は、この時總立ちとなつて、當局の横暴を鳴らし、口々に不平を訴え、ために場内の正服私服の多數の警官は、これの靜止に大童の活動振りを發揮した。この騷擾裡に長谷川先生登壇。紹介するや、流石の場内も嵐の後の靜けさに迄沈默し一同傾聽。楚々とした先

生の痩軀から迸り出る玲瓏たる一句一言を、聽衆は熱意を以つて聞きとれる。登壇一番の先生獨特の巧妙な野次封じ「名古屋の皆様は大變お靜かでうれしい」で萬場微苦笑、時々飛び出す質問的單語にも一々應酬され、女人藝術の立場について滑達な言辭を述べられ「今や一般女性は團結して正しき道に進む可きであり、舊來のすべてを淸算すべき立場におかれてゐる」意味の言葉を最後として結ばれる。私は、この先生の最後の言葉が、聽衆、殊に今日の大半の若き女性に何かの暗示を與えた事を、彼等の動搖から、溜息から、抵い囁きから感知する事が出來た。先生の降壇されるや場内をゆるがす大喝采起り、續いて百二十餘名の名古屋市女子タイピストリーグの方達の大コーラス團の熱誠な出演によつて、松坂屋オーケストラの伴奏、早川彌左衞門氏指揮で全女性進出行進曲が合唱された。

先生を始め、織本氏中島氏、小池氏も加はり、わざ〳〵豐橋からいらした聯盟の内山金子氏や聯盟員の大林ゆき子氏も泣んで、肚の底からの溢れ出るすさまじい意氣で、高らかに私達全女性のための行進曲を歌つた。「さあ、私達は手を握りあつて進まう。足並を揃えて進まう。」歌ひ終つた後で私達は、かうした感激を味はつた。しみ〴〵と込み上げてくる歡びだつた。聽衆の中でも五六人が私達の歌に合はせて歌つてゐたとか、理由なくうれしかつた。名古屋に於ける盛況だつた講演會、私達は、東京からお出で下すつた長谷川先生を始め、諸氏の熱誠な親愛のこもつた講演が名古屋の一般女性の心に何ものかを與えた事を、その頭腦に何ものかを植えつけた事を、確信してゐる。彼女達が、その與えられたもの、植ゑつけられたものについて深く思索し、熟考する時、私達は、只それだけでも、大きな希望を未來にかける事が出來る。私達はその日の來るのを双手を上げて祝福しやう。

附記

萩岡氏生憎病床にあつて出られず、充分の奔走出來なかつた事をお詫びいたします。

宮崎支部新年會報告

原田公恵

大變御報告がおくれたのですが實は徹々たる會でも御座ゐましたし見合せてゐたのでござゐますが何かの御參考までにもと御送りいたします。

會の前後對入の新聞(宮崎時事新聞)紙上で再三叩きつけられ恰かも思想的に何物かを計畫するかの如く書き立てられ各々迷惑しました。一記者等は共產黨と聯絡ありなど御丁寧にも裁判所特高課あたりまで注意して廻る等むしろ滑稽でした。しかし私達は會場の都合等で一時中止のやむなきに至らうとしましたけれどそんなにまで云はれてゐる以上、どうしてもと、とも角も豫定通り開會したわけでした、會員を限り



宮崎支部の諸氏

ましたのは、適當な會場なきためでした、その上縣民全體の人口に於て東京市の人口にも及ばぬ當地に於ての事です御推察願ひ上げます、會員券百八十枚ほど出しまして、入場者百四十名位でしたまづ最初のものとして好成績でござゐました。二月頃都城、正岡方面に會員倍加の進出を試みるつもりです、(準備中)尚特高課では反って遠慮して當夜額もみせませんでした、尖端を行く新聞記者にも田舍となれば哀むべき米がゐます。

プログラム

開會の挨拶　松葉萬龜子
不良に對する一私見　德丸ヒデ子
英詩朗詠　林　ふみ子
フエミニズムに就て　東　ひさ子
脚本朗讀　石黑さと子
女性のために　原田　公惠
短歌朗詠　德丸ヒデ子
所謂モダンガールを殴す　林　ふみ子
或る話　石黑さと子
短歌朗詠　原田　公惠
閉會の挨拶　伊藤　泰子

尚支部準備會では一月三日夜私方で心ばかりの新年會を開き大に賑ひました、そしていよいよ第三土曜日から集つて研究する事になりました、くだらない事ですけど當夜餘興の福引で面白いのを一二御知らせします、近代レビュー大福引と云ふのです。

一、コロンタイ女史の力作――赤い戀（赤紙鯉）
一、五十七議會に於ける無産代議士の質問――赤端火を吐く（燐寸）
一、堺眞柄氏の社會主義は―親代々―（橙）
一、全女性進出行進曲――レコードとなり破れる盛況（破れレコード）
一、久米正雄氏發奮の動機――筆子から（筆）
一、勞資協調の要諦――互に持ちつ持たれつ（餅）

當夜の御馳走が戰鬪準備（握り飯）、壓迫（奈良漬）生めよふえよ（數の子）甘露（おしるこ）等々で大笑ひでした。

尚支部準備會同人元氣で今年こそは早々と支部にさせねばと意氣熾なるものがあります支部準備會を聲明してより各所より聲援非難の中に兎も角も一同の意志固く本年より計畫を着々と進むべく協議中です。

何しろ半分は職業を持つ人達の事とて甲が休みの日は乙が勤務ありと云ふ風で、中々集りも思ふ樣に行かぬ事がありますが皆つとめて研究に精進してゐます、一月二月中は、政治問題方面に力を入れる事になつてゐます。みんなのために、女人講座の樣なもの一週間位、開催したく相當の講師を物色中です。

女人聯盟德島支部發會の記

藍谷絢子

一月二十八日臺灣旅行からの歸途、生田花世女史が郷里である此の德島に歸省せられました。延び〱になつてゐました女人聯盟德島支部準備會では、是を機會として發會式を擧行すべく、その打ち合せの爲、一月三十日德島縣板野郡松島村泉谷の山鄕に生田女史を訪問致しました。

打ち合せの結果、二月二日午後一時より、德島尋常高等小學校の講堂で、女人聯盟支部發會式文藝講演會を開催する事にしました。

其處で早速、德島毎日新聞社に電話をかけ、女人聯盟員である坂口シオリさんに新聞宣傳をお願ひしてから、聯盟員を動員してビラ、ポスターに女人聯盟支部發會講演會の宣傳をして頂きました。皆興奮して、からだを粉だらけにして働いて與れました。



二月一日夜德島日々新報主催生田花世女史
德島聯盟員諸氏

文藝思想大講演會がありました。

其の夜、女人藝術を赤い雜誌と思つてゐた警察では數名の臨官が物々しく監視してゐましたが、生田女史の講演を聞いて安心したものか翌日の支部發會式には一名の臨監もなく和やかに發會式を擧げる事が出來ました。

二日午後一時會場にはぎつしり聽衆がつめかけ前夜に倍する程の人でした。「文藝上の另女の位置」と云ふ題で生田女史の熱辯は微に細にわたつて一人〳〵の聽衆にどれだけの感銘をあたへたか想像以上で御座います。

かくして盛會裡に無事德島女人聯盟支部發會式を擧行する事が出來ました。

發會式後四時より、德島市公園內太陽軒にて生田女史を中心に座談會を催しました。會するもの十五名、自己紹介の濟んだ後、面白い質問が生田女史に飛ぶ。しばらくして生田女史の恩師德島高等女學校の先生方が御見へになり話は益々はずんで來ます。

生田女史の學生時代體操の時間に一番ビリで四人一組でダンス等する場合二人か三人後の方に殘るのでダンスが出來なくて口惜しかつたと想出話が出ます。

又女人藝術創立時代の話、長谷川時雨氏が最近は着物一枚作る事なく女人藝術の爲につくされてゐる事、雜誌が賣れた時五十錢銀貨を手の中に入れてふりまはして喜んだ話、等々、お腹をかゝへて、一同は笑ふのです。

新らして愉快に一日をすごし夕闇の濃くなる頃、生田女史に短册や色紙に臺灣土產の揮毫をして頂き寄書きをして散會致しました。

女人聯盟德島支部も無事に生れました。今後は支部を如何に發育させるか、丈夫な子供は丈夫に肥るでせう。

支部例會記（一月）

綠川靜枝

一月二十八日午後七時から、大阪支部第二回の例會が北濱四丁目櫻根病院四階に於て開かれることに決つた。生憎午後になつてから降り出した雨の中を私は子供を主人の實家へ預ける爲めに五時頃家を出た。實家へつくとこの日は少し早めに行つてお手傳ひをしませうと云つてをられた大澤さんの許へ電話をかけて、お茶とストーブの用意を賴み、すぐ伶

人町の大原社會問題研究所へ森戸先生をお迎へに行つた。ベルを押すといつもの受付の學生が出てきたので刺を通じると、やがて先生が出てこられて來客中だから暫らく待つて下さいと云ふ選擧には入つてからは先生の身邊は殊にお忙しそうに見受けられた。

　私は時間もまだ早かつたので應接室で落着いてゐた。やがて先生がオーバーを着けてこられたので一足先に出てタキシーを呼んだ。

　車中で先生は今夜九時から又芦屋の方へ演說に行くのだと仰有つた。私は二三日前に大每主催で中央公會堂にあつた先生の講演會に急用が出來て行けなかつたことを思出しながら、こんなにお忙しい中を私共の爲めに時間をさいて快よく來て下さる御好意に深く恐縮してしまつた。

　二十分後今夜の會場である櫻根病院につく。中へ入ると年寄りの受付が出てきて會の方は下駄をお持ち下さいと云ふ。廊下を出て階段の突きあたりの所に筵が敷かれて、その上に澤山の靴や下駄が並んでゐた。實は七時から始まるところを、その時間きつかりに皆さんがお集り下さらなかつた時は先生には不愉快な思ひをおさせする懸念から、皆さんには三十分早く、六時半に開會のお通知を出してをいた。私は履物を眺めて安心した。

　エレベーターがないので先生と私はぐるぐると階段を四階まで昇つて行つた。昇りながらこの三階までは病室なので會場を借りる約束をした時に、絕對に樂器や高聲を斷はられたことをお話しする。四階につくといつもの顔ぶれの他に五六人の新しい方々がおられて隨所に談話の花を咲かせて居られた。

　私は先生をストーブの所へ御案內して、お茶の用意が出來るまでお待ちを願つた。すると女學校の先生をして居られると云ふ岩崎さんが側へ寄つてこられて、私の主人は一高時代に先生とは一緒でしたと仰有られる。

　五六人の方々とお茶の用意に階下へ降りた。降りて見ると內々探してゐた幹事の菅さんや大澤さん安宅さん等が、氣を利かしてお菓子まで買つてすでに用意が出來てゐた。

　それをみんなで四階に運ぶ、その間に大澤さんが先生に少しもお禮が出來ないのだからせめて蘆屋までの自動車をとその方の交渉をして下さる。暫らくして歸つてこられて手と頭を振りながら駄目だと云ふ表情をされる、九圓でなげれば行かないとのこと、三四圓位だつたら皆さんと分擔してと思つてゐたのだが、九圓と聞いてはさすがにどうすることも出來ず斷念してしまつた。

　お茶が出來てみんなが席につかれると、簡單な挨拶の後、先生のお話をおききした。

　お話は至極平易に先づ社會の構成から始つて、ＡＢＣ的に諄々と說かれて現代社會に及び、現社會の缺陷を暗示的に指摘された。

　一時間後先生のお話が終ると、二十分間の質問討議に移つた。森川さんが皮切りに改造に載つてあつたと云ふ何かを引つぱり出して先生の御意見は如何ですかと質問に及ぶ。次には永瀨さんが隅つこの方からひくい聲で長々と質問されるに對し、竹內さんが大きな聲で共產黨事件の人達にはどうしてあのやうな重い刑罰を與へなければならないのでせうかと質問される。

　先生は私達のどんな突飛な質問にもいちいち叮寧に說明され、御意見を述べて下さつた。

　九時近く最後の質問が終ると、私達は先生を玄關までお送りする。タキシーを呼び止めて阪神まで驅けつけてもらふ。

　四階に引返した時は九時を廻つてゐた。この病院は九時に門を閉めることになつてゐるので、時間があつたら最後に大田さんや竹內さんの二月號の作品の批評をするつもりでゐたが、出來なくて殘念だつた。

　皆さんから今夜の費用の割當てを受取る。

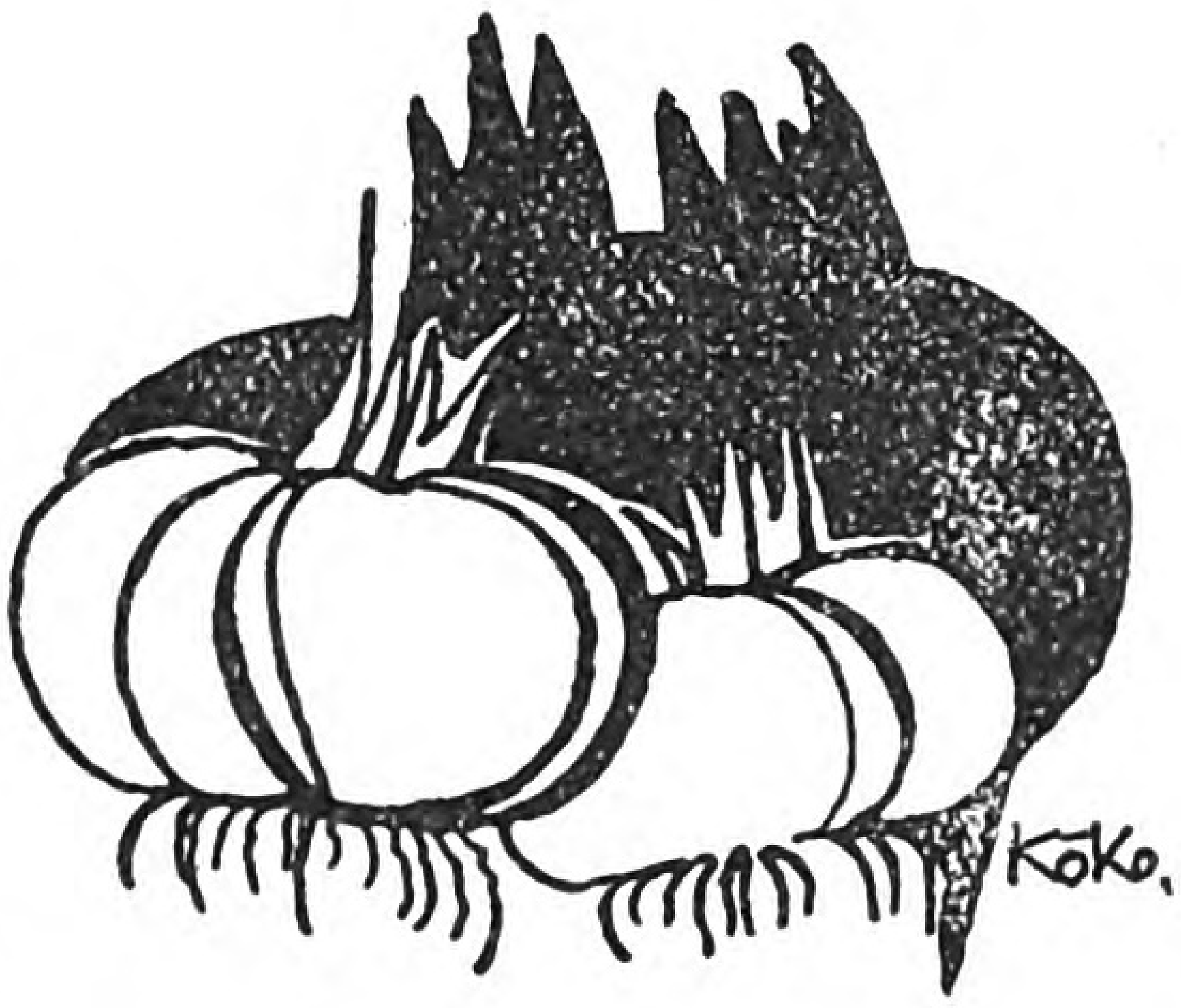
　私達は御厚意で會場を提供して下ずつた櫻根夫人に厚くお禮を云つて表に出た。

　ほそぼそと雨が降つて堂ビルの灯が、都會の哀愁を中天に明滅してゐた。

　九時半の雨の北濱の風景——（一月三十日）

社會時評

永島暢子



總選擧を前にして

第五十七議會が解散された。今や總選擧戰の眞最中である。何故に議會が解散されたか？また何故に民衆は議會の解散を要求したか？

眞にこの議會の解散を要求したのは、ひとり無產階級のみであつた。民政、政友を代辯者とする支配階級は、出來るならば解散を避けたかつたのだ。しかし少數黨である民政黨であつて見れば、政策遂行のためと、所謂ブルジョア的憲政の常道から一應内閣の信用を民衆に問ふといふ形式にしばられてゐる。彼等は、泣き顏を笑ひにかくして、解散の悲喜劇的場面を演出したのはその爲である。だが無產階級は、議會の解散を要求したのは、さうした一片の形式やカラクリからではない。たゞに自分達の利益を獲得し、生活の安定をはかりたいが爲にあつたのだ。社會民衆黨から、勞農黨に至るまでの無產黨が、無產階級の利益を代表する如き口吻を以て、大衆の支持を得やうとしてゐるのも、大衆の要求がそこにあつたからだ。果して現在の既成無產黨が、眞實に勞働者農民無產階級の利益を代表して戰ひ得るものだらうか？

私達は、總選擧に際して、まづ現制度下に於ける社會の本質をはつきりと認識してかゝらねばならない。議會は民衆の意志を反映せしめる場所だと彼等はいふ。選ばれたる代議士は、民衆の代表者であり、民衆自身の生活を討議するのだといふ。支配階級の僞瞞はこゝからも見られる。吾々が吾々の代表を擁立するには、二千圓の供託金を必要とする。そして選擧權を得るまでには、滿二十五歳まで待たなければならないし、一ヶ年以上定住せねば、幾歳になつても、その權利はないのだ。

首の不安定な勞働者は、また住處も不安定である。年齡居住權、供託金制度は、要するに無產階級に對して權利を事實上剝奪し、支配階級に都合のよい議會を構成しやうが爲である。だから彼等は、民意を表示せよ、と尤もらしく宣傳しながら、勞働者農民の正しき要求を掲げれば、すぐ彈壓だ。凡そ其階級の利害は、その階級に屬

する人はよく知つてゐる。勞働者農民の利益を代表し得る者は、勞働者農民以外にはあり得ない。だが、勞働者農民の利益を戰ひ得る革命的代表者に對しては、支配階級は一切のものをあげて阻止しやうとしてゐるではないか。

昨第五十六議會に於て、本會議に無產黨の立場から、比較的ブルヂョアの牙城を衝いたのが、淺原健三氏であつた。けれどその鬪爭的口吻とゼスチュアを除いては、實際にブルヂョア的な官憲横暴の批難であつた。だから彼等は、ちつとも恐くないのである。何にでも應用のきく、「それは見解の相違」といふ奥の手を使へば、それつきりである。民衆に議會幻影を與へて當選第一主義で乘り込んで行つた代議士の、民衆の要求を民衆の中に持ち込む事を知らず、單に議會の壇上に於ける質問で萬事終れりとする限りに於ては、再び返す言葉もない筈だ。その淺原氏の言論さへが、議會政治をみだるものとして、問題視されたのだ。議會內に於ては、言論の自由があると思つたら間違ひである。言論の自由といふも、支配階級を支持する限りに於ての自由であり、飽まで被支配階級の意志を代表して鬪ふならば山本宣治氏の如く××に倒れる事を覺悟せねばならぬ。その上に、衆議院を押へつけるものに、貴族院があり、更に樞密院がある。議會に於て、よしどんなに多數を以て決議されやうとも、貴族院で通るとは限らないし、樞密院までもお伺ひを立てねばならぬ。物事によつては、樞密院で決議されたものを、事々しく議會にかけて協賛を得る、などいふ奇現象を平氣でしてゐるのが、日本の議會政治である。どこに民衆の意志の反映があり、民衆の要求を討議する所だといふ事が出來るか。國家機構そのものが、階級的構成を土臺とし、被支配階級の搾取の上に成り立つてゐるからには、決して被支配階級の、眞實の要求を貫徹し得るものではない。階級なき社會に於て初めて貫徹し得るものである故に、被支配階級は、まづ階級鬪爭を第一義と爲すべきである。

然るに、社會民衆黨から、勞農黨に至るまでの無產黨のスローガンは、飽までも改良的である。勞働者農民が、支配階級に對して、一の改良を乞ふ事は、それだけ搾取を一層合理化する樣自ら願ふ事になる。また漠然たる要求は、單に要求の自慰的行爲にすぎない。例へば勞農黨の金看板は、政治的自由の獲得である。一體政治的自由とは何か？ブルヂョアデモクラシーの事か？徹底的にプロレタリアートの政治的自由は、勞働者農民の政府××を戰ひとらざる限りに於ては、倒底實現され得べきものではない。故に吾々は「政治的自由獲得」を揭げるよりも、まづ最も直接的なるもの、治安維持法その他一切の暴壓諸法令の撤廢を要求し、プロレタリヤ黨の活動の自由を獲得せねばならぬ。そのためには、××戰線の城寨たる勞働組合を强立化し、農民組合を組織し勞働者の指導權を持つ所の勞農協議會を確立して戰ふ事を必要とする。それを避け、「政治的自由獲得」のボヤケた看板を出すのは、彈壓が恐いからであり、彈壓がひどくては、當選は覺束ないので、いゝ加減のところで胡麻を摺らうとしてゐるのである。これが改良主義、民主々義でなくてなんであるか？殊にこのスローガンが、プロレタリヤ黨と、協同戰線黨との定まらざる指導下にあつた當時の勞働農民黨のそれであり、既に意義なきものとして捨てられたものではないか。いかに緊縮內閣に御用振りを發揮するとは言へ、スローガンの廢物利用は、最も唾棄に値するものだ。

また勞農黨にして、多少なりとも、勞農階級のために戰ふもので

あるならば、何故再び香川の地にて吊合戰をなし、壞滅されたる農民組合の再建の爲に力を盡さなかつたか？勞働者農民の利益は、現在の議會に一名の代議士を送るよりも、その選擧戰を通じて、城塞を築く事を要する。それを東京五區に鞍代へし、散票によつてゞも、當選を得やうとするのは、議會主義者と見られても仕方がないであらう。宜なるかな、勞農黨は、左翼彈壓下に急據名乘りをあげ、アゴヒモをピケに頼んで創立された政黨であり、關東金屬の某支部が、檢束拘留によつて鬪爭上非常の苦しみにあつた時、すきをねらつてデマゴーグをとばし、勞働者をおぢけさせて組合乘つ取り策を講じた事實さへある。我獨り無產黨なりとほこる勞農黨はこれである。「優秀な無產者の子弟に、國家で高等教育をうけさせよ」「產見制限を設けよ」と、社會政策的要求でお茶をにごす社民黨や、「賄賂政治の撲滅」など、ブルヂョア政黨並の要求に、鬪爭的衣をきせて見榮を切る日本大衆黨は問題ではない。

また人達はいふ。「何故無產黨は合同しないか。選擧協定をして一人でも多く代議士を議會に送らないか。」と。無產黨が、似たりよつたりのスローガンを掲げて合同も選擧協定も出來ないのは、理由が判然としてゐる。即ち「自分の地位を確定したい」といふ事で足りる。水谷長三郎氏が恩師河上肇氏に地盤をゆづるために、立候補を斷念するといふ、悲壯？な聲名書を出すか出さぬうちに、既にまた選擧戰に打つて出てゐる。賀川豐彦氏は日本大衆黨の顧問である。日頃思想的立場を異にすると稱してゐる社民黨が、その大衆黨の顧問である氏を公認として擁立した。賀川氏は、一身上の都合から、承諾しないのだが、それでも社民黨は戰ふ意氣込みなさうだ。曾て馬島僩氏が、舊勞働農民黨から、市議戰に打つて出やう腹であつたのが、黨では革命的勞働者を立たしむる方針から否決になつたので、爾後社民黨に鞍替へたといふ事である。卽ち社會民主々義者等は、階級的利害の爲めに鬪ふのではなく、ブルヂョアとの取引きを有利にしやうが爲である故に、何處から、どういふ風にして出やうとも、當選しさへすればよいのである。

だが、現制度下に於て、殆ど飢餓線上に追ひやられ、搾取の下に呻吟するが、××なき社會を建設する歷史的使命を持つ勞働者農民は、かゝる選擧鬪爭に斷じて參加すべきではないのだ。勞働者農民が議會に代表を送るのは、議會內より、ブルヂョアジーの機構を暴露し、民衆の持つ議會的幻影をぶちこはし、解放戰線に備へる爲めであつて、改良的施設を歎願するためではない。だから勞働者農民は飽までも、自身の階級の要求を掲げて徹底的に鬪ひ得る、××的勞働者を議會に送らねばならない事が當然である。

有り難い工場法

少年並に婦人勞働者の深夜業禁止が、問題になつてから三十五年以上の年月を經、工場法が制定されて、その禁止が條文となつて發布されてから、尙十七年の月日を經て漸く實行された。急激の禁止は、主として紡績產業に影響を及ぼし、財界に不況を來す恐れがあるからといふのが彼等支配階級の口實であつた。そして禁止期が近づく頃には、そろ〳〵操業短縮の徵候が表はれて來てゐた。何の苦もなく深夜業が禁止された筈である。けれど工場法第四條の附則は依然としてそのまゝであつて問題にすらもしなかつたのだ。工場法第四條の條文は「工業主は、十六歲未滿の者、及女子をして午後十時より午前五時に至る間に於て就業せしむる事を得ず」である。だ

が例の如く、資本家の御機嫌を宜しく取つて「但し行政官廳の許可を受けたる時は、午後十一時まで、就業せしむる事を得」と抜道を作つてくれてゐる。この附則さへも、生産額に急激な變化を來さないが爲といつてゐるのである。けれど昨今の紡績産業の生産過剰は、非常に價格の低落を導いて來た。彼等紡績工業者は、價格吊り揚げに狂奔してゐる。そして第一の手段として用ひられたのが、操短である。しかも彼等資本家は、一割七分の操短を決議するまでには、どんなカケヒキをしたか？

生産過剰を緩和するには、まづ工場法附則を禁止し、第七條の休日日數をもつと増加すべきであつた。勞働時間の短縮も出來るし、休み時間をたつぷりと施行してい丶筈である。勿論資本家は、そんな事を考へて見やうともしなかつた。ばかりか、依然として條文はそのま丶において操短をすべく、社會局との取り引きを、うまくやつてのけたのである。勞賃を少くして勞働者を苦しめ、失業者を街に溢れさせたつて、儲けさへ得ればよいのだ。いかにすれば、ポッポが溫くなるか、の胸算用でいつぱいなのだ。何かと言へば、法律に照したがるのが日本である。無産階級に對しては、法律の條文をピシ／＼と當てはめやうとする。寢込みを襲つて、自宅から引つぱつて行つた斗士をして、警察犯處罰例第一條第三項に當てはめて、二十九日の拘留を食はしたり、治安維持法に事實ふれなくとも、支配階級の爲にならぬ、と思へば、罪にする位朝飯前の仕事だ。だが、資本家に對しては、なんて寛大な事であらう。この生産過剰の場合條文が明に物言ふならば、誰がなんといはふとも、第四條の附則を廢止すべきではないか。如何に彼等が、一度附則を取り消されたなら、再び事業擴張の折に許可はむづかしいからとて泣きついても、それをはねかへすべきではないか。それを仲よく妥協して、法文をそのま丶にして操短を實施したのを見ても、如何に、政府に、資本家、地主の手先きであるかといふ事がわかるであらう。

この事實のみではない。工場法は實に一の空文にすぎないのだ。

全國の製糸業者が、糸價暴落を口實として工場の七八割までが、賃銀不拂にあるといふ事實がある。工場法施行令第三章第二十二條に於て、「職工に給與する賃銀は、通貨を以て之を支拂ふべし」と規定してある。が事實製糸工場のすべてが、女工が浪費するからとか、國元の親の生活を補助する爲とか、御切介千萬の口實を以て保管し、年二回位に支拂ひ、實に自身の工場の運轉資本に流用したり利子をくすねたりしてゐるのだ。それはたゞに工場主が爲すばかりでなく、官廳の默認の下にあり、官廳自身、資本家の利益を助力せんが爲に、法文にそむいてゐるのだ。儲け得る限りに於ては女工の賃銀からでも血の様な利潤をすゝりながら、さて經營困難となれば、その血と汗の勞賃を奪取するばかりか任意貯金さへ返さない。この憎みても餘りある資本家の行爲を政府はなんと見てゐるか？即ち內務省社會局は、各府縣の工場課と聯絡をとり、至急賃銀を支拂ふべき事を警告してるさうだが、その言ひ草が面白い。「當社會局に於ては、これ等の賃銀不拂ひによる、工場違反に就いては、規定迄罰則規定を適用すれば、全國三千三百の工場法適用工場中、過半數以上は、ひつかゝる事となるので、今度は之を大目に見すごし、特別のものに限り、罰則規定を爲すものと見られてゐる（東京朝日）しそれにこの事を大げさにすれば、政府の强調した所の、金解禁に對する聲名即ち、産業資本に打擊を及ぼすものでもなければ、財界を攪亂するものでもないといつて、シヤニムニ金解禁を行つた結果を

裏切るものとして、政府は極力これの彌縫策を講じてゐる事を忘れてはならない。

この事實をのみ考へても、いかに政府は資本家地主の繰釣り人形であり、無産階級搾取の權力的表はれであるかといふ事を知る。勞働者の捲き起る不平不満に甘い飴をしやぶらす爲に設けた工場法の內實は實にこの通りである。勞働の强化と生活の低下によつて、極力肉體を犯される勞働者が激增すれば、工場法扶助規則の徹底化をはからず、勞働者自身も掛金を負擔する所の健康保險法を實施して資本家の負擔を輕くしやうとするのだ。

こゝに於て私達はしつかりと知つた。あらゆる法律は、必ず無產階級搾取のための用具である。又政府當局が、どんなに表面的に、勞働者階級に利益な條件らしいものを見せつけやうとも、政府それ自體が、ブルヂョアの代辯者である限りに於ては、無產階級の利益は、常に永遠の彼方におかれるといふ事はいふまでもない。幻影に描く幸福をでなく、現實にある所の幸福を獲得せんとする勞働者は、何々保護法制定といふが如き空文實施に、空しき鬪爭する事を斷じて除け、鬪爭の過程に於て、自身の要求を獲得しつゝ、勞働者農民の社會を實現する方向に向つての、鬪爭が活潑に進展さるべきである。

山の犧牲者勞働の犧牲者

スポーツは最も喜ばしい娛樂には違ひない。テニスであれ野球であれ、競技の持つ特殊的な昂奮と均衡のとれた肉體的活動は、まづ快き魅力に引き入れる。そして尙單にスポーツとして樂しむだけであれば、結果に對する責任もなく、生活の脅威を考へる必要もなく、遊びたい時に遊び、嫌になつたら止す、何等の拘束をうけない所にまた喜びがあるのだ。殊に樂々と出來る事よりも、冒險心を滿足し得るもの、人の知らぬ事を知る優越心、それ等感情の交錯は、一層冬のスポーツを隆盛ならしめて行く。最近スキーかついでの登山姿は、有閑階級の誇らかなる流行であり、鐵道もその客を當てこんでの方策をたてる事も當然であらう。

そして冬のスポーツの犧牲者については、だんだん私達の耳に繁くなつた。炭燒き、きこりの遭難に對しては、無感覺らしい都人士もスポーツの犧牲者には、惜し氣もなく哀悼の淚を捧げる。昭和二年末の針木峠の大雪崩に、四名の死者を出した早大野球部の遭難以來、蔦臘岩菅山に於ける帝大生の凍死、北海道又は五色温泉に於ける學生の遭難など、今冬になつてからすら、隨分と報導されてゐる。殊には、先月富山縣立山の劍澤小屋に於ける六名の犧牲は、非常なる注目をあつめ、新聞は連日に渡つて報導し、劍澤小屋の撤廢から立山登山禁止が持ち上るなど、これを契機に當局は、冬のスポーツに對して、關心を向け、種々の保護策を講じやうとしつゝある意志を示してゐる。事實山の犧牲は悲しき事件に違ひなからう。だが私達は、無條件の哀惜を捧げ得ぬ、寧ろ公憤をさへ禁じられぬものを持つ事を否む事が出來ない。

この立山遭難事件が報じられつゝあつた最中、基隆炭礦會社の炭坑に椿事があり、二百五名の坑夫諸君の生死の程もわからぬ記事が、ポツチリ出たきり詳報さへ報じてなかつた。また一月二十六日、福島縣入山炭坑に於てガス爆發し、作業中の坑夫並に職工が九名重傷を負ひ、二名の死亡者を出し、多數の輕傷者を出した事實があり、二月六日の新聞は、三重縣參宮急行電鐵青山トンネル坑內作業

中、岩石が崩壊したために、十數名が生き埋めとなり、五六名が即死した事を日常茶飯事の如く報じられた。私達は、少し新聞に氣をつけて讀めば、實に之等の慘事を頻繁に感得せざるを得ないのだ。たゞ新聞も大して大事件として報導しないし、一般も亦「あゝまたか！」位に考へてるのかもしれない。

けれど、その犧牲の根本的意義の實に霄壤の差のある事ではないか。一は單に遊戲の犧牲であり、一は、家族を率いて、生活の糧を得るために、搾取の鐵鎖に引きづられて死ぬのだ。遊戲のために失つた命は、たゞそれ一つの損失で濟むのだが、勞働の犧牲者には、幾人かの命の綱を握られてゐる。それなのに何故社會は、一に大騷ぎをし、一に冷淡であるだらうか。こゝにも亦私達が、いかに支配階級が、僞瞞的觀念を植ゑつけるに成功してゐるかを見る事が出來る。

最近著しく大衆に浸透して來た革命的傾向に對して、支配階級はあらゆる方策を講じてその撲滅に力をつくしてゐる。治安維持法その他の諸法令を以て正面から彈壓するは、いふまでもなく、教化總動員の名目の下に、反動的思意の普及に努め、スポーツを奬勵しては、若人の心はなるべく思索的に赴かない事、眞實なるものを考へない樣に望んでゐる。彼等はいふのだ。「スポーツには階級がない。協同と互讓の精神があるのみだ。このスポーツ精神を社會生活にまで及ぼせ。」言葉はなるほど、貧乏長屋を繪で見る樣に綺麗である。鳥渡は眞の意味がわからない爲にだまされ易い。だから各工場でも、野球部などが設けられ、職場會議に花咲く不平不滿の統一を、スポーツに放散せしむる方策をとつて來た。

が、しかし、スポーツは、畢竟、有閑階級金持ち階級の娯樂にすぎない。勞働者は、一時野球なり、テニスなりに打ち興じやうとも僅か三十分もすぎないうちに、現實的な生活戰に立たねばならないし、時間が來れば、どんなに、要求しやうとも、それは既に他人の物も同樣である。雪國にスキーを流行らせ、貧乏人も金持ちも出來るなどゝ言つてはゐるが、さて雪降らぬ國から、雪降る國をあこがれたらどうするか。金があり時間の餘裕がなかつたら、全然空しい希望ではないか。即ちスポーツ的山の征服者は、金持ちの息子達であり、犧牲者も亦、學生や有閑人に限られてゐるのはその爲である。劍澤小屋に於て案内人二人の犧牲者は、無茶なお坊ちゃん達の犧牲になつた悼ましき死ではないか。

犧牲に對して哀悼するならば、まづ勞働の犧牲に對してなさるべきであり、また當局も勞働の犧牲に對して完全なる對策を建てるべきである。入山炭山は、既に前にも一度ならず、ガス爆發の事件があつた筈である。それを再び慘事を繰り返したのは、資本家は、危險な坑内に對して、安全處置をとつてゐないからではないか。かゝる資本家の態度をこそ峻嚴に取り締り、彈壓するのが至當なのだ。そして犧牲者に對しては、遺族の生活を補償せしむべきである。かゝる本末を顚倒しての方策は、意識的に、すべてから階級性を沒却せしめやうとの魂膽からであり、報道機關も亦、支配階級の代辯者であるので、勞働の犧牲はあつさりと片付けて、資本主義制度の不當を痛感せしめない樣、御用振りを發揮するのだ。

私達は、どんな事件に對しても、分析し解明し、その本質をよくつきつめる事を必要とする。支配階級のなす僞瞞の網の目に添ふてそれをよく究明し、階級的本質を燎にして鬪爭を激發してこそ、解放の勝利を吾手に奪ふ事が出來るのだ。（三〇・二・六）

婦人彙報

◇反動的青年との結婚拒否

山梨縣中巨摩郡玉幡村民衆青年同盟では、農村婦人の社會的解放確立のため、同組合婦人部、約百名を糾合して無産婦人青年會を設立の準備中、一月二十六日その結成大會を行つた。同青年同盟は社民黨所屬の團體で、田中書記長の夫人、とよ子氏が婦人部の執行委員長となり、反動的青年との結婚拒否、反動希望社勢力の浸潤に對抗、排撃の決議、その他無産婦人運動方針についてのスローガン六項を決議した。地方に於ける無産婦人青年會の組織は全國での嚆矢で、反動勢力の跳梁劇しい農村の婦人間に刮目されてゐるが、期待は今後の活動進展の如何にかけらるべきものであらう。

◇上海刑務所の勞働爭議

上海租界外にある刑務所の囚人は、二十九日夜、同刑務所の典獄に對して、獄內作業の勞銀値上げを要求して、七百名全部が結束して起つた。若し應じなければお手のものゝ破獄手段に訴へるとて、非常に强硬な態度を示し、軍隊巡警百數十名が鎭壓にむかつた。米國ばかりかと思つてゐた刑務所爭議はそろ〳〵上海迄やつて來た。

◇ガス問題一束

料金値上げ、勞資の兩天秤で横車を押した揚句、どれもこれも不首尾に終つた東京ガスの鈴木常務は、資本家間の素晴らしい道德で容赦なく岩崎社長に詰め腹らを切らされて辭職し、福島縣から代議士に打つて出る事になつた。所が、これまで鈴木常務獨裁の形であつた東京ガス、急に八方にひろげた因緣關係が誰にも判からない程こんがらがつて紛騷を起して岩崎社長が手をやいてゐる。資本家のからくりは常の事ながら、やり過ぎた結果御當人達にも始末がつかなくなる等は正に彼等の狡猾手段も斷末魔に瀕したといふ可きか

なほ愛知縣の東邦ガス會社はガス料金につき、從來の容量販賣を熱料販賣の方法に變更し度いと商工省へ申請して來た。熱量販賣になれば、これまでの空氣の多い不良ガスは却つて會社の損になるので、料金の差はともかく不純ガスは少なくなる筈である。

◇左傾學生嚴重取締

文部省の全國高等學校長會議で田中文相は、思想的指導を嚴重にして、高等教育の目的達成を訓令し、各學校內の穩健な研究團體や修養團體の獎勵をなすと共に、左傾學生の監督取締りを斷然嚴重にする事を訓示した。協議事項には「特に生徒の左傾運動の取締りに關する件」の一項さへあつて、今後學生の左傾運動に對する徹底的な取締りを督勵した。當局の思想善導、左傾學生取締りは從來の温情的なベールを美事にかなぐり投てゝ、益々露骨になりつゝある。

◇產兒制限相談所

不景氣、產業の合理化、濱口政策の緊縮節約等々、日每に生活の窮迫を强ひられつゝある無產階級の產兒制限問題は、去年十一月社會局で一寸話が出たが、內務省の强硬な反對にあつて沙汰止みとなつてゐた。今度勞働診療所長馬島醫師、岩田抱村、奧むめを氏等の愛兒女性協會の發起で、芝區芝公園五號地五で產兒制限相談所を開設し無料で相談に應ずる事になつた。

◇三・一五事件東京豫審終結

昭和三年三月十五日全國一せいに擧げられた共產黨事件の被告百五十三名に對する豫審は二年を經た最近になつてやうやく豫審終結、四月には公判を開始する。この豫審調書は五十册、二萬五千枚といふ空前の大記錄で、これを閱らんする判事は大車輪であるといふが、二年の寒暑を冷たい未決に虐げられてゐる多數の有爲な人々の事を考へると、最少し早くやれないものかと思ふ。

◇伯林の大暴動

伯休全市に亙つて一齊に共產黨員の大暴動が起り、ケルン方面は特に猛烈で、街燈の柱を打倒し、街路を暗黑にして、各所にバリケードを築いて、銃を持つた警官隊に頑强に應戰したが、首謀者と見なされる六十名外、百六十名餘名が完備した警察隊の人殺し機械の前に逮捕された。

◇朝鮮學生盟休事件後報

朝鮮學生の盟休事件は、その後檢束された女學生九十九名中、首謀者と見なされた二十七名を除いて釋放された。二十七名は梨花女高普通學校十一名。同德女學校五名、槿花女學校三名、女子商業二名、淑明女二名、實踐一名、女子美術一名外三名で、殆んど凡てが十八から二十一位までの盛んな女學生である。此の事件はそれより以前に學生科學研究會の連中によつて組織された朝鮮學生前衛同盟との連絡によつて一大民族運動にまで發展しかけたものである。

なほ、この事件を報導した朝鮮の新聞は次へもつていつて、兒玉政務總監の南鮮巡視の記事を掲げ標題に「御機嫌サンは南鮮の兒玉總監「麥青し云々と」皮肉つてゐる。總監の感想句麥青し、空にヒバリの仰がる、だとさ、一月、地は固く凍つて各地の人心鬱勃たるものがあるといふのに。

◇選擧に朝鮮文字有效

本月二十日に施行される全國總選擧において、朝鮮文字の使用を許可する事になつた。朝鮮人の內地居住者は全國で三十萬人以上あり、內有權者は數萬人と見込まれてゐる。これを機會に朝鮮人の團體相愛會の副會長朴春琴氏が立候補することになつた。その他本所の方の候補者は立看板に朝鮮語の振り假名をつけてゐる。現在朝鮮人居住者の主なるものは東京三萬人、横濱八千、大阪七萬京都一萬八千、名古屋二萬、濱松六千、豐橋五千、九州十萬といふ風に集團的に散在してをり、製鐵大工場のある八幡市は代議士を二人選出する程の人數があり、東京は第六區に有權者一千二百二十名といふ勢力なので、無產黨の立候補者は非常に注目し期待してゐる。

◇總選擧を機會に再檢擧

京都帝大、同志社大學、第三高等學校生徒等による社會科學研究會系の共產黨員が日本共產青年同盟の名で、總選擧を機會に活躍せんとして多數檢擧された。警視廳ではその他大山氏等の合法政黨樹立を排撃した勞農同盟、帝國同盟、救援會、無產青年同盟、ナップ等の選擧鬪爭同盟に對して盛んに彈壓の暴威を逞しくしてゐる。

◇密輸入の罰金九百圓

京都第一の寶石美術骨董商として知られた山中松次郎氏は支那各地の同業者と連絡をとつて約三百萬圓の密輸入をした事が發覺、取調べられてゐたが、飽まで密輸の事實を否認してゐた。にも關はらず事實は明瞭に證明してゐるので、現品を全部沒收すると同時に罰金九百萬圓を課せられた。かうした大仕掛けな密輸事件は稀有な事といはれてゐるが、大實業家連の脫稅、密輸をすつかり擧げたらどんなものだらう。

首相、八大臣出版法違反

民政黨總裁總理大臣濱口雄幸、內務大臣安達謙藏以下各大臣が出版法違反で日本大衆黨河野密、加藤勘十以下三氏によつて告發された。理由は東京市疑獄事件に連座して、刑事被告人となつてゐる瀬川光行小俣政一外、民政黨員の候補者について未決を理由に、其罪をかばふ樣な推薦狀に署名して各方面へ發したといふにある。これらは無恥な旣成政黨が政權を握る度に不斷に弄する奸策の一であるが、區裁判所の大竹檢事が公判を請求してゐるので司法當局の方針、及び事件の成行きは興味を持つてみられてゐる。

◇臺灣のアヘン吸食特許

臺灣總督府は從來の阿片吸食者の上に又々一萬人近くの阿片吸食者追認を行はんとして四方から批難の聲をあびてゐる。臺灣の土着人は年々減少の傾向を示してゐるのに、阿片吸食による癈疾者の增加を誘導するやうな認可をするのは人道上及び國際上の由々しい問題なりとして、國際聯盟協會の阪谷會長及び宮島幹之助博士らは外務省及び拓務省を訪問して、詰問し臺灣總督に訓令を發した結果實施無期延期といふ事になつた。帝國主義の殖民地政策も大分行づまつて際どい所までの藝當をする。

◇紡績女工の聽力障害

岡山縣倉敷町の勞働科學研究所では、所長暉峻博士及び田邊醫學士が主となつて紡績女工の聽力障害に關する試驗的研究を行つた、機械の美觀だの、ジャズだのと近代的設備に對する讃辭はあるが、日夜ごう〳〵たる紡績工場で、產業の强度化による過度な勞働を强ひられつゝある工女等の聽覺は甚だしく害はれてゐる事を今更ら發見するにいたつた。その統計によると普通人の生活聽力の限界を六乃至八メートルとしこれを標準として紡績工場內の織布職工四十八パーセント、精紡工は十七パーセント、仕上工は十パーセント、かせ絲工場は十六パーセントといふ甚しい聽力障害のある事がたしかめられた。これによると織布工がもつとも惡く、勤續數の長い者程その傾向が著しい同研究所では豫防策として作業中の女工の耳に綿栓を施して試驗した所幾分有效なことがわかつた。

◇郵便局配達夫の罷業

京都中央郵便局では新組織の組合が出きるや、單に左翼臭いといふのを理由に幹部七名を解雇したので、社民黨所屬遞友同志會の活動となり、總選擧の忙しい最中配達從業員の動搖を來たしてゐる。組合側は郵便局の不法を鳴らして罷業の氣勢を上げてをり、要求を入れない時には東京の遞友會も同情罷業を決行する準備中である。

編輯後記

今年の冬は暮らし好いといつてゐたのに、雨があり、今年の初雪がふり、風が出て一月の平穩な暖かさに比べて二月は何だか春くる前振れの季候の荒さを思はせます總選擧の運動も今や酣は、至る所政見發表の演說會で不景氣で懐侘しい人々が、何か知ら自分達の生活に餘裕を洩らしてくれる政黨がどこかに有りはしないかと云ひた氣に賑はつてゐます。面白い事にはおそくなつて十時頃社を出ると每晚のやうに近くの長延小學校から演說會歸りの人々がぞろ〳〵出て來るか否や薄暗い左内坂の兩側にずらりと並んでシヤア〳〵にみんな呆れてアラアラと云ひ乍ら坂をかけ下ります。三月はもう花屋に櫻草が出ます。春！春（素子）

めづらしく雪が積つた。恐らく一年中で一番寒さと鬪つて生れたのが此の號だらう。でも中味はたか〳〵に寒くないつもり。熱のあふれた小說號だ。外は北風。ピユー〳〵と云ふ音は左翼劇場のお得意の木枯の音とそつくりだ。どつちがどつちに似てゐるのか、ちよつと面喰つた。だがこんな風位、雪位、この小說號を抱いてたらふつとんで了ふ事、疑なしだ。（倭子）

起きてみるとサラサラと粉雪が吹き寄せて屋根も木も眞白。占めた——犬ぢやないけど嬉しくなつて雪の中をかけ廻る。轉んだ拍子に食べた雪のジユンと解けた冷たさが蟲齒に沁みていたむ。一月二十九日名古屋每日新聞社主催の講演會に引張り出された社長さんの祕書兼暴力團で中京名古屋の土を踏む。祕書官何をして來たのか、今更ながら考へ出して見ると一日に五度御飯を食べて、庇の深い暗い大きな宿で物も云はず靜かさにひたり、靜かさを抱きしめてゐる社長さんの橫で、淋しさを持て餘し、聯盟支部の藤原さんと矢田さんに名古屋で一番賑かな通りに連れてつて貰つて不二屋でコーヒーをのんで東京を感じて一寸なぐさめられて——吹きつのる冬の夜の嵐に耳をそばだてながら編輯室の緣のシエドをみてゐると色んな事が思ひ出される。（みどり）

總選擧で候補者も運動員も無中になつてゐる。言論戰、買收、泣き落し等、生活難は不景氣のどん底の中でいよ〳〵我々にひしめきよつてくる。全國三千三百の製絲工場中女工さんに賃金支拂をしない工場が約八割、そして賃銀は平均一日二十錢から廿六錢。本年度は絕對に工場では契約をせず優良女工の申込主義に依るといふ。かくして農村は極度に行詰り都會のプロレタリア急テンポでどん底へと轉落してゆく。此現狀の元に無產候補は何を民衆に約束せんとするのだらうか。解放の道は只一つだ。私はそれを信ずる。（八木）

きさらぎ。私には忘れられない悲しい月なんです。でも私達の本と共に導かれ力強い喜びの中に幸福な日を送つてゐます。天にゐる父さん母さん喜んで下さい。「東京は實に寒いよ」兄さんに云ひ聞かされていた當がはづれて此んなに暖かいのにと思つていたらそら御覽とばかり、有難うとも云ひ兼ねます。新しい申込で二月號二月號と袋に入れて書く時はとても嬉しいのです。どん〳〵知らない人を誘つて申込んで下さい。悅んで郵便局に飛んで行きますから（美智子）

名古屋行きに寒中だからと二の足を踏んだ弛んだ心を、それだからいけない、さうした惰を常に惱んでゐるくせにと叱るものが心にゐて出かけると、舊大晦日も元日も三月の春日のごときうららかさに恵まれ、其上名古屋の方達の大いなる抱擁に溫く包まれいひ知れぬ感謝と悅びをもつて歸つて來てすぐ伊豆大嶋の「全女性進出行進曲」の作者松田解子に、名古屋の新女性が合唱されたを報じ喜を共にした。波の音の明暮れに孤獨であらう彼女は私とおなじ心持ちで眼を濡らした事と思ふ。

前號小說號豫告の顚ぶれで書けなかつた人が數名あるが、新進はみな一生懸命の作をよせてゐる。私は收集不行屆の罰にて昨夜中に喜劇一篇を命じられ目を白黑。

アナ系婦人達の雜誌が出る高群、望月氏、八木氏も參加、女人進出はここにもありと祝す。（時雨）

昭和五年二月廿五日印刷
昭和五年三月一日發行（每月一回一日發行）

定價 今月號 金五十錢 送料二錢

1部……40錢
6部……2.40錢
12部……4.80錢

誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者——長谷川時雨
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂・北隆館・東海堂・大東館

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五


上

勝本清一郎氏著

（新刊六版出來）

四六判紙裝▼價壹圓七拾錢

四百頁▼郵送料拾錢

前衛の文學

マルキシズム文學の向ふ所を指し示せる劃期的大論文集

マルキシズム文學の論客として、その研究の眞摯と、その論鋒の鋭利とを以て、よく此の派文學論の指導的任務を果したのは、若き批評家勝本清一郎氏である。二三年來マルキシズム文學論は、我が文藝評論壇の主潮的題目となり、甲論乙駁、紛々として異說交々起つたが、中に就いて、最も根柢的なる、最も徹底的なる、從つて最も權威的なる立論をなしたものは、實に勝本氏であり、その論稿の全部を集めたものが卽ち此の一卷である。この一卷こそ、方今、文藝界空前の一大轉換期にあつて、その轉換の契機を把握せる劃期的一大評論と云はねばならぬ。新文藝研究者は勿論、苟くも社會問題を念とするほどの者は、必ず本書を一讀す可き必要あり、義務ありと信ずる。

東京牛込 新潮社